
転ぶ三日月

瀬野とうこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転ぶ三日月

【Nコード】

N9066U

【作者名】

瀬野とうこ

【あらすじ】

眼鏡をはずすと妖怪変化の姿をとらえてしまう少女、望月ミカ。高校に入学早々、生徒会長の左手が血にまみれているのを目撃したことから始まり、身の回りの人物が、妖怪だったり、吸血鬼だったり、妖精だったり、意外や人間だったり……。こった煮の学園生活で、己の立ち位置をつかむまでのおはなし。（第三章以降、R15タグを追加しました）

登場人物一覧（前書き）

全五章に登場する人物一覧。ネタバレあり。
「誰だっけこれ？」と、思ったときにでもご利用ください。

登場人物一覧

- ・ 望月 三日 (もちづき みか) .. 主人公。いわくつきの
高校一年。
- ・ 二階堂 皐月 (にかいどう さつき) .. 三日のハーフの
幼馴染。
- ・ 三鷹 奏 (みたか かなで) .. 使い走りのクラス委員長。
- ・ 橘 十夜 (たちばな とうや) .. 生徒会長。獏。
- ・ 一之瀬 秋 (いちのせ あき) .. 生徒会副会長。夢魔。
妹の巴は淫魔。
- ・ 九条 直己 (くじょう なおみ) .. 生徒会書記。寡黙な
書道家。
- ・ 音無 百々 (おとなし もも) .. 生徒会会計。ナイフ使
いの勤労少女。
- ・ 浦和 涼一 (うらわ りょういち) .. 美術部員。才能あ
る画家。
- ・ 大瓦 千佳 (おおがわら ちか) .. 三日の友人。人間。
- ・ 京堂 友哉 (きょうどう ともや) .. 体操部副部長。ブ
ローカー。
- ・ 千葉 茜 (ちば あかね) .. 吸血鬼。
- ・ 八又 さやか (やちまた さやか) .. ストーカー。
- ・ 小八木 芽衣 (こやぎ めい) .. 家庭科部部长。木立の
妖精。
- ・ 五島 息吹 (いつしま いぶき) .. 体操部部长。南風の
妖精。

- ・ 七森 しずく (ななもり しずく) .. 美術館の学芸員。
あぶくの妖精。
- ・ 仁木 風太 (にき ふうた) .. サッカー部のエース。火
炎の妖精。双子の兄。
- ・ 仁木 灯 (にき あかり) .. 保健室通いをする病弱な生
徒。火炎の妖精。双子の妹。
- ・ 溝口 理央 (みぞぐち りお) .. 情報処理部員。アング
ロサクソンの容姿の情報屋。
- ・ 尾上 京子 (おがみ きょうこ) .. 家庭科部副部長。溝
口の部下。
- ・ 原田 正樹 (はらだ まさき) .. 家庭科部員。美食家。
- ・ 柁木 朔 (まさき さく) .. 奏の幼馴染。獣術使い。
- ・ 高槻 翔吾 (たかつき しょうご) .. 皐月と柁木のクラ
スメイト。狩人。
- ・ 斉藤 十全 (さいとう じゅうぜん) .. 三日の担任。入
道。
- ・ 六崎 麦 (むつぎき むぎ) .. 保険医。吸血鬼。
- ・ 朝倉 滯 (あさくら みお) .. 家庭科部顧問。幽霊。
- ・ 金森 那由他 (かなもり なゆた) .. 化学の教師。魔女。
- ・ 九十九 一樹 (つくも かずき) .. コレクター。

第一話

望月^{もちづき} 三日^{みか}は、ぐっと悲鳴を飲みこんだ。

(う、わあ)

極力、グロいものは見たくない。それなのに、つい目が釘づけになっってしまう。

(血みどろ……)

うららかな春の陽が射す校舎の廊下で、三日はしりもちをついていた。

後ずさろうとして手をすべらせた先で、愛用の眼鏡が指に触れた。ぶつかった拍子に落ちたのだ。

だからだろう、こんな日常とはそぐわない光景を目にしている。

眼前には、我が校の生徒会長がプリントをまきちらして膝をついていた。

細いフレームの眼鏡をかけた、理知的というよりも、いささか冷たさの勝る面立ちの上級生だ。

入学してまだ日も浅い三日ですら、顔を知っている数少ない人物の一人である。

朝っぱらから彼にぶつかったのは、運が悪かった。

その際に眼鏡が落ちたのは、いっそう運が悪かった。

春の陽気に誘われて、ぼうっと窓のむこうをながめて歩いていたのだから、自分にも責任はある。

しかし、眼鏡さえ滑落しなければいたって普通の青年でしかなかったはずの、彼の一面を目のあたりにしてしまったのは、やはり不運だったと思えない。

生徒会長こと、橘 十夜の左手は、真っ赤に染まっていた。
まるで、今しがた生物の体内に手を突っ込んだばかりなのだとでも
いうように、どっぷりと手首から先が血にまみれ、したたっている。
いかにも匂い立つような様相を呈しているのに、血なまぐさい臭気
を感じないのが不思議なほどだ。

三日の喉が鳴った。

スプラッタは苦手だった。

見つめる先で、人差し指にはめられたシルバーのリングが、そこだ
け血に染まらずに光をはじいた。

視線を感じておもてをあげると、探るような眼差しの十夜と目が合
った。

（しまった）

後ろめたさと、いくばくかの危機感をいだく。

「ええと、ごめんなさい。よそ見してました」

顔はこわばっていて、目をそらす様子も、我ながら実にぎこちなか
っただろうと思う。

「いや。俺も前方不注意だったから」

鋭い目つきとは裏腹に、落ちついた声がかけられた。

「拾います」

三日は身をのりだし、ちらばったプリントをまとめだした。

同じように拾い集めていた十夜に紙を手渡す際、真っ赤な左手で束
ねられたプリント用紙がいささかも血で汚れていないことに気づい
て、目を見張る。

とっさに廊下を確認すれば、先ほど手をついていたあたりにも血痕
はなく、けっこうな頻度でしたたり落ちている彼の血はどこに消え
ているのだろうか興味をひかれた。

——首を突っこむつもりは微塵もないけれど。
動揺をふりきるように、三日は眼鏡を装着した。

とたんにおどろおどろしい鮮血は消え失せ、穏やかな日常の風景が戻る。

あるべき視界、あるべき日常のひとつコマでは、ばったり出会った生徒会長の手も、真っ当な高校生らしいなめらかな肌色をしている。どこにもおかしいところなどない。

（やれやれ）

三日はそつと息をついた。

プリントを受けとり、立ち上がった十夜がたずねた。

「すまなかった。ケガは？」

「大丈夫です。お気遣いなく」

あわてて三日も立ちあがり、軽く頭をさげる。

「君は一年生？」

「……そうです」

なんとなく、名前をききたいのだろうという気配を感じた。

そこで、きかれるまえに退散することにして、口をひらいた。

「本当にすみませんでした。ホームルームがはじまっちゃうので失礼しますね」

「そうか、ではまた。気をつけて」

眼鏡ごしでもわかるほど、彼の目が妖しく光った。

——気のせいではなかったように思う。

けしてふりかえらず、三日は足早に立ち去った。

いささか疲れた面持ちで教室の扉をくぐると、友人の明るい笑顔が出迎えをしてくれた。

「ミカ、おはよう」

大瓦 千佳は、おおらかで人懐こい少女だ。

愛想のよくない三日にも、初対面のときから気さくに声をかけてきた。

「あなた、すごくきれいだねえ」

そう、えらく瞳を輝かせて話しかけてきた千佳に、最初とはまどいを隠せなかったものだけれど、部活もクラスも同じ彼女は、早くも三日の親しい友人となっている。

入学式の日、ついで彼女はこう言ったのだ。

「ヘンな名前だね？ 覚えやすくていいけど」

自身の名前が風変わりであることは重々承知していた。

幼少のころは嫌な思いもしたけれど、三日にとって大切な幼馴染が好ましいと褒めてくれるから、この名前は嫌いではない。

千佳は面食いで、流行り物が好きで、おいしいものと軽いノリのドラマが好きな、まぶしいほどに普通の少女だ。

正直なところ、話はまったくあわないけれど、彼女といえるのは心地がよい。

挨拶をかえして席につく三日のところに、千佳がいそいそと寄ってきた。

「ね、ね、数学の宿題やってある？ 見せてほしいの」

「うん、どうぞ」

鞆の中身を机にうつし、数学のノートをひらいて差し出した。

「やった！　ありがと。ちょっと待って、あたしのノートも持つてくる」

千佳は数学が苦手だ。課題をさぼっていたらよけいに苦手になるんじゃないかという気はするけれど、当人がかまわないのであればそれでいい。

これまで他人に頼られるという経験にとぼしかった三日には、新鮮に感じられる。

千佳は周囲の面倒を見ることにも積極的で、彼女のやることなすこと、すべてが自分にとっては目新しいのだ。

（入学したかいがあったなあ）
しみじみと三日は思う。

ひとつ前の座席の椅子を借りて、数学のノートを写しはじめた彼女を眺めていると、右隣の席に影がさした。

「あ、委員長だ。おはよう」

千佳がおもてをあげて、あけっぴろげな笑顔をむける。

「ああ、おはよう」

クラス委員をつとめている三鷹みたか 奏かなでが登校してきた。

いかにも優等生然とした、あたりさわりのない言動をする男だ。

奏とは席が隣同士なのにあわせて、週に二回、同じ補習を受講しているが、人付き合いに不慣れな三日でもそれなりに会話が成立する貴重な相手だ。

三日も挨拶をかえすと、奏は机にひろげられたノートを見つめて、目をぱちくりとさせた。

「ああ、数学、課題出てたっけ。忘れてた」

千佳が身を乗り出す。

「へえ、委員長ってそういうのちゃんとやる人かと思ってた。一緒に見る？ ミカのだけど」

「うん、必要だったらどうぞ」

三日も言葉をそえる。

しかし奏は首をふり、

「いや、いい。範囲だけ教えて」

座席に腰をおろしながらそう言った。

あくびをかみこす奏に、「寝不足？」とたずねてみる。

「ちよっと、昨日からあわただしくて」

「そう」

会話を掘りさげたほうがいいのだろうかと思っただけで、それも余計なお世話のような気がして、課題の範囲をさっと伝えた。

「どうも。悪いね」

「いえ、ちっとも」

学生らしい日常会話に、胸がじんわりとあたたかくなる。

三日が求めていたのは、こういうなにげない穏やかさだった。けれど、人間並の視力ではとらえられない、怪しげな血液に片手をひいた人物などではない。

三日はふるふるとかぶりをふった。

「どうかした？」

奏が首をかしげる。

「ううん、なんでもない」

千佳とは違って、彼はこういうときに深く突っ込んでくることがない。

きっと、他人にあまり興味がないんだと思う。

他人というものを知りたくて学校に通うことにした三日とは、正反對だ。

それまで真剣なおもちでノートを書き写していた千佳が、ペンを置いて両腕をのばした。

「終わったー」

「おつかれ」

「うん。ミカありがと。すっごくたすかった」

「どういたしまして」

ノートとペンをばたばたとしまつて、千佳が立ちあがる。

「このお礼は日本史で返すね。じゃあね」

自分の席に戻る千佳に目をやり、奏がたずねた。

「望月さん、日本史苦手なの？」

「うんそう。どうも興味がもてなくて。人の名前も覚えられないし」

「へえ、何でもこなすのかと思ってた。意外だな」

「三鷹くんは苦手な科目ってある？」

「オレは国語。明確な回答がないのが、すわりがわるい」

「なるほど」

その意見は妙に納得がいくものだった。

そして、三日たちのクラス担任の担当教科は現国だった。

前方の扉のガラス窓にぬっと巨大な人影がさし、ドアがひらいた。

二メートルはあろうかという大男が、窮屈そうに机をくぐって入ってきた。

一年一組の担任、斉藤だ。ジャージを身にまとった巨体に、禿頭が光る異様な風体をしているが、いったん口をひらけば、人情味あふれる印象をあたえる壮年の男だ。

「起立」

奏が声をかける。

「礼」

「おはようございます」
教室に、生徒たちの声がひびきわたった。

第二話

昼休みに入ると同時に、三日は千佳とつれだって、購買に昼食のパンを買いにむかった。

このタマゴサンドが三日は好きだ。

タマゴサンドとイチゴジャムパン。あとは牛乳かな……と、考えごとをしながら歩いていると、食堂へむかう廊下の途中で障害物につまりた。

「おっと」

涼しげな青年の声がした。彼の足につまずいたのだろう。

（つまずいたっていうより、……転ばされた？）

「ちょっと、大丈夫？ ミカ。――あ、わ！」

背後からあせった様子で声をかけていた千佳が、何に気づいたのか、こらえきれなかったような歓声をあげた。

両手を床についた三日が見上げると、すらりとのびた肢体の先に、どこか見覚えのある面立ちの青年が自分を見つめていた。

「ごめんね、僕のせいだ」

泣きぼくろが印象的な優男だ。

男は、上体をかがめて三日の頬に手をのぼした。

彼の指先が眼鏡のフレームにかかる直前に、

「秋。待て」

突如静止を求める声がかけられて、二人の間に割りこむ影があった。

「あ」

三日の口から間の抜けた声がもれる。

不機嫌そうなおもちで駆け込んできたのは、くだんの生徒会長だった。

「悪いな。こいつが迷惑をかけた」

右手で秋と呼ばれた男を牽制しつつ、三日に左手をさしのべる。

「あ、どうも」

さしだされた手をつかもうとして、――寸前で、三日は動きをとめた。

シルバーのリングが光る左手。

今は何の変哲もないように見える手だけれど、実際は今もべったりと血に濡れているのだろう。

触れてみたらぬるっとすべったりするのかどうか気にはなるところだけれど、自ら確かめてみる勇氣はない。

「ああ、えっと、大丈夫です。一人で立ってます」

今にもとうとうとしていた手をひっこめて、立ちあがる。

「そうか」

自然な動きで手をひいた十夜も、三日の不自然な態度に気がつかなかったはずはない。

気まずい沈黙をやぶって口をはさんだのは、秋という名の優男だった。

「きみ、一年一組の望月 三日ちゃんでしょう。そっちの子は何ていうの？」

秋に見つめられて、千佳が顔を赤くする。

「あたしは、大瓦 千佳っていいます。えと、ミカと同じクラスの」

「そう。三日ちゃんに千佳ちゃんね。僕は、一之瀬 秋。生徒会の副会長をやってる。こっちの無愛想なのは会長の十夜。よろしくね」

「はい！ よろしく願います」
にこっと人当たりのよい笑顔をみせる秋に、千佳は元気いっぱい
返事をした。

千佳とは対照的に警戒心を強めた三日は、おそろおそろ口をひらく。
「……あの、どうして私の名前を知っているんですか」
正直なところ、この秋という青年は、いささか不気味だ。

愛想のよい笑顔が、彼のひとなりを覆い隠しているように思える。

秋はにこやかな表情のまままでこたえた。

「女の子の名前を覚えるのは得意なんだ。二人とも、いまから学食
？」

「はい。お昼にパンを買おうと思って」

露骨にはぐらかされた答えを疑問に感じることもなかったのか、千
佳が嬉しそうに会話をひきついだ。

「天気がいいから、ミカと二人で中庭で食べようって話してたん
です」

「そうなんだ。購買のメロンパン、おいしいよね」

「へえ、あたしそれ食べたことないです。買ってみようかな」

「うん、あれはおすすめ。ああでも、早く行かないと欲しいパンが
なくなっちゃうか。足止めしちゃってごめんね」

「いえ、そんな」

「三日ちゃんも、ケガがなくてよかった。今度あらためてお詫びを
させて？」

「いいえ必要ありません。少しぶつかっただけですから、平気です」
硬い表情で、断固として首をふった。

「そう？ 残念。かわいらしい新人生と親しくなれるチャンスかと思
ったのに」

「秋。ふざけていないで、もう行こう」

「はいはい」

十夜にうながされ、秋は二人に手をふった。

「じゃあね、またね」

「はい。失礼します」

頭をさげる千佳にあわせて、三日も会釈をかえす。

いくぶん緊張していたのか、ほっとして息がもれた。

上級生二人に見送られて、食堂へと足をむける。

何かおかしな人に目をつけられたのではないかと背筋を寒くさせる自分に対し、千佳は上機嫌だ。

「ラッキーだったね、副会長とお話ししちゃった。生徒会ってきれいな人が多いけど、副会長がダントツだよ」

「……そうなの？」

やだもう、と千佳が背中をどやしつける。

「どこ見てるのよ。あきらかに美人さんだったじゃない。もつとつつきにくい人かと思ったのに気さくに話してくれるし、しかも名前前で呼んでくれたし。嬉しいなあ」

よかったね、とは言ってあげられそうになかった。

最初に目が合ったとき、色素の薄い彼の瞳を、冷たい光がよぎった気がしたのだ。

あの眼差しには覚えがあった。異質なものを排除しようとする者の目だ。

もしかしたら、今朝方十夜の手を見てしまったことが、彼の耳にも入ったのかもしれない。

（だから探りをいれてきた、とか？）

動揺を上手くごまかせなかった自分を、いまさら悔やんでもしかたがない。
なるべく彼らには近寄らないようにしようと思心に決め、三日は目の前の昼食へと意識をきりかえた。

早めに昼食をすませて仮眠をとろうと、急ぎ学食にむかっていた三鷹 奏は、行く手をふさぐ四人を目にして、足をとめた。
同じクラス的女子生徒が二名と、あとふたり。我が校の生徒会長と副会長が、どうやら立ち話をしているようだ。

（知り合いか？）
しらないふりをして通りすぎるべきか、ひきかえすべきか、しばし悩む。

しかし結論が出るよりさきに、女子二名が立ち去り、こちらに気づいていたらしい生徒会長が手まねきをしたので、奏は大人しく近づいていった。

「いいところに来たな」

「こんにちは。いや、どうもオレ、嫌な予感しかないんですけど。
なにか用ですか」

「なに、たいしたことじゃない」

「そうそう、奏にちょっとしたききたいことがあってさ」
女子生徒の後ろ姿を目で追っていた副会長の秋が、振り向いて言った。

「同じクラスなんでしょ、望月 三日。どんな子？」

(……望月さんのほうか)

やっかいごとの予感に、こっそりとため息をつく。

この二人とは、知り合ってもう二年になる。

悪い人たちだとは思わないが、自分のところにろくな話を持ち込んでこないというのは折り紙つきだ。

縁あって同じ学校に入学してからというもの、こき使われてばかりなのだから。

奏はすこし頭を整理して、質問にこたえた。

「望月さんはね、容姿は派手だけど、性格はひかえめ。授業態度は真面目で、落ち着いてるよ」

「親しい？」

「そこそこ。席、隣りなんだ」

「へえ、それはいいね」

秋は楽しそうにあいづちをうった。

さて、彼女にはこの男の興味を引くような点があっただろうかと思いつく。

望月 三日は美人だ。黒くてまっすぐな髪はツヤがあって人目をひくし、肌は白くて人形のようなだ。

黒目がちの瞳は、目が合うとまっすぐにこちらを見つめてくる。

ただ、その瞳の持つ温度はわりと低くて、色気はない。

話す口調も声のトーンもおちついたもので、口数もさして多くないことから、奏としては隣りが彼女でよかったと思っている。

(この人が気にかかるようなタイプには思えないんだけど)

これが他の男なら、整った面立ちを見て一目惚れでもしたのかと思うところだけど、秋に限ってそれは考えにくい。

「望月さんがどうかした？ 問題がありそうな人には見えないな」

問うと、十夜が微かに表情を曇らせて述べた。

「俺の左手が見えるようだ」

意味を察して、奏は目を見開いた。

十夜の左手は、わけありだ。奏も幾度か目にしたことがある。

（けっこうエグいんだよな、あれ）

しかし彼の手を染める血液は、昼日中からあらわにされるたぐいのものではないはずだ。

常に血に濡れてはいるのかもしれないが、人目にさらされるのは、夜がふけてからのはず。

すくなくとも、奏はそう認識していた。

ことは十夜にとっても意外だったようで、そのおもてにはめずらしく困惑の色がみてとれる。

「目がいいだけなら、めずらしいとは思うが問題はない。ただ、時期が悪いだろう」

「うん、タイミングが悪すぎるよね。このところのゴタゴタとの関係を疑うなっていうほうが無理でしょう。まあ、春は毎年荒れるものだけど、嫌になるねえ」

そう言って秋は鬱陶しそうに前髪をかきあげた。

春は荒れる、というのは、まさしくそうだ。

学校選びを間違えたかと思うほど、入学してからこっち、生徒会のかかえる学内の問題解決に、奏もつきあわされていた。

「そんなわけだから、奏、あの子のこと調べてね」

「え」

秋のいきなりの発言に、奏は思いきり顔をしかめた。

「僕が動こうと思ったんだけど、なぜか十夜が邪魔をするから。こ

いつのことだからどうせ、面倒だからほうっておこうか思ってるんだらうけど、僕は逆に面倒だからこそ早く処理しちゃいたいんだよね」

「せっかちな」

「十夜がのんきなんだよ。せめてあの子の種族くらい把握しておかないと、何かあったときに対処できないでしょう」

奏は内心でぼやいた。

（望月さんが人間じゃないっていうのは、この人たちにとってはもう確定かよ）

偏見だというのは自覚してるが、人間ではないあれやこれやといった者たちが、奏はあまり得意ではなかった。

（まあ、ここに入学した時点で、だいぶあきらめちゃいるけどさ）
奏の知っているだけでも、学内には様々な種族の生徒が紛れ込んでいる。

目の前の二人だって、例外ではない。

十夜が言った。

「めずらしく積極的だな。あの娘がそんなに気になるのか？」

「そうだね」

秋は首をひねった。

「興味はあるけど。ほらあの子、人間じゃないにしても見えすぎなんじゃない？　僕でさえ、こんな真昼間からは見えやしないっていうのに」

「秋さんは夜型だから。望月さんは昼型なんじゃないの」
なかばヤケになって奏は言った。

「いっそ本人にきいてみようか。あなた何者ですかって」
秋があきれた様子で眉尻をさげた。

「お前ね」

「正直オレ興味ないし、巻き込まれたくないんだけど」

三日は無害な同級生だ。そのままできていいと思う。

「仮に彼女に害意があつて、学校を荒らして回ってるんだとしても、十夜さんに任せておけばなんとかしてくれるよ」

これは責任転嫁ではなく、適材適所というやつだ。

奏にはなんら役に立つ特殊能力などありはしないが、十夜はちがう。伊達に生徒会長を名乗り、学園を仕切っているわけではない。

すると、ふいにふわりと頭をなでられた。何事かと思い、目をむけると、穏やかな眼差しの十夜と目が合った。

「奏はいい子だな」

「こいつのどこが？」

秋が目をむく。

奏もなにやら複雑な心境になって、ぼそぼそと言いかえした。

「いや……、この年でいい子が褒め言葉だと思ってるのは、きっと十夜さんくらいだよ」

「そうか？」

そうして微かに口元をほころばせた十夜の笑顔には、希少価値があった。

一般の生徒にはとりつくしまも与えないほどクールな対応をとる彼は、トラブルを強引におさめる処理能力もあいまって、学内では怖れられていることが多い。

とくに問題行動の多い生徒ほど、その傾向は顕著だ。

その彼が優しく微笑むことがあるなど、見る人が見たなら度肝をぬくことだろう。

しかし、奏は知っていた。この顔は、十夜が愛犬にむける表情と同じなのだ。

（まあ、ライアスはかわいいけどな）

真っ白な大型犬を思いおこし、苦笑をうかべる。

（仕方ないな）

ついほだされて、できる範囲での協力を申し出ようかと考えた矢先、秋がニヤニヤと性質のよくない笑みをむけて口をひらいた。

「たしかに奏はいい子だ。非常に使い勝手がいい子、なんだよね」
苛立ちをこめて、奏は秋をにらみつけた。

こういう顔をするときの秋は、本当にいやなやつだ。

「手伝ってくれるんでしょう？ 知っていたよ」

ぐっと、くちびるを噛む。

（くっそ、ムカつく）

「奏？」

甘ったるいほどの優しい声音で、秋が返事をうながす。
奏は舌打ちをした。

「やる」

もとより、断るという選択肢は、奏に与えられてはいないのだ。

折れた奏に、秋は満足気な表情をうかべた。

「うん、えらいね。奏がうちの学校に入学してくれて、本当によかったよ」

いたわるように、十夜が背中をかるくたたいた。

「無理はしないでいいからな」

「そうですね」

秋はムカつく男だが、奏にとっては恩人だ。すぐに茶化すし、気まぐれだし、人使いは荒いしで、ろくに良いところのない人物だが、感謝の念は変わらずにいつもある。素直に頼めばきかないことなどないものを、わざと怒らせるような物言いをして遊んでいるのだ。

「ほんと、最悪」

ぼやかずにはいられない。

と、十夜の携帯に着信があり、「九条からだ」と断りをいれて、彼は通話ボタンを押した。

九条といえば、生徒会書記の九条 直己だ。

いくつかのやりとりの後、十夜の眉間にはシワがよせられた。

「またか。――わかった、今から行く」

通話を終えて、十夜は秋に告げた。

「西門の結界にほころびが生じたそうだ」

「今度は西？ 昨日から三度目じゃない、まいるね。誰の仕業か知らないけど、犯人見つけたら絶対に沈めてやる」

秋も嫌そうな声をあげた。

「行くぞ」

「しょうがないなもう」

大変だなあ、と思いつつ、そっと距離をあけていた奏の腕を、秋がわしづかみにした。

「どこ行くのさ。奏も行くよ」

「秋さん、オレ……空腹なんです」

「気があうね、僕もだよ」

「オレが行っても役に立たないと思うし」

「謙遜なんて必要ないよ。昨日は立派な働きをみせていたじゃない」

「使い走りしかしてません」

「パシリも必要なんだよ」

「……疲れてるし」

「ふん、昨夜はお楽しみだったんでしよう。絶好調じゃないか」

奏は秋の足をけとばした。

「ふざけんなよ。オレ、そういう冗談大嫌い」

弱みをつかれて怒った奏を笑いながら軽くいなして、秋は顎をしやくった。

「ほら、十夜も待ってる。じゃれるのは後回しだ」

「わかったよ！」

奏は腕を振り払うと、秋も十夜も追い越して、ずんずんと先を急いだ。

「おお、見上げた根性だ。やる気だね」

「……秋」

からかいすぎだと、秋をいさめる十夜の声が聞こえたけれど、気にもとめずに足を進めた。

（やっぱりさっきは、ひきかえすのが正解だったよな）

憎らしいほどにうらかな春の陽射しをあびて、奏は深いため息をついた。

第三話

三日の通う万理万里学園まりのばんりがくえんは、白睡山はくすいさんにつらなる小山の中腹にある。

人の集まる都心部は、山をくだって広がる平地の先、太平洋に面した海沿いに位置し、住宅街もそのあたりを中心に広がっている。

古い街並みが今なお面影を残す観光地でもあるが、残念ながら海岸はけわしい岩場や岩壁となっていて、海水浴には適さない。

人の出入りは多いものの、それは都心にかぎったことで、あたりには緑が濃く、繁華街をはずれると、夜には深い闇に覆われる。

三日の住んでいるマンションは、住宅街のはずれの山側にある。

この春から生家を離れて一人暮らしをはじめた。

両親が気にかかるため、幼馴染の母子が住むマンションの隣室を借りている。

同い年の幼馴染は、住まいからほど近い山のふもとの公立校に通っているが、三日は電車とバスを乗り継いで、万理万里まで通っている。

それというのも、両親の強い勧めがあったからで、――三日は両親の思惑に納得がいく反面、とまどうことも多いのだった。

例えばの話をしよう。

三日は千佳とつれだって、放課後部活に顔をだした。
家庭科部だ。

部員はさして多くなく、活動内容もゆるやかで気に入っているのだが、困ったことに三日には顧問の教師が視認できない。

眼鏡をはずせば見える。割烹着姿の小粋な女性教員だ。年はおそら

く三十前後。

ただし、二十年以上前から、この学校で家庭科を担当しているという。ベテランだ。

最初はかつがれてるのかと思った。次に、もしや透明人間でもいるのだろうかと思った。

しかし、三日以外の生徒からはごくあたりまえの存在として受け入れられているようなので、ようやく三日にも眼鏡の弊害なのだと思づくことができたのだ。

顧問の朝倉は、眼鏡をかけていると衣服もろとも見えなくなる。

声は聞こえるし、朝倉が手にしている教科書や調理道具は見えるからまだいいものの、おかげで三日はよくぶつかる。

一度、朝倉が腰かけている椅子に座ろうとしたときなどは非常にバツが悪かった。

下敷きにしてしまったふとももがふわんと柔らかくて、あやうく叫び声をあげるところだった。

当人は笑って許してくれたけれど、千佳には大笑いされたものだ。

「失礼しまーす」

家庭科室に入ると、二年の尾上 京子と三年の小八木 芽衣がでむかえてくれた。

よく見ると、教壇近くのテーブルで、上白糖の袋を開けている調理バサミが宙をただよっていることから、顧問の朝倉も室内にいらしい。

家庭科部には幽霊部員が多い。まあ言ってしまうえば、顧問の朝倉からして筋金入りの幽霊なのだが、それとは別に、あまり顔を見せないという意味でのそれだ。

「今日はマフィンを焼きますよ。二人とも手を洗ってね」
朝倉の声がとぶ。

はーいと返事をして、三日と千佳はエプロンをとりだし、準備をはじめた。

家庭科部では、その場で簡単にできるお菓子を作ることが多い。

活動内容は、毎月皆で相談して決めているのだが、他には手芸をすることもあるし、園芸部の手伝いをしてその見返りに野菜をわけてもらったりもする。

なんらかの調理をする日には、火を使う関係上、かならず顧問が付き添うきまりになっている。

「もう学校には慣れた？」

とっつきにくい学校だという認識は共通のものなのだろうか。

三年の小八木 芽衣が、三日に話しかけてきた。

「ぼちぼち、ですが、たぶんまだです」

人間らしい生活をしようと考えて入学したはずなのに、人間離れした人ばかりがひしめいているのはなぜなのだろう。

見えすぎる目を封じるために眼鏡をかけているのだが、学内で眼鏡をはずして過ごしたら大変なことになりそうだ。

かくいう芽衣は、三日の見立てでは木立の精だ。俗に言うところの妖精である。

精霊ほどの引力はないが、芽衣からはいつもさわやかな新芽の香りがする。

茶色いふわふわのボブにカットされた髪も、深緑の瞳も、やわらかな人柄をよくあらわしている。

小柄で優しくかわいらしい。三日はこの先輩が好きだった。

芽衣のほうも、三日に対して感じるころがあるのか、ことのほか

親身になって世話をしてくれる。

「一見、望月さんのほうがしっかりしてそうなのに、学校に馴染むのは大瓦さんの方が早いみたいだね」

もう一人の上級生、尾上 京子がおもしろそうに千佳と三日を見くらべて言った。

「ええ。あたしはもうすっかり慣れました」

千佳がうけおう。

二年の京子は、芽衣とは対照的な女子生徒だった。

千佳が一目見て、「一人歌劇団だ」ともらしたように、長身でいくぶん男性的な、女子高に通っていたら間違いなくもてはやされそうな人物だった。

髪は短く、体型もスレンダーで、身軽そうな印象をうける。

運動部に所属しているほうが似合いそうなのに、なぜこの部に入ったのかと以前たずねたところ、甘いものが好きだからという返事がかえってきた。

芽衣と京子はタイプがまるで違うせいか、仲がいい。

おかげで、部室内はいつもわきあいあいとしていて居心地がよかった。

「はい、じゃあ三日ちゃんはこの粉をふるいにかけて。千佳ちゃんはこのバターを練ってね。手順はここにあるとおりだから」
レシピが記載されたプリントと共に、芽衣にボウルを渡される。

手近な椅子に腰かけて、プリントにさっと目をおす。

作り方はいたってシンプル。混ぜて焼くだけ。

芽衣と京子があらかじめスケールで計っておいてくれた粉類を、こぼさないようにふるいにかける。

粒子の細かい粉が落ちて、触れたら気持ちが悪そうだな。

テーブルをはさんだ反対側では、京子がバナナをカットしている。

「今日はバナナとチョコ、ナッツとシナモンの二種類作るからね」

「バナナチョコ！おいしいですよ」

「あら、わたしはナッツも好きよ」

千佳と芽衣が期待に瞳を輝かせて言う。

「望月さんは？」

京子にきかれて、三日は力強くうなずいた。

「両方好きです」

「そっか。私と一緒にだね」

プリントを見ながら、粉にバター、砂糖、卵、牛乳を混ぜいれ、それぞれ具材とともに型に流し入れた。

味は二種類。全部で六十個ものカップができる。

いつも少し多めに作って、余ったぶんはお土産として家に持って帰ることになっている。

たまにお菓子作りの日だけ参加して、意中の男子に差し入れをする生徒もいるらしいのだが、三日はまだ顔をあわせたことがない。

「たのしみだね」

そう言って、京子がオーブン二台にカップをセットする。

焼きあがるまでの三十分、使った道具を洗いながらおしゃべりをする。

顧問の朝倉は、雑談にときおり参加はするものの、活動にはほとんど口をはさまない。

調理後のお茶会に加わることもあるけれど、嬉しそうにおすそわけを受けとって、準備室に下がることもある。

今日は参加するつもりがあるのか、率先してお湯を沸かし、紅茶の準備をはじめていた。

朝倉が動き回っているときは、三日はじっとしているように心がけているので、片付けが終わったあとは大人しく千佳のおしゃべりに耳をかたむける。

「聞いてくださいよ、今日、お昼に副会長とお話ししちゃったんです」

「一之瀬くんと？」

「そうなんです。美人でした！」

うなずく芽衣とは裏腹に、京子が首をかしげている。

「美人……かなあ」

「京子先輩、なんでそんな疑問形なんですか。三日と同じような反応しないでくださいよ」

「いやだって。きれいっていうより、おっかなくない？」

「怖くなんてないですよ、すごく優しい人でした。一緒にいた会長の方はすこし近づきがたいタイプだったけど、でもああいう寡黙なのがいいっていう人も多いですよね」

「うーん、そうかねえ」

腕を組んで京子が考えこむ。

「私にはどちらも似たり寄ったりに見えるけどなあ」

「京子は外見より中身を重視するのよね」

「性格はなにかとにじみ出てくるからね」

千佳が釈然としない様子で言う。

「まるで副会長の性格が悪いみたいな言い方じゃないですか」

京子が肩をすくめた。

「性格がよかったら生徒会なんてやってられないよ。あ、でもうちのクラスの九条はいいやつだよ、そういえば」

「九条さん？」

誰のことだかわからない三日とはことなり、千佳には合点がいったようだ。

「ああ、書記の人ですね。あの人もきりっとしてますよねー」

「生徒会の人間でまともなのはあいつくらいだね」

「そんなに生徒会の人たちって偏屈ぞろいなんですか」

三日がきくと、芽衣が表情をやわらげた。

「大丈夫、皆まじめな人たちだから」

「そうそう。ダメですよ、ミカはなんでも真に受けちゃうんだから。京子先輩は生徒会がキライなんですか？」

「べつに嫌いじゃないけど。お近づきにはなりたくないだけで」

「へえ。あたしなんか、あんなにきれいな人なら、いつだって見ていたいけどなあ」

「千佳ちゃんはきれいな人が好きなのね」

芽衣に言われて、千佳は拳をにぎった。

「美人は大好きです！ 見てるだけで幸せになります。そういえばこの学校はきれいな人が多いですよ。あたしここにきてよかったな」

「ええ、わたしもこの緑豊かな土地柄が気に入っているの。でも、山の中で不便だからって敬遠する人もいるわよね。二人はどうしてここに来ようと思ったの？」

「私は親の勧めで」

「あたしは、受験した公立に落ちちゃって。モデルやってるかっこいい先輩がいるからって、ちょっと高望みしちゃったんですよ」

頭をかく千佳に京子が感心したように言った。

「すごいな。大瓦さんの面食いも堂に入ってるね」

「はい。きれいな人に囲まれて過ごすのがあたしの夢です。あ、そういえば」

「うん？」

「ふもとの男子校に、今年は王子様が入ったそうですよ」

第四話

「王子様？」

芽衣と京子が首をかしげる。

「そう。西洋風の王子様です。ハーフらしいんですけど、金髪碧眼の美男子で、スポーツも万能なんですって。あたし、一回でいいから会ってみたいなあ」

「へえ、それって八重やえがしこうこう櫨高校でしょう」

「はい、そうです。もしかして京子さんも知ってましたか、王子様のうわさ」

「いや、それは知らないけど、八重櫨とだったらうちは交流が多いから、顔をあわせる機会くらいはあるんじゃないかな」

「え、本当ですか！」

「そうね、毎年夏には両校交流イベントがあるわね」

「えええ、すてき！　じゃあ八重櫨の学校祭まで待たなくても会えるんですね」

千佳がガッツポーズをとった。

「まあ、中身はただのゴミ拾いなんだけどね」

「かまいません。うわさの二階堂くんに会えるなら、ゴミくらいいくらでも拾ってみせます」

「名前までチェック済みなのか。頭がさがるね」

「人の顔と名前を覚えるのは得意です」

だから千佳は日本史が得意なのかな、と考えていると、微笑みをたたえた芽衣と目が合った。

「三日ちゃんは興味ないの？　そのうわさの王子様」

「うーん、私は、顔とか運動神経とかにはあまり」

「それじゃあ、どういう男の子だったら好き？」

「男子だからってわけじゃないですけど、一緒にいて落ちつける人
がいいです」

「わかるわ。それってとても大事なことよね」

「なるほど。ミカと芽衣先輩は相性重視なんですね。あ、京子先輩
はこういうタイプが好みですか」

京子はひとつまばたきをして、それから静かにこたえた。

「私は、――心が豊かで優しい人がいいな」

そう告げる京子の瞳は、思わずみとれるほどの慈愛に満ちていて、
こんなふうに想いを寄せられる人は幸せだろうなと、すこし羨まし
く感じた。

ほんのりと胸があたたかくなったところで、室内に電子音がひびく。

「皆さん、マフィンが焼けましたよ」

朝倉の声にうながされて、四人は席を立った。

「ちょうど紅茶もはいたところだから、お茶にしましょうね」

「はい。わあ、いい匂い」

「本当。おいしそうね」

オーブンから熱々のマフィンを取り出し、皿に取りわけていく。

「お天気がいいから窓際で食べましょうか」

朝倉の勧めで、おのおの紅茶とマフィンを手に取り、席をうつる。
窓は中庭へと続く小道に面していて、開け放たれた窓から、園芸部
の手によるツルバラが目を楽しませてくれる。

「きれいに咲いてますね」

三日がつぶやくと、芽衣があいづちをうった。

「ええ、本当に。よく手入れしてくれているのよね」

「いいな、きれいだなあ」

植物は好きだが、家には盆栽がひとつ置いてあるきりだ。

（花が咲くのもいいかもな）

「そら、食べようか」

花にみとれる三日の注意を京子がひき、皆はそろって手をあわせた。

「いただきます」

「あつそう」

ねこじたの三日が息を吹きかける横で、京子のかまわずにぱくりとかぶりつく。

「甘い。おいしい」

「ナッツのほうは甘さがひかえめで、素朴な味がしておいしいわよ」

「芽衣さんは木の実が好きだもんね。じゃあ次はそっちを食べてみるよ」

「うんうん、両方おいしいです」

三人に少し出遅れる形で、三日はナッツとシナモンのマフィンをかじってみた。

生地はしっとりとしていて、シナモンの刺激の後にバターの香りが口に広がり、頬がゆるむ。

「おいしい」

「ああ、本当だ。とてもおいしそうだね」

ふいに声がかけられ、見ると窓のむこうに一之瀬 秋が立っていた。
「副会長！」

千佳が声をあげる。

「一之瀬くん。どうしたの？　こんにちは」

「やあ芽衣ちゃんこんにちは。そっちの子たちは昼に会った二人だね、家庭科部だったんだ」

「はい」

「いいな、部活楽しそうだね。僕なんか校内の見回りに駆り出されていて、もうくたくただよ」

「あら、そんなに忙しいの？」

「うん、まあ春だからね。どこも浮き足立ってるみたい。きみたちは今日は何を作ったの？　すごくいい香りがする」

「チョコとナッツのマフィンを焼いたんです。あの、たくさんあるのでよかったら副会長も食べていきませんか？」

そう言っ腰を浮かせる千佳に、秋は礼を述べた。

「ありがとう。でも皆が待ってるから行かなくちゃ。また今度ご相伴にあずかせてもらってもいいかな」

「はい。あ、じゃあ皆さんのぶんもお土産にどうですか？」

「そうね、今日はたくさん作ったから、持っけてもいいわよ」

「本当？　それは助かるよ。実は昼を食べそこねちゃって、お腹がすいてたんだよね」

「あらたいへん」

「ちょっと待ってください、すぐに包みますね」

千佳が持ち帰り用の小袋を手にし、いくつか中に入れていく。

「家庭科部は我が校の癒しだね。皆あまりに優しく、涙が出るよ」

京子がトゲのある口調で言った。

「大事な部員たちです。ちょっかい出さないでくださいね」

「やだな、人聞きの悪いこと言わないでよ」

「念のためです」

三日は胸の内で京子にエールを送った。
初対面での印象が悪かった人物に、一日に二度も会うとは思わなかった。

「はい、これどうぞ」

千佳がポリ袋に入れたマフィンを差し出すと、秋は笑顔で受け取った。

「ありがとう。皆も喜ぶよ」

千佳の頬が上気する。

「放課後まで見回りなんてたいへんですね。おつかれさまです」
「これ食べてがんばるね。……ああそうだ、三日ちゃんっていったよね。ちよつといい？」

窓越しに手招きをされて、三日の顔がこわばった。

「なんですか」

嫌々足を運んだ三日に、秋が露骨な愛想笑いをする。

「昼に会ったときから、気になっていたことがあるんだ」
(ほらまた)

相手を見定めようとするかのような、秋の視線が三日に刺さる。
睨まれることをした覚えはないと言いたところだけれど、きっと秋にとっては敏感にならざるを得ないことなのだろう。

(そんなにあの血みどろの手は見ちゃいけないものだったのかな)
もっと上手に、見なかったふりができたらよかったとでもいうのだろうか。

勘弁してほしいと思いながら、言葉の続きを待っていると、秋は両頬に手をのばした。

「さつきは十夜に邪魔されて見られなかったんだけどさ。――ほら、やっぱりきれいだ」

秋は、三日のかけていた眼鏡を奪い取り、瞳をのぞきこんだ。

三日は息をのんだ。

（わ、藍色）

裸眼で見つめる秋の瞳は、深夜に見上げる空の色をしていた。

気を抜くと吸いこまれそうな、魔性の色だ。

その瞳が、怪しい光をたたえてきらめく。

「素顔、見てみたかったんだよね。眼鏡も知的でいいけれど、コンタクトにはしないの？」

「……眼鏡が、気に入っているの」

「そう」

口角をつりあげて、満足をした様子の秋は、三日の顔にそっと眼鏡をかけなおした。

とたんに、秋の夜の闇を秘めた瞳はなりをひそめ、穏やかな茶色い瞳にとってかわる。

緊張にこわばる体をおして一步さがり、息をつく。

真横でなりゆきを見ていた千佳が、「おお」と声をあげ、秋に嬉しそうにくっつくかかった。

「副会長、もしかしてミカにお熱ですか」

一瞬、何を言っているのかわからずに間抜け面をさらす三日の前で、秋は、顔をそむけるとふきだした。

「お熱っていつの言葉さ。いやいや違うよ、ただの好奇心。千佳ちゃんかわいいね、気に入ったよ」

「一之瀬 秋」

京子が低い声で名を呼んだ。

「なにかな」

「ちよっかいを出すなど言っただけなのに。お菓子を持ってとつとと業務に戻ったらどうです」

鋭い視線をむける京子に、秋は肩をすくめた。

「はいはい怖いな。それじゃあ千佳ちゃんに三日ちゃん、今度は過保護な保護者のいないところでね」

手をふり立ち去る秋に、千佳がにこやかに手をふりかえす。

三日はどうにも消化しきれないもやもやをいだいて、席に戻った。

その後に食べたマフィン、もう湯気を出してはいなかった。

今日は部活も早くに終わり、一本早いバスに乗って帰宅した三日は、「ただいま」と声をかけて家に入った。

陽が延びたために、外はまだ明るく、一見ただけで部屋に人気のないのがわかる。

「今日は来ないかな」

そうつぶやいて、そのまま三日はきびすをかえし、外に出ると隣の家のインターフォンを押した。

三日の住むマンションはワンフロアに二軒しかなく、A棟B棟と横並びに棟がつらなっている。

三日の住まいはA棟の三階で、隣りには幼馴染が母親と二人で暮らしていた。

同い年の皐月は、小さいころから、三日の最も大切な友人だ。家族同然という言葉があるが、実家を離れた三日には、家族以上に

一緒に過ごす時間が多い相手でもある。

皐月の母親が不在のときなどは、よく三日の家に泊まりにくるし、在宅しているときには逆に三日が夕食に呼ばれたりもする。

しばらく待っても返事がないので、三日は合鍵を取り出して皐月の家の玄関をあけた。

部屋の中には入らずに、靴箱の上の飾り棚に、今日作ったマフィンと二人分置いておく。

以前、玄関先に吊るして置いていったことがあるのだが、皐月が嫌がったために、不在の際は室内に入れておくようにしているのだ。再び施錠をして自宅に戻り、部屋着に着替えてくつろいだ。

「つかれた」

不慣れな学園生活は肩がこる。

「あー、がんばろう」

今日のぶんの課題をやって、食事をとって、お風呂に入る。明日は補習授業のある日だから、そのぶんの予習もしないといけない。一人暮らしだと邪魔のはいることがないから、勉強がはかどる。皐月の気配がないことをすこし物足りなく感じもするけれど、三日はゆったりと過ごして疲れを癒した。

そんな夜半に、三日は夢を見ていた。

（悪夢だ）

そうひとりごちるほど、それはまぎれもない悪夢だった。

世界は赤く血に染まっている。
まるで十夜の左手に包みこまれているように、赤くぬめる。

赤黒く曇った空からは時折にこった血のかたまりがドロリと垂れ、
大地は臓器のような弾力をもっていて、一步を踏み出すごとに、靴
底がわずかに沈む。

風がなく、大気が停滞しているせいか、じめついでいて生臭い。

いつからここにいたのかわからない。

気づいたら見わたすかぎりの血染めの湿地で、ひとりたたずんでいた。

地面に微かな隆起がある以外には、人も獣も建物も、なにひとつと
して見あたらない。

どこに行くあてもないなか、転倒しないように気をつけて歩を進め
る。

三日は学校の制服を身に着けていた。靴も通学に使用している革靴
だ。

裾にレースのついた繊細なデザインのスカートや、生成りのブラウ
スが、汗ばむ肌に貼りついている。

（ここはどこだろう）

暗くよどんだ空に、胸の内まで塗りつぶされる心地がする。

徐々に瞳をにごらせて肅々と歩く三日のくるぶしに、水滴がはねた。
目をやると、何もなかったはずの大地に、小さな血の池があらわれ
ていた。

くすんだ色の大地とは異なる、鮮血の池だ。

池の周りには血があふれていて、どうやら三日はこれを踏んだらしい。

足を止めて池を見つめる三日の耳に、物のこすれあうような微かな音が届いた。

神経を逆なでするような、不穏な音だ。

わきあがる嫌悪感に肌があわだつ。

緊張のあまり、きしんだ音をたてそうな首をなんとかひねり、背後を見る。

ムカデが、地平を埋めつくさんばかりに大挙して、うごめいている。真っ赤な世界に、突如としてあらわれた異物だった。

もはや、大地を覆うものは血の赤ではなく、ひしめきあう琥珀色の生物だった。

百足という名の通り、無数の足をカサカサといわせて、こちらに押し寄せるようだ。

あわてて視線を転じると、いつのまにかムカデは池の外周をぐるりと取り囲み、地を這い、三日に迫っていた。

三日は恐怖に凍りついた。

弱々しく、いやいやと首を横にふった。

悲鳴もでなかった。

三日にとって、この世にムカデほどおぞましいものはほかにない。心の中で泣き叫びながら、逃げ場のない世界を見わたした。

目の前には、底の見えない血の池がひろがる。

せまりくるムカデの気配に耳をふさぎ、三日は表情の抜け落ちた顔で、池に飛び込んだ。

むっとする生暖かい血液が口に入る。

目をつむることはできなかった。

――三日は泳げない。

口からゴボリと空気がこぼれ、三日は喉をかきむしり、沈んでいった――。

第五話

夢見が悪かったなんてものではない。

げっそりとやつれた顔にクマをこしらえて、三日はとぼとぼと登校していた。

世間は平和だ。

常ならば心の浮き立つような小春日和だ。周囲を歩く生徒たちの表情は明るい。

ひとり三日だけが、寝不足もあらわな沈んだ面持ちで歩いている。

バス停から山道を五分ほどのぼり、昇降口へと至る。

頭がずんと重かった。

「望月さんおはよう」

声をかけてくれるクラスメイトに、適当に返事をしながら教室へむかう三日の前に、

かの生徒会長と副会長が、そろって姿をあらわした。

「あれ、三日ちゃんおはよう。すごい顔だね、どうしたの？」

「……ああ、一之瀬さん」

面倒な人たちに会ったと思った。なにより、口をひらくのが億劫だった。

「寝不足か」

十夜が眉をひそめる。

「そのようだね。だめだよ三日ちゃん、睡眠不足は女性の敵だよ。

……にしても、くらい顔だね。大丈夫？」

「少し夢見が悪かっただけです」

「夢を見たのか」

低く十夜がつぶやく。

「ええ」

「ふうん、よほど嫌な夢だったんだね、可愛いそうに。調子が悪そうだけど、保健室に行く？」

いかにも親切めいた声の調子で、秋が問う。

「いえ、平気です」

「そうかな、大丈夫なようには見えないけど。無理はしないようにね」

「ありがとうございます」

そう答える三日に対し、十夜はなぜか不機嫌そうに目をすがめた。

だが今朝の三日には、その視線を受け止めるだけのゆとりはなく、うつむいたまま頭をさげた。

「教室行って、すこし休みます。それじゃあ」

「お大事に」

薄い笑みを口元にはいて、秋が手をふった。

「秋」

力ない足取りで立ち去る三日を見送ると、十夜は表情をあらためて、厳しい口調で秋を責めた。

「彼女に干渉したな。勝手なことを。必要ないだろう」

「必要だよ。怪しいものは疑ってかからないと」

十夜は目を細めた。

腰の重い自分とは異なり、この男はフットワークが軽い。

互いに補い合うことで、生徒会が機能しているのは間違いなかった。

「……何かわかったのか」

問われて、秋は困ったように表情を崩した。

「忍耐力はそれなりにあるけど怖がりだってことと、ムカデが嫌いだってことくらいかな。ああ、あと泳げない」

「それで？」

「それと僕のこととは知らない様子だった。夢が人為的なものだったことは、気づいてなさそうだったからね」

やれやれと首をふる。

いましがた会った、憔悴した様子の彼女の顔が頭をよぎる。

自分の手を染める血に気づいていながら、さして驚いたそぶりもみせない少女が気にはかかるが、かといって、それだけで夢の中身を引っ掻き回すなど、やられるほうはたまったものではないだろう。

「まだ続けるつもりか」

「もちろん」

「……ならば、今夜は俺も行こう」

羽目はずしがちなこの男の、ストッパーになるのは自分の役目だ。

秋が首をかしげた。

「来るの？」

「ああ。お前は加減を知らないからな。ほうっておけないだろう」

「ふうん、まあいいけど。じゃあ次は趣向を変えて、話しかけてみようか」

口元に手をあてて、秋が言った。

「昨夜は、反撃するそぶりもみせなかったんだ。真っ向から問いつ

めたほうが早いかもしれない。嘘のつけない空間で、あの子が何を語るのか、みものじゃないか」

楽しげな秋に、釘を刺す。

「あまり遊びすぎるな」

まるで気に入りのおもちゃを見つけたような態度の秋を見て、不運な新入生に憐憫の情をいだく。

「それと、ホームルームがはじまる前に、校舎の外を見回りに行くぞ」

「ええ、嫌だなあ」

不満の声をもらす秋に、十夜は告げた。

「小物がうろついているんだ。駆除しておかないとまずい」

「見回りいつまで続くのさ。どこのバカだよ、いい加減にしてくれないかな」

それには十夜も同意を示すしかなかった。

「ああ、まったくだ」

――この日は、学園内の空気がざわざわしていた。

小さなトラブルが頻発し、生徒たちも皆、落ち着きをなくしているようだ。

三日も、どこからともない視線を感じることが幾度かあった。

昼食後、いくぶん気分も上昇していた三日は、千佳とわかれて図書館へ行こうと思った。

昨日見たツルバラが印象的だったので、花の咲く植物について書かれた園芸書を読んでみようと考えたのだ。

実際に購入するかどうかはわからないが、花の名前を覚えるだけでもたのしそうだ。

そんなわけで、図書館へとつづく渡り廊下を歩いていたときのことだった。

「おい、あぶないぞ！」

ふいに野太い声がかけられ、ふわりとあたたかな風が体をつつんだ。うしろから、三日を押しつけて立ちふさがる人物があった。

男は、はっとする三日に背をむけて身構えると、とつぜん茂みから飛びかかってきた黒いかたまりを、太い腕ではらいのけた。

べちゃ、と、弾力のあるものが壁に当たる、嫌な音がする。

半透明な体液をこぼし、廊下のすみに落ちたのは、黒いネコだった。

大柄な男は、倒れるネコをつまみあげ、口の中をのぞきこむと言った。

「ロボットだな」

突然の出来事に、わけがわからずにたちすくむ三日の肩を、誰かがたたいた。

振り向くと、さきほどの男ほどではないものの、筋肉質な体つきをした青年が、なだめるように三日を見つめた。

「大丈夫？ 災難だねえ、あんなのにでくわして」

「あの、あんなのって……？」

ネコをぶら下げた短髪の男が、三日のほうに戻ってきて言った。

「眼球にカメラがしこまれているようだ。たぶんこれは情報屋の目だな」

「あーあ、壊しちゃってよかったんですか？ 叱られますよ」

「しかたないだろう。この娘さんが襲われそうだったんだから」

三日の肩に手を置いたままの青年が、首をひねる。

「でもそれって変ですよねえ。情報屋のって、あれはただの悪趣味な監視カメラでしょ？ 人を襲うなんてはじめてきますよ、バグかなあ」

「知らん」

「物騒な話ですねえ。お嬢ちゃんも怖かったね？」

「あつ、はい。ありがとうございます。たすかりました」

「いや。ケガがないならなによりだった。これの持ち主には苦情を言っておく」

「あとう、持ち主って誰なんですか」

三日がおずおずとたずねる。

「情報処理部で、のぞきやハッキングまがいのことをやっている、困ったヤツがいるんだよね。お嬢ちゃんは新入生？ かわいいねー」

「京堂。軽薄なまねはするな」

「軽薄じゃないですよ。率直な感想です」

「ええと」

ずつと肩に触れたままの手が気になり、視線をさまよわせる三日を見て、がっしりとした体つきの男がため息をついた。

「まずはその手を離せ。わいせつ行為だ」

「ええ？ わいせつってのはこういうのをいうんですよ」

京堂と呼ばれた青年は、肩の上の手をどかすと、腕をまわして三日の腰を抱きよせた。

「京堂！」

地響きのような怒鳴り声がして、京堂が笑いながら腕をはずす。

「冗談ですって。ごめんね、お嬢ちゃん」

「ああいえ」

めまぐるしい会話に、不慣れな三日は目がまわりそうだ。

「ところでかわいいお嬢ちゃん。クラスと名前とメールアドレスを教えてくださいるかな」

「は？」

ぶぜんとした男の、せきばらいが聞こえる。

「教える必要はない。出来ない部員が失礼をした。俺は三年の五島だ。今のようなことはめったにあるわけではないが、気をつけたほうがいい」

「五島さん、ムキムキでしょ。体操部の部長をやってるんだよ。こんなに重そうな筋肉をしてるのに、鉄棒とかくるくる回っちゃうんだ。面白いから見学においで。美人はいつでも歓迎だよ」

「へえ、体操部。すごい」

五島と京堂のがたいのよさにも納得である。

「オレは京堂。友哉って呼んでもいいよ。お嬢ちゃんは部活なにかやってるの？」

「あ、私は家庭科部に入ってます。望月 三日です」

ぺこりと頭をさげる三日を、京堂がしまりのない顔で見つめる。

「へえ、女の子らしいねえ。これから、ことさらよろしくね」

「ええと、よろしくおねがいします」

「今度、家庭科部に遊びにいつでもいい？ 部活、何曜日にやるの？」

「火曜日と木曜日です。遊びに来ていいかどうかは、私にはちょっと……」

わからない、と続けようとした三日の言葉をさえぎって、京堂は大

きくうなずいた。

「明日だね。わかった」

「え、あの」

「そこまでだ」

不毛な会話を打ち切って、五島は京堂の頭をつかんだ。
京堂があわてて身をよじる。

「ちょっと、痛い、痛いですって！」

「下級生に迷惑をかけるな」

「かけてませんよ。仲良くなろうとしてただけでしょ。ねえちよつと、自分の馬鹿力をわきまえてくださいよ！」

「知らん。行くぞ」

わめく京堂をひきずって、五島は「邪魔をしたな」と声をかけ、クラブハウスのある方角へと歩いていった。

あたりには、さわやかな春の風だけが残る。

ぽかんと二人を見送って、三日はつぶやいた。

「なんだったんだろう。にぎやかな人たち」

そうして、騒ぎのきっかけとなった、黒ネコの残した壁のシミを、
けげんなおももちで眺めるのだった。

第六話

昼休みは短い。

橘 十夜は、副会長の秋をひきつれて、情報処理部の部室へ来ていた。

ディスプレイを見ながら、俗に「情報屋」と呼ばれる溝口 理央と会話をかわしていると、ほどなくしてそこに、二年の尾上 京子がやってきた。

京子は、予想だにしない顔ぶれがそろっていたせいか、あからさまに顔をしかめて、部室の主の溝口に言った。

「お客さまがいらしてゐるなら、私は戻ります」

溝口が首をふる。人種の違いを思わせる白い肌に、肩の下まで伸びるくすんだ赤毛がさらりと揺れた。

「いいんだよ、京子さん。ゆっくりしてって」

「いえ。悪だくみには加担したくありません。またあらためます」

「ああ、待って」

きびすをかえした京子を、溝口は呼び止めた。

「今、橘くんと話してたんだけど、学内の結界が破られそうなんだ。そうしたら、外から悪いものが入ってくるかもしれないでしょう。」

京子さんも気をつけていてね」

「結界が？」

京子が舌打ちをする。

「生徒会は何をしているんでしょうね。不甲斐ない」

「それでも毎日走り回ってるんだから、あんまりいじめないですよ」
あてこすられた秋が、へらりと笑う。

「ああそうだ、昨日はマフィンをごちそうさま。皆でおいしくいただいたよ。とくに奏はよろこんでたっけ」

「奏？　ああ、あの一年の」

「そう。あの子、お腹がすくと扱いづらくなって大変だから」

「人づかいの荒い上級生に囲まれて、鬱憤がたまってるんじゃないですかね」

「かわいい子ほどかまいたくなるもんさ。誰もがあなたの放任主義のご主人さまと同じじゃないんだよ」

京子は、心底うんざりしたというように秋をねめつけて、「失礼します」と吐き捨て、部屋を出ていった。

「あーあ、怒っちゃった」

十夜があきれた眼差しを向ける。

「怒らせたんだろう」

「感情豊かでいいでしょう、京子さん」

どこことなく誇らしげに、溝口は言った。

「で、さっきの続きだけど、どうなったの？」

秋が仕切りなおす。

「ああ。望月さんね」

溝口が監視カメラから送られてきた映像の、再生ボタンを押した。

「結論からいうと、なにもわからなかった。邪魔がはいったんだ」
ディスプレイ上に、外の渡り廊下を歩く三日の姿が映し出される。

「ほら、ここ」

溝口が指さす。

カメラが少女に急接近したとおもうやいなや、突如、画面を筋肉質

な男の上半身が占め、画像が激しくぶれて、映像はぶつりと途絶えた。

「あー、これはまた」

秋が残念そうな声をもらす。

「体操部の五島だな」

「だねえ。かわい一年女子を守るヒーローじゃん。あこがれるね」

「どうする？ 監視はつづける？」

溝口に問われて、十夜はうなずいた。

「ああ。しかし見ているだけでいい。不審な行動があったわけでもないのに、飛びかかるのはやりすぎだ」

「了解」

「十夜はやさしいからなー」

秋がくるりと体の向きを変える。

「それじゃあそういうことで。おじゃまりました」

「すまんが頼む」

とっとと出て行く秋を追って、十夜も部室をあとにした。

クラブハウスの廊下で、体操部の五島と京堂の両名とすれちがう。

「おう」

「こんにちはー」

五島はしぶく、京堂は軽薄そうに、挨拶をする。

十夜も挨拶をかえしながら、五島の右手にさげられた黒い毛のかたまりをちらりと見た。

「ああこれ？ 五島さんが殴り壊しちゃったんですよ。情報屋さん
とこの端末みたいだから、今から謝りにいくんです」

「謝るんじゃない。苦情を申し立てに行くんだ。誤作動を起こした
からな」

「そうか」

十夜はうなずいて、二人を見送った。

秋はというと、体操部の二人になど目もくれず、少し行った先で携帯を片手に誰かと通話をしていた。

「そう。だから、三日ちゃんと千佳ちゃんにはお礼を言っておくんだよ」

近づく、そう話しているのが聞こえてくる。

「じゃあね。今日は補習がある日でしょう。終わったらおいで」

「奏か」

携帯をしまった秋に問う。

「うん、そう。あいかわらず嫌そうな声をしていたよ」

秋が目をはそめた。

シャープな顔だちをした後輩を思い浮かべて思う。

性質のよくないやからにばかり気に入られる彼は、気の毒だ。

放課後、任意の補習授業が終わり、帰り支度をした生徒たちが教室を出ていくと、奏は廊下を追いかけて、望月 三日に声をかけた。

「望月さん」

「ああ、三鷹くん。今日の英語、たくさん宿題でちゃったね」

「うん。……あのさ」

並んで昇降口に向かいながら、奏は重い口をひらく。

「昨日はマフィンをごちそうさま」

「え、あれ？ 三鷹くん食べたの？」

「その、昨日はちょうど、生徒会の手伝いをしてたんだ。クラス委員なんて、生徒会の下請けのようなものだから。そうしたら、副会長がさしいれを持ってきて」

「そうなんだ。まさかあのマフィンが三鷹くんの口に入るとは思わなかったな。ちょっとだけびっくり」

「おいしかったよ。お腹がすいていたから、たすかった」

「よかった」

三日の眼差しがやわらかな光をおびた。

「それで副会長が、望月さんと大瓦さんに会ったらお礼を言っておけて。急に二人の名前がでるから驚いたよ。家庭科部だったんだね」

「ええ、そうなの。運動部とちがって、のんびりとしているから楽しいよ」

奏はいくぶんためらいがちに、質問を口にした。

「部活ではどんなことをしてるの」

「かたんなお菓子や軽食を作ることが多いけど、小物を作ったこともあるよ。まだ、はじまったばかりだからよくわからないんだけど、来月からは皆がそれぞれ興味のあることを話しあって、活動内容を決めていくみたい」

「へえ。なんだかいね」

「でしよう」

三日がはにかんだような笑みをみせる。

こうしてみると、三日はあらためて美しい少女なのだと感じる。

（きれいだけど、すこし、世間離れした美しさだよな）

まっすぐな長い髪も、にじみ出る品のよさも、不思議と人間くささ

を感じさせないのだ。

（秋さんに監視対象だなんてふきこまれたせいかな）

しかしこうして話しているかぎりでは、三日にうしろぐらい部分があるようには思えない。

背すじがのびていて、一見すると気高いようなのに、内気な性格のせいか、いつもひかえめにしている、とらえどころのない女の子だ。

「どうして家庭科部に入ったの」

そうたずねると、三日はすこし考えるそぶりをみせた。

「……そうね。調理、とか、お裁縫とかでも、それって自分やまわりにいる人が心地よくなるためにすることでしょう。生きるために必須だからやるわけではなくて、生活を充実させるためにすること」
「そうだね」

「そこが不思議で、興味があつたの。人間らしさって、なんだろう
と
思
っ
て」

（――それは、聞きによっては、人間ではないと言っているようにもとれるよ）

そう、彼女に告げてみたかったけれど、奏にそこまでの思いきりのよさはなく、困惑をあいまいな表情でごまかした。

「ずいぶんと難しいことを考えているんだね。オレはてっきり、料理が好きだからとか、そういう答えが返ってくるんだと思ってた」

三日は、二度三度とまばたきをする。

「もちろん、おいしいものを食べるのは好きよ」

「だったら一緒だ。オレもおいしいものは好きだからね。まあ、自分では作らないけど」

「作らないの？」

「つい、時間がもったいない気がしちゃってね」

「――ああ」

三日はふいに、まじめな表情になって、目をふせた。

「時間を惜しむ、か。——それもよくわからない感覚だなあ」
くちびるからこぼれ落ちたつぶやきを、しかし奏は聞き逃さなかった。

三日の顔をのぞきこみたい衝動をおさえて、視線をさまよわせる。

と、そこで、奏は息をのんだ。

（——うっそだろ。タランチュラ！）

本物かどうかはわからない。クモにくわしくなどない。

だが、子どものにぎりこぶしほどもありそう大きなクモが床を這い、斜め後方から音もなくにじりよってきていた。

毛のこわそうな黒い胴体に、人の警戒心をかきたてる赤い斑点模様が入っている。

足の一本一本に、顔のパーツまでもが、はっきりと視認できた。

背中を冷や汗がつたう。

（これ、毒がある。絶対）

見る者にそう信じこませるにたる、禍々しさを全身から発している。

（どうする）

奏は迷った。

ちらりと三日の背中に目をやる。

思考にひたっているのか、うつむいたままで、クモに気づいた様子はない。

意を決し、奏はベルトの内側から、ひとさし指ほどの長さの銀の小刀を取り出した。

右手に二本、かまえて息をととのえる。

ナイフ投げのコツは、二年の音無 百々（おとなし もも）に、以前教わったことがある。

百々とは違い、自分の場合は急場しのぎでいどにしか使えないが、ないよりマシだ。

奏は小学生のころから弓道が続けていたし、的へ当てるという点では、気構えは同じだろう。

そう自分をふるいたたせ、ひとつおもいに投げた。

一投、二投と、銀の刃は吸い込まれるようにクモの背をつらぬいた。ガツ、とひびいた音に、三日が肩をふるわせる。

「え、なに？」

とっさに奏は三日がふりかえらないように肩を押し、ものを拾うしぐさをみせた。

「ごめん、携帯落とした」

三日の肩から力がぬける。

「びっくりした。ごめんね、私すこしばうっとしてたみたい」

手にした携帯のボタンを適当にいくつか押しながら、首をふる。手に汗をかいていた。

「いや。そういうえば、望月さんは、もうまっすぐ帰るの？」

三日が小首をかしげて奏を見る。

「ええ。そのつもりだけど、三鷹くんはちがうの？」

「オレ、今メールがきちゃって。書類の不備がみつかったから、整理を手伝えだって。生徒会室に行かないといけなくなった」

「ええ、たいへん」

同情の色をみせる三日に、奏はわざとらしくすねた表情をしてみせる。

「貧乏くじひいた気分。でもまあ、しかたないから行ってくるよ」

「そう。早く終わるといいね。生徒会とかクラス委員とかって、いままであまり感心がなかったけれど、けっこう忙しいもののね」

「うん、忙しい時期もあるっていうだけで、いつもじゃないよ。じやあここで。気をつけて」

「わかった。さようなら」

「また明日」

立ち去る三日の背中が消えるのを見届けて、奏はようやくうめき声をあげた。

「……しんどい」

うなだれたまま、動かなくなった毒グモを見やる。

「どうすんだよこれ」

善良な一般人たる自分には手に余る。

こわごわ近づいてみると、廊下には赤黒い血がにじんでいた。

奏は遠い目をする。

（また結界に穴があいたんだろうな）

学園を囲う結界が正常に機能しているなら、悪霊もあやかしも、害虫のたぐいだって、校内に侵入するおそれはないのだ。

ここ数日のあいだ、外部からこれを破ろうとする試みがくりかえし行われていて、管理をまかされている九条などは、見ていて気の毒になるほど奔走している。

いくら山の中だとはいえ、このような毒グモがいるという話は聞いたことがない。

「こいつも化け物か」

憤りをこめて、吐きすてた。

しばらく考えたあげく、クモはナイフごとハンカチにくるんで、ト

イレからかっぱらってきたトイレットペーパーでぐるぐる巻きにし、生徒会室に置いてくることにした。

案の定全員出払っているらしく、部屋は無人だったので、『毒グモ在中。取り扱い注意』のメモとともに、机の上に放り出した。

秋に顔を見せろと言われていたけれど、一応足は運んだのだし、向こうも忙しいのだから言い訳はたつだろうと、これで帰ることにした。

そうと決まれば善は急げだ。うっかり顔をあわせないように、そそくさと家路を急いだ。

道中、望月 三日のことを思いおこした。

奏の知るかぎり、あやしげな能力をもつ者ほど、気配に聡い。

もしも演技でないとしたならば、三日はそうとうニブい部類に入ると思う。

「彼女、この学校でやっていけるのかな」
ひとごとながら、気になった。

第七話

帰宅した三日は、この日も皐月の家のインターフォンを押した。

「今日もないの？」

自宅でひとりになってみると、昨夜の悪夢が頭をよぎり、今日は一緒にいてもらおうと思っただ。

帰ってきてほしいとメールをしようかとも考えたのだけれど、そこまでのこともないだろうと思いなおして、三日は大人しく自分の家に戻った。

「添い寝のあてがはずれちゃったな」
くちびるをとがらせる。

まさか二日もつづけて嫌な夢は見ないだろうけれど、なにせ自分にとっての天敵が出てくる夢なんて見たことがないから、気分がわるい。

三日は体をふるわせた。

「ああもうなんてこと。思い出すだけで血も凍るわ」

三日は心底ムカデがきらいだった。名前を口にするのもいとわしいほどだ。

たぶんこれは、母方の血が原因なのだと思う。

生まれながらにして、細胞に刻み込まれているのだろう。

ムカデは忌避の対象だ。あれだけは、この世に存在してはならないものなのだ。

一瞬、今日くらいは実家に戻ろうかなとも考えた。

三日の実家は、タクシーでわずか十五分。白睡山のふもとにある。

行けばあたたかく出迎えてくれるのはわかっていたが、この年で夢が怖いと泣きつくのもどうかと思えて、あきらめた。家を出るときに、夏休みまでは実家の門をくぐらないと決めていたこともある。

「きつと、お腹がすいているから悲観的になるんだ」
自分にそう言いきかせて、三日は夕飯のしたくをはじめた。

怒ればいいのか、嘆けばいいのか。――三日はふたたび、悪夢のただなかにいた。

昨夜と同じ、赤一色におおわれた大地で、ひとり立ちつくしている。

歩いたら、また出るだろうか。そう思うと、歩を進めるのにもためらいが生じる。

だが、昨夜の夢では、血の池も大量のムカデも、とうとつに現れたのではなかったか。

ならば、ここに立ち止まっても、どこにむかって進もうとも同じではないかと、三日は足のむくまま歩きはじめた。

行けども行けども景色のまるで変わらない世界を歩いていると、自分の存在がいまいに感じられるようになってくる。

（ここはきつと、閉じた空間なんだわ）

停滞した空気をかきわけて、三日は思う。

どこにもつながってなどいない、閉鎖された場所では、歩くことに意味などない。

胸の内に変化を望む気持ちがある。

昨夜のような身の毛もよだつ展開はごめんだが、こうしてわけもなく足を動かしていると、どうしても考えてしまう。

（ずっとここに閉じ込められたままだったらどうしよう）

この状況が長びけば、その恐怖がいや増すことは確かだった。

——きつと、そのうち耐えきれなくなる。

三日は足をとめて、地面を見つめた。

（穴を掘ってみたらどうだろう）

道具はないが、粘膜にも似たこの大地は、やってみたら意外と簡単にやぶることができるかもしれない。

（ちがう、そうだ）

はっとする思いで、三日はくらく垂れこめる空を見上げた。

（ああ、どうして気がつかなかったんだろう）

夢にしては、ここはやけにリアルではないか。

三日は、かけていた眼鏡のフレームに指をそえた。

（もし、この夢が私のストレスに起因しているのだとしても、眼鏡をはずせば、見えてくるものがあるかもしれない）

夢占いというものがあるくらいだ。夢にはおのれが強く反映するのだろう。

だったら、それと向き合うためにも眼鏡は不要だ。

眼鏡をかけているときの三日は、おのれを偽っている。

（夢の中では、視界をせばめることに意味なんてないもの）

三日が眼鏡をはずそうとしたとき、大地がかしいで、彼女は血だまりにヒザをついた。

息をのんで、顔にはねた鮮血を制服の袖でぬぐう。

大地には血の池がひろがっていた。

昨晚とは異なり、三日が今ひたっている場所は、足首までの深さしかない。

三日は顔をしかめた。

（さっきまで、ちゃんと地面があったのに）

体をひたす池の血は、生ぬるくて気持ちがわるい。

すると、池の表面にぽつぽつと水泡があがってきて、水面が波打ち、手をのばせば届くような距離に、池の中から大グモが浮かび上がってきた。

地面を這うのと等しい動きで、こちらに、つーつと近寄ってくる。

（オオツチグモ？）

俗称をタランチュラというクモに似ている。

もし、本当のタランチュラなら、世間に出回るイメージとは異なり、さして害のある生物ではないはずだ。

だが、眼前のクモには不気味な赤い斑点もようがあった。

（毒があるかもしれない）

そう思ったって、三日は距離をとろうと後ずさる。

だが、クモが這うぶんを三日が後退していくと、池の深さはどんどん増し、とうとう腿のあたりまで血につかるようになってしまった。

このままではちがいかないと、三日は大きく息をつく。

（大丈夫。やれる）

すばやく眼鏡をはずし、右手の二本の指先に意識を集中して、四縦五横に早九字をきった。

「きえちやえ」

三日の声とともに、パンと乾いた音がして、クモが消失した。クモだけではなく、血の池も、大地も、空も、――ありとあらゆるものが消えうせた。

(え?)

三日は目をぱちくりとさせた。

大地も空もない真っ白な空間に、三日と、それからつい先日知りあったばかりの人物が二名、向かい合う形で立ちつくしていた。

「生徒会の……」

かすれた声が口からもれる。

対面する二人も、おどろきを隠せずにいるようだ。

「うわ、すごいな」

一之瀬 秋は、まじまじと三日を見つめた。

「こんなのはじめてだ。護身法だけで全部打ち破るなんて」

「望月 三日か」

ともにいた十夜が、一步前に出る。

「まずは謝罪しよう。不快な思いをさせて、すまなかった」

「え、え？」

秋はゆるくかぶりをふると、常に口もとをおおっている笑みを消し、三日を見すえる。

「ぼくは謝らないよ。きみ、なにが目的で万理万里に入学したの」

「目的、ですか。あのう、その前に、謝罪ってどういう意味です？」

今は夜空の藍をうつした、秋の瞳がまたたく。

「気づいてないの？ ぼくらをこうしておもてに引っ張り出しておいて？」

「すみません、さっぱりわけが……」

「あきれた」

秋がさげすむような目をむける。

「そうだな、昨日ぼくがきみの眼鏡をはずしたのを覚えているでしょう」

三日はうなずいた。

秋の藍色の瞳は深く澄んだ色をおびていて、眼鏡ごしにうつる茶色の瞳より、ずっときれいだと思ったのだ。

「ぼくが他人の夢の中に入るには、目と目を見交わして、マーキングをしておく必要があるんだ」

そのための行動だと、秋は告げた。

「それって」

三日は心底おどろいて、ならば二人の顔を見比べた。

「私がわざと悪夢を見せられたという意味ですか」

「ぼくは夢魔だからね。夢に入りこんで、その人と親しくなるのが仕事なのさ」

「昨日の、夢も？」

「ああ。夢の中では、人は正直だ。きみも、ぼくも」

三日の体が微かにふるえた。

「怒った？」

「……なんのためにですか」

「きみのことが知りたくて」

瞳にからかいの色をまぜた秋を押しつけて、十夜が口をはさんだ。

「お前が怪しかったからだ」

「あやしいですか」

「怪しいな」

「そうだね、すごく」

口々に言われて、そういえばと、ようやく三日は事の起こりを思い出した。

「私が、橘さんの手を見てしまったから……？」

「そうだ」

三日はうなだれた。

理不尽だと思った。そんなことが原因でムカデに囲まれたなんて、あんまりじゃないだろうか。

「さすがに、わりにあわないよ」

そうしておそらく、自分はいまだに疑われているのだ。

「私、あやしいものじゃありません」

三日の告白に、秋が目がすがる。

「なにそれ、なにかの冗談？」

「いえ、ほんとうに。だいたい、あやしいってなんですか。なにをもってそんなことを言うんです」

「きみの目には、十夜の手はどんなふうに見えるの」

「血みどろでえぐいです。ご自分の血ではないように見えます。垂れた血液がどこに消えてしまうのか、気になります」

「夢の中でそう見えるのは正常なんだ」

そういう秋に、三日は視線で問いかけた。

「夢は真実をあらわすから。ここでは十夜の手は、誰が見ても、あるがままに見えるってこと。でも、きみは昼間の学校でも見たのでしょうか」

「俺のこの手に気づく者は少ない。お前の目のよさは、尋常じゃないな」

秋がそれに付け加えた。

「護身法をきる技量もね」

三日は困った。

「ええと私、そんなにたいそうな者ではありません」

「だったらなんなの」

「九字法は、父に教わったんです。うち、そういうトラブルを持ち込まれることが多いから」

「お父さん？」

「はい。あの、八百坂神社やおさかじんじやってご存知ですか。お山のふもとの」

「ああうん、知ってる」

「退魔で有名なところだな」

「私、その一人娘なんです」

三日はおのれの身の上を語った。

魔を払う力の強い家系に生まれたこと。

神が住むといわれる白睡山が近いことから、もののけに遭遇する機会が多かったこと。

神社をたずねてくる人たちの事情に巻き込まれる危険もあったこと。二人はだまって耳をかたむけていた。

「たしか、白睡山を住まいにしているという神は、白蛇だったな」

「よくご存知ですね」

「有名な話だ」

けしてそんなことはないはずだが、十夜はさも当然だというように、言葉を吐いた。

「禁忌の山を背負う娘か」

「背負っているつもりはありませんが。なので、よく見えるのは血筋かと」

「眼鏡は伊達か」

三日は眼鏡のフレームを指でたどった。

「この眼鏡は、祖父に作ってもらったんです。見えすぎる目を封じるために。そのほうが、平穏に暮らせますから」

秋がじっと三日を見つめたまま、口をひらいた。

「で、話を元にもどすけど、この学校に入学したわけは」

「両親が勧めたからです。たぶん、私に向いていると思ったんですよ」

しぜんと三日の顔がしかめられる。

複雑な思いはあるが、中学まで、人間ばかりが集まるごく一般的な学校に在籍し、まったく馴染めずに過ごしたのだから、文句を言うことはできなかった。

「学校に結界がはりめぐらされているのは知っている？」

「はい、なんとなくは」

「最近、これを壊そうとしてやつきになっているヤツがいるんだよ。ぼくは、きみのしわざなのかとも思ったのだけど」

「ちがいます」

断固としてこたえた。

「もし、その疑いのせいでこんな目にあってるのだとしたら、おかどちがいです。してません」

「んー、そっか」

秋は肩をまわした。

「わかった。もういいよ」

——最近、貧乏くじをひいたと言っていたのは誰だったろう。

（ああ、三鷹くんね）

まさしく、そんな気分だった。

三日は、十夜の血染めの手を見つめた。

そういえば、流れたあの血がどこに消えるのか、教えてはもらえなかった。

「気になるか」

重々しい声で、十夜がきいた。

「あ、いえ。不思議だなと思っただけです。あと、不便じゃないのかな、とも。触れられたくない事柄なのだったら、すみません」

「いや、かまわない。お前には迷惑をかけたからな。質問があるなら答えよう」

「ええとでは、とめどなく流れてるその血はいったい……？」

「うわ、要領を得ない質問だなあ」そう、秋がひとりごちた。

十夜はかまわず、ゆっくりと語りだした。

「この血は、俺が吸い込んだあやかしどもの呪いなんだ」

「まあ、目に見える形で残った断末魔の悲鳴のようなもんだよね。

十夜は、獏なんだよ」

「ばく？」

「そう、獏。動物園にいる、カバっぱいやつのことじゃないよ。知ってるでしょう？ 夢を食べる獏」

そう説明されても、じつのところ、三日は動物園に行った経験がない。

お山に生きる動植物にはくわしいのだが、獏という名前の動物にはこころあたりがなかった。

ばく、ばく……、と幾度かつぶやき、目覚めたら調べてみようと思ふにとめる。

しかし、悪夢を食べてくれるという種族については耳にしたことがあったので、うなずいた。

「あれ、でも私、悪夢を食べてもらっていませんよ」

「悪夢を食べるというのは、人間の願望だ。俺はそんなことはしない」

「食べないのですか」

十夜は赤い左手をかかげてみせた。

「食べるのではなく、吸い込むんだ。手のひらから吸収する」

三日はもうしわけないと思いながらも口にした。

「……掃除機みたいに？」

上体がかめて、秋がふきだす。

十夜は真面目な顔のまま、こたえた。

「まあそうだ。夢だけではなく、霊魂や妖怪、妄執などを吸い込むこともある。世の中に害をなすような者ほど、抵抗するからな。その恨みが、血になって残る」

笑いをおさめて秋が、補足した。

「あの学校、いろんなやつらが集まってるぶん、トラブルが多いんだよ。言ってもわからない悪い子は、ぼくがここに連れてきて、十夜が処分する。適材適所ってやつだね」

「処分ですか」

不穏な単語に、ひっかかりを覚える。

「命まではとらないよ。十夜は優秀なんだ。生きたままでも処分はできる。見てみたい？」

「あ、いえ。遠慮します」

三日はあわてて手をふった。

「よっぽど悪いことをしないかぎり、そんなお仕置きはされないから大丈夫だよ」

「ほかに質問は」

十夜が問う。

ききたいことはまだまだある気がするのに、どれも言葉にならなかった。

「いえ、ありません」

「そうか」

落ち着いた物腰の彼は、表情は乏しいものの、もしかしたら誠実な人かもしれないと、三日は思った。

さんざんな目にはあったけれど、十夜と言葉を交わしたせいかな、さして怒りはわいてこなかった。

ただ、これだけは伝えておこうと、三日は硬い口調で言った。

「もう、私の夢に入り込むのは、これきりにしてくださいね」

「ああ」

「了解。必要がないかぎり、しないよ」

秋が言った。

「そうだね、ぼくからも最後にひとつききたいことがあるんだ。きみはさ、学園生活をどんなふうに過ごしたいの」

質問の意図がつかみそこねたものの、三日は率直な気持ちを口にもぼらせた。

「私、今まであまり、人間とは親しくなかったんです。人間のことを知りたくて、——ともに歩む方法を探りたくて、入学しました。そうですね、それでもできれば平穩に」

「ふうん」

秋のあいづちを合図に、彼らがその答えに満足したのかどうかかわからないまま、夢はさめた。

画面が切り替わるような、あっけない幕切れだった。

しばし頭がおいつかず、自室のベッドで目を覚ました三日は、身じろぎせずに天井を見つめた。

挨拶もできなかったと思ったけれど、さようならと声をかけあうというのも、おかしいことかもしれない。

夜はとても静かで、いましがたの出来事と、こうして見上げる天井と、どちらが現実なのか非常に曖昧な気がした。

ようやくの思いで寝返りをうち、時計を見ると、夜明けにはまだ間があった。

眠れないだろうとは思ったが、三日はそつと目をとじた。

第八話

朝から十夜は学園の敷地内を奔走していた。

おそらく十夜よりも、結界を維持することに長けた九条のほうが負担が大きかったが、今朝になって外部からの攻撃が激化し、要となる複数の定点を同時に崩されそうになったため、手が回らなくなっていた。

週末がくれば、教職員が補強にあたってくれらるという話だが、このままであと二日、やりすごせるかは微妙な線だ。

溝口が情報屋としての腕をふるい、学園の異変をいち早く知らせてくれるから、今のところなんとかはいるものの、依然として犯人の目処も目的も、わかってはいない。

——時折、自分がなぜこんな役割をかってでているのだろうと、冷めた目で見つめてしまうことがある。

九条は疲労の色が濃いし、秋は目にみえて機嫌が悪くなっている。残る一人のメンバー、会計の音無 百々だけが、ハードワークには慣れていると言って、余裕しゃくしゃくといった態度をみせる。

（女は強いな）

常に生気と自信に満ちあふれている彼女ならば、十夜のように、自分の置かれた立場を疑問に思うこともないのだろう。

「わたしが決めて、好きでやってることだから」とでも言いそうだ。

自分に割り振られた定点の補強が終わる。

臨時のもので、応急処置でいどの効果しかなさない出来だ。

この場の修復にあたるのは、二度目だった。

二日前に、九条が焼きつけた魔よけの呪符が、黒く輝きを放ってい

る。

力強いその波動に、十夜はいくばくかの力添えをしたようなものだ。壊すのは得意だが、守るのは不得手だ。

それでも、十夜にしたって、自分で決めて好きでやっていることなのだった。

「さすがに疲れたな」

肩をまわして、上体を伸ばす。

秋と奏がいなければ、生徒会役員など引き受けはしなかった。

大多数の生徒など、どうなろうともかまいはしないが、彼らと過ごす自分の居場所を守るために、十夜はおのれにできることをこなしていくしかないのだ。

「次にいくか」

十夜は携帯を取り出し、溝口に電話で手の足りていない箇所を確認した。

若草の萌える季節に、さわやかさはほど遠い厳しい目つきで、十夜は次の定点へと足を運んだ。

奏は早朝に届いたメールを読み返し、まるで流れに乗りきれないなおのれを感じていた。

（とりあえず、望月さんに伝えればいいんだよな）

立場の弱さをかみしめて、教室のドアをひらく。

（あれ）

いつもなら奏より先に登校しているはずの、三日の姿がこの日はなかった。

クラスの男子とてきとうに会話を楽しんでいると、始業時間ギリギリになって、彼女が教室へと駆け込んできた。

「めずらしいね」そう声をかけると、はにかんだ様子で、

「ねぼうしちゃった」と肩をすくめてみせる。

よほど急いで来たのだろう。息があがっているのに、すんと下にたれた髪はちっとも乱れていなくて、彼女の髪はなにでできているのだろうか、くだらないことを考える。

すぐに授業がはじまり、私語を交わす間などなかったため、彼女への伝言は後まわしとなった。

ようやく落ち着いて会話のもてる機会がおとずれたのは、昼食後のことだった。

学食でカツカレーセットを食べて教室に戻ると、三日がひとりで本を読んでいた。

「なに読んでるの」

「ん、盆栽図鑑」

席につこうとしていた奏の動きが、一瞬とまる。

「……望月さん、盆栽に興味があるの？」

「家で育てているのはひとつだけで、増やすつもりはないんだけど、この本はいろいろな家庭の盆栽が載っていておもしろいわ。こういうのって、手をかけている人のこだわりが如実にあらわれるの。一本の木に対して深く関わろうとする考え方って、とても不思議ね」

「それはオレも不思議だ。望月さんのおうちは、誰が世話をしてるの」

「もちろん私よ。ひとり暮らしだもの」

(え)

なぜ盆栽なのかと突っ込むべきか、それともひとり暮らしのほうに

話題をそらすべきか、しばし悩んだ。

（地味な性格だと思ってはいたけど、いくらなんでも地味すぎやしないか？）

なんてモテなさそうな趣味なんだ、と思ったけれど、さすがに余計なお世話なので口をつぐんだ。

「そう。ええと、ひとり暮らししてるんだね。実家は遠いの？」

「いいえ、すぐ近くの。ただ、見聞を広めようと思って家を出ただけ」

「よく許してくれたね」

世間知らずな印象をうける娘だ。家族はさぞかし心配だろう。

「最初は反対されたけど、説得したらわかってくれたみたい」

「へえ。ああそうだ、ところで」

「なあに？」

秋からの伝言を口へのぼらせようとして、奏はためらった。

（なんて言えばいいんだ？）

なんせメールには、

『彼女、八百坂神社の娘だった。魔よけの腕はプロ並み。うさんくさいところもあるけど、とりあえず監視まではしないでいいや。なにか気づいたことがあったら教えて。それと、生徒会に入る気はないか、きいてみて』

と、あったのだ。

（ああくそ、誘いたいなら自分でやればいいのに）

心の中で毒づいて、奏はしぶしぶ話しだした。

「その、副会長から望月さんに伝言をたのまれてるんだけど」

三日の表情がいくぶん硬くなる。

「ええと、いや、たいしたことじゃなくて、その、……生徒会に加

わるつもりはないかって」

「生徒会ってどういうこと？」

「さあ。オレもよくわからないけど、気に入られたんじゃないかな、たぶん」

三日がもの問いたげな眼差しをする。

それはそうだろう。彼女の態度から察するに、あまり好意的にはとらえられていない様子だ。

（また余計なことしたんだろ、あの人）

目の前の少女に、いくばくかの同情を覚える。

「私、そんなつもりはないから」

「じゃあ、そう伝えておく。もし、しつこく誘われることがあっても、嫌ならきちんと断ったほうがいいよ。すこし強引なところのある人だから」

「うん。ありがとう。……それにしても、突然でびっくりしちゃった。どうして私なんだろう」

「さあ。それはオレにはさっぱり」

「副会長とは親しいの？」

「いや、そうでもない」

と、思いたい。と、胸中でつけ加える。

三日にその気がないことを、すぐにメールで伝えようかと思ったが、考えなおす。

早朝のメール以降、生徒会の誰からも連絡がない。

秋からの、返信をうながすメールすらきていない。

それはすなわち、彼らが忙しくしており、こちらにかまけるゆとりを失っているということだ。

（触らぬ神にたたりなし、と）

「それにしても、意外だったな。ひとり暮らしってたいへんそうだけど、すこし懂れるよ」

あたりさわりのない話題を口にして、いま学園を襲っているのであろう問題からは意識をそらした。

人にはそれぞれの領分というものがある。

一般の生徒としては、おとなしくしているのが最良の選択だというものだ。

放課後、三日は千佳とともに家庭科室にいた。

「今日はりんごのケーキを焼くからね」

京子がレシピの載ったプリントを手渡してくれる。

調理後の試食のほかに、それぞれひとつずつ持ち帰ることができるというから、三日は昨日世話になった体操部の人たちに、お礼をかねて持っていこうかと考えた。

芽衣が、りんごが好きだと言って、はしゃいでいる。

「アップルパイ、タルト、焼きりんご。りんごってほんとうにおいしいわよね」

「ですねー。りんごあめも、食べきれないくせについ買っちゃいます。かわいくて」

「わかるわ」

千佳と芽衣が意気投合して、りんごのすばらしさについて語る。

「生のりんごもいいんですよ。最初にりんごをウサギにみたてた人は、天才だと思います」

「誰かにむいてもらうのも嬉しいものよね」

「ああ、いいですね！」

「わたし、ジュースにして飲むのも好きなの」

「あー、わかります。おいしいです！」

「ジャムも、甘いのにどこかさっぱりしていて、好きだわ」

「ゼリーにしてもおいしいし」

「ヨーグルトとあえるのも好きよ」

「りんご、ヨーグルト、はちみつ。最強です」

「ああ、たのしみね、りんごケーキ」

盛り上がる二人に、京子があきれた様子で声をかける。

「好きなのはわかったから、食べたかったらほら、手を動かす」

「はい」

そんな光景のただなかについて、三日はじんわりと思った。

（平和だなあ）

二晩つづけてみた悪夢が、まさしく夢のようだった。

平穏な日常のなかで、人間らしさを学ぶ。それこそが、三日の目標であり、願いでもあった。

「やぶられた」

十夜がさげんだ。

九条はすぐさま手をひいて、自分たちの周囲に守護の結界をしいていく。

太い筆が地面をすべり、墨で円陣が描かれる。

「中に」

九条にうながされて、秋が陣の中へ入る。

「あーあ、とうとう壊れちゃったか。まあ、放課後でよかったかもね」

「しかしまだ、学内に残っている者も多いだろう」

学校を覆う柵をのりこえて、全長三メートルはありそうな甲殻類が、校内へ侵入しようとしていた。

「……カブトムシ」

九条がぼつりとつぶやく。

「ああうん、カブトムシとかクワガタとか、それっぽいよね。子どもが見たら喜びそう」

「泣くだろう」

十夜がつっこむ。

昆虫のように見えるのは外見だけで、色はまだらなオレンジだ。

巨大な毒々しい、動くオブジェといったところだろうか。

それが、進入をはたすと同時に、触角をふりまわして暴れたした。

口もとからは、黄色みがかった唾液がしたたりおち、垂れた先ではジュツという音とともに、白い煙がたちのぼる。

秋が首をまわして、億劫そうに名乗り出た。

「しかたないなあ。ぼくがやるよ」

そうして九条のはった陣から出ようとしたとき、目の前の昆虫の触角が、ぱっさりと切り落とされた。

「おまたせ」

空をよぎった光の来た先を見ると、会計の音無 百々が駆けつけるところだった。

「いいところに来るなあ。ラッキー」

百々の姿をみとめて、秋が円陣の中央へ後退する。

「これ一匹？」

「ああ」

「わたしがやるわ」

そういつて、百々は、触角を失って身悶える巨大な昆虫に相対した。

腰にさげたポーチから、ナイフを四本、抜いてかまえる。

昆虫の額からはえた短いツノが、百々のグラマラスな肢体にぴたりと向けられた。

百々の呼気のもれる音がした。

両手から放たれたナイフが、身をよじる昆虫の、顎下と腹に二本ずつ刺さる。

見ると、立ち位置をずらした百々の手には、ふたたび四本のナイフが握られていた。

気をはりつめたままの百々の見つめる先で、昆虫はどう、と倒れた。

唾液が散り、ところどころから煙があがる。

しばらく身構えたままだった百々は、やがて足元からとがった石を選び手に取ると、折った枝の先にくくりつけ、投擲の要領で昆虫の口内に突き刺した。

「動かないわね。死んだかしら」

「百々ちゃん、おつかれ」

秋がねぎらいの声をかける。

「あっけないわね。まだ来るかもよ」

「おそろくな」

結界が破壊されたのは、今いる柵に沿った一角だけだ。

後続が来るならばここだろうと予想はついたが、念のために溝口に電話をかけて、周囲の状況を確認する。

すると溝口は、十夜に意外な情報をもたらした。

「家庭科室で騒動がおこってるんだ。召喚のおこなわれた形跡がある。もしかすると、今回のトラブルの本命はそっちなんじゃないかな」

「なんだと」

「京子さん一人じゃ心配だな。そっちの手があいたら、様子を見に言ってあげてよ」

じゃあね、といって、通話が切れる。

溝口とのやりとりを残りの三人に説明すると、百々が厳しいおももちで柵の向こうに目をやった。

「来たわね」

今、百々に倒され、地面に転がっていると同種の昆虫が、全部で五匹あらわれる。

柵を越えようとする敵にナイフをあげせ、百々が言う。

「さすがにひとりじゃキツイわね。一之瀬さん、手伝って」

「了解」

秋につづいて、十夜も一步をふみだした。

「俺もやろう。手早く済ませて、家庭科室を見にいくぞ」

柵を越え、一匹二匹と、昆虫が地面に転がる。

十夜は地面を強く蹴った。

騒動の糸を引く人物を、今日こそ特定してやると、心に決めた。

第九話

ガラスの割れる音がして、三日は窓の向こうに目をやった。

先日ツルバラを眺めた、外へ続く窓ガラスが割れ、破片が室内に散乱していた。

突然のできごとに、きよんとする三日の背後で、千佳の悲鳴がひびきわたった。

「なぜこんなものが……」

体をふるわせた芽衣が、よろめくように後ずさるのを、京子が外をにらみすえたまま、背にかばった。

「逃げて」

京子が硬い声で、たたきつけるように言った。

「早く！」

ふたたび、千佳の口から悲鳴があがる。

「先生が、先生が消えちゃった！」

慌てて室内を見回すが、元から見えない教師の不在は三日には認められず、はっとして眼鏡をはずす。

目にうつる光景は激変し、三日は息をのんだ。

とても大きな、クモがいた。

見た目は昨夜の夢にでたクモによく似た、赤い斑点模様をしていたが、大きさは段違いだった。

縦にも横にも、二メートルはあろうかという大グモだ。

なにより、昨夜のクモとの最大の違いは、その目に意志をやどした光があることだ。

自然に存在するものとは思われない。千佳が怯えるのも当然だった。

クモの吐いたとおぼしい白い糸の束が、教壇に巻きついていて、皆の視線から察するに、そこに朝倉がいたのだろう。壇上には、ノートと筆記用具が散乱している。

「先生のことはいい。あの人は大丈夫だから。おねがい、逃げて」京子の言葉に、三日は千佳の腕をとった。

「行こう。助けを呼ばないと」

「でも……」

「芽衣さんも。はやく」

必死な声音の京子に、青ざめた芽衣がうなずいた。

「わかった」

京子が芽衣の肩を押したのを合図に、三人は扉に向かって駆け出した。

京子がクモに向って立ちはだかるのが、視界のすみにうつった。

しかし巨大なクモは、思わぬ敏捷さをみせて京子をかわすと、最後尾を走る芽衣の背後に迫り、尖った足をふりかぶった。

「芽衣さん！」

京子が叫び、クモに体当たりをする。

クモはわずかに足をすべらせ、動きをとめると、持ち上げた足を再び芽衣に向ってふりおろした。

京子が芽衣をつきとばす。

身をしていしかばった京子の腹部を、クモの足がつらぬいた。じわりと血がにじみ、京子の体がくずおれる。

芽衣ののどが鳴った。

「京子」

かすれた声で名を呼ぶが、京子は身じろぎもせず床に伏した。

「うそ……。いやだ、京子先輩」

千佳がはげしく首をふる。

「なんてこと」

ふるえる声をしてクモを見据える芽衣に、クモが噴出した糸の束がおそいかかった。

微かな声をもらして、芽衣の体がとらわれる。

全身に嫌な汗がつたう。

こちらに向きなおったクモから、奔流のような糸が襲いかかるのを、まばたきもせずに見つめた。

千佳が泣き声で助けを求めるのが聞こえていた。

全身を締め上げるクモの糸は、粘つくというよりも、弾力のあるゴムのような質感で、きつく体をはんでいた。

全員の動きをとめた大グモは、他には見向きもせずに芽衣に這い寄り、糸の束に拘束された芽衣の体を口にくわえた。

「待ちなさい」

場にふさわしくない静かな声で、三日は言った。

汗で手のひらが濡れていた。

三日は、どうにか自由になる指を動かし、体を覆う糸をつかんだ。糸が、ほろりとくずれた。

あいた隙間から手をのばし、縛りつけていた糸をつかみ、はがしていく。

両腕が自由になると、首すじをつたう汗を手でぬぐい、さらに糸をほどいていった。

やがて全身の自由をとりもどした三日は、割れた窓から外に出ようとしていたクモへと駆け寄った。

クモの胴体を蹴り上げて動きをとめ、芽衣をくわえた顎を両手では

さみあげる。

「その人をはなしなさい。こんなまねは許さない」

力まかせに顎をひらくと、芽衣の体は外の草地にどさりと落ちた。

三日はクモの顎から手をはなし、こわい毛に覆われた胴体を両腕でぐいと持ち上げた。

自分の何倍もありそうな胴体も、三日にとってはどうということはない。

腕力には自信があった。

有無をいわず頭上にかかけ、教室の床に叩きつける。

クモは衝撃にびくりと痙攣し、動きをとめた。

「クモならば、糸を分解する溶液も持っているでしょう。お腹をかっさばいて、取り出してあげる」

調理台から包丁を取り出し、三日はクモに向かい、ふりかぶった。

——ふいに、窓の外から場違いなまでに穏やかな声がかけられた。

「おやまあ。お嬢ちゃん、見た目によらずおっかないなあ。そこらで勘弁してくれない？」

クモの体を足で押さえつけたまま、首をまわすと、あきれたような苦笑をうかべる京堂がいた。

「あなた、体操部の。なぜ」

言葉みじかく、三日が問う。

「んー、家庭科部に遊びにいくって言ったでしょ。約束は守るんだよね、オレはさ」

「そうではなく」

なぜ止めるのかとききたいのだ。

京堂は、糸に覆われたあたりの惨状になど目もくれず、軽い口調で言葉をつぐ。

「そのクモ、オレのなの。あまりいじめないであげてくれる？」

三日の視線がするどくなった。

京堂は、へらりと笑って手をふった。

「やだな、そんなににらむことないじゃない。部屋荒らしたのは悪かったよ。クモは撤収させるし、部屋も片付けるからさ」

「このクモは人を傷つけました」

「人は傷ついてないよ。肉体的な意味では、誰ひとりとして傷ついてない」

三日は目をすがめた。

「尾上さんが血を流して倒れるのを見ました。なぜこんなことになったのかは知らないけど、笑ってすませられることじゃないでしょう！」

「うーん、そうだねえ。だったら尾上 京子は修理にだそうよ」

「……修理？」

「そう。ほうっておいても、すぐに情報屋が引き取りにくるさ。まあ、こっちから送り届けてもいいけど」

「どういう意味です」

京堂は窓枠を越え、三日に歩み寄った。

「知らなかった？ 尾上 京子は人間じゃない。情報屋の所有するアンドロイドなんだよ」

三日は言葉がでなかった。

「だから、あのくらいならすぐに修理できる。安心したかい」

「あなた」

「京堂だよ、お嬢ちゃん。友哉でもいい」

「京堂さん」

「なにかな」

「あなたが、わざと引き起こしたんですか」

京堂の瞳がたのしそうにまたたいた。

「ご明察」

「なぜ！」

三日の声がうわずった。

「人を傷つけて、たのしいですか」

「いいや。そういう野蛮なことはオレはいやだね」

「だったら」

「仕事なんだ」

なんでもないことのように、京堂は言った。

「妖精をひとり、連れてくるように言われている。ボスにね。……」

オレは仕入れ業者だからさ、依頼があったら運ばないと」

「それで、小八木さんを？」

「そう。まさかお嬢ちゃんにジャマをされるとは思わなかったけど」

三日はゆるくかぶりをふった。

「信じられない。それはやっちゃだめなことだよ」

「ふうん、お嬢ちゃんはそのような人間ばなれした怪力を秘めているのに、案外モラリストなんだね」

いいね、と、京堂はささやいた。

「ねえ、今日のところは引き上げるし、もう家庭科部で暴れたりもしないから、そのクモを放してあげてくれないかなあ」

反省の色のみえない京堂に、三日は齒がみした。

「それにしても、お嬢ちゃんには驚かされるね。その馬鹿力もそうだけど、クモの糸もひきちぎったでしょう。力任せに引っ張ったっていうより、触ったら溶けたようにも見えたけど、どうやったの？」

「知りたいですか」

正体の知らない京堂の考えをすこしでも探ろうとして、三日は彼の目をじっと見上げた。

いつしか、腕をのばせばとどくほどの距離にいた。

「痛いのはやだな。無理に体に教え込むとか、そういうの？」

「いいえ。ちっとも痛くはないです、ほら」

そう言うと、三日は包丁を手ばなした。

「教えてあげます」

そうして、背伸びをして両手をのばした。

京堂の頬をつつみこみ、三日はそつとくちびるをよせた。

三日のくちびるが、京堂のすこし乾いたくちびるに触れる。

あっけにとられた様子の京堂のくちびるを割って、三日は舌を差し入れた。

唾液をのせて、口内を蹂躪する。

（さあ、教えてちょうだい。あなたは誰なの）

彼の正体をあばこうと、三日はおのれの唾液を京堂の体内に流し込んだ。

舌がからまり、しめった音がして二人のくちびるが離れた。

沈黙がながれ、三日の探る視線と、京堂のたのしげな視線がからまった。

「いいね。これってもしかして、求愛行動なのかな。粹だね」

三日が言葉をうしなった。

「美人のキスか。役得だなあ。仕事は失敗しちゃったけど、請け負った価値はあったかな」

「……うそ」

「ん、なにが？」

信じられない思いで、まるで態度の変わらない京堂を見つめる。

「あなた、……人間なの？」

「やだなあ、人間じゃなかったらなんだっていうのさ。まあ、この学校はバケモンばかりだけどね」

「うそ」

「ほんとだって。なに？ お嬢ちゃんは人間じゃない男のほうが好みなの？」

（信じられない）

てっきり、害意のある妖怪かなにかだと思った。

（人間）

くらりと目まいのするような思いがした。

三日は胸の内でつぶやいた。

（ああ。私、人間のことなにもわかってないのね）

三日は途方にくれた。

人間が相手だと思うと、とたんにどうしてよいのかわからなくなる。

三日は、人間にくわしくないのだ。

「京堂さん。小八木さんと千佳を、解放してください。それから、尾上さんを、その……、手当てできる人のところへ大至急つれていってあげてください」

「りょーかい、わかった。どいてくれる？」

京堂にうながされて、三日はクモを床にぬいとめておいた右足を、素直にどかした。

京堂は、「おー、よしよし」と、クモをねぎらって、手にした水晶球をかかげた。

彼がなにごとかをつぶやくと、こぶし大ほどの水晶があわい光をは

なち、クモと、クモのまきちらした糸が、球に吸い込まれていった。

見る間にクモのいた痕跡はなくなり、ガランとした印象の室内に、血だまりに倒れ伏す京子と、扉のそばで昏倒している千佳が目にはいった。

「尾上さん。千佳……」

まずは出血の量が多い京子のもとへ向おうとした三日を、差し置いて駆け寄る少女がいた。

「京子！」

白い顔をして意識のない体にすがりついたのは、窓の外で放置されていた芽衣だった。

芽衣は、悲痛な声をあげて、京子の体を抱きしめた。

「ごめん。ごめんね……」

目の前でくりひろげられる愁嘆場に、元凶たる京堂は心をゆさぶられた様子もなく、肩をすくめる。

「あっちの嬢ちゃんは、びっくりして気絶してるだけでしょ。じゃあオレ、尾上 京子連れて行くよ。部活、ジャマしちゃってごめんね」

京堂の言葉に、芽衣は京子の頬をさすりながら、振り向くことなく怒鳴りつけた。

「京子に近寄らないで！」

言われるがまま足を止めた京堂は、頭をかき、

「ふうん、だったらオレもう帰っていいかな。小八木 芽衣の代わりも用意しないといけないし、忙しいんだよね」

「いいわけないでしょう、そんないいかげんな」

千佳を抱き上げた三日が、眉をしかめる。

「尾上 京子はこちらで引き受けよう。それに、京堂 友哉。お前もだ」

窓の外から、新たにかけられる声があり、見ると、きびしい表情をした十夜と秋が立っていた。

「あらま、さすがにはやいね」

困ったように顔をゆがめる京堂に、秋が底冷えのする笑顔を向ける。

「まいったね、京堂。あんたとはじっくり話し合う必要があるそう
だ」

「京堂、お前のしわざか。何が目的だ」

二人にすごまれて、京堂はやれやれと息をついた。

「妖精の調達を頼まれたんですよ」

「誰に」

「うーんと、ボスに」

十夜の眉間に深いシワが寄る。

「コレクターか」

秋が舌打ちをした。

「あんなヤツのことなんかきくなよ。バカじゃないの」

「しかたないです。仕事なもの」

「それでこの騒ぎか」

「解せないな、妖精だったら他にもいるじゃない。なぜ小八木 芽衣を狙うのさ。あんたなら身近にいますでしょう、誘えばどこにでもついてきてくれそうなのが」

そうきかれて、京堂ははじめて嫌そうな顔をみせた。

「一之瀬さん、それ、五島さんのこといってますよね。いやいや、ないでしょう。あの人のどこに妖精らしさがあるんです。全身筋肉の妖精なんてありえませんか。妖精っていったらやっぱりほら、

可憐な女の子じゃないと」

「……あの人、妖精だったんですか」

千佳を抱えたまま、たたずむ三日がつぶやいた。

京堂が顔をゆがめて何度もうなずく。

「ねえ、お嬢ちゃんだって、そんなん詐欺だと思うでしょう。あの人、風の申し子だけあって、あれでめっちゃ歌が上手いんだよ。気持ち悪いったらもう」

どちらかといえば、無骨な風貌の、がたいのよい男だった。

男気あふれた五島の風体を思いおこし、そういえば彼のまわりには心地よい風が吹いていたかと、ひとりうなずく。

「ともかく京堂。お前には生徒会室に来てもらう。壊れた結界の補償と、学園を荒らした責任をとれ」

「あーあ、おてやわらかに頼みますよ」

「あんたに手心くわえる義理がどこにあるのさ。きっちり話をつめようじゃないか」

「それと、尾上 京子は情報処理部へ運ぼう。九条に言って、人手をまわしてもらうか」

京子の名に、うずくまる芽衣の背中がびくっと跳ねた。

「情報処理部って、クラブハウスですか？ 私、運びますよ」

三日が申し出ると、十夜はきいた。

「運べるのか」

「うんうん、お嬢ちゃん、力自慢だもんなあ。かつこいいね。でも、今抱いてる女の子を先に、保健室に連れて行ってやりなよ。人間優先でしょ」

秋の目が光る。

「へえ。たしかに今も、人ひとり抱いて、腕も震えていないんだ。」

なにかと規格外だね、三日ちゃん」

「腕力に自信があるなら、そのほうが早い。その一年を保健室に寝かせたら、尾上 京子を情報処理部へ運んでくれ。クラブハウスの二階だ」

「わかりました」

「よし、たのんだね。もし無理そうだったら、生徒会室においで。こっちでやるから」

三日がうけおうと、十夜と秋は、しぶる京堂をひたてて、家庭科室から出ていった。

三日は、芽衣の背中に声をかけた。

「千佳を置いてきます。急いで戻りますから」
芽衣はうなずいた。

「ごめんね、三日ちゃん。……ありがとう」
涙まじりの、痛ましい声だった。

第十話

あけて金曜日。学園は今日も平和だった。

昨日は、情報処理部に京子と芽衣を連れていったあと、千佳が目を覚ますのを待って、一緒に帰った。

常軌を逸した出来事には慣れていなさそうな千佳が、大グモに襲われたことをどう乗り越えるのかと心配したが、一夜あけて教室で顔をあわせた彼女は、まったくいつもの千佳だった。

（ほんとうに人間ってよくわからないな。たくましいってことなのかしら）
ううむとうなる。

「いちおうね、お守りをもつことにしたんだ。お正月に神社で買ったやつ」

そういつて千佳がカバンから出して見せてくれたのは、学業成就のお守りだった。

意味がないのではと思ったけれど、千佳は自信満々なそぶりです。胸をたたいた。

「学業を成就するってことは、きちんと卒業までめんどろみでくれるってことだから、だいじょうぶ」

「なるほど」

その迫力におされて、こくこくとうなずく。

昼休みには、部室の片付けをするために、二人で家庭科室へ向った。部屋には京子と芽衣もすでに来ていて、ぴんぴんとしている京子の姿に、安堵の息をもらした。

「先生！」

千佳が甲高い声をあげ、室内に駆け込む。

そういえば、いつも見えないから忘れがちだけど、朝倉も昨日は部屋にいたのだけと思いつつ、三日は眼鏡をはずした。

千佳が「急に消えたりするから、びっくりしたじゃないですか」と話しかける先に、朝倉はいた。

(……薄い)

三日はどういう顔をしてよいのかわからず、再び眼鏡をかけた。

いつもと変わらぬ割烹着姿の朝倉は、体をたもっていられなかったダメージが残っているのか、いつもより体が薄く、透きとおって見える。

床のガラスを掃いているようなので、動く箒を目安にすれば、ぶつかることもないだろう。

昨日割られたガラス窓には、ダンボールが外と中から貼られていた。

「週末に業者に入ってもらって、なおしておくからね」と、朝倉の声にする。

部屋は、さほど荒れてはいなかった。

「三日ちゃん。昨日はほんとうにありがとう」

机をふいていた芽衣と京子が、やってきて言った。

「世話になったね、たすかったよ」

「ごめんね、わたしたち、上級生なのに三日ちゃんと千佳ちゃんを守ってあげられなかった」

縮こまる芽衣の背中を、京子がやさしくさする。

「芽衣さんのせいじゃないよ。私だって、ずっと芽衣さんを守ると決めていたのに、足止めにもならなかったんだから。情けないよ」

「ううん、京子はわたしを守ってくれたよ。……でも、すごく胸が痛かった。もう、あんな無茶はしないで。おねがいよ」

芽衣を見つめる京子の瞳が、甘やかな光をおびる。

「芽衣さんはやさしいね。そんな芽衣さんだから、好きなんだ。でも、もしかた似たような状況になったら、きっと私は同じことをしてしまうと思う」

――三日は、ただならぬ雰囲気、途方にくれてあたりを見回した。窓辺では、千佳が同じように口をあけて、京子と芽衣を見ていた。

「そんな、困るわ」

「困らないよ。耐久性、すこし上げてもらったんだ。役に立つよ」
芽衣は、いささか憤慨したように言った。

「わたし、役に立つから京子のことが好きなわけじゃないのよ」

「知ってるよ。ごめんね」

「もう。……ケガ、しないでね。京子がいなくなっちゃうのかと思って、わたし昨日、すごく怖かった。自分がケガするよりも、ずっとずっと怖かったんだから」

「芽衣さん」

芽衣と京子が見つめあう。

「ええええええ！」

千佳の情けない声があたりにひびいた。

これが世に言う二人の世界というものかと、三日は一歩後ずさった。

芽衣を見つめる京子の瞳は、以前に彼女が、「心が豊かで優しい人
がいい」と語っていた

ときと同じ、あたたかな眼差しをしていて、――ようやく想いが通じたのかなあと、三日はぼんやり考えた。

「ええと、ひとまず、お二人とも元気そうで安心しました」
三日は言った。

「うん、望月さんのおかげだよ」

「制服、新しくなったんですね」

「あー、これ、そうなんだ。お腹のところに穴があいちゃって。新調してもらったんだよ」

京子は、けろりとした顔でそんなことを言う。

万理万里の、すんとしたラインの制服は、京子によく似合った。

京子が着るから、すんとして見えるのかもしれない。

ふっくらとした千佳が着ると、同じ制服でもいささか装飾過多に見えたから、着る人のカラーをうつしだす形をしているのかもしれない。

（なごやかだなあ）

片付けを進めるあいだに、芽衣と京子のおりなす空気にもだいぶ慣れた。

本立の精霊は、三日の家ともゆかりが深いから、芽衣がしあわせそうに笑っていると、自分もどことなく嬉しく感じるのだ。

最初は驚きをあらわにしていた千佳も、次第に納得がいったようで、「青春ですね」と、しきりにうなずいていた。

部室は意外と早くに片付いて、また来週からいつもどおりの活動が始まることになった。

芽衣がくやしがったので、活動内容はふたたびりんごケーキ作りに決まった。

（一件落着、かな）

三日は思った。

放課後、この日は補習があつて、教室に向おうとする三日の腕を、誰かがつかんだ。

振り向くと、隣りに京堂が立っている。

「京堂さん」

目を見開く三日を、京堂は、人気のない階段の踊り場に引っぱりこんだ。

「よう、お嬢ちゃん。探してたんだ。ちょっとつきあってくれないかな」

（逆恨みとかじゃないでしょうね）

大人しく腕を引かれながらも、警戒心がわきあがる。

一見したところ、昨日までと様子の違うところはない。

だが、あのあと、生徒会や雇用主との間で、ひと悶着あったのは間違いないだろう。

二人きりになると、京堂は三日の腕を離し、まっすぐに向かいあった。

やや明るめの茶色い髪が、陽の光をはじいた。

体操部だけあつて、一般の生徒よりも首が太い。

上背があり、体格もよいのに、彼はとてもしなやかに動く。

「なんの御用でしょう」

「ああええと、そのだなあ」

なぜだか京堂は齒切れがわるい。

「その後、なにか問題でもありましたか」

調子のよい人ではあるけれど、悪い人にはみえないというのに、世の中誰がなにをしてくすかなんて、わからないものだ。

昨日の今日で、彼が自分にどういった用件があるのかさっぱり見当がつかず、三日はたずねた。

「いや、心配してくれてありがとうな。ちゃんと、代わりの品は用意できたんだ。目星をつけていたのがいて、そっちは穩便に処理できたんだよね。まあ、生徒会のやつらは、うざったいたらなかったけど」

京堂がかわいた笑いをもらす。そして、言いづらそうに口をひらいた。

「その、それはともかくとしてだ。早いうちに、きちんと返事をしないといけないって思ったんだよ」

「返事ですか？」

「昨日のことなんだけど」

「はい」

口の重い京堂を見上げて、三日は続きを待った。

京堂は、なぜか照れくさそうに目を細めて、こう言った。

「お嬢ちゃんの気持ちは嬉しいんだけどさ。ほらオレ、危ない仕事をしてるだろう。だから危険がおよばないように、そばに置く人間は、自分の身を自力で守れるヤツだけにしようって決めてるんだ」

「はあ」

「いや、お嬢ちゃんが力持ちなのは知ってるよ。でもさ、……ごめんな、お嬢ちゃんとはつきあえない」

「はあ、そうですか」

「嬉しかったんだけどね。積極的な子は好みだし、お嬢ちゃんは美人だし」

熱心に語る京堂に、三日は首をかしげる。
(なんのこと?)

「だから、ごめん。ごめんな」
ふいに京堂は腕をのぼし、三日の頭を抱えこんだ。
あたたかな体温が、体をつつむ。
大きな手のひらが、やさしく頭をなでていった。

(ああ!)

三日は、膝をうちたい気分になった。
合点がいった。彼は、三日のくちづけの意図を誤解しているのだ。

「あの、京堂さん」
おもてをあげた三日のくちびるを、京堂はひとさし指でふさいだ。
「お嬢ちゃんの気持ちにはこたえられないけど、困ったことがあったら相談においで。オレにできる範囲でだけど、力になるから」
「いえ、それはいいんですけど……」

三日のセリフをさえぎり、京堂は首をふった。
「この学校はやかいナツが多いからね。あまり危ないことには首をつっこんじゃダメだよ。――じゃあね、オレ、行くから」
「え、あ、待って」
呼び止めようとする三日に、いたわるような笑みを向け、京堂は立ち去った。

「ええ、うそ、待ってよほんとに」
中途半端に持ち上げていた腕が、ぱたりと垂れた。
京堂の去った階段の先を、呆然と見つめる。
「……ふられた」
告白もしていないのに。

「しかも、あんなに普通っぽい理由で？」

三日は思った。

人間は、なんと謎めいているのだろう。

——窓の外で、小鳥がチクチクと鳴いていた。

望月 三日、十五歳。はじめて異性に交際をことわられた、高校一年の春だった。

第一話

街は水中に没していた。

夜の繁華街を、最近親しくしている年上の女性と歩きながら、二階堂 皐月はずぶやいた。

「梅雨だね」

「六月だもの。水であふれているわ」

水のよく似合う女性だった。

彼女の髪が揺れるたび、ここは水中なのだと思い知らされる。

大気は青く、ネオンの光を歪ませる。

湿度は濃密な質感をもって、皐月の全身を包んでいた。

まるで水の中のような触感、水の中のような揺らめく視界、そして息苦しさに満たされる。

昼夜を問わず、幾度も上空を見上げた。

ここはいつもの街並みなのに、上空には海面がある。

街を満たしている水が海水なのだと教えてくれたのは、隣りを歩く彼女だった。

しずくは言った。

「海の中から、呼ぶ声がするの。かわいそうに、海から出ることができないから、街を海に沈めてしまおうと思ったのね」

「オレには何も聞こえないけど」

「今はまだ遠いから。そうね、声は聞こえなくても、姿は見えるようになると思うわ。皐月くんは目がいいから」

そう言って、しずくは海のあるほうを指さした。

建造物にはばまれて、ここから海を眺めることはできないけれど、

きっと彼女は海で何が起こっているのかを知っているのだろう。
彼女は、海に愛されていたから。

皐月は、昨日から唐突にぶくぶくと浸水していった街並みを見や
った。

なにも変わったことなど起こっていないかのように、人々は通りを
行き交う。

時折、皐月と同じように空を見上げる人もいたけれど、そうでない
人々には、この街はいつもと同じ乾いた雑踏にしか見えていないの
だろうか。

（溺れないのが不思議なくらいなのに。へんなの）
生ぬるい風がふく。

街を覆う水は、おそらく幻覚なのだろう。

梅雨どきだから、という言葉ではすまされないほど、重く水をはら
んだ空気が体にまとわりついていたけれど、呼吸に支障はきたさな
い。

海面ははるか上空に位置しているというのに、水圧に苦しむことも
なかった。

ゆるく水につつまれる感覚をたのしんで、皐月は空を見上げた。

「きれいだね」

「そうね。たまには、こういう幻想的なのも悪くないわ」

「いつまで続くかな」

「さあ。彼の、探しものが見つかるまでじゃないかしら」

「海で呼んでいるという、彼？」

「ええ。彼は女官に恋をしたの。海の御遣いを探しているのよ」

「へえ」

海には海のルールがある。

皐月は陸地に属するものなので、海にはくわしくなかったけれど、そういえば、大切な幼馴染の少女は、海とはゆかりの深い存在なのだった。

（あとで行こうかな）

今の皐月には、選択肢がみつがある。

自宅に帰るものと、幼馴染の家に転がりこむものと、しずくとだらだら夜を過ごすものだ。

明日も平日で学校がある。

本来ならば、満月の近いこの時期は、目がさえて眠れないものだけれど、今日は恵みの曇り空だ。

厚い雲に覆われて、月も星も見えやしない。

（じめじめするのはイヤだけど、これに関しては梅雨もそう悪くないよな）

体が軽かった。

夜を通して、駆けつづけたいほどに。

しずくと別れた帰り道、気まぐれに海に見える岩壁にのぼった。

凧いだ夜の海に、鬼火が舞う。

ふわふわとただよう燐光の合間に、黒く人影があった。

おそらく、そうとうの距離があったはずなのに、人の頭部とわかる、不思議な影だ。

（あれが、例の彼？）

小さな人影は、まさしく影のようにしか見えない。

到底、街を水の幻影に沈めるほどの力があるようには見えなかった。

「女官に恋、ね」

波間にただよう黒い影と、どこの誰とも知れない女官とのラブロマンスなど想像もつかず、皐月は肩をすくめた。

街も木も、すっぽりと水に覆われている。

ただ、最奥に位置した白睡山だけは、一切の水の浸入を許さずに、変わらずそこに座している。

「さすが、山神は伊達じゃないってことか」

海でさすらう男の妄執など、ものともしないたたずまいだ。

「あの黒い人も、恋をしたのが山の巫女でなくてよかったんじゃないの」

そうであったなら、恋のかなう予感はない。

なんにせよ、早く決着をつけて引き上げてくれるように願って、皐月はきびすを返した。

せめてあと数日のうちにはなんとかしてくれないと、物珍しさが失せるにつれて、ずっと水につかって過ごすというのにも嫌気がさしそうだ。

「山か。最近行ってないな」

高校に入学する前に一度、幼馴染とともにのぼったのが最後だ。

子どものころは、幼馴染の少女と一緒にいつもあの山で遊んだ。

禁山と呼ばれ、一般には立ち入る者のない山だが、皐月にとっては馴染みの山だ。

そしておそらく、皐月の母は今あの山中にいる。

一緒に暮らす母は、日本に越してきてからずっと、定期的にあの山に通っていた。

山の中で母親と顔を合わせるのも、どうにも気まずいから、時期をずらしてまた足を運ぼうと決め、皐月は幼馴染の待つマンションへと戻った。

――住宅街のはずれに、皐月の住むマンションはあった。なるべく白睡山の近くに住みたいという母の希望のもとに選んだ物件だ。

仕事もあって单身異国に住む父が、毎月潤沢な生活費を振り込んでくれるから、快適な二人暮らしをおくっている。

その皐月の家の隣りに、幼馴染は部屋を借りていた。

どうせ無人とわかりきっている自宅には戻らず、皐月は隣りの家の鍵を取り出し、ドアを開けた。

「ただいま」

声をかけるが、扉をくぐった室内は暗く、個室のドアもとざされている。

「開けるよ」

いちおうドアをノックして、寝室へと入る。

「三日、寝てるの？」

時計を確認すると、針は午前の一時をさしていた。

室内の照明はおとされていて、ベッドにはひとりの少女がすやすやと寝息をたてている。

黒く長い髪が寝具に散り、白い陶器のような顔は、うすく口もとが開いて、あどけない表情を浮かべていた。

皐月はベッドの端に腰かけて、親指で彼女の頬をむにとつぶした。

きめの細かい肌は、あたたかくて弾力がある。
むにむにとした、餅のような触感を、しばらく楽しむ。

どうやら寝室の窓が開いているようで、時折入り込む夜風にカーテンが揺れた。

「無用心だっていつも言ってるのに」
両の頬をぎゅっとつまむ。

寝つきのいい彼女は、ちょっとしたことでは起きやしない。
湿度が高くて寝苦しかったのだろう。彼女は、エアコンが嫌いだから。

しかしここは三階だ。たとえば自分だったなら、この高さならば容易に窓から侵入できる。

「オレが暴漢だったらどうするんだよ」
そうつぶやいてはみたものの、彼女のことだ。身の危険が迫ったら、片手で相手の首くらいへし折るかもしれない。
たおやかな容姿の彼女は、怪力の持ち主でもあったから。

「でもやっぱりだめ」
皐月は立ち上がると、窓を閉めて鍵をかけた。

「今夜はそんなに暑くないよ。なんせ海の底にいるんだもの。めずらしいでしょう」

乱れていた薄いかけ布団を直し、皐月は寝室をあとにした。
「おやすみ」

扉を閉めて、リビングの電気をつける。

彼女の家にはテレビがないから、いつも静かだ。
今から自宅に帰る気分にはならなかったから、シャワーを借りて泊まっていくことにする。

まずはのどがかわいたので、冷蔵庫から水を出して、グラスに一杯

飲み干した。

第二話

目覚めたら、人の気配があった。

三日は起き出し、洗顔をすませると、ふたつある個室のうち、もう一方のドアを開けた。

LDKをはさんで、三日の寝室とは反対側に、皐月の間借りしている私室がある。

案の定、部屋に置かれたソファベッドに、寝そべる少年の姿があった。

部屋のカーテンを開けて、朝日を入れる。

外は雲っていたから、さわやかな陽光とはいかなかったけれど、それでも室内はぱっと明かりをとりもどした。

大判の枕に顔をうずめた彼が、身をよじる。

「朝だよ。皐月、おはよう」

皐月は朝が弱い。この時期はことさらにだ。低くうめく彼から、布団を剥ぎとる。

「起きなよ」

「……ああ、うん」

生返事が返ってくる。

「おはようってば」

「おはよう」

「朝ごはん食べるでしょ」

「たべる」

「学校も行くでしょう」

「行く」

「ちゃんと起きて」

「起きるよ」

そう言ったばかりの彼のまぶたが、ふたたび閉じる。

寝返りをうった頬に、薄茶の髪がさらりとかかった。

皐月は、日本人の父とフランス人の母との間に生まれた。

三日の、ただひとりの幼馴染だ。

このままでは埒があかないと、三日は皐月の両脇に手を差し入れて、ぐいと上体を持ち上げた。

そのまま、ずるずるとリビングまで引きずっていき、ソファに体を放り出す。

「ほら、ごはんの時間。したくして」

眠いとぼやく彼の頭をかるくはたく。

「家に戻って着替えもしないといけないでしょう。はやくしなよ」

両手でゆるく癖のある髪をかきあげて、のろのろと皐月が活動をはじめ。

その隙に、三日は朝食のしたくをした。

といっても、トーストを焼いて、スープの残りをあたためるだけだけれども。

「ごはんできたよ」

声をかけると、ようやく意識のはっきりしたらしい皐月が、洗面所から出てきて席についた。

「おはよ」

「おはよう。バターとクリームチーズとジャムとレバーペースト。どれがいい？」

卓上に瓶を並べて、意見をうかがう。

「うーん、バター」

皐月が手をのばし、トーストにバターを塗っていく。

三日は昨夜の残りの中華スープをすすって、問いかけた。

「ゆうべは遅かったの？」

「んー、そうでもない。三日はとっくに寝てたみたいだけど」

そうして、思い出したように、身をのりだした。

「そうだ。だめだろ、また窓開いてたぞ」

「そうだっけ。ああ、暑かったから」

「暑くないよ、まだ」

「暑いよ」

「どこが。ずっと曇ってて、太陽だって出てないじゃん」

皐月が身振りで窓の外を指し示す。

三日は複雑な思いで外を見た。

「……たしかに、けったいな気候ではあるけど」

昨日はまだ階下にあった水面が、今朝にはとっくに天井を越えていた。

世間は水びたしだ。リアルには存在しない水に、人も建物も飲み込まれている。

「水槽の中にいるみたいね」

三日はつぶやいた。

そうする間にも、水で光が屈折するのか、時折視界が歪む。

「溺れそう？」

「ううん。でもふしぎな気分」

皐月はうなずいた。

「水の中にいるなんて、はじめてだろ。めったにない機会だから、満喫しなよ」

三日は筋金入りのカナヅチだから、たしかに水中からものを見るな

んていう経験はなかった。

「きれいな。落ち着かないけど」

「ああ」

それから皐月は、昨夜耳にした、女官に恋をしたという海の人影の話をした。

「へえ。それで街が水没しちゃっているの」

「っていうはなし」

「よほど想いが強いのか」

「よくいえば一途ってことなんだろうけど、まあ、迷惑なはなしだよな」

「変わったこともあるものね」

そのせいだろうか。例年にないほど、先日から湿気がすごい。

「ごちそうさま」

先に食べ終え、下げた食器をざっと洗いながら、皐月が言った。

「そういえば、オレ明日、三日の学校行くんだよ」

「え、どうして？」

三日は食事の手をとめ、彼を見た。

「放課後そっちで練習試合。万理万里、行くのはじめてだな」

皐月はふもとの男子校で、サッカー部に所属している。

そういえば、以前に部活で、皐月の学校とは交流が多いようなことを、先輩が言っていた覚えがある。

「そうなんだ。試合があるの。暑いのにたいへんだね」

「いやだから、そこまでまだ暑くないって」

背中を向けた皐月が笑いをもらす。

「グラウンドでやるらしいよ。見にくる？」

三日はすこし考えた。

「ん、たぶん無理。明日は放課後、補習があるもの」
「そっか」

それ以上は誘うそぶりもみせず、皐月は三日の使い終わった食器を片端からうばって洗っていった。

「じゃあオレ、帰るから。いってらっしやい」
そう言って帰宅する皐月を玄関で見送り、三日も学校に行く荷物をまとめる。

玄関に置いてある眼鏡を手にとり、両手でかける。

同時に、部屋を満たしていた水の幻影がさっと失せた。

大気はいつもよりもねっとり体にとわりつくが、それだけだ。

「いってきます」

そう口にして、靴をはいた。

自宅から電車でひと駅。そこから徒歩十五分の場所に、皐月の通う八重樫高校はある。

山のふもとの立地で、色気もそっけもない、公立の男子校だ。

万理万里学園は、もっとぐっと山をのぼったところに位置しており、駅前から送迎バスが出ている。

同じ駅の利用者なので、必然的に皐月は毎朝、三日と同じ制服をまとった学生をそここで目にする。

学内では共学校をうらやむ声もあるが、皐月としては男子校を選んでよかったと、しみじみ感じているところだ。

今日も、登校中に駅を出たところで、とある女子学生に声をかけられた。

「あの、おはよう。二階堂くん」

「……おはよう」

ポニーテールがまぶしい、やせ型の少女だ。

鼻から頬にかけてちったそばかすが、かわいらしいといえなくもない。

「えっと、呼び止めてごめんね。二階堂くん、サッカー部だったよね。明日うちの学校で合同練習があるってきいたんだけど、二階堂くんも来るの？」

「そうだね。たぶん」

彼女は時折こうして声をかけてくる。万理万里の一年生、八又さやかだ。

淡々とした返答をする皐月とは逆に、緊張に頬を染めて小包を差し出す。

「あの、あのね。それでもしよかったらなんだけど、スポーツタオルなの。受け取ってもらえないかな」

皐月はためいきをつきたくなった。

告白をされたのが先月。ことわってから、プレゼントを用意されるのは三度目だ。

「ごめんね。誰からも、なにも貰わないようにしてるんだ」

「……そう」

さやかは目に見えてがっかりした様子で包みを抱きしめた。

「気持ちだけ受け取っておくよ。ありがとう」

そうして歩き出した皐月に、さやかは言った。

「うん。明日、応援してるから！」

軽くうなずいて、足を進める。

朝から気分が下降する。

（わずらわしいな、もう）

女性うけする容姿をしている自覚はある。

便利だとも思うこともあるけれど、迷惑をこうむる機会のほうが圧倒的に多かった。

足早に学校に向かい、ふてくされた面構えで登校する。

教室で席についた皐月に、声をかける者があった。

「おはよう、二階堂くん。朝からご機嫌斜めだね」

「ああ、柫木。おはよう」

頭を上げると、感情のうかがえない細い目と目があった。

クラスメイトの柫木まつぎ 朔さくだ。

自宅が弓道の道場をひらいているという、弓道部の男だ。

なぜか皐月になつき、よく話しかけてくる。

「さっき、万理万里の女子につかまっていたでしょう。プレゼント、ことわっちゃったの？」

「受け取る理由がないからな」

「もったいないね」

「全然」

柫木はあきれたように言った。

「しかし二階堂くんはよくモテるね」

皐月の眉が寄る。

「見た目がめずらしいだけだろ」

色素の薄い髪と目が、人目をひくのだろう。

女性は嫌いではないが、しつこくつきまとわれるのは迷惑だ。

柫木が言う。

「共学の学校に行ってたら、さぞかしにぎやかだったろうね」

「それが嫌で八重樫にしたんだよ」

「ああ。そうなの」

「中学で懲りたんだ。あいつら物見遊山気分だから」

「それはずいぶんと贅沢な悩みだね」

さして羨んでいる様子もなく、柁木は肩をすくめる。

「おや。高槻くんだ」

言われて背後に目をやると、高槻^{たかつき} 翔吾^{しょうご}がやってきて、斜め後ろの席に腰をおろした。

「おはよう。なんの話？」

「モテる男の弊害についての話。二階堂くんが今朝も女子につかまっていたから」

「ああ」

高槻の目が面白そうな光をたたえる。

「美人？」

「普通」

「ふうん。普通ならいいんじゃないのか」

皐月は顔をしかめる。

「よくねーよ。しつこいんだもん」

「二階堂くんは年上が好きなんだよね」

「へえ。彼女いるの」

問われて、皐月は首をかしげた。

「……たぶん」

「たぶんってなんだよ」

「たぶんはたぶんだよ。あるだろ、そういう微妙なの」

柁木が笑う。彼は目が細いから、口元が歪まないと笑っているかどうかの判断がつかない。

「その年上の彼女はいくつなの」

「さあ。十個上くらい」

「二十五！」

高槻が目を見開く。

「すげ、いいな！」

つられて皐月もけらけらと笑った。

「なに興奮してんだ」

「だって社会人だろ。うわ、犯罪」

「そういう人と、どこで知り合うわけ？ 不思議だな」

「海で」

「海で？」

皐月はうなずいた。

「そう。海に行ったらいたんだ」

だから付き合うようになったと説明したら、高槻が盛大に顔をしかめた。

「お前の話、ぜんっぜん参考にならねえ」

「うん。ならないね」

高槻が盛大なためいきをもらす。

「あーあ、やっぱりスポーツやってるヤツはモテるのかね」

「スポーツといえば、二階堂くん、明日は練習試合だって？」

「ああ。放課後、万理万里でな」

そう告げると、高槻は不快げに鼻を鳴らした。

「うげ。俺、あのガッコ嫌い」

「どうして？」

「気味の悪いヤツが多いだろ」

どんな偏見だと思ったが、そういえば三日も人間ばなれした生徒が多いとぼやいていたのを思い出し、言葉につまる。

「ああ、なるほどね」

そしてなぜか、柾木も妙に納得した様子で首を縦にふったのだ。

「個性的な人が集まっているようだね」

「だろ。二階堂お前、あそこ行くなら気をつけろよ」

「今日のあの子も、万理万里の生徒だったしね」

そう言うと、柾木は楽しそうに声をはりあげた。

「なんだか楽しそうだな。僕、明日応援に行こうかな」

「はあ？ 来なくていいよ、わざわざ」

「いや行く。決めた。高槻くんはどうする？」

「俺、行かねーよ」

「柾木、ほんとに来んの？」

皐月がきくと、柾木は力強くうなずいた。

「うん。幼馴染もいるしね。万理万里には興味があったんだ」

「へえ」

同じだな、と思った。

同時に、やはり万理万里に進学しなくてよかったとも考えた。幼馴染の少女には申し訳なかったけれども。

第三話

「あれ、委員長だ」

昼休み、購買で買ったパンを持って中庭に出ると、千佳が校舎脇の花壇を指さした。

「ほんとだ。三鷹くんだね、何をしているんだろう」
(草むしり……?)

奏はこちらに背をむけて、せわしく両手を動かしている。

花壇には青いバケツが置いてあり、花壇から何かをせっせと移しかえているようだ。

三日と千佳は、顔を見合わせた。

「行ってみようか」

二人はそろそろと彼に近づき、背後から声をかけた。

「三鷹くん」

びくっと、奏の背が揺れる。

「うわ。ああ、望月さんと大瓦さんか」

「委員長、何してんの？」

千佳がげんなりな面持ちで、バケツの中をのぞきこんだ。
何かを入れているように見えたのに、中身はカラだ。

奏はバツの悪そうな顔で、ぼそっとこたえた。

「……キノコ採り」

「は？」

「キノコ？」

三日はあたりを見回した。

「キノコが生えているの？」

「あるよ。二人には見えない？」

千佳が情けない顔をする。

「……ないよね？」

「ええと、私にも見えないけれど」

奏はいたたまれなさそうにうめいた。

「見えなくても構わないけど。いや、むしろ見えないのが健全だと思うけど、キノコを採ってるんだ。ああでも、オレだけが変なんだと思うなよ。他にも採ってるヤツはたくさんいるんだから」

そう言っ、奏が示したほうを見ると、たしかに他にも数名の生徒が、校舎の隅で入れ物を片手に何かを採るようなそぶりをみせている。

千佳は目を丸くした。

「えええ？」

わりといつも冷静な彼らしくもなく、奏は露骨に眉をしかめると、千佳の手をとり、てのひらに何かを載せた。

千佳がひゃつと悲鳴をあげる。

「なななに？ やだ、なんか載ってる！」

「な。見えなくてもあるだろ、キノコ」

千佳はきやあきやあ言いながら、慌てて手を振り払った。

「やだ、気持ち悪い！」

「――悪い」

千佳の手から落ちたとおぼしきキノコを拾い上げ、奏は三日を見た。

「望月さんは、その眼鏡をはずしたら見えるよ、きつと」

三日はぽかんと口をあけた。

「え、え？」

自分でもなんとなくそうだろうとは思っていたが、まさか彼の口から指摘されるとは思っておらず、すっとんきょうな声をあげる。

「どうして三鷹くんが私の眼鏡のことを知っているの」

ああ、と声をもらして、奏はくちびるを噛んだ。

「もしかして秘密にしていた？ ええとほら、前に小耳にはさんだんだ。ごめん」

「どこで？」

「生徒会室で」

（なるほど）

ようやく三日にも合点がいった。

生徒会の役員ならば三日の目のことを話題にのぼらせてもおかしくはないし、クラス委員の彼は、生徒会室に出入りする機会が多かった。

しかし気になることもある。

「あの、隠してるわけじゃないから、べつにいいんだけど。でも、あのね、……他のクラス委員の人とかも当然のように知っていることなの？」

それは嫌だなあ、と思っていると、奏はすこし慌てた様子で首をふった。

「いや、それはない。そんな言いふらすようなマネはしてないよ、誰も」

そうして、軍手をはめた手で、わしわしと頭をかく。

「言い方が悪かったかな。たぶん、そんなに知っている人はいない。オレはたまたま、ちょっと間が悪かったただけだから」

「そう、よかった」

胸をなでおろす三日の隣りで、千佳が「はい」と手を挙げた。

「ちょっと、二人でわかりあわないでよ。あたし置いてけぼりなんだけど。ミカの眼鏡がどうしたの？」

「あ」

思わず声をもらし、奏と三日は目を見交わす。

三日はしかたなく、ざっくりとした説明をした。

「そうね、ええと、……私、実家が神社だって前に話したでしょう。それで、見えるのよ。お化けとか、いろいろなものが。だけどこの眼鏡をしていると、そういうあやしげなものが見えなくなるから、わざわざかけているのよね」

「お化け、見えるの？」

三日はうなずいた。

千佳は同情たっぷりといった様子で、三日に言った。

「うわあ、それは怖いね、かわいそうに。それじゃあ眼鏡かけてたほうがいいよ、絶対！」

予想と違ったりアクションに、まばたきをした。

「信じるの？」

「そりゃあ信じるよ。だって、あたしには見えないけど、キノコもさっき触ったもの」

胸をはる千佳に、思わず感心する。

（人間って、誰でもこんなに柔軟な思考を持っているのかなあ）

三日にはよくわからないけれど、小学生のころに同級生に化け物あつかいされた記憶もあるので、人間にもおそらく個性差があるのだろう。

ほっと安堵の息をもらす。

近しい人間が受け入れてくれるのであれば、それに越したことはないのだ。

千佳は目を輝かせてうながした。

「怖いものはないほうがいいけど、でもねえ、ちょっと眼鏡をは

ずしてみてよ。そしたらキノコ、見えるかもしれないでしょ」

「ん、ええ、そうね。わかった」

三日にも興味があつたので、眼鏡をはずして、ポケットにしまう。

「うわあ」

眼前にあらわれた光景に、胸をつかれる。

(すごい)

「ミカ、見えた？」

「見えた。キノコだらけなの。おとぎの国みたい」

普段目にする校舎とは、まるで様子が異なっていた。

たゆたう水底に、花壇はおろか、中庭の下生えの間や、校舎の隅など、いたるところに極彩色のキノコが群生しているのだ。

(おどろいた。目がチカチカしちゃう)

花壇に腰かけ、二人のやりとりを黙って見ていた奏を見やる。

さきほどまでカラダと思っていたバケツの中に、黄色地に緑の斑点もようがついた大ぶりのキノコが山となっていた。

「ほら、キノコ狩りするのもわかるだろ。希少性のあるキノコも多いらしいよ。今しか採れないから、皆必死になって集めてるんだ」

「なるほどねえ」

色とりどりのキノコを、まじまじと見る。

いかにも毒がありそうな、ペンキを塗りたくったような色のものばかりだ。

中には、紫色をした輝く粒子を放っているキノコもある。

(あれ、吸っても害はないのかな)

見えると途端に気になるということもある。

三日はぶるっと背中をふるわせた。

千佳は、羨ましそうな声をあげる。

「いいなあ、ミカと委員長には見えるんでしょ。損した気分」

「毒々しい色のキノコばかりだよ。でもたしかに、見ごたえはあるかも」

「ふうん、そうなんだ。で、委員長はそれを集めてどうするの？」

奏の眉間にシワが寄る。

「頼まれたんだ。強引に。拒否権なしで」

そうして忌々しげに言葉を継いだ。

「あーあ、オレも見えなかったらこんなことしないですんだのにな」
こんなふうに、感情をあらわにする彼はめずらしかった。

そう考えた矢先に、奏は舌打ちをして毒づいた。

「くっそ、どうも口が滑るな。キノコのせいかな」

もしかして、それは舞い散るキノコの粒子のせいなのでは。そう頭をかすめたけれど、口はつぐんだ。

かわりに、疑問を口にしたのぼらせてみる。

「三鷹くんは誰のおつかいをしているの」

「ああ」

彼は露骨に目をすがめた。

「あいつ」

そう言って顎で示した先に、いつの間にやら近づいていた秋がいた。

「副会長」

千佳がよろこびの声をあげた。

「やあ。たのしそうだね」

「こんにちは」

秋は片手をあげて挨拶を返し、奏を見ると、にっと口角をつりあげた。

「きこえたよ、奏。おまえ、すこし口が悪くなっていやしないかい」
「誰のせいだよ。いつも好き勝手に使いやがって」

おやおや、と、秋が大仰に腕をひろげる。

「奏は善意で手伝ってくれているのでしよう。しかし案外弱いね、もう胞子にやられたの？ もっと耐性があるかと思ったよ、なさけない」

「胞子だと」

「そう。これ」

秋は三日が目をつけていた、輝く粒子を放つキノコを手にとり、かかげてみせた。

「トンデケロリタケ。自白作用がある」

ぎょっとした様子で、千佳が秋の手元を凝視する。

奏は忌々しげに口をゆがめた。

「やっぱ被害のあるキノコばかりじゃないか。浮かれて収穫なんてしてないで、はやいとこ駆除しろよ」

「なにをいう。どれも貴重な品なんだよ。こんなふうに一斉に繁殖するなど、そうあることではないんだ。これも海の恩恵なのかね」
そう言って秋は、はるか頭上の海面に目をやった。

三日は、気安ささえうかがえる二人のやりとりに、目を見張る。

（仲、いいんじゃないのかな）

奏は不快感を隠そうともしていないが、こうして噛みつく姿を見るのも、はじめてなのだった。

（ケンカするほど、っていうし。それかも）
いつもの公平な態度が嘘のようだ。

奏はバケツを指さした。

「どうせこれだって、あんたロクなことに使わないんだろう。もう
いっそ全部燃やしちまえよ」

「まあそう言わずに。完成したら奏に優先的にわけてやるからさ」
千佳が、おずおずとして口をはさんだ。

「あの、集めたキノコをどうするんですか？」

「そうだねえ」

秋は顎をさする。

「きみにはこれは見えないのかな」

「ええ」

「そう。だったら、漢方の材料がそろってるとでも思ってみて。こ
このキノコにはさまざまな効能があるんだ。専門家が調べると、
幅広い薬液ができる」

「へえ」

「ぼくが今回作ってもらおうと考えているのは、催眠剤と催淫剤。
それと幾種類かの香をね」

三日はつぶやいた。

「犯罪の匂いがあります」

「いやだな、悪いことには使わないよ。生徒会でね、終業式の後に
打ち上げをするんだ。その舞台設置にね、必要なんだよ」

「はあ」

万理万里学園は三学期制を導入している。そのため、夏休みと冬休
みの前には、終業式があった。

「今から打ち上げの準備をするなんて、気のはやいことですね」

「キノコは採れるときに集めておかないと」

「……集めるのはオレなんだけどな」

奏はバケツいっぱい集まったキノコを大ぶりのビニール袋にうつすと、空になったバケツにまた別の種類のキノコを収穫しはじめた。

「ほら、これ持っていけよ」

なげやりな態度で、黄色いキノコのつまった袋を秋に差し出す。

秋は、にこりと笑顔で受け取ると、励ましの言葉を彼におくった。

「えらいな、ちゃんとどれを集めればいいのかわきまえているじゃないか。その調子で頼むよ」

「やかましい。とっとと行け」

背を向けてキノコを採取しながら、秋の顔を見ようともしない奏に、千佳はおどろきの声をあげた。

「あたし、こんなに無愛想な委員長、はじめて見たなあ。でもなんだかいね、委員長と副会長って、おともだちなの？」

「はあ？」

奏がぎろりと千佳をにらむ。

「そんなわけないだろ。使役されてんだよ、オレは」

秋がにこやかに口をはさんだ。

「奏はね、たしかに以前からの知り合いではあるけど、ぼくではなくて、本当はぼくの妹と仲がいいんだよ。とてもね」

奏の動きがぴたりと止まった。

「へえ、そうなんですか。副会長、妹さんがいたんですね」

「そう。とてもかわいい子だね。奏がせっせと集めているキノコも、これは巴が使うんだ」

「――おい」

奏の口から、地を這うような音がもれる。

「ああそう、巴というのは、妹の名なのだけど」

秋は手をのぼし、バケツの中から、まだらに変色した茶色いキノコをひとつ手にとり、くるくると回した。

「さっきのは眠りを促す作用があるんだけど、こっちは催淫作用があつてね。これは妹に頼まれたんだ」

「え？」

「だってほら、誰もが奏のようにがつついてるわけじゃないからさあ」

「てめえ！」

奏は声を荒げると、手にしたバケツを秋に向つてたたきつけた。

とっさに秋が払いのけたバケツが地面を転がり、しなびた色のキノコが宙を舞う。

秋は実に楽しそうな笑い声をあげて、キノコをつまんだビニールを抱え、後ずさった。

「本当に奏は怒りっぽいな。キノコ、ちゃんと集めて化学室に運んでおきなよ」

剣呑な表情をした奏の口から、歯ぎしりの音がもれる。

「ちくしょう」

いくつか悪態をついたのがわかったけれど、それは三日には聞きとれなかった。

秋はふたたび手をふって、校舎にむかつて歩き出した。

「じゃあね」

三日と千佳があっけにとられて見送るなか、奏は無言で落ちたキノコを拾い集めた。

（背中から、怒りのオーラが見える）

気詰まりな空気を感じて、千佳に救いを求めて視線を向けた。

千佳はきよとした表情で奏を見ると、こうたずねた。

「よくわからないんだけど、委員長って副会長の妹さんと付き合ってるの？」

「違う。きくな、違うんだ」

「ふうん」

いくつかまばたきをして、あっけらかんと彼女は言った。

「まあいつか。キノコ狩り、がんばってね」

「ああ」

「あたしお腹すいちゃった。ミカ、ごはん食べよ」

「うん、そうだね」

うなずいて、奏とじわじわ距離をあける。

奏はふと頭をあげて、三日を見た。

「外で食べるなら、キノコが生えてない場所で食べろよ。どうやら胞子は有害らしいから」

「うん、わかった。どうもありがとう」

落ち着きのある優等生で、適度に親切で温厚。そんな印象をうけていた彼にも、個人の事情があるんだろうなと、ぼんやり思った。しかし基本的にはいい人なのだろう。

三日は、奏の助言にしたがって、穏便に昼食がとれそうなベンチを探すことにした。

第四話

放課後、三日と千佳は、部室の鍵を借りるため、職員室にむかっていた。

どうやらキノコは校舎内にまで侵食しているらしく、廊下や教室のあちこちで何かを拾い集める行為にふけっている生徒を見かけた。

「委員長、まだ集めてるのかな」

千佳がそんなことを言う。

「どうだろう。それにしても多いね、キノコ狩りをしている人たち」
「あたしには、ゴミでも拾ってるようにしか見えないんだけど。でも、ちよつといいなあ。皆が集めるってことは、それだけいいものってことでしょ。なあんか楽しそうなんだよね」

「でもきつと、見えていたら歩くのに邪魔だよ」

千佳は、三日の顔を横目で見た。

「眼鏡、はずさないの？」

「私、使い道のわからないキノコを集める趣味はないもの」

「そっか。だよね。皆、なにに使うんだろうねえ」

きつとそれだけ、おのおの望む事柄があるのだろう。

「本当、ふしぎね」

「あ」

千佳が三日の袖を引いた。

「ねえ、あの子、三日のこと睨んでるよ。ええと、四組の八又さん。知り合い？」

うながされた方向に目をやると、空き教室で袋を片手にしゃがんでいた八又 さやかが、こちらに厳しい眼差しを向けていた。

三日は教室の前で足をとめ、あたりを見回す。

(え、私……?)

さやかとは、受講している補習授業が同じだけれど、それ以外の接点はないはずだった。

顔と名前はかろうじて知ってはいるが、言葉を交わしたことはない。当然、睨まれる覚えもないのだった。

とまどう三日の視線の先で、さやかは立ち上がると、不快げに顔をしかめて言った。

「なに見てるのよ。どっか行って、気分がわるいわ」

「え、あのう」

とまどう三日の目の前で、さやかはつかつかと歩み寄ると、たたきつけるように扉をしめた。

「ちょっと、なによ」

千佳が肩を怒らせて言う。

「ひどいじゃない。気分悪いのはこっちのセリフだよ、ねえ」

「うん、ごめんね」

「どうしてミカがあやまるの」

「だって千佳に嫌な思いさせちゃったから」

「……八又さんと、なにかあったの?」

三日は首をふった。

「こころあたりはないけど。でも、知らないうちに嫌われることもあるよね」

「ないよ、そんなの!」

「そうかなあ」

千佳は口をとがらせた。

「理不尽な目にあっただよ。ミカ、もっと怒りなよ」

「怒るようなことじゃないから」

納得はいかないものの、怒りはさっぱりわいてこなかった。
拒絶されるのには、慣れているのだ。

「もういいよ。今度、機会があつたら理由をきいてみるから。ね、もう行こう」

「もうっ。あたし怒ってるんだからね」

「うん。ありがとう」

千佳の頬が、おもしろいくらいにぷつくりとふくらむ。

「もどかしいなあ、もう、やだな！」

三日は、我知らず微笑んでいた。

自分の受けた敵意に腹をたててくれる人というのは、中学のころの
皐月以来かもしれなかった。

「笑うところじゃないよ、ほんとに」

「ごめんね」

そういいながら、ゆるんだ口元はなかなか戻りそうになかった。

向かう廊下の先で、ばたばたとせわしない足音がした。

上級生の男子生徒が数人、あたりを見回しながら、足早に歩いてく
る。

「ああ、君たち、ちょっと」

そのうちの一人が、三日と千佳に声をかけた。

「すまないが、亀を見なかったかな」

「亀、ですか」

そういえば、もう何年も目にした記憶がない。

「生物室から亀がいなくなって、探してるんだ」

「自力で逃げだすはずはないから、誰かのいたずらかもしれないんだけど」

「悪いけど、もし見かけたら知らせてくれないか」

くちぐちに語る彼らに、二人はこくこくとうなずいた。

「わかりました。亀ですね」

「そう。全部で五匹いたんだけど、ほら、このくらいの大きさで」
そう言って、彼らはおにぎりを握るときのようなしぐさをしてみせた。

「緑色をしていて」

「そう、それでとても、つぶらな目をしてる」

「名前は、イチコ、ニコ、サンコ、ヨンコ、ゴコ」

「心配なんだ。もし見かけたという人がいたら、生物部に来るように伝えて」

「たのむね」

「よろしくね」

それだけを、勢い込んで告げると、彼らはふたたびバタバタと廊下を去っていった。

「うわあ、なんだろう今の」

千佳がいくぶん弱気な表情で、彼らの後ろ姿を見送る。

「生物部の人たちなのかな。かわいがってるんだね、きっと」
千佳がうなる。

「それはわかる。でもね、あたしあのネーミングセンスは許せない

な」

「イチコ、ニコ、サンコ、ヨンコ、ゴコ？」

「そう。ないよそれは実に」

「わかりやすくてよくない？」

「ない！」

きりりと真剣な顔をして、千佳は断言した。

「それはそうと、亀って泳ぐよね」

「そりゃあ、そうなんじゃない？」

三日はなにげなく眼鏡を外して、窓から空を見上げた。
校舎は水中に没している。

（もしかしたら、泳いで逃げたのかもしれないね）
いまにも魚が泳ぎだしそうな日和だ。

亀が泳いでもいいんじゃないかと、そう感じた。

「生物部って、亀の飼育をしているんだね。そういえば、生物室って行ったことないし、亀が学校にいるなんて知らなかったな」

三日が告げると、千佳もうなずく。

「そうだね。そういわれると、学校の中でも行ったことのないところって、けっこうあるかも」

視線を校内に戻すと、やはり廊下の隅にはキノコがぽつぽつと生えていた。

廊下も、教室も、階段も、色とりどりのキノコが場所もわきまえずに群れている。

（あれ？）

三日の視線が、廊下の先の一点でとまる。

「ねえ、千佳。あそこって何があったっけ」

つきあたりの手前の教室を指差す三日に、千佳はこたえた。

「ああ、美術室だよ。そういえば、そこにも縁がないね、あたしたち」

「ちょっと、行ってみてもいい？」

「いいけど。なんで」

三日は、眼鏡を制服のポケットにしまった。

「美術室のまわりに、キノコがないの。ほかはどこもたくさん生えているのに、あそこだけぽっかりとないんだよ」

とてつもない生命力をほこるキノコの群れが、廊下のある一点をさかいに姿を消していた。

あたりまえのそんな景色が、際立って異質に見える。

「へえ。除草剤でもまいたのかな」

千佳がそんな冗談を口にして、二人は美術室へと足をむけた。

美術室のドアはあいていた。

イーゼルにたてかけられた、描きかけの絵が数点、壁際にあつまりられている。

部屋の中央には、一人の少年がいた。

やわらかそうな褐色の髪をした、細身の一年生だ。
がらんとした室内で、ひとり絵を描いている。

（あれ？）

三日は目をまたいた。

一瞬、懐かしいような気持ちにとらわれたのは、なぜだったのだろう。

絵の具の匂いが鼻をかすめた。

言葉もなく見つめていると、少年は二人に気づいたようで、おもてをあげてふっと穏やかな笑顔をみせた。

清らかな笑顔だと、そう思った。

（誰だろう）

意識がひきつけられて、気がつくともとれていた。特別にきれいな風貌をしているというわけではないのに、あっさりとした顔立ちには清廉さがあり、目をうばわれた。

少年が、二人に向かって手招きをする。

「こんにちは。望月 三日さんと、大瓦 千佳さんだね。そんなところに立っていないで、入っておいで」
「まただ、と思った。」

（どうしてこの学校の人たちは、ひとの名前を知っているんだろう）
同学年の生徒だとはいえ、初対面なのだろうに。

「ええと、あなたは？」

「僕は二組の浦和 涼一。二人はもしかして、美術部の見学？」

「いえ、ちよつとのぞきに來ただけなの。邪魔をしちゃってごめんなさい」

「いいよ、そんなの。今は僕ひとりしかないから、気がねしないでどうぞ」

おじゃましますと声をかけて、二人は美術室に踏み入った。

「見てもいい？」

さっそく千佳が涼一のキャンバスをのぞきこみ、感嘆の声をあげた。

「うわあ、きれい！」

千佳に腕を引かれて絵を見た三日も、息をのんだ。

それは、海の絵だった。

生命にあふれた海の底から、かがやく水面を見上げるような構図の絵だ。

胸の奥が、痛みにも似た感動を覚えていた。
(なぜだろう。とても懐かしい感じがする)

三日は思わずあたりを見回した。

ここ数日、空を見上げれば、この絵とよく似た光景を目にしていたはずだった。

なのに、こうして現実にあたためた水と、涼一の描く水中とはあきらかに異なるのだ。

絵の中に存在しているのは、現実よりもなお美しく深みをおびた水底だった。

目には見えない生き物が、ひしめきあう気配があった。

いまにもキャンバスの水がうねって、世界を包み込みそうな、そんな錯覚を覚えるほどに、力強く心をつかむ作品だ。

「すごい。生きているみたい」

陶然として言葉をもらすと、涼一は嬉しそうに笑みをうかべた。

「三日さんも絵は好きなの？」

「いいえ、いままであまり見ることはなかったの。でも、すごいわ。

浦和くんの作品は命が込められているみたい」

「涼一でいいよ。君には名前と呼んでほしいんだ」

「え？ あ、はい」

涼一と目があつた。底の見えない澄んだ瞳が、まっすぐに三日を見据えた。

「……涼一さん」

なんとなく、「涼一くん」と呼ぶのははばかられた。

線の細い風貌なのに、大人びた表情をしているせいかもしれないかった。

千佳が、食いつくように見つめていた絵から視線をはずして、涼一

に話しかけた。

「あたしも名前で呼んでもいい？」

「もちろん。千佳さん」

「ありがと。涼一くん、あたし、涼一くんの絵、すごく好き」

「嬉しいな。まだ未完成なんだけど、気に入ってもらえるのはとても嬉しい」

「となりのクラスなのに、こんなに絵の上手な人がいるなんて、ちつとも知らなかった。あたし、もっと見てみたいな。他の作品はないの？」

「うーん、ここにはクロッキー程度しかないかな」

「それでもいいよ」

席を立った涼一が、はい、と手渡したクロッキー帳を、三日と千佳はぱらぱらとめくった。

どれも、海にまつわるカットばかりだった。

「鉛筆の線なのに、色がついているみたい」

千佳がうつとりとした声をもらった。

三日はたずねた。

「涼一さんは海が好きなのね」

「好きなのかな、どうだろう。慕わしいとは思うけれど、……でもそれ以上に、僕にとってはなくてはならないものだという思いが強いんだ」

「いつも海の絵ばかりなの？」

「ほかは、必要ないから」

クロッキー帳を返すと、涼一は優しく目元をやわらげて、二人に言った。

「またいつでもおいで。歓迎するよ」

「ありがとう。きっとまた来るわ」

三日が告げると、千佳も瞳をかがやかせて同意を示した。

「すてきな絵を見せてくれてありがとう。ぜひまたおじゃまさせてね」
「僕も会えてうれしかったよ」

美術室のドアまで見送った涼一が、去り際の三日の頭をそつとなでた。

振り向く三日に、彼は慈愛に満ちた笑顔をうかべて、手をふった。
三日も自然と笑みくずれて、彼にぺこりと頭をさげた。

第五話

思わぬ寄り道をして予定よりも遅くなり、出向いた職員室では、鍵はすでに借りられていた。

今日は京子も芽衣も掃除当番で遅れるということだったから、他に誰が持っていたのだろうと首をかしげつつ、二人は家庭科室へと足を向けた。

三日の胸の内には、美術室の清涼な空気とあの海の絵が、深い余韻とともに座していた。

部活にもいろいろあるのだ。

そういえば、と、あの教室にキノコが生息していない理由をきくの忘れていたと、家庭科部の部室を目前にして、気がついた。

ともあれ、今から部活の時間だ。

頭を切り替える必要がある。

家庭科室には、人のいる気配があった。

はたして、ドアをあけると、そこには意外な人物がいた。

「原田くん」

原田 正樹。小柄で大食漢の一年生だ。

体躯は細くて背も低いのに、恐ろしいほどよく食べる姿を、食堂で幾度か目にすることがある。

数少ない男子部員であるのと同時に、絵にかいたような幽霊部員で、初回の挨拶以来、部室に顔を出すのははじめてだ。

「めずらしいね。それに、それ」

原田は大量のキノコを持ち込んでいた。

色とりどりのキノコをザルに盛って並べ、鍋でぐつぐつとなにやら

調理をしている。

三日は眼鏡をはずしたままだったので、彼の意図に察しはついたものの、キノコを視認できない千佳からすると、彼の行動はいささかとっぴに感じられるのではないだろうか。

「なにしてるの？」

千佳が問いかけると、原田はうつとりとした眼差しで鍋の中身をかきまぜた。

「スープを作ってるんだ。コガネスベリダケが手に入ったからね。それと、こっちの縞模様のキノコはひき肉と一緒に炒めるとおいしいんだよ」

「またキノコなの」

不服そうに口をとがらせる千佳に、彼は満面の笑みを向けた。

「ああ。まったくすばらしいね！ それからこれ、このキノコはかるくあぶって、塩で食べるんだ。最高だよ！」

「へえ」

「大瓦くんは見えないのかい」

「うん、そうなの」

「大丈夫。見えなくても味わえるから、あとで味見してみなよ」

上機嫌な原田に、三日はたずねた。

「そんなにおいしいの？」

毒々しい見た目のキノコを、口に入れる人物がいるとは思わなかった。

「もちろん」

自信満々で胸をたく原田が、三日に目をとめ、瞳をかがやかせた。「ああ、ぼくはどうして気がつかなかったんだろう！」

「なに？」

「望月くん、よく見たらきみつてずいぶん肌がきれいなんだね」

「はあ」

ひとりテンションを上げて、原田は力強く言い放った。

「実に、実においしいそうだ！」

三日はぽかんと口をひらき、千佳はうめいて渋面をつくった。

「ああ、きいてくれないか。一本だけ採取したこの黄金色のキノコ。乙女の脾臓っていうんだけどね、これはエキスをしぼって処女の生き血にたらしめてのむんだ。それはもう天にもものぼる心地が味わえるというのだよ」

原田は三日の手をとり、きつくにぎった。

「ひとくち飲めば、目の前には花畑がひろがり、ふたくち飲めば、天上の調べがきこえるという。まさに極上の味！」

「えええ？」

それってもしかすると、臨死体験なのでは。そう突っ込む三日をよそに、原田は熱く語った。

「屋上でこれを見つけたときには、目をうたがったものだけど、まさかまさか、これほど身近に健康そうな血液の持ち主までいたなんて。ああ、なんてぼくは幸福なんだろう」

「いえ、あの」

「望月くん、飲もう。ぜひとも飲もう。グラスに一杯だけ、きみの生き血をわけてくれ。そして、ともに天上へと旅立とうじゃないか！」

（うわあ）

ひくり、と顔がひきつった。

「あの、原田くん」

「ああ、ほんとうになめらかな手だ。さぞかし血液もさらさらなんだろうね。いいことだよ、普段の食生活がしのばれるね。最高だ」

「私の血は、人には毒です」

すっぱりと三日は言った。

「わけあって、人の身には合わないと思うの。あの世をのぞき見るどころか、直行しちゃうよ。あきらめて」

「またまたそんな」

原田は笑顔でかぶりをふる。

「いいえ、本当に。私、呪われているから。体液は毒なのよ。あげられませんか」

毅然として見つめたまま断言すると、原田はしばらく考えこんだのちに、がっくりと肩をおとした。

「そんなあ。それはひどいよ」

せつかく理想の健康体にめぐりあえたっていうのに、と、ぶつくさと文句をたれる。

千佳が冷たい眼差しで原田を見た。

「さすがに引くわあ」

しかし原田はへこたれなかった。

「となると、解毒の手段さえあればいいんだね。さて、では化学部に持っていこうか。金森先生だったら相談にのってくれるかもしれない。望月くん、血液を」

「あげません」

そんな調子で、この日の部活はまったく予定通りには運ばなかった。遅れてやってきた京子と芽衣もまきこんで、原田のキノコ談義は過熱した。

すすめられて食した料理は、どれも意外なほど上品な味つけで、彼は終始ご満悦な様子だった。

放課後、奏は化学室に来ていた。

化学の教師、金森 那由他は、魔女だ。

女教師の名にふさわしい、銀縁眼鏡に白衣をまとった長髪の女性だが、体に凹凸はとぼしく、眼光は鋭い化学部の顧問だ。

（微妙に惜しいんだよなあ）

口には出せない失礼な感想をいだきつつ、奏は金森にキノコの入った袋を差し出した。

「一之瀬 秋からです。よろしくおねがいします」

「はいどうもね。よく集めたわねえ、たくさん作れるわ」

そう感心されたキノコは、催淫剤の材料だ。

ろくなもんじゃないと、奏は内心こきおろした。

金森は艶然とした笑みをうかべて、奏にきいた。

「これは、あなたが使うのかしら？」

はつきりとした不快をにじませて、奏は否定した。

「ちがいます。冗談じゃない」

それから、ふと気がついて、きいてみた。

「あの、先生。媚薬が作れるというなら、逆に鎮静剤を作ることも可能ですよね」

「ええ、まあそうですね。材料さえあれば。それと、私の機嫌をとることができればね」

「機嫌、ですか」

「そうよお」と、金森は楽しげにくすくすと笑った。

「なあに、あなた鎮静剤が欲しいの？ 性的な意味で去勢したいってこと？ 変わってるわねえ」

奏はくちびるを噛んだ。

「切実なんです。お願いできませんか」

うーんと、金森は首をひねる。

「性欲過多ってことかしら。思春期だからではなく？」
奏はうつむき、シャツのボタンをいくつかはずした。

はだけた胸元のアザを示すと、金森は「あら、珍しい」と、声をあげた。

「オレ、呪われてるんです。疲れたり、空腹になったりすると、ダメなんです」

「吸血鬼の呪いね。ひさしぶりに見たわ」

金森は手をのばすと、指先で赤い十字のアザをなぞった。

「このウィルスにたちうちするには、元から浄化しないとだめ。やっかいなのに魅入られたわねえ」

「……笑いごとじゃありません」

「あら、わたしにとっては、他人の不幸は娯楽よ」
シャツのボタンをしめなおし、奏はたずねた。

「元から浄化って、どうやるんですか」

「んー、そうねえ。タダで教えろっていうの？」

「は」

「と、普段だったらいいわる言うんだけど、いいわ。あなた、その不幸な面構えが気に入ったから、サービスしちゃう」

「……ありがとうございます」

奏は顔をひきつらせながら礼をのべた。

「薬で一時的に衝動を抑えることはできるけど、それじゃあなんの解決にもならないのよ。元を断つには、方法はふたつあるわ」

「はい」

「ひとつは、あなたに呪いをさずけた吸血鬼に、解放してもらおうこと。あなた、その人とは面識があるのでしょうか。無駄だとは思うけど、一応たのんでみたら？」

「彼女は、行方が知れません」

奏の脳裏に、いまわしい女の顔が、浮かんで消えた。

「会ったのは、呪われたときの一度きりで、——成長したところにまた来ると告げて、どこかへ行ってしまったんです」

「まさしくツバをつけられたってところね」

「それで、もうひとつの手段というのは」

「人魚の涙を手に入れること」

「人魚、ですか」

奏は目をまたたいた。

「そうよ、人魚の涙は万能薬なの。あらゆる呪いを浄化できるといわれているわ。飲めば、真人間に戻れるわよ」

「人魚……」

はたして人魚は実在するのだろうか。

そういえば、以前十夜に、街からほど近い五宝湾ごほうわんには人魚がいたという伝説があると、きいたことがあった。

（探してみるか）

到底見つかるとは思えないが、なにもしないよりはマシだった。

金森が楽しそうに笑い声をあげる。

「見つかるといいわねえ」

奏は頭をさげた。

「ありがとうございます」

「いいえ、いいのよ。ああそうだ、かわいそうなあなたにプレゼントをあげるわ」

歌うように、魔女は言った。

「これだけキノコがあるのだから。あなたが体をもてあまさないように、いいものを調合してあげる」

「いいものって」

「秘密よ。人生は楽しまなくちゃ。あらかじめわかっていたらつまらないでしょう。待っていて、完成したら連絡するわ」

「はい」

「似たようなものをいくつか作るから、手間じゃないのよ。サービスしちゃう」

なにがそんなに楽しいのか、金森はキノコの袋をささげもち、くりと回った。

「ああ、楽しみね。人間の欲には限りがないわ」

魔女の本質は、眺め、楽しむものだときいたことがある。

校内でキノコを採る生徒の多いことから、金森の元へ舞い込む依頼の多さもうかがえる。

街を覆う水も、校内にはびこるキノコも、どちらも余計だ。

（呪いがとけたら、おかしいものも見えなくなるのかな）

翻弄されるばかりの自分の体には、ほとんど嫌気がさしていた。

「では、よろしくおねがします」

奏は重ねて礼をのべ、その場を辞した。

奏を見送った金森の元には、ぞくぞくと依頼人がおとずれた。

その中に、極めて年相応の少女らしい願いをいだいた生徒がいた。

八又 さやかは、熱のこもった瞳で、金森にたのんだ。

「これで、惚れ薬を作ってもらいたいんです」

「あらあら、材料はそろっているのかしら？」

定番の依頼だが、多様な素材を集めるのはひと苦労のはずだ。

はたして少女は、自信満々に、袋の中身をひらいてみせた。

「あります。キノコ三種に、葉草に、淫魔の体液も、このとおりです」

「ふうん。よくそろえられたわねえ」

さやかは、大きくうなずいた。

「協力してくれた人がいるんです。自分のコレクションからわけてくれて」

「あらあらあら」

収集癖のある人間というのはいるもので、金森自身の知り合いにも、コレクターと呼ばれる人物がひとりいる。

そういう人間の助力を得るのはなかなか困難なものだが、当人になんらかの思惑がある場合ならば話は別だ。

さやかも、何かと引き換えに手に入れたのかもしれないが、そこは金森の関知するところではない。

「ひとりを落としたいの？　それとも、ひろく周囲の関心をひきたい？」

さやかは迷いのない声でこたえた。

「ひとりです。ひとりだけに好かれないの」

「そう」

金森は指先で材料をもてあそんだ。

「わかったわ。完璧に惚れこむ薬を作ってあげる。強力なぶん、一度しか使えないわよ」

「はい！」

「明日の放課後に取りにいらっしやい。用意しておくから」

さやかは喜色満面となって頭をさげた。

「ありがとうございます！」

依頼人がはけたあと、金森は一旦職員室へ向かい、途中でその足をとめた。

キノコにまみれた校舎のなかで、異質をはなつほどに清らかな教室がある。

金森は歌謡曲を口ずさみ、美術室へと立ち寄った。

「こんにちは」

陽はかげり、明かりのついた室内に、ひとりの少年がキャンバスに向かっていた。

浦和 涼一は、「やあ」と返して、口もとに薄い笑みをはいた。

「なにを描いているの？」

「遠い南の海だよ。亀が一匹、迷っていたからつかまえたんだ」

金森がのぞきこむと、海を描いたキャンバスを、たしかに亀が泳いでいた。

波間をただようように、四角い枠の中でうごめく亀がいる。

「あいかわらずね」

涼一の描く絵画には力があつた。

時折、こうして彼の描く世界を垣間見るのが、金森の楽しみのひとつだ。

「ねえ、那由他さん」

涼一は常になくご機嫌な様子だ。

「三日に会ったんだ。もちろん僕は、あの子を見守るつもりで入学したけど、まさか向こうから会いにきてくれるなんて思わなかったよ」

「あら、それはよかったわね。一年の望月さんでしょう、きれいな子よね」

「それは当然だよ。あの子の母親だって、そりゃあ美人なんだ。やはり血は争えないね」

金森と涼一は、かねてからの知り合いだ。

彼が大切になっている少女と面識を得たというならば、機嫌がいいのもうなずける。

「ああ、うれしいな。あんなに大きくなって。彼女の面影もしっかりあるんだ」

「あら、そういえば」と、金森は話した。

「さっき、わたしのところに相談にきた子がいるのよ。吸血鬼に青

田買いされちゃってる子でね、自由になりたいっていうから、教えてあげたの。人魚の涙を手に入れなさいって」

涼一は肩をすくめた。

「それは気の毒に。五宝湾に人魚などいないだろう」

「徒労におわるかしら」

「さて。それにしても分が悪い。人魚を探したうえ、泣かせないといけないんだろう」

「ええ。そうよ、たのしいわね」

金森は心が浮き立つのを感じた。

「それでね、その子、望月さんと同じクラスの少年なのよ」

涼一の視線がきびしくなった。

「そいつは相談する相手を間違えたんじゃないか。那由他さんのところじゃなく、保健室に行くべきだったね」

「あら、それもそうね」

万理万里の養護教諭は、いたって温厚な吸血鬼だ。

もしもあの少年が相談におとずれたなら、真摯に受け止めてくれたかもしれない。

とはいえ、金森にそれを打ち明けるつもりはなかったし、養護教諭が吸血鬼だと知る者は学内でもさして多くはない。

少年が保健室にたどりつく可能性は低いように思えた。

「そんな穏便な結末じゃあ面白くないわ。彼は探し出せるかしら、行方知れずの人魚姫を」

「海で溺れてみたらいいんじゃないかな」

金森はふきだした。

「いじわるね。海に人魚はいないのよ。あなたがそう言ったんじゃないの」

少なくとも、今は海に出るべきではない。

金森は、窓の向こうに目をやった。

沖は荒れている。海には今、海坊主がいるのだ。

第六話

二階堂 皇月は、海辺へ来ていた。
しずくが、海が見たいと言ったためだ。

今宵も月は厚い雲に隠れ、遠い街灯のほかには明かりはない。
街を覆う水は、濃度が増しているような気がした。
体はらくだが、息苦しい。

海の水は黒く目にうつり、磯の香りが鼻孔をくすぐる。

夜風に舞う、しずくの細い髪がきれいだった。
しずくの肌は、幼馴染の少女と比べても遜色ないほど、白くなめらかだ。

彼女の、しっとりとした雰囲気が好きだった。

今宵は、波があった。

しずくが沖を指さす。

「皇月くん、見える？ あれが海坊主よ」

黒い影が、波間に屹立している。

「見えるよ。昨日より大きくなってる」

昨晩は豆粒ほどだった影が、今宵は指の形まで見分けられるほどに巨大になっている。

「そりゃあ、海坊主だもの。大きくて当然よ」

「恋しい相手にはまだ会えずにいるんだね」

「ええ。会いにいくまでがたいへんなのよ」

そうして、しずくは彼の事情を語ってくれた。

「彼はね、龍宮の女官に恋をしたの」

「龍宮城のこと？」

「そう。海の底の雅やかな御殿よ。御伽噺にあるでしょう。亀の背に乗って、深く底までくだっていくの。龍宮の所在は隠されていて、彼は自力で探すことができないのよ。だからああして、そこまで自分を運んでくれる御使いを探しているの」

「御使いって、やっぱり亀なの」

「そのとおりよ。普通の亀ではいけないの。龍宮に囲われている亀でないかね」

「ふうん」

皐月は黒い影が意気揚々と亀にまたがる姿を想像した。

「海坊主って大きいんだよね。あの黒い人が乗れるほど、その亀って頑丈なのかな」

「背中に乗らなくてもいいのよ。先導してもらえば」

「そう。で、肝心の亀が見つからないわけだね」

「この街にいるのでしょうかね」

皐月はしずくの表情をうかがった。

「どうしてわかるのさ」

しずくは、さも当然であるかのように、こう告げた。

「だって、匂いがするもの。龍宮の、香の匂いよ。その香が、御使いを御殿へ導くの」

皐月は目を閉じ、あたりの匂いをかいでみた。

（磯臭いばかりだけだな）

嗅覚には自信があるが、元を知らなければ判別のつけようのない香りなのかもしれない。

「わからないな。嗅ぎなれない匂いもしないようだけど」

しずくはうなずいた。

「まだすこし遠いわ。内陸のほうから香るもの」

「海坊主は海から出られないといったよね」

「ええ。亀のほうから来てくれないと、このままでは彼はむくわれそうにないわ」

「でもあいつが街を水浸しにしているんでしょう。それでも陸にはあがれないの？」

「街が水に覆われているのは、彼の想いの強さに呼応して起こった現象でしかないのよ。彼は海岸線からこっちは来ることができない」

そう言い切られて、皐月は安堵した。

あのような得体のしれない者が街を踏み荒らすのは、どうしたってぞっとしないからだ。

「しずくさんには、その亀の居所はわからないの」

「探そうと思えば、見つかるでしょうね。けれど、わたしもこの水にのまれた世界をたのしみたかったの。海の底は心地がいいわ。水に包まれているとね、わたしの主人がよろこぶのよ」

皐月はぎくりと体をこわばらせた。

「……しずくさん、結婚してるの」

しずくはきよとした表情をみせ、その後くすくすと笑いだした。

「いやだ、皐月くん。違うわよ。主人というのは、敬愛する主という意味での主人よ。わたし、主人に仕えたくてここにいるの」

皐月はあいまいにうなずきかえした。

皐月としずくは、互いのことをほとんど知らない。

しずくが人間ではないことはなんとなく察せられてはいたものの、彼女の正体を問い詰めようとは思わなかった。

（オレもわざわざ話そうとは思わないしな）

幼馴染の影響か、肩書きにはあまり興味はない。

ただ、一緒にいてくつろげる人と共にありたかったし、そういう人は希少なのだった。

（とりあえず、既婚者じゃなくてよかった）

そのへんのモラルはゆずれない。

「でも、街がこのままだといいかげん困るな」

「だいじょうぶ。きっと亀にも彼の呼ぶ声は聞こえているわ。そのうち務めを果たしにあらわれるでしょう」

「そうだいいけど」

「そうでなくとも、ここら一帯の亀はみな困り果てているんじゃないかしら。御使いを呼ぶ声が日増しに高まって、亀が亀だというだけで、心穏やかではいられないはず。自分たちで御使いを探して、海坊主にさしだすくらいのことはしかねないわね」

「亀が亀を探すの？ シュールだね」

はたして普通の亀にそこまでの行動力があるのかどうかは疑問だが、亀にも亀にしかわからない苦労があるんだろうなと、深く考えもせずに受け入れた。

「ひとさわがせなヤツ」

海坊主は、大きく首をまわして、空に吠えた。

皐月にはその声はきこえなかったが、黒い影でしかないはずの彼の風情から、声を発したのだろうと想像はつく。

（そうまでして会いたい人、か）

激しい恋情を皐月は知らない。

うらやましいとまでは思わないが、ささやかなエールを胸の内につ

ぶやく程度の気持ちはあった。

(まあ、ほどほどにな)

月のない海に、海坊主の呼び声がひびきわたる。

実家の道場の門をくぐったところで、柁木 朔は五匹のつらなる亀と出会った。

柁木の後について外へ出た奏が、目をまるくした。

「亀？」

「そう、亀だね」

八重樫高校に通う柁木と、万理万里学園に通う奏は、幼馴染だ。

ふたりとも幼いころから、柁木の家で弓道を習っている。

友人、と言ってもいいと思う。

中学二年の夏、奏が吸血鬼に魅入られてから、彼は道場に顔を出す回数が減った。

それでも、気持ち揺らぐようなできごとがあった折には、かならず今日のように弓をひきに来た。

奏にとっては、まさに呪われた唾棄すべき日。柁木にとっても、苦い後悔にさいなまれる元となった、夏の日だった。

吸血鬼を奏の元へと呼び寄せたのは、柁木の能力が原因だ。

それならそれで、当の柁木を呪ってくればよかったものを、舌なめずりをして、彼女は奏に噛みついた。

感情をすぐにおもてに出す奏が、彼女の眼鏡にかなったのだろう。

「かわいい」と、そう言っていた。

柁木は、自分にかわいげなどないことを知っている。

目が細く、表情に乏しいことから、何を考えているのかわからないと言われるからだ。

かといつて、奏をかわいいなどとは思わないが、素直なやつだとは思う。

今も、街灯の下にたたずむ亀を見て、驚きに目をみはっているのだから。

亀はみな、悄然とした様子だった。

柁木は、奏にことわりをいれて、亀の訴えに耳をかたむけた。

「お困りのようだね」

柁木が問いかけると、亀はこちらを拝み倒しそうな勢いで、口々に言った。

『困る』

『たすけて』

『たすけて』

『海』

『海坊主』

『うるさい』

『しつこい』

『こわい』

『亀』

『ちがう』

『御使いの亀』

『探して』

『暴れる』

『とても迷惑』

『困る』

『おねがい』

『さがして』

『御使いは』

『梓の中』

『海に』

『海へと』

『おねがい』

『かえして』

柁木は、動物の声をききわけることができた。

音声を聞きとるわけではなく、意志をくみとる力があつた。

動物の気持ちが柁木にはわかったし、柁木の言うことも彼らには通じるようで、動物たちのなかには頼みごとをきいてくれる存在というの、ままたつた。

亀の訴えのマトには、すぐに思い当たる。

「ああ、あれ。海をさわがせている妖怪だね」

『海坊主』

『こわい』

『御使いを』

『はやく』

路上でわあわあとさけぶ五匹の亀を、柁木はしゃがんで順にながめた。

「あれが亀を探しているというのは、いろいろなところで耳にしたよ。きみたちは、御使いの亀というのを探して海に返してほしいと言ってるんだね」

『御使いは学校』

『うちの水槽のものと下』

『そう、下』

『杵は重い』

『重くて運べない』

『塗料は臭い』

『塗料は嫌い』

『杵も嫌い』

『でも、御使いは杵が好き』

『身使いは迷子だから』

『だから運んで』

『しずかに暮らしたい』

『うるさいのは嫌い』

『たすけて』

「なるほどねえ」

柁木はうなずいた。

「察するに、きみたちは学校で飼育されている亀なのかな。どこの学校だい」

『知らない』

『知らない』

『学校は学校』

『水槽は水槽』

『うちの水槽』

『亀が五匹』

『今日は六匹』

『ちがう』

『今は一匹』

『御使いは迷子』

「おやおや、学校名はわからないのかい。まいったな」

すると、それまで黙って様子をみていた奏が、つつけんどんに言った。

「万理万里だろ」

「え、そうなの？」

「放課後に生物部のやつらが、亀がいなくなったと騒いでいた。ふざけた名前の亀な」

そこで柁木は路上の亀にきいてみた。

「きみたち、名前があるの」

亀は声をはりあげた。

『イチコ』

『ニコ』

『サンコ』

『ヨンコ』

『ゴコ』

「ほう、かわいらしい名だね」

奏に確認をとると、どうやら間違いないようだ。

「御使いのいる杵というのはなんだろう」

『杵は杵』

『海のある杵』

『水でいっぱい杵』

「水槽ってこと？」

『ちがう』

『水槽は水槽』

『杵は杵』

『杵は紙』

『そう。紙』

『紙は海』

『御使いは泳いでる』

「紙で海の粹？」

そうだと亀は同意を示したが、要領を得ない説明に、柁木は頭を悩ませた。

「よくわからないな。まあいいか。どうせ明日には万理万里に行くんだし、様子を見てみるよ」

そう請け負うと、奏は不思議そうに柁木を見た。

「来るのか？」

「うん。ほら、明日はサッカー部の練習試合があるでしょう」

「さあ、知らないけど」

「あるんだよ。うちの学校とそっちのついで。クラスメイトが出るからね、応援に行くんだ」

「物好きだな」

「まあね」

くだんのクラスメイトを思いおこし、柁木は声はずませた。

「なんというか、そのクラスメイトには興味があるんだ。おもしろい人でね、そうだな、端的にいうと、獣くさい」

「はあ？」

奏はいぶかしげに顔をしかめた。

「それっておもしろいのか？」

「おもしろいよ。見た目はすぐきらきらしてるんだ。僕でも見とれてしまうくらいに魅力的なんだよ。なのに、獣の匂いがする」

「へえ」

たいして興味もなさそうに、奏はあいづちをうった。

「まあ、それはともかく、今はこの亀だね。ねえ奏、万理万里の亀だっていうなら、連れてかえってあげてよ」

「オレが？」

奏がじつに嫌そうな声をあげた。

こういう素直なりアクションが、彼の最大の魅力だと柁木は思う。同級生の二階堂 皐月のように人目をひく容姿はしていないが、普段はとりすましたその顔が、ことあるごとにすぐ崩れるのが、見ていて心ひかれるのだ。

（だから余計なものにまで魅入られてしまったのかもしれないのだけれど）

苦労性の友人は、押しに弱い。

「僕が届けるのはおかしいんじゃない。やっぱり奏にしか頼めないよ」

しぶる奏に言葉をかさねて頼み込むと、ようやく彼は了承を示した。

「……わかった」

「うん。ありがとう」

「で、結局、この亀の用件はなんだったんだ」

「ああ」

それは奏にとっては、意味不明なことだったろう。

柁木はおおまかな説明をこころみた。

「海に海坊主が来ているというのは知ってる？」

「知るわけないだろ。なんだよそれ」

「来てるんだ。どうやら、亀を探しているらしいよ。しかもそれが特別な亀だね」

「亀に特別なものもないだろ」

「海坊主にとっては、違うんじゃない。その、御使いって呼ばれて

る亀が、奏の学校にいるらしいよ」

「……またかよ」

度重なるトラブルに疲弊している幼馴染は、頭をかかえた。

柫木は、さきほど亀が話していた内容をかいつまんで伝えた。

「こころあたりはある？」

「ないな」

「そう。困ったね」

といつても、困っているのは柫木ではなく、亀であつたが。

「亀も海坊主も、どうでもいいな。オレは人魚を探すことになったんだ」

唐突に、奏は言った。

「人魚？」

そうして語る奏の言葉を、柫木は真摯にうけとめた。

「なるほどね。人魚がいるなんて噂はきいたことがなかったけど、こちらでも探ってみるよ」

「助かる」

「いいや、これくらいしか僕にはできないからね」

胸に巢食う罪悪感がある。

あの日、柫木がコウモリの声に耳をかたむけなければ、奏が吸血鬼に目をつけられることはなかった。

謝罪の言葉はもたないけれど、できる助力を惜しむつもりはない。

「見つかるといいね」

そう声をかけると、奏はまっすぐに柫木を見つめた。

「違う、朔。見つけるんだ」

第七話

昼休み、三日は千佳とともに学食で焼魚定食を食べたあと、同じく昼食を終えてのんびりと過ごしている奏を見かけて、声をかけた。

「今日はもうキノコを採らなくてもいいの？」

奏はいくぶんすっきりとした面差しで、「代わりが見つかったんだ」と言い、食堂の一角を指差した。

「ほら、あの人。一年生のたくさん食べる人」

示された先には、首にタオルを巻き、帽子をかぶってごはんをかきこむ原田の姿がある。

「原田くん？」

「知ってる人？」

「同じ部活なの」

原田とは昨日顔を合わせたばかりだ。

食に並々ならぬ情熱をかたむける人なのは知っていたが、今もテーブルの上にはカレーとラーメンとトンかつと、それに山盛りのサラダが載っている。

もくもくと料理を口に運ぶ彼を遠目に見やり、三日はたずねた。

「代わりって、どういうこと？」

「生徒会のためにキノコを集める役、肩代わりしてくれたんだ。あの人、百々さんをずいぶんと慕っているらしくて、こころよく交代してくれたんだよ」

「百々さん？」

首をかしげる三日に、横から千佳が口をはさんだ。

「会計の音無 百々さんだよ。あの人きれいよねー」

「そう、その百々さんが頼んだら、ちょっとびっくりするくらいやる気をだしてね、朝からばんばん採ってきてくれてるんだって。おかげでオレは解放されて、のんびりごはんが食べられるってわけ。ありがたいね」

「原田くんって、よっぽど美人に目がないのね」
千佳が呆れた眼差しを原田に向けた。

「でもまあ、音無さんに惹かれるのはわかるかな。あたしもうつとりしちゃうくらいスタイルいいもん、あの人。話したことはないけど、姉後肌っぽいし、人気あるんだよね」

「たしかに、売り物にするだけあって、スタイルはいいな」
うなずく奏に、三日はたずねた。
「売り物ってどういうこと？」

「百々さん、熱心なアルバイトなんだ。なんでそんなになってくらい、よく働くよ。オレの聞いたかぎりでも、ウェイトレスに貨物運びに、手品師の助手とか、あと風変わりなところで地下アイドルとか。いつも体が資本だって言ってる」

「へええ」

千佳が感嘆の声をあげた。

「どうりで引き締まった体してるわけね。あこがれるわあ」

三日は、千佳の丸みがあってふわんとした体つきがやわらかそうで好きなのだが、人は自分にはないものに憧憬を抱くものなのだろう。

「でもま、よかったね委員長。キノコ集めるの、嫌そうだったもんね」

「ああ。自分のやりたいことに時間が使えるって、いいことだよ」
そのとき、学食の入り口をくぐってきた女子の一団が、きやあきやあいう声をあげた。

耳をつく声に、何事かと思って目をやると、一年の女子生徒が興奮

した様子で話をしている。

「あ」

三日の口から音がもれる。

五人集まった生徒の中心に、昨日三日につっかかってきた八又さ
やかな姿があったのだ。

「やかましいな」

奏がわずかに眉をひそめた。

食事時のピークを過ぎて、人気もまばらになった食堂に、彼女たち
の声が聞くともしなしに耳にとどく。

「早く放課後にならないかな！」

「たのしみだよー」

その中に皐月の名前があがるのを耳にして、彼女たちが何に対して
盛り上がりを見せているのか思い当たる。

「ああ、サッカーって今日だったっけ」

三日がつぶやくと、奏も合点がいったようすで、あいづちをうった。

「そういや、そんなこと言ってたな」

「他人の試合を見て、なにがそんなに面白いんだろう」

「それもそうだな。うちのサッカー部、そんなに強いって話はきか
ないし、練習試合ごときでそうまで騒ぐこともないだろう」

「あ、そうか。……たぶん、サッカーが目当てなわけじゃないと思
う」

小学生の頃はまだしも、中学に入ってから皐月の人気には、三日
もうんざりしてたのだ。

入り口脇の自販機の前でたむろして騒ぐ彼女たちを目にして、三日
はほとんど確信を得ていた。

（サッカー部の応援じゃなく、皐月の応援がしたいんだね）
他校の女子にまで熱く話題を提供するなんて、幼馴染の少年も難儀なものだと呆れてしまう。

「どういうこと？」

奏が問うのへ、三日はこたえた。

「練習試合の相手の他校の生徒に会いたいんだと思う。普段接する機会もないから、嬉しいんじゃないのかな」

「八重樫だろ。そんなに上手い選手でもいるのか」

と、そこへ、これまできょんとしていた千佳が、すっとなきょうな声をあげた。

「え、えええ！ なにそれ。八重樫のサッカー部が来るの？」

襟をつかみあげかねない剣幕の千佳に、あつけにとられて三日と奏はうなずいた。

「らしいな」

「そう聞いたけど」

見ると、千佳の頬は紅潮し、握った拳はふるふると震えだした。

「うそ！ やだ、うそ、素敵！」

「はあ？」

けげんそうな奏をよそに、千佳は興奮を隠そうともせず続けた。

「八重樫のサッカー部と練習試合があるの？ 今日、この学校で？」

「そのようね。放課後にグラウンドでやるって聞いたわ」

「ってことは、二階堂くんが来るってことじゃないの！」

（ああ。やっぱり）

三日はこっそりと息をついた。

以前、千佳が皐月の顔を拝みたいと話していたのを思い出したのだ。

皐月のどこがそれほど女子の気をひくのか、身近な存在すぎて三日にはよくわからない。

なにしろ、相手は自分の兄弟のようなものだ。

好きにやってくれとは思うが、騒動に巻き込まれるのはごめんだっ
た。

「やだ、夢みたい。そりゃあ騒ぎもするよ。ああもう、そんなお得
情報知らなかっただなんて、不覚だわ！」

「そうなのか」

「そうなのよ。まさかこんなに早く二階堂くんに会えるだなんて。
これは張り切って応援に行かないといけないね」

瞳をかがやかせる千佳に、「三日も行こうよ」と、声をかけられて、
首をふる。

「ううん、私、今日の放課後は補習があるから」

「終わってからでも、まだやってるかもよ？」

「スポーツに興味ないし」

「スポーツじゃないよ。噂の二階堂くんをチェックしに行くんだよ」
「……いつてらっしゃい」

さめた目を向ける三日に、千佳が不満げな声をもらす。

「もったいないなあ、せっかくのチャンスだっていうのに」
奏が口をはさんだ。

「その二階堂ってのが目当てで、あいつらも盛り上がっているのか」
「そう。すごくかっこいいって評判なんだよ。いいよね、麗しい男
子が汗を流す姿。躍動する筋肉。しなやかな動作と輝く笑顔！」

「そうか。よかったな」

気持ちのこもらない平坦な声で、奏が言う。

「……男も体が資本か？」

そうして、奏がぼそつとつぶやくのを、三日は聞いた。

万理万里学園には、エースストライカーがいる。

「火をふくシュートってやつ、見てみたかったな」

皐月の見つめる先には、炎のエース、仁木^{にぎ} 風太^{ふうた}がいた。

スポーツ刈りをした細身の二年生だ。

いかにもスポーツ少年めいた、カラリとした笑顔をふりまいている。人のよさそうな男だ。

その風太の表情とはうらはらに、空は黒い雲に覆われ、グラウンドにはざぶざぶと雨が降っていた。

八重樫高校と万理万里学園の練習試合は、前半戦を終えたところで雨のために中止となった。

得点は二対二。他校との試合はじめてで、たのしみにはじめてに残念だ。

とくに、エースと名高い風太が気迫をこめて放つボールは熱気をまとい、かげろうすら立ち昇らせると聞いていたから、なおさらだった。

雨をよけ、第二体育館のかたすみで、帰り支度をしながらバスの時間をまっている皐月のところに、応援に来ていた柁木がやってきて話しかけた。

「せっかく来たのに、もう帰るなんて残念だね。うわさに違わない風変わりな学校だっていうのに」

どうも柁木は、サッカーなどそっちのけで、万理万里の学内に興味をいだいているらしい。

それも無理のないことか。皐月も正門をくぐるなり、あつけにとられてあたりを見回したくちだった。

「ヘンな学校ってのは、オレも思った。学び舍って雰囲気じゃないよな」

なにしろ学校中、キノコだらけだ。いくら湿気が多いからといって、自然に繁殖する規模を超えている。

（しかも、子どもの落書きみたいな色合いのやつばかりだろ）
学校ぐるみで育てているのだろうか。

グラウンドから体育館に移動する間にも、カゴを背負ってキノコを集めている生徒がいた。

「高槻が昨日、気をつけろと言っていたのもわかる気がするな。毎日ここに通っていたら、このけったいな光景があたりまえだと感じるようになるんじゃないか」

「それはこわい」

柁木が首をすくめた。

「環境が人をつくるという部分もあるからね。あまり毒されないようにと、幼馴染に言っておかなくちゃ」

「そういや、お前も友達、ここに通ってるんだっけ」

「うん。今日は補習があるとかで会えなかったのだけど」

「へえ」

そういえば、三日も補習だと言っていた。

（あいつ大丈夫かな）

万理万里にはじめて足を踏み入れたが、わずかな合間にも、人間らしからぬ気配をまとった人物が幾人もいた。

人間ならば安心だとは皐月は考えていなかったが、混沌とした場にはトラブルも他より多く起こるのではないか。

そんななかで、いまだに自我を確立できているとはいいいがたい幼馴染の少女がどのような影響を受けるのか、気になった。

（三日にはまだ、自分ってものがないからな）

そばにいてやったほうがよかったかと、後悔にも似た気持ちがちらりとよぎった。

中学までの、互いの友人は互いだけだというような閉じた関係を打破しようと、自立を志した少女の気持ちを汲んだ結果だ。

（まあ、学校は面白いつて言ってたからな。なんとかなるか）

——すこし面白すぎる気もするが。

群生するキノコの匂いが鼻につき、顔をしかめる。

（この漂ってる胞子も、害はないのかね）

たらたらと物思いにふけっていると、そこへ引率の教師の声がかけられた。

「時間だ。各自、荷物を持って、挨拶」

野太い返事がいっせいにあがる。

皐月も周囲にならない、対戦相手へ感謝を述べる。

柾木と連れ立って体育館の外へ出ると、——そこには女子の集団がいた。

そんなに他校生がめずらしいのかと、熱のこもった視線をあびてげんなりとしたが、男子校に通う男の悲しい性なのか、チームメイトも浮き足立っているのに気づき、肩をすくめる。

取り囲む女子生徒の幾人かに声をかけられる。

「残念だったね」とか、「また来てね」とか、好意的な態度を示されると、まあ悪い気はしない。

適当な返事をしながら、ひらひらと手を振る。

中には、八又 さやかの姿もあった。

さやかはひとときわ熱心に、「また応援に行くからね」と、うるんだ瞳で声をあげた。

柁木に背中をつつかれる。

「さすが二階堂くん。すみにおけない」

そうからかう柁木は、気もそぞろな様子であたりを見回していた。

「どうした柁木、好みの子でもいたのか」

皐月がきくと、「いや」と即座に否定して、かすかにうなる。

「ちょっと探したいものがあつただけど。……自由に探し回れないんだったら、やっぱり無理かな」

「なに探してるんだ」

「うん、亀」

「亀？」

意表をつく答えに、ぎよつとする。

「なんでまた」

「頼まれたんだ。ここ数日、この街は住み心地が悪いと僕も感じていたからね。迷子の亀を海に返してあげられたら落ち着くのかと思つて」

「それって……」

もしかして、と続けようとして、言葉につまる。

（なんて言やいいんだ？）

この飄々としたクラスメイトにも、街を覆う海の水が見えているのかもしれない。

「海の中へ。そんな単純なことで気の済む者がいるのなら、やってもいいかと思つただけだね」

「しかたないから、ひとに頼むか」と、ひとりごちる榎木に、こいつは何者なのかと疑念がつのる。

皐月は重い口を割って言った。

「お前が探しているというのは、――海で巨人が探してる、御使いの亀なのか」

やっこの思いでたずねると、榎木は声をはずませた。

「そう！ やっぱり二階堂くんも気づいてたんだね。そんな気がしていたよ」

「その亀が、この学校にいるってのか」

「僕の聞いたかぎりでは、そうだね」

（とんでもないな）

よほどの学校は、常ならぬ者どもにとって、居心地がよいらしい。

（引き寄せるんだろうな）

類は友をというやつだ。その中には、幼馴染の少女も含まれる。

思った以上にやっかいな学校だ。

だからだろうか。玄関に向かう途中、廊下の先に彼女を見かけたとき、とっさに声をかけていた。

第八話

「三日！」

ぱつと彼女が振り向く。その隣りを歩いていた、優等生じみた、シンプルな装いの少年も足をとめる。

「おやおやまあ」

なぜか柾木がたのしげに目をまたたき、手をあげた。

三日と一緒にいた少年が、すこし驚いた顔をしてうなずきかえした。

「知り合い？」

「さっき話した幼馴染」

どうやら互いの幼馴染と同時にでくわしたということらしい。

三日が小走りに寄ってくる。

「サッカー終わったの？」

「途中、雨で中止になっちゃった。三日は、まだ補習？」

「ううん。私も終わったところ」

「外、すごい雨だよ」

「うん、でも、ちょっと前が一番すごかったよ。今はすこし落ち着いてきたかも」

「そうか」

歩きながら、三日が皐月のチームメイトに目を向けて言う。

「皆、けっこう濡れちゃったみたいね」

「水の中で雨に降られるっていうのも、おかしなもんだな」
そう小声で返すと、かすかに笑う。

三日のあとをついてきた少年が、柾木に声をかける。

「本当に来たのか。ものずきめ」

「まあね、来たかいはあったかな。ここ、おかしい学校だねえ」
そう言われて渋面をつくる少年は、どうやら常識を重んじる性質らしい。

「物見遊山かよ」と、ぼやくのが聞こえた。

「三鷹くん、お友達？」

三日がたずねる。

「ああ。中学のクラスメイト」

そこで簡単に四人で名乗り、挨拶を交わしたところで、柁木が言った。

「僕ら、もう帰らなくちゃいけないんだ。奏、かわりにアレ探しておいてくれない」

「アレってなんだよ。頼まれたやつだったら、ちゃんと部室に返しておいたぞ」

「それはそれ。そうじゃなくてさ、鍵となってるほうの亀だって」
柁木は本気でこの学校に御使いの亀がいると信じているのだろう。
そんなことを幼馴染だという奏に頼みはじめた。

しかし、奏のほうは乗り気ではないらしく、こう渋る。

「亀なんてどうでもいいって、昨日も言っただろ」

「でも、奏も今後、海に出る機会があるかもしれないじゃないか。
海の生き物に恩を売っておいたっていいんじゃない」

「どこにいるかもわかってないんだろ」

「そうなんだよね。『梓の中の海』って、いったいなんなんだろう」

釈然としない様子で、柁木が言う。すると、

「え？」

三日が声をあげて柁木を見上げた。

三日も女子にしては長身なほうだが、柁木はさらに背が高い。

「望月さん、だっけ。心当たりがある？」

きかれて、三日は首をひねる。

「そういうわけでもないのだけど」

「突然ごめんね。僕ら、普通の亀を探してるわけじゃないんだ。けどもし、学校の中に、水槽以外で亀がいそうな場所を知っていたら教えてくれないかな」

「亀に見覚えはないの」

「なんだっけ、朔、当てにならないヒントをもらっていただろう」

「そうそう。海は紙なんだって。写真かな、とも思ったんだけど、どうだろう」

「……紙に、海に粹」

三日がつぶやく。

「亀に心当たりはないけれど、美術部で海の絵を描いている人なら知ってるわ」

柁木がはっとして指をさす。

「それだ！ 当たりっばい。そういえば、塗料がどうかとも言った」

しかし奏は納得がいかない様子だ。

「なるほどね、写真じゃなくキャンバスか。でも、絵の中に亀は棲まないだろ」

「いや、紙の粹で泳いでるっていうんだから、ない話じゃないと思うよ」

わけがわからないといったそぶりで柁木と奏の顔を交互に見比べる三日に、ためいきをついて皐月は説明をしてやった。

「あのさ、海で女官に恋をした男がいるって話をしただろう」

「ええ」

「その男が龍宮城の女官の元へ行くのに、道案内の亀が必要なんだって。で、その亀がこの学校にいるらしいってこいつら話してんの」

三日がきよとんとした目を皐月に向ける。

「浦島太郎の、あの亀？」

「いや、どんな亀かは知らないけど、亀は亀なんじゃない。でまあ、亀が見つければ、沖に来ている海坊主も満足してどっかに行ってしまうんじゃないかっていう、そんな話」

「ふうん」

皐月は柁木に厳しい眼差しを向けた。

「さて、それで、仮に亀が見つかったとして、お前どうすんの」

「海に返すよ」

「なんのために」

問うと、柁木は口もとをゆるめた。笑ってみせたのかもしれない。「海坊主が騒ぐせいで安心できないって声をあちこちで聞くんだ。かわいそうでしょう。だから、善意で」

「しかし、写真にせよ絵にせよ、そんなところの亀をどうやって……」

海に返そうというのかと問い詰めようとしたとき、とうに玄関で靴を履き終えていた部長にどやしつけられた。

「遅いぞ！」

「すみません」

あわてて靴をはき、玄関を出る。

「三日、オレ、一旦学校に戻ってから解散になるから。あとで下の駅で会おう」

すると柁木も、押し付けるように奏にこう告げた。

「とりあえずその絵、見てきて。他にも探してみてよ。電話する」

「はい」と、三日は素直にうなずき、もう一方の奏は露骨な不満顔で、手を振った。

外は雨。

いまさら濡れたところで大差はないが、なんととはなしに皆が駆け足となって、バス停へと向かう。

正門をくぐると、ぱたりとキノコの姿を見かけなくなる。

あのキノコも、類は友をよぶうちに含まれる存在なんだと、そう思った。

「さてと」

疲れたような顔をして、奏が三日を振り向いた。

「妙なことに巻き込まれたね。望月さん、その絵を描いたっていう人のところに案内してくれる？」

「ええ、それはいいけど」

いまいち話が飲み込めていないまま、三日は玄関に背を向けた。

すこし離れたところに立っていたさやかと、ふいに目が合う。

思わず息をのんでしまうほど、厳しい眼差しが三日をつらぬいた。

立ちすくむ三日に、鼻を鳴らすと、さやかはつんとそっぽを向いて、廊下の向こうに立ち去った。

「望月さん？」

奏がげんな面持ちで三日を見る。

「何かトラブル？」

「ううん、たぶんちがう」

「そう？」

曖昧な返事に納得はいかなかっただろうが、三日にもよくわかっていないのだ。

（やっぱり嫌われているのかな）

小学生の時分は、悪感情を向けられると感情のおもむくがままに暴れ返っていたのだが、いつしかそれにも飽きた。

感情の齟齬があったとして、解決する方法など思いつきもしないから、放っておくよりほかにない。

だって、世の中、複雑なのだ。

ともあれ三日は、奏とともに美術室へ向かった。

率直なところ、三日は亀が見つかるなどとは考えていなかった。

『梓』と『海』というキーワードから、涼一の絵を連想しただけで、あの絵に亀など描かれてはいなかったからだ。

仮に描かれていたところで、それが海坊主の求める亀だなどと考えることはなかっただろう。

はたして美術室には、今日もひとり、涼一がキャンバスに向かっていた。

「やあ」

三日をみとめて、涼一の瞳にやわらかな光が宿る。

「こんにちは」

三日と奏は頭を下げて室内へ踏み入った。

「よく来てくれたね。三日さんと、それからお友達？」

「クラス委員の三鷹くんです。こちらは涼一さん。とても素敵な絵を描くの」

「どうも」

昨日も感じたことだが、涼一は独特の雰囲気がある青年だ。

眼鏡をかけている今日も、彼のまとう清らかな空気には目をひかれる。

三日はおずおずと口をひらいた。

「あの、今日はちょっとぶしつけなお願いがあつて」

「なに？ うれしいな、なんでも言つてよ」

「絵を見せてほしいんです。海の絵を」

「オレたち、亀を探してるんだ。亀がいる絵はないかな」

勇敢にも、奏はとつぴに聞こえる質問をずばり口にした。

「亀かい」

涼一は動じることもなく、キャンバスを手にとると、三日に向かって差し出した。

「迷子の亀を探しているの？ これのこと？」

「あ」と、奏が声をもらした。

目を丸くする奏の顔を、三日は不思議に思つてのぞきこんだ。

「三鷹くん、どうかしたの」

「は。だってまさか、本当に亀が。うそだろ」

「亀？」

奏が凝視するのは、昨日見たのと同じ、南国を彷彿とさせる色鮮やかな海の絵だった。

当然、そこに亀など存在してはいない。

いぶかしく思う三日に気づいたのか、奏は低くつぶやいた。

「望月さん、眼鏡」

「ああ、そっか」

言われて三日は眼鏡をはずした。

とたんに、キャンバスの中で海がたゆたう。

（わあ）

きらきらと光る海の中で、亀が一匹心地良さそうに泳いでいた。

（きれい）

うっとり目を細める三日に、涼一が微笑む。

「気に入った？」

「ええ。驚いた。本当に生きて動いているのね」

「きみにあげるよ」

おどろいて、三日は顔をあげた。

「亀を探していたのでしょうか。三日さんが必要としているなら、どうぞ持っていて。海に返してもいいし、このままどこかに閉じ込めてしまってもいいんだよ」

穏やかに語る涼一に、奏もあつけにとられているようだ。

「えらくトントン拍子にカタがつくな」

そう口からこぼれるのが聞こえた。

三日は手渡された絵を受けとって、すすいと水をわたる亀を見つめた。

「せっかく描いたものを、本当にいただいていいの？」

涼一の絵にはどんな魔力が込められているというのだろうか。

体の芯から惹きつけられる絵だと昨日も思った。そして今、キャンバス越しに海中を眺めていると、この中に吸い込まれてしまいたいという欲求さえいだくのだ。

三日は感嘆の息をついた。

（ああ。――泳ぎたい）

けして泳げるようにはならないといわれている三日の、湧き上がる思いが胸をしめつける。

しかしこうして泳ぐ亀を見ると、水をかきわけて巡るのはさぞ

かし気持ちがよいのだろうと思えるのだ。

「いいなあ」

思わずそう吐露していた。

涼一が、切なげに眉根を寄せる。

「さあ、持ってお行き。きみの願いならなんでも叶えてあげたいけれど、あいにくそうもいかないからね。これくらいならお安い御用だよ」

「ありがとう」

素直にそう礼をいえた。

「また、これからも絵を見せてくれる？」

「もちろん。いつでもおいで」

涼一はきれいに笑う。

不思議な人だと、あらためて思う。

涼一と三日が穏やかな表情で見つめあっていると、奏が「えー」と、口をはさんだ。

「すまないが、ちょっといいか」

「ああ、きみ。何」

ずっと冷めた顔をして、涼一が奏を見やった。

「ありがとう。いちおう、オレからも礼を言っておくのと、あと、ききたいんだど、この亀を海に返す方法を知ったら教えてくれなかな」

「ああ。そんなこと」

涼一は一転して淡々とした口調でこたえた。

「その亀は僕の描いた絵に迷い込んできただけなんだ。だから海にキャンバスごと放り込んでやればいい。きっと自分のいるべき海域に戻っていくよ」

「そうか」

「……でもそれじゃあ、せっかくの絵がだめになっちゃうんじゃないか、もったいないと、思うのだ。」

「だけど涼一はまったく頓着していない素振りで手を振った。」

「かまわないよ。手慰みに描いていただけだし、海の絵なら何度でも描く。三日さんも、また見に来てくれるんでしょ」

「うん」

「今度はちゃんと、きみの手元に残るような絵をプレゼントするよ」それは非常に魅力的な申し出だった。

胸元にキャンバスをぎゅっと抱きしめ、感謝の気持ちを涼一に告げた。

第九話

キャンバスをビニールの袋で包んで、三日と奏はふもとの駅で、皐月と柾木の両名と落ち合った。

そこから電車で、海岸へと向かう。

ごつごつとした岩場の先に、荒れた海が広がる。

三日は眼鏡をかけていなかった。

高層ビル並に高く、黒い人影がそびえている。

——時刻は七時をまわり、晴れていたならば、そろそろ夕日が背後の山あい沈む頃合いだろう。

空を覆う厚い雲と、街を覆う深い海。なによりも異彩を放つ海のあやかしが、女官が恋しい一心でとうとうここまでやって来たのだ。

海坊主を間近に見たのは、はじめてだ。

たしかに生きていると感じるのに、塗り込められたような黒い巨体で、かがんで水底をさらったかと思うと、ざぶんと立ち上がり、空に向かって吠えもする。

雨は小降りになっていた。

傘をさすことを嫌う三日はとうにしとどに濡れていたから、いまさらどうでも構わなかった。

あまりの巨体に危険だというので、奏と柾木にはいくぶん距離を置いて後方に待機してもらっている。

二人はしぶったが、三日と皐月だけならば、たとえば海坊主が襲いかかってきてもどうにかなるのだ。

三日に寄り添う形で、皐月が立っている。

「しかし大きくなったもんだな」

まったく、見上げるだけで首が痛くなりそうだ。

あまり暗くなる前に帰宅したい三日は、手短に用件を済ませようと、ビニールから涼一の絵画を取り出した。

絵をかかげ、ろうろうと声をあげる。

「見ろ。海坊主。そなたの探す御使いはここにあるぞ！」

日頃三日が紡ぐ声とは異なる、大気をふるわせる、低いうなりにも似た声だった。

その声を聞きつけたのかどうか。海坊主の視線がおもむろに突き刺さるのを三日は感じた。

「受けとるがいい。そして、そなたの望む海の底へと旅に出ろ」

そう告げて、海へと絵画を投げ込もうとしたときだった。

思いも寄らぬ敏捷さで、海坊主がぬつとその太い腕を突き出した。

三日の動きが一瞬とまった。

――捕まる。

とっさに身構えた三日の体を、背後から皐月が抱え上げた。

（わ、飛ぶ）

そう感じるやいないや、三日は思いきりキャンバスを海の向こうへ放り投げた。

直前まで二人の立っていた地点を、海坊主の腕がかすめていく。

皐月は恐るべき身体能力を発揮して、三日を抱え、高く、高く跳躍していた。

空を舞う絵画を求めて、海坊主の手が伸びる。

遙か後方に皐月が着地するころ、青いキャンバスが黒い影に捕らわれるのを確かに見た。

「……焦った」

皐月がうなだれる。

両の腕からおろしてもらい、三日はあやまった。

「ごめん。私もびっくりした」

皐月が鼻で笑う。

「でかい図体してたら、動作も鈍いって思うよな。まったく」

「ありがとう。たすかったよ」

皐月がいなければ、危なかった。

泳ぐことのできない身ならば、海に引きずりこまれることは避けなければならぬ。

皐月が三日の頭に手を伸ばす。

「気をつけろよ」

海坊主の両手が、大切そうにキャンバスをつつみ、やがて真っ黒な全身がずぶずぶと海中に没していくのが見えた。

亀がキャンバスから無事に海へと戻ることができただろうか。

海坊主は念願叶って、女官に会いにいけるのだろうか。

——この先は、三日にはかわりのないことだった。

（さてと、帰ろうか）

頭を切り替えて、皐月に帰宅を促そうとしたときのことだ。

ほっと息をつく二人に、「おい」と、声がかけられた。

「……わすれてた」

皐月が苦々しげな声をもらす。

駆け寄ってくるのは、もちろん奏と柁木の両名だ。

二人は目を見交わした。皐月ははっきりとした困り顔だ。

三日もとつさに、先ほどの彼の身のこなしは何事だと問いつめられることを覚悟したが、――彼らはそのようなことを口にしたりはしなかった。

「二階堂くん、かつこいい！」

なぜか妙に興奮した口調で、柗木が皐月にくいついた。

「は？」

「何てすばらしい脚力！ 幻想的な背景とあいまって、映画みたいだったよ。いいなあ、かつこいいなあ……！」

あっけにとられる皐月に対し、テンションを上げた柗木は、両手をもみしぼり叫んだ。

「二階堂くんは肉体派だったんだね、見直したよ。ファンになりそうだ！」

焦る皐月と追いつがる柗木をぽかんと眺めていると、こちらはまったく動じていそうにない奏が声をかけてきた。

「望月さん、ケガは」

「私は平気」

「そう、よかったね」

わざとらしいまでにいつもどおりの態度をとる奏に、内心あきれる。

（この人って、本当に他人に興味がないよね）

彼は独特の距離の置きかたを思う。

それを如才ないととるか冷淡をとるか人は人によるだろうが、あの学校で三年間を無事に過ごそうとするなら、そのくらいでちょうどいいのかもしれない。

「用はもうすんだんだよね。どうする、望月さんはもう帰る？」

「ええ、そうね。残る理由もないし、まっすぐ帰ることにする」

「送っていったほうがいいのかな」

思わぬ氣遣いに、両手をふった。

「ううん。皐月が同じマンションだから大丈夫」

「そう」

脇では、柁木が皐月に、自分のことも抱えてジャンプを試みてほしいと言いつがつている。

幾分情けない顔になってきている皐月に、笑いがもれた。

「朔。オレもう帰るぞ」

奏はそう声をかけて、「じゃあな」と皆に手をふると、とつとときびすを返して歩き出した。

「え、奏、待ってよ。まだいいじゃない」

「いや、そうだな。柁木、オレも帰るよ。三日、行こう」
安堵の色のにじむ声で、皐月も言う。

「ええ、二階堂くんまで？ ゆっくり話がしたかったのに」

「無茶言うなよ。雨にも濡れたし、帰って風呂に入りたいんだ」
氣づけば雨はやんでいた。

皐月が三日の手をとり、歩き出す。

柁木も、皐月をはさんで三日の反対側に並んだ。

一歩先を行く奏の背中を追いかける。

おかしな顔ぶれで、おかしなところにいるものだ。

ため息まじりに柁木が言った。

「あーあ、僕も万理万里に行っておけばよかったかなあ」
(ヘンなひと)

そう思った。

駅で奏と柁木の二名と別れて電車に乗り、自宅に向かって歩いているときのことだった。

「晴れるな」

皐月が空を見上げてつぶやいた。

雲がずいぶんと薄くなっている。

海坊主が手を引いたせいか、街を覆う水もぐんと水位を下げていた。

（雨上がりの匂いがする）

明日には、街並みもあるべき姿を取り戻すだろうか。

雲間から、月明かりがもれていた。

「急ごう」

皐月が足を速める。

自宅のマンションは既に視界にはいっていた。

そうして二人はほどなくして、エントランス前に佇む少女に気がついた。

「八又さん」

三日が驚きの声をもらす。

傘とカバンをたずさえて人待ち顔で立っているのは、同学年の八又さやかだ。

さやかはこちらに気がつくど、けわしく顔をしかめて、前に出た。

「八又さん、どうしたの」

そう問いかける三日を無視して、さやかは語気荒く言い放った。

「どうして。いつも望月さんだけ特別扱い！」

（え？）

さやかの視線がまっすぐ皐月に向かっているのに、疑問を抱く。

「こういうことをされると困るんだよなあ」

声のトーンこそ落ち着いていたものの、不快の念をにじませて皐月は言った。

「前にも言ったけれど、君とは付き合えない。ほかに気になる人がいるからね」

「それが望月さんってわけ」

皐月が首をふる。

「違うよ。三日は関係ない」

「ああ」

三日の口から、間の抜けた声がもれた。

こういった光景には見覚えがある。

「恋のさやあて？」

皐月が苦笑をもらし、頭を小突く。

「何言ってるの」

きつく噛みしめるさやかのくちびるがぴくりとふるえた。

「仲が いい のね」

皐月の目つきが厳しくなる。

「三日は妹のようなものだから」

それを聞いて、さやかは笑った。

「いいのよ、二階堂くんが誰と仲良くしようとかまわないの。あたしを選んでくれなくてもいいのよ」

言いつのるさやかに、場の緊張感が増した。

「あたしを、好きになってくれればそれでいいの」

（何を）

さやかは、縁石に荷物を置くと、制服のポケットから小瓶を取り出

した。

遮光性のある、茶色の瓶だ。
見つめる先で、きゅっとコルクの栓が抜かれる。

「二階堂くん」

さやかが一步、前に出る。

皐月は渋面をつくり、彼女を睨みつけた。

「それ、ずいぶんと嫌な匂いがするね。一応きくけど、どうするのかな」

さやかのくちびるが、弧を描く。

「恋におちるの。幸せになるのよ」

彼女が瓶を持つ手を振りかぶるのを見て、三日はとっさに皐月を肩で押し出した。

「三日！」

中の液体を撒き散らし、飛んでくる瓶を、両手でしっかりとキャッチする。

透明な液体で手が濡れて、刺激臭が鼻をついた。

息をのんで立ちすくむさやかに歩みより、三日は瓶を放ると、べつとりと手に付着した液体を、彼女の頬になすりつけた。

「これが何かは知らないけれど、ひとに害をなすようなマネは感心できない。ねえ、――皐月を傷つけたら、許さないよ」

正面から至近距離で見つめると、彼女の瞳に動揺がはしる。

「あたし……」

「八又さん、約束して。皐月に手は出さないで。私……、あまり人間を嫌いになりたくないのよ」

「望月さん」

うわずった声で、さやかが呼んだ。

「望月さん。望月 三日さん」

「どうしたの？」

うわごとのようにさやかが呼ぶ。

「ああ、どうしよう」

熱い息が顔にかかった。

「少し、様子が変わらないか」

後ろから皐月がのぞきこむ。

しかしさやかは、彼になど目もくれず、ひとと三日を見据えて告げた。

「こんなのってどうしよう。あたし、はじめてなの」

「八又さん」

「望月さん。……あたし、あなたが好き。すごくすごく好きみたい」

熱っぽい眼差しで見つめられて、三日は後ずさった。

「何言って……」

両の頬を包んでいた手を離そうとすると、ぱっと彼女の両手に手首をつかまれる。

「ねえ、望月さん。あたし本気なの。こんな気持ちははじめてよ。

あなたが好きなの」

三日がぱくぱくと口を開け閉めする。

（なんなの！）

まったく現状が理解できない。

さやかは、ただならぬ様子で三日にせまった。

「おねがい、あたしと付き合って。一緒に幸せになりましょう」

「え、いや、無理……だよね」

（そもそもこの人、私のこと嫌っていたよね）
冷や汗をかく三日に、皐月が瓶を持ち上げて言った。

「これのせいじゃないのか。情動を煽る成分でも入ってたんだろう」
「なるほど」

よくわからないけど、わかった。

「わかったから落ち着いて。少し頭を冷やしたほうがいいよ」

「胸が苦しいの」

「お水でも飲む？」

いやいやとさやかはかぶりを振った。

「そんなのいらない。――望月さんが欲しい」

ぞわっと背すじがあわだった。

救いを求めて皐月を見やると、彼はこちらの具合などそっちのけで、
ひたと上空に目を向けていた。

「あ」と、その口から音がもれる。

幾日ぶりだろうか。雲が切れて、月がさした。まるで黄色い満月だ。

月はゆっくりとその姿をあらわし、やわらかな月光があたりを包みはじめる。

「――やばい」

皐月がうなった。文字通りのうなり声だ。

「八又さん、今日のところは帰って」

三日は表情をひきしめ、さやかの手を振り払った。

時間がなかった。さやかの視線を遮ろうと、彼女に背を向けて、皐月の腕をさする。

「臯月、中に入ろう」

明るい色の臯月の髪が、月光に映える。

青灰色の瞳が光を放ち、三日をつらぬいた。

手のひらに伝わるさつきの肌が、質感を変える。

「だめだ間に合わない」

臯月はさつとあたりに視線を走らせると、強引に三日を抱え上げ、
こう言い捨てた。

「飛ぶぞ」

「望月さん！」と、さやかが呼び止めるのを聞いた。

体の下で、臯月の筋肉がぐんと跳ねる。

三日は、空を舞っていた。

さきほどよりも、高く上へ――。

ぬるい夜風が髪をあおる。

臯月の髪も伸びていた。

金のたてがみのような、しなやかな髪だ。

三日を抱えて、臯月はマンションの外壁を蹴り、片手で四階の棧に
ぶらさがると、三階に位置する三日の部屋の窓を行儀悪くつま先で
開けて、部屋の中に飛び込んだ。
外から、さやかの呼ぶ声がする。

臯月は三日を降ろすと、後ろ手に窓を閉め、カーテンをひいた。

「三日、また窓の鍵を閉め忘れていたろう」
そんな小言は忘れない。

いまやはっきりと、臯月の外見は変化をとげていた。

髪は肩につくほどに伸び、耳はひとまわり大きくなった。

手足の爪は硬度を増し、なによりも全身の皮膚がなめし皮のような

触感の、白く短い毛に覆われている。

皐月の、半狼としての姿だ。

満月の光を浴びると、体毛が伸びて、身体能力が増す。

しかし彼は、人型をそこなうことはない。

皐月は、獣人と人間とのハーフだ。

日本人の父親は人間だが、フランス人の母親はれっきとした狼女である。

おそらく、今も気高く美しい金の毛並みの狼と化して、お山を駆け回っていることだろう。

窓を閉め切ってしまうと、さやかな声はもう耳に届かない。

皐月の変化をどこまで目撃されたのか。また、彼女の急激な態度の変化は何だったのかと、気になる点は多々あったけれど、起こってしまったことを気にやんでもしかたがない。

「三日、ごはんにしよう。カレーが食べたい」

外での騒動などもうすっかり頭にない様子で、靴を脱ぎながら皐月が言う。

「ああでも、三日は先に風呂に入っておいで。さっきの匂いがこびりついてる。鼻が曲がりそうだ」

顔をしかめて頭をふる仕草も、今夜はやけに獣じみている。

「わかった。そうする」

三日も頭を切り替えて、一旦外のわずらわしい出来事をすべて忘れることにした。

——満月の夜は長い。

幼い頃から、この日ばかりは、二人で静かに過ごすならわしになっている。

夜更けには、皐月のはやる血をなだめ、そっと背中 of 毛づくろいを

する。

そんな時間は、三日の心もなぐさめる。

二人はずっと、持ちつ持たれつでやってきた。

外見も血統も大きく隔たっているのに、双子のようだと時折思う。

三日はキッチンに向かうと、作り置き of 鍋を火にかけた。

満月の夜はカレー。そんなきまりがいつからかある。

「シャワー浴びてくるから、これ混ぜておいて」

さやかはまだ、エントランスの前で三階の窓を見上げているのだろうか。

そんな考えが一瞬よぎったが、すぐに頭から振り払った。

今夜は満月。

人間の都合など、月の光にかすんで消えてしまうだろう。

聖なる夜。魔物の夜だ。

三日は浴室の窓を開けると、夜の大気を吸い込んだ。

第一話

万理万里学園ではこの日、恋愛にのめりこむ生徒が大量に発生した。
(どうしたんだろう。皆、頭が沸いてるみたい)

朝からそこで発生する騒動に、めまいがしそうだ。

三日はべつに、思春期の恋愛を否定するつもりはまったくない。
自分に関係のあることがらだとは思えないので、たいして興味がな
いだけだ。

それでも、今日の学園内の雰囲気は明らかにおかしかった。

大多数の生徒が、精神の均衡を欠いているように思える。

今も、休み時間に教室を出ると、廊下のあちらこちらで頭をのぼせ
上がらせた人々が、寄り添って恋情をつらつらと語り合っている。
かたく指先をからませて見つめあう男女もいれば、片思いの相手を
戸口から凝視する女生徒もいる。

渡したラブレターの行く末を声高に話す集団もあれば、放課後に意
中の彼女を誘うのだと息巻く男子生徒もいるといったぐあいに、非
常に居心地の悪い空気ができあがっていた。

移動教室へと向かうみちすがら、わっと盛り上がる集団が通路の端
にあった。

男子生徒がむらがる中に、あでやかな女子生徒がひとり歩いている。
なにごとかと目を向けると、隣りを歩いていた千佳が耳打ちをした。

「生徒会の音無先輩だよ。音無 百々さん。これまた派手だね、お
みそれしちゃう」

遠目にもわかるメリハリのある肢体に、ウェーブがかかった茶色の
髪が華やかな、ちよつと見た感じだとても高校生とは思えない豪

華な美女だ。

きゅっと上がった口角が、意志の強さをあらわしている。

「あ、原田くん」

百々を囲む人々の中に、家庭科部の仲間が混じっているのを見つける。

千佳がけられらと笑い声をあげた。

「原田くん、音無さんの熱心なファンだっていうもんね」

実際あのように群がって、何を盛り上がるのか見当もつかないが、今日にかぎっていえば、似たような光景を何度も目の当たりにしていた。

堂々と好意を表にあらわす人もいれば、内面で情熱をたぎらせて瞳を燃え上がらせる人もいる。

表現方法は様々だが、一様に、恋愛面への興味が突出しているらしい。

なんとも朝からにぎやかだ。

「こんにちは、望月さん。どこに行くの？」

そんななか、別のクラスの女子が三日に声をかけてきた。八又さやかだ。

はずむ声音に明るい表情で、全身で三日に会えたよろこびを表現している。

彼女の態度が急変した夜から、既に二週間が経過しているが、いまなお彼女から寄せられる過剰な好意に変化はないようだ。

どうやら原因は彼女が所有していた惚れ薬にあるようなのだが、まったくもってたいした威力である。

次が移動教室なのだと答えると、彼女は身をよじってなげいた。

「あたしも一組だったらよかったのになあ」

正直なところそれは遠慮したい三日なのだが、横目で見たところ、千佳も同じ気持ちであつたらしい。

口をひん曲げて、露骨に視線をそらしている。

毎日のようにこんな場面にでくわしていたら、それは嫌にもなるだろう。

最初のうちこそ、やいのやいのとさやかと言ひ合いをしていた千佳も、今週にはいつてからはさじを投げたのか、見て見ぬふりを決めこむようになってしまった。

「でも今日は補習があるね、水曜日だもん。一緒に授業うけるのたのしみだな」

「……そうね」

何に対してのあいづちなのか自分でもよくわからないまま、肯定する。

「ねえ望月さん。今日のお昼はふたりきりでとりたいな」

ぐっと身をよせたさやかが、三日の手をにぎろうとする。

とっさに手をひいた三日は、しかしすぐに避けたのはやりすぎだったろうかと考えて、わたわたと所在なさげに両手を動かした。

気を悪くしたそぶりもみせずに、「へんな望月さん」と、ひとしきり笑ったさやは、何に思い当たったのか、ふいに真面目な表情をして三日の顔をのぞきこんだ。

「望月さん、もしかして、……あなたアレが効いてないのかしら」

「あれ？」

突然どうしたというのだろう。さやは重ねて三日に問いかけた。

「今日はいつもよりもドキドキしたり、妙に気になる人がいたりしない？」

「さあ、特にないようだけれど」

「人恋しい気分になったりとか」

「いえ」

「じゃあ思いきって、人肌が恋しくなったりとか？」

「いいえ」

「夏休みを一緒に過ごす恋人がほしくなったりとか」

「ないわね」

「やっぱり……」と、うめくと、さやかはうなだれた。

「効いてないんだ」

そこでようやく三日もきいてみた。

「何が効いていないというの？」

形ばかりの乾いた笑い声をもらし、さやかは語った。

「恋愛脳になる薬よ」

「何それ」

さすがに聞き捨てならなかったのか、千佳が会話にくわわった。

「今朝、化学室から拝借してきて、学校中にばらまいたの」

「はあ？ 何を？」

身をのりだす千佳に、さやかは冷ややかな目を向けた。

「うるさいわね。今、望月さんと話しているのよ。入ってこないで」

「なんですって。あんたいつもいつも、本当に態度が悪いよね」

かみつく千佳は無視をして、さやかは三日の腕に手をかけた。

そのまま半袖のブラウスからのびる素肌をなでさすりながら、困惑した様子で顔をゆがめる。

「それもこれも、すべては望月さんに恋のすばらしさを理解してもらおうとすることだったのに。肝心の人に効果がないんじゃない、完璧に無駄足だわ」

ずいぶんな告白をきいた気がする。

「もしかして」

三日はおそろおそろたずねてみた。

「今朝から学校の様子がおかしいのって……」

「薬のせいでしょうね。バカみたい。皆で浮き足だっちゃって」

「ちょっとあんた、なんてことしてくれるのよ！」

つかみかかる千佳に、さやかは倍の勢いでわめきかえした。

「文句を言いたいのはこっちよ！ 情報料もふくめてけっこう苦労したっていうのに、ひどいじゃないの」

「知らないよそんなの。文句があるならミカに言いなよ」

するとさやかは、頬を染めてはにかんだ。

「そんな……。望月さんに文句なんて言えるわけじゃないじゃない」
そう言って、三日の腕をそうっと優しくつねってみせる。

（うわあ）

いたたまれない心地になって、三日は視線をさまよわせた。

（なんだろう。なんだろう、これ）

ひとつわかったことがある。

恋愛感情なんていうものは、けして素晴らしいものではなく、ただひたすらにやっかいなものなのだということだ。

「それにしても、どうして望月さんには効かないの？」

「個人差、……というよりも、体質のせいね。きっと」

「前にあたしが惚れ薬を持ち出したときも、そういえば望月さん、平然としてた。おかしくない？」

「薬は効かない体質なんだよ」

「だってでも、あの夜は原液を浴びたのに。あの状況だったら、望月さんもあたしのこと好きになっていないといけないと思うの」

不信をつのらせて、さやかが詰め寄る。

「化学の先生、言ってたもの。一人の人の心を手に入れる協力な惚れ薬だって。それを素手でつかんでおいて、平気なはずない」

「ええっと、そうだなあ。だったら、その一人の人っていうのが八又さんだったんじゃない？ 先に八又さんに効いてしまったから、その時点で効能が失せたんだよ」

「先に薬に触れたのは、望月さんだったわ」

「うーんとほら、私は手のひらだったけど、八又さんは頬だったじゃない。顔に近いほうが素早く浸透したのかも」

「……それ、本気で言ってるの」

じと目で見られて、三日はごまかし笑いをした。

「だったらいいかなあ、って」

「まったく。望月さんったら」

口をとがらせて、さやかは言った。

「まあ、そんなところもかわいいんだけどね」

思わず咳き込みそうになってしまった三日に背を向けて、さやかは手をふった。

「しょうがないから、また別の手を考えるわ。じゃあね」

嵐が去るかのごとく、きびきびとした動作で遠ざかる背中を見て、息をついた。

「ちょっともう、尋常じゃないわね」

うんざりしている気持ちを隠そうともせずに、千佳がぼやく。

「あの惚れ薬を用意したのって、化学の先生だったんだ。そういえば、学校にキノコが蔓延したときも、化学室にキノコを持っていたって調査してもらったことを言ってたものね。ああまで効き目があるなんて、すごいなあ」

「ミカったら、そこに感心しちゃうの？」

「うん、いまさらながら、それなら必死になってキノコを集める人たちがいたのにもうなずけるかなって」

「あら、なあに」

面白そうに目を輝かせて、千佳がきいた。

「ほしいものなんてないようなことを言っていたのに、叶えたい夢でもできたの？」

三日はゆるくかぶりをふった。

「ううん、そういうわけじゃないの。あれ？　でも、そういえば」

「うん？」

「八又さん、今日撒いた薬も化学室から持ち出したものだって言っただね。私だけじゃなくて、千佳もいつもと変わらないように見えるけど、大丈夫なの？」

「ああ、そんなこと」と、千佳は胸をはってうけおった。

「だってそれって、恋愛方面に頭が अच्छا 薬なんですよ」

「らしいね」

「それなら平気よ。あたしいつだって恋愛脳だもの」

——女はたくましいと、そう実感させる一言だった。

三鷹 奏は、恋愛にうつつをぬかしている女が嫌いだ。

その奏からすると、今日の学校はまさに魔窟だ。

昼休みには、なかば本気で早退しようかと考えたほどである。

（なんの悪夢だよ、これ）

生徒会室のドアを開けた奏は、そこで足がすくんで動けなくなった。扉の向こうは、めくるめくハーレムと化していたのだ。

立ちすくむ奏に、奥の座席で書きものをしていた秋が声をかける。

「おや、自分から出向いてくるなんて珍しいね。どうしたのさ」

ペンをはしらせる秋を取り囲み、女子生徒が一、二、三、……七人はべっている。

（一週間分か）

頭にわいた即物的な思考を慌てて振り払う。

言葉もない奏に、秋がいぶかしげに問いかける。

「奏？ 入ったらどう？」

「いや、オレ……」

「用があつたんでしょ」

それはそうなのだが、さして広いとも言い難い室内に、既に八人も的人物がいるのだ。

（しかも全員三年生。しかも全てがこの男目当てって、本気かよ。

趣味悪いなオイ）

秋の良いところはどこだろうかと考える。

（エロい顔、と……Sっ気のあるところか？ でもそれって美点じゃないだろ）

頭を悩ませる奏に、男運の悪そうな悩める子羊の一人が微笑みかけた。

いや、年のわりによく熟れた肉感的な肢体の持ち主なので、子羊という言葉はそぐわないのだが、それはともかく。

「かわいいわ。一年生？」

「ぎくしゃくしちゃって、照れてるんじゃない？」

「いらっしゃいよ。お茶をいれるところなの。ご一緒しましょう」

子羊たちが口々に奏を誘う。

彼女たちは一様に、新しいおもちゃを見つけたときのような目つきをしていた。

「あの、いえ。十夜さんは？」

秋は、困っているようにも楽しんでいるようにもとれる表情で、簡潔にこたえた。

「逃げた」

「ああ。なるほど」

それは十夜にも、この空間は居心地が悪いだろう。

このようないかがわしい場にいたくはないだろうし、もしかすると一箇所にとどまることで、秋のように異性に囲まれるというリスクをおかしたくなかったのかもしれない。

部屋に詰める彼女たちのかもしだす雰囲気も体つきもたいへんに悩ましげなのだが、秋はいたって普通の態度で次々と書類に記入をしている。

「はい、次これね」

それどころか、集まった子羊たちにも適当に仕事を割り振っている様子なのが、この男らしいといえれば非常にらしい。

「忙しいようなので、オレ帰ります。十夜さんに借りてた本があったんだけど、また今度にするから」

「渡しておこうか？」

奏は首をふった。

「ううん、大丈夫」

「そう」

子羊の一人が、プリントアウトした用紙の束を秋に手渡す。

「ありがとうね」

秋が相手の目をじっと見つめて微笑むと、彼女はぱっと頬を染めた。

(……バカらし)

片や愛想をふりまき、片や労働力を提供している。

彼女たちの寄せる好意をさばききれる度量は素直にすごいと思う。

(そもそもこの場で平然と座っていられる時点で、普通じゃないよな)

奏には無理だ。部屋の有様を目にただけで腰がひけている。

「おじやました」

結局一步も生徒会室に入ることなく、扉を閉めた。

第一話（後書き）

お久しぶりです。再開します。

今後、週に2回ペースで更新していけたらいいなと思っています。

あと、今まで掲載していた分に、改行を追加しておきました。
見づらくてすみません。ほんとに。

第二話

次に奏が向かったのは、化学準備室だ。

化学室には幾度か足を踏み入れたことがあるものの、準備室に来るのははじめてだった。

今回は、化学教師の金森に呼び出されての訪問である。

「失礼します」

奏が訪れると、金森は対面側のソファをすすめて、ローテーブルの上に小さな香水の瓶を載せた。

「ではさっそく。これが約束の品よ、あなたにあげるわ」

「これは？」

華奢なピンクの瓶だった。キャップが金のハート型になっている。

金森は意気揚々と、胸をはってこたえた。

「こちらは幻の入れ食い装置になります」

「何です」

「要するに、これを使うとモテるのよ。麻酔機能付きのチャームコフレね」

「ええとつまり、雑誌の広告なんかでよく見る、フェロモンがどうとかいうやつですか」

「そうそう」

金森は手を打って喜んだ。

「察しがいいわね、三鷹くん。使い方は簡単。これを自分にシュッと一吹きすると、灯りに群がる蛾のように、女の子が寄ってくるって寸法よ」

奏はがくりと肩をおとした。

（いらねえ）

人魚という手がかりを示してくれた金森が自分のために調合してくれる薬ときいて、多少なりとも期待をしていた。

（鎮静剤が欲しいって言ったよな、オレ）

それがどう化けたら、こんな正反対の意味あいをもつ香水となるのか。

（それか、もしかしたら人魚を探すうえで役に立つものでもくれるのかと思っただけだな）

そうは問屋がおろさない、というやつか。世の中甘くはないらしい。うなだれる奏を歯牙にもかけず、金森は自信たっぷりに説明を続ける。

「それだけじゃないのよ。香りで異性の気をひいておいて、気に入った子がいたら、このハートに内臓されてる針でちくんと刺すの」なるほど、たしかにキャップ部分のハートをねじって開くと、中には針が仕込まれている。

「ここにね、しびれ薬がしみこんでいるから、そうしたらもう後はお好きにってことよ」

わめきだしたい衝動を押し殺し、奏はきいた。

「……先生は、オレを性犯罪者に仕立て上げるおつもりですか」相手が教師でなければ、「アホか!」と、怒鳴りつけているところだ。

（いや、実際アホだろ。何作ってんだよ、どうすんだよこれ）

女性受けしそうなかわいらしい小瓶も、こうなるとトラブルの種にしか見えやしない。

「危ないもん作るなよな」

ついそう小声でこぼしてしまう。

「もちろん、使う時と場所は選んでね」

軽いノリでウイंकがひとつ飛んでくる。

「使いませんよ」

「あらあ、どうして。便利じゃない」

「一体何が便利だっていうんです」

金森は小首をかしげて奏を見つめた。

「だって三鷹くん、体をもてあましているんでしょう。そもそも吸血鬼の呪いって、相手を自分の元から逃れられなくするためのものなのに、当人がいなくなっちゃうなんてひどい話よね」

「そう、なんですか」

初耳だった。

「あら、知らなかったの？ 欲求で相手を縛りつけるのよ。なのに三鷹くんは、空腹のまま飼い主に首輪の鎖をはずされちゃって困っているのよね。だったらよそでお腹を満たすしかないじゃない」
「なるほど」

この瓶を用意された理屈はわかった。

「ね、これがあれば発散する先には困らないわよ」

つまり、欲求を抑えこむのではなく、前向きに受け止めろと言いたいのだろうか。

（犯罪だけどな）

今の奏には不要の品だが、秋や十夜と出会う前なら、飛びついてい
たかもしれない。

金森は知らないだろうが、自身を縛るこの首輪に、鎖はもうつない
であるのだ。

二年前、呪いに苦しむ奏を見出し、救ってくれたのは秋だった。

秋はすぐさま彼の妹と、それから十夜に会わせてくれて、――呪いの大半は十夜が左手で吸引をしてくれた。

自身に食い込んでいる核の部分までは除去できなかったものの、それも秋の妹の巴が定期的にメンテナンスをほどこしてくれることにより、事なきを得ている。

奏がこうして日常をおくっていられるのは彼ら三人のおかげだし、呪いが身の内にある以上、彼らから離れることもまたできないのだった。

「念のためにききますが、オレが受けとらなかったとしたら、先生これをどうします」

「えー、そりゃあせっかく作ったんだもの、欲しいと言ってきた人にあげるわよ」

（やっぱり）

金森に人としての良心を期待しても無駄なのだろう。

こんなものを欲しがる人間にろくな奴はいなさそうだが、誰がどんな使い方をしようとも、きっと彼女は氣にとめない。

（しかたないな、もらっておくか）

そう心に決めたとき、金森はけろりとしてとんでもないことを言い出した。

「需要はあると思うのよ。なんせ原液を盗みにはいる人がいるくらいなもの」

「それはそう、――待ってください。なんですって」

「だからね、盗られたのよ。作りだめしといった香水部分の原液を」「いっす」

「んー、昨晚から今朝にかけてかしら」

さして問題を感じている様子もない彼女に、奏は目をむいた。

「ばっ……！ 何をのんきに構えてるんです。犯人は捕まったんで

すか」

「捕まえてどうするのよ」

「取り返すに決まってるじゃないですか！」

人を惑わす悪の実だ。犯人が誰であれ、ろくでもないことに使おうとするに決まっている。

気を揉む奏を尻目に、金森は「そうねえ」と、笑って手をふった。

「だったら手遅れだわ。もう使っちゃったみたいだもの」

「なん……っ」

口をついて出そうになった罵声をぐっところえた。

（おちつけ。怒鳴ったってしょうがないだろ）

意識して深呼吸をくりかえす。

「既に使われているというのは、確かなんですか」

「そりゃあねえ、午前中の様子を見ていれば、明らかじゃないの」

「それって」

「よっぽど薄めて学校中に散布したんじゃないかしら。あまり賢い使い方だとは思わないけど、でもそもそもわたし、使用法なんて説明してないものね。知らなくても無理ないわ」

「ちよっと、先生いいですか」

金森をさえぎり、頭の中を整理した。

「いろいろききたいことはあるけれど、とりあえずひとつ。今朝から皆が浮き足立っているのは、その薬のせいなんですね」

「たぶんね」

奏はうめいた。

「くっそ、どこのバカだよ。余計なことを」

愚痴をこぼす奏に、金森はさらりと告げる。

「一年の八又さんね」

「知ってて放置してるんですか！」

「あら、後でちゃんとお代は請求するわよ。色をつけてね」

「そういう問題ではありません」

とうとう奏は頭をかかえた。

「そうだ。それで、撒かれたという薬の効果を打ち消すには、どうしたらいいんですか」

しかし前向きに対処しようとする心意気は、どうやら伝わらなかったようだ。

金森の返答は、実に気のないものだった。

「ほっときなさいよ。明日には薄まって効果もきれるわ」

（このバカ女）

放課後に行われた補習授業は、いつになく気詰まりなものだった。自身にからみつく女子の視線もさることながら、事の元凶である八又 さやかが同じコマを受講しているというのが、奏の神経を逆なでした。

当のさやかはというと、同じクラスの望月 三日にべったりだ。

（よそでやれよ、鬱陶しいな）

三日が迷惑がっているのはわかるのだが、同情をいだけだけのゆとりもない。

補習が終わりしだい三日の席に駆け寄って、一緒に帰るだの帰らないだの言い合いをしているさやかには極力意識を向けられないように

して、手早く帰り支度をする。

無造作にペンケースを鞆に放りこんだとき、中で硬いものに当たるゴトリという音がして、のぞいてみると、金森にもらった小瓶が横倒しになっていた。

（ああ、そーいやさっき、鞆に突っ込んでおいたっけ）

中身がこぼれて香りが漏れていては事だと、手に取り無事を確認する。

フタがはずれかけていたので、きっちりと閉めなおす。

（どう処分したもんかな）

手にした誰かに悪用されるのを恐れて、良心の命ずるままに受けとってしまったけれど、これを使用するつもりは微塵もない。

金森は、「魔女の秘薬よ。大切に使いなさいね」と言っていたが、自然と扱いはぞんざいになる。

自宅で机の引き出しにしまいこまれるのがオチかな、と思っていると、帰り支度をおえた三日が話しかけてきた。

「きれいな瓶ね。難しい顔をして、どうかしたの？」

「あ、いや」

机の横で足をとめた三日の腕には、がっちりときゃかが巻きついて
いる。

つい眉をしかめてしまう奏に、さやかはからかいまじりの声をあげた。

「あらそれ、アトマイザーじゃない？　きっと彼女にでもあげるんだよ」

「アトマイザーって？」

たずねる三日に、さやかが嬉々として説明しようとするのがわかったが、これ以上彼女の声を聞きたくなくて、先んじてして口をひら

いた。

「携帯用の香水瓶のことだね。残念だけど、誰かにあげる当てはないんだ。オレもこれ、貰い物なんだよね」

「そうなんだ」

「ふうん、でもそれ、あきらかに女物だよね」
(うるさいな)

しつこく口をはさんでくるさやかに、苛立ちがつのる。

じろりと目を向けると、さやかも負けじと睨み返してくる。

「まさかこれ……。望月さんにあげるつもりじゃないでしょうね」

「急に何を言い出すんだ」

「貰い物だなんて嘘でしょう。これみよがしに見せつけて、望月さんの気を引こうとしたんじゃないの」

言いがかりとしか思えない発言に、奏の目がすわる。

「そんなわけないだろう」

「知ってるのよ。あなた、望月さんの隣りの席なのよね。毎日、横顔を眺めているだけじゃ満足でなくなったんだわ」

「わけのわからない邪推はやめてくれ。何かと思えば、やきもちかよ」

だんだん険悪になってくる空気に気づいたのか、とまどいがちに三日が話題をそらした。

「ええっと、たしかに千佳あたりが好みそうなデザインのようだけど、香りにも性別によって区分けがあるのかな」

「うん、そうそう。これなんかきつと、甘ったるい匂いがすると思うよ」

そう言ったかと思うと、さやかの手がすっとのびて、香水瓶をとりあげた。

「あ、待っ……！」

慌てて立ち上がる奏の目の前で、さやかがキャップをはずし、三日めがけて香水をふりかけた。

「どんな匂いかなー」

（この、バカ！）

「返せ」

さやかの手から小瓶を奪い返し、キャップを閉めて鞆の内ポケットに放り込む。

鼻腔に、甘酸っぱいさわやかな香りが届く。

奏は、ぼっと口もとを手でふさいで、三日を見た。

「望月さん……」

「三鷹くん、どうかしたの？」

（やばい）

「もしかして、使っちゃいけないものだったとか。ねえ八又さん、ひとのものを勝手に使っちゃいけないと思うの」

「えー、いいじゃない、それくらい」

（よくない。よくないぞ）

さっと周りに目を向けると、ちらちらとこちらに注意を向けている生徒が幾人もいる。

香水の有効範囲がどのくらいなのかはわからないが、嫌な予感がひしひしとする。

そうこうするうちにも、自分自身めまいにも似た感覚におそわれて、妙に三日のふるまいが気になりだしたものだから、奏はあせった。

「望月さん、ちょっと出よう」

「ええ、いいけど」

「ダメだよ！」

奏が三日の腕をつかもうと手をのぼしたところを、さやかが音をたてて払いのける。

「あんたには言っていない。いいから、はやく」

「ほら、やっぱり望月さんに気があるんじゃない。連れ出そうってそうはいかないわよ。望月さんはあたしと帰るんだから」
奏の口からこらえきれずに舌打ちがもれた。

「うるさいな。そんなの知るかよ」

「三鷹くん？」

三日の肌の白さに目をうばわれる。
自然と指で触れそうになっていることに気づいて手を引っ込め、一歩下がる。

（ああ、くそ）

魔女の実力を、身をもって実感などしたくはない。

「わかった。悪いことは言わないから、よく聞けよ。なるべく誰にも近づかないようにして、早く帰ったほうがいい。気をつけて、急いで」

「はあ、なにそれ」

さやかが冷ややかな目を向けてくる。

「急いで家に帰ればいいの？」

きよんとする三日に、言葉を継ぐ。

「そう。寄ってくる奴がいるかもしれないから、気をつけろよ」

「ええ。でも一体どうして」

三日が近寄るのを避けて、後ずさる。

「悪い。オレ、先に帰るから」

「あの……」

何かを言いつのろうとする三日に背をむけ、奏は教室を飛び出した。甘酸っぱい香りとともに、三日の表情や、声や、眼差しが頭に焼きつく。

（何だこれ）

足元がぐらつくような心地がして、自分が信じられなくなった。薬のもたらす影響が気にはなったが、自分を取り戻すことが先決だと、奏はその場を逃げ出した。

第三話

そそくさと奏が教室を出ていくと、三日の周囲には人垣ができた。顔見知りていどの男子生徒が口々に声をかけてきて、これは様子がおかしいとすぐに気づく。

「前から話をしてみたいと思っていたんだ」

「今日の宿題、一緒にやらない？」

「それよりさ、駅前においしいヨーグルトパフェを出す店があるんだ」

（はやく帰ったほうがいいって、まさかこれ？）
何が起こっているのかはわからないが、ここは素直に助言に従ったほうがよさそうだ。

「ごめんなさい。私もう帰らなくちゃ」

「だったら一緒に帰ろうよ」

「どこに住んでいるの？ 送っていくよ」

「いえ、でも……」

教室を出ようとしたところを詰め寄られて困惑する三日をかばい、ぬんとさやかが立ちふさがった。

「ちょっと！ 望月さん困ってるじゃない。何なのよあんたたち」

「一緒に帰ろうって誘ってるだけだろ」

「望月さんはあたしと帰るのよ」

「どうせ同じバスなんだし、皆で帰ろうか？」

「嫌よ、そんなのごめんだわ」

「俺、望月さんと二人がいいな……」

「あたしが！ 二人で帰るのよ！」

「決めるのは望月さんだろう」

「ねえ望月さん、こんなうるさい奴らほっといて、僕と帰ろうよ」

「ええっと、ごめんなさい。私やっぱり、一人で帰りたいなって……」

じりじりと廊下に向かって後ずさる三日の肩が、何かにぶつかった。

(わ)

それが人だと気づいて謝るよりも先に、聞き覚えのある声が頭上からふってくる。

「おいおい、ずいぶんな騒ぎじゃないか」

はっとして首をまわす。

「京堂さん」

体操服姿の、筋肉質な青年と目があつた。

「あれ、友哉って呼んでくれないんだ？」

おどけた表情をして、京堂は三日の耳元にくちびるを寄せた。

「困ってるの？ たすけてあげよつか」

そそぎこまれた提案は魅力的で、三日はかすかに顎をひく。

京堂は満足気に口元に笑みをはくと、おもむろに三日の肩を抱いて引き寄せた。

「悪いが彼女はもらっていくよ。個人的な話があるんだ」

ざわつく教室内から、さやかが一步前に出た。

「あなた誰よ。気安く望月さんに触らないで」

「二年五組、京堂 友哉。残念だったね、オレは触ってもいいんだよ」

楽しげに京堂の瞳がまたいた。

大きな手が三日の髪をなで、すくった毛束にくちびるがおちる。

「行こうか」

至近距離で見つめられて、かすかに頬がひきつった。

「そ、そうですね」

「望月さん！」

叫ぶさやかに、「じゃあね」と、京堂が手をふる。

肩を押されて歩き出しながら、首をひねって三日も声をかけた。

「ごめん、さよなら」

立ち去る背中にかけられたのは、極めて率直な罵声だった。

「この人さらい！ バカー！」

肩を抱かれたまま、足早に階段をのぼった。

「どこに向かってるんですか」

「職員室」

「下ですよ」

うながされるまま四階までのぼってきたが、職員室なら下の階だ。

「そうだけど、さっきの連中とはちあわせしたくないでしょう。少し遠回りをしよう」

なるほど、気をつかってくれているらしい。

京堂はそのまま屋上へとつづく階段をのぼり、たちはだかるドアの前で腰をおろした。

肩に腕が回されたままなので、三日も強制的に並んで座る。

「外は暑いからさ。少しだけ時間つぶして、人がはけたところに下におりよう」

「はい。あの、ありがとうございます」

「いえいえ」

「京堂さん、部活中なんですよ」

「そう。職員室に用があって抜けてきたただけだね」

「だったら、……私はもう一人で平気なので、戻っていいですよ？」
そう告げると、彼はおおげさなそぶりで天をあおいだ。

「オレにあのむさくるしい体育館に戻って？ そりゃないよ。せっかく抜け出してこれたっていうのにさ」

「むさくるしいんですか」

「かなりね」

放課後の体育館には足を運んだことがないけれど、京堂のセリフには真実味があった。

「部活、毎日あるんですか」

「あるよ。体操部は第二体育館でやってるんだ。そうだとお嬢ちゃん、もし帰りのバスの時間をずらしたいなら、見学してく？」

「お邪魔になりませんか」

「ならないよ。むしろ練習に熱がはいるんじゃないかな」

「そうですか。お気持ちはうれしいんですが、ええと、ちょっと気になるんですけど」

「何？」

「なぜ親切にしてくれるのでしょうか」

それと、なぜこんなにくつついているのでしょうか。

そう疑問に感じながらも、そういえば彼は初対面るときからべたべた触ってきていたっけと思いつめぐらせる。

「オレ、いつも親切だよ」

「いいえ、そんなことないですよね」

普段さして接点のある相手ではないけれど、善人でないことくらいは知っている。

「助かりましたし、ありがたいと思ってるんですけど、ちょっと意外で」

「ええ、お嬢ちゃん、オレのこと誤解してない？」

いかにも心外だというふうに、顔をしかめる。

「かわいい子が困っていたら助けるでしょ普通。しかも知らぬ相手でもないし」

「見返りなしに、ですか？」

「誰にも何も頼まれてないからね」

そう苦笑をもらして、頬を寄せてくる。

てっきり彼は打算で動く人物だと思っていたのに、――仕事からまなければ、言動が軽いだけの善良な高校生なのだろうか。

（よくわからないなあ）

手を差しのべてもらうだけの義理もなければ、こうして並んで話し込むような縁もないと思っていた。

単なる気まぐれなのかもしれないけれど、だからといって気を許している相手ではないはずだ。

「京堂さん」

「うん」

「重いです」

脱力した彼の頬が、頭にずしんとのっていた。

「お嬢ちゃん、オレ一人くらい持ち上げられるんじゃないの」

「だったら訂正します。重くはないけど、鬱陶しいです」

耳元で、笑いのもれる音がした。

「オレ、誰かにくつついてるの、けっこう好きなんだよね」

「それは私も嫌いじゃないですけど……。でも相手は選んでくださ
いよ」

「うーん」

気のない返事をした京堂が、上体をひねって三日の髪に顔をうずめ
た。

「……さっきから気になってたんだけどね」

「なんです」

「いい匂いがする」

「ああ。じつは先ほど、香水を吹きかけられまして」

「へえ。甘い匂いだ」

肩を抱く力が強くなる。

反対の手で頬を包まれて、上を向かされた。

「……近すぎませんか」

「そうだね」

なにやら思い悩むような真剣な眼差しで、京堂はつぶやいた。

「なぜだろう。気になるんだ」

指先が頬から顎の線をくだっていく。

いまにもくつつきそうだった距離が縮まり、京堂の顔が三日の首筋
にうずめられた。

「おいしそうな匂い。舐めていい？」

きくが早いか、彼の体温が伝わるのと同時に、あたたかな舌先が喉
をペロりと舐めあげた。

「うわ、ちょっと！」

あせった三日が、ぐっと拳をにぎりしめる。

「少しでも汗ばんでる。しっとりとした、いい肌だ」
耳の真下で、声がした。

(ぎゃあ)

三日は反射でその頭部にげんこつを落とそうとして、あやういところで思いとどまる。

(っと、いけない。だめ、だめだね。危ないなもう)

加減なしで殴っては、ケガをさせてしまうだろう。

「あれ？」

声をもらし、身じろぎした京堂のくちびるが、肌をかすめる。

三日はぐっと彼の体を押し返した。

「いい加減に離れてください」

押し戻されるままに体を離れた京堂は、目を見開いて三日を見つめた。

「……お嬢ちゃん、オレに何かした？」

「何かしたのは京堂さんですよ」

さすがに半眼になって、京堂をねめつける。

今頃になって、全身がたまらなくぞわぞわしてきた。

「私だって知ってます。許可なく触ったり舐めたりしたらいけないんですよ！」

腕でごしごし首をこする。

(ああもう、ああ、もう！)

妙に顔まで熱くなる。

(なんで舐めるの。動物なの?)

「一体なんだっていうんです」

人間に舐められるのは初めてだ。

（へんな感じ）

顔をしかめる三日に、京堂は「あれえ？」と、首をかしげる。

「そうだよね、おかしいな。なんでオレ、お嬢ちゃんにせまってるんだろ」

心底不思議そうにそんなことを言うものだから、三日は怒るべきなのか呆れるべきなのか、判断に迷った。

「私がいってるんですけどね」

「そうか。そうだね。いやごめん。つついね」

（つつい……？）

「ついの範疇を越えています」

「だよねえ」

京堂がかわいた笑いをもらす。

「しかしオレも、急に目が覚めたようだとしか……」

「目が覚めた、ですか」

「うん、まあね。こう、ふらーっと惑わされて、あれ？　みたいな」

三日のおもてがひきしまった。

「それって、もしかして本当に惑わされていたってことですか」

「うん？」

「さっきの教室で起こったのと同じ……？」

ふいに、やけに慌てていた奏のセリフがよみがえる。

（寄ってくる人間に気をつけろって言ってた）

ぎゅっとブラウスの胸元を握りしめる。

「香水のせいなのかしら」

こうなることを知っていたから、彼はああまで動揺していたのかもしれない。

この香りが人を惑わせる効果があるのだとしたら、京堂が目が覚めたというのも、当然の成り行きといえる。

「私の首を舐めたから、正気に返ったんですね」

鼻をくんくんさせていた京堂が、きょんととして三日を見た。

「舐めたらさめるのかい」

「ええ。たぶん、ですけど。どうやら私、ひとの気をひく効果がある香をまとっているようです。京堂さんも、その匂いにやられたんじゃないですか」

「へえ、でもおかしいね。匂いが消えたわけじゃないんだろう」
効果が急激に消え去ったのはなぜかと問われて、三日はこたえた。

「私が汗ばんでいたって言ってたじゃないですか。あまり大きな声で言えたことではないのだけど、私の体液には解毒作用がありますからね。そのせいじゃないですか」

「解毒作用ね。それはまた風変わりな体質だねえ。——お嬢ちゃん、何者だい」

三日はそっけなく返事をした。

「私は神社の娘ですよ」

「ふうん」

京堂はかるく頭を振ると、立ち上がった。

「じゃあオレ、また理性を失わないうちに退散しようかな」

「ええ。そうですね。そうしてください」

三日もつづいて腰をあげると、京堂がからかいまじりに手をのばした。

「とはいえ」

喉元にのびてきた指を避け、三日がぴよんと飛び跳ねる。

「なぜ逃げるの？」

「本能です」

「逃げなくてもいいのに」

性質の悪い笑顔をうかべて、京堂が一步詰め寄る。

「実はね、もったいなかったかなっていう気もしてるんだ」

「え？」

「さっきの。目が覚める必要はなかったよね。だって、本当においしそうだったんだ」

目を細める京堂に、三日はうんざりとして口をまげた。

「私も言いたいことがあります」

「どうぞ」

「あなた、わかりにくすぎるんですよ！ 正気を保っていても、失っていても、態度がちつとも変わらないじゃないですか。反省してください！」

ふいとそっぽを向くと、明るい笑い声が耳元ではぜた。

「ああ、オレ、裏表のない性格だからね」

「知りませんよ。裏表がないって、やっかいだっていうのと同義ですか」

ふいをついて伸びてきた長い指が、三日の頬をつついた。

「赤いよ」

「青いよりマシです」

言い捨てて、三日は階段を駆け下りた。

後ろから足音がつづき、背中に声がかけられる。

「いやほんと、キミっておもしろいね」

ますます顔がほてった気がして、三日はうなった。

第四話

京堂と職員室前で別れた三日は、さてこれからどうしようかと思案した。

最初は次のバスの時間まで図書館でも過ごそうかと思ったが、なるべく人のいそうな場所はさけたいものだ。

いつそ歩いて帰ろうかと、きびすをかえした先に、美術室の扉が開いているのが目についた。

（――ああ）

涼一のまとう清廉な空気が思いおこされる。

彼ならば、三日がどんな匂いをまもっていたところで物ともしないのではないだろうか。

そんな思いに突き動かされて、ふらふらと美術室へと足を向けた。

「こんにちは」

他に誰かいたなら、すぐに引き返そうと思っていた。

「やあ。三日さん」

しかし今日もここには涼一が一人きりで、キャンバスに向かって筆を持っていた。

ほっと息をつく三日に、涼一は慈悲深い笑みを向け、室内に招く。

「どうぞ、入って。来てくれてうれしいよ」

水晶にも似た透明なまなざしを向けて、彼は言う。

「おや。だけど奇妙な香りをまもっているね。どうしたんだい、それ」

「匂いますか」

放課後に香水を吹きかけられて以降、人が寄ってきて困っているの

だと説明する。

「ああ。魅惑の香だね。どうりで覚えのある香りだと思った」
「知っているの？」

「うん。化学の那由他先生が、見せてくれたことがあるから。しかしそれじゃあ災難だったね」

「涼一さんはなんともないの？ この香り」

「僕には効かない。君もそうでしょう？ 効果は人によるんだよ」
「ええ。そうね」

たしかに、人というよりも自然に近い雰囲気をもとうこの人が、香りに酔って我を見失いう姿など想像がつかなくて、素直に納得してしまう。

「よかった。安心しちゃった」

胸をなでおろすと、涼一も優しく笑みをもらす。

「ああ、でもこれって洗えば落ちるのかしら。すぐに効果がきれるといいのだけど」

「うん、洗い流すのが一番だろうけど、家に帰るまでが大変そうだね。帰りはバス？」

「バスと電車なの」

「人の多いところは避けたほうがいいかもね。タクシーを呼ぼうか？ ひとりだと心配だから、送っていくよ」

「ありがとう。ううん、でも平気。それなら走って帰ることにするから」

「走って？」

面白そうに、涼一が目丸くする。

「山育ちだから、足には自信があるの」

「ふうん、そう。ならいいけど。気をつけるんだよ」

心配だと言ったわりには止めるそぶりもみせず、涼一はうなずいた。

「なるべく人気のない道を通るといい」

「そうする。アドバイスをありがとう。……不思議ね、あなたと話している、とても落ち着くの」

「それはよかった。困ったときはいつでもおいで。逃げ場くらいにはなるだろうから」

涼一のもとを後にして、学校を出た三日は、山道を軽快に下っていた。
った。

舗装された道路には近寄らず、木立の間をくぐって、ぐんぐん行く。

土を踏み返す感触というのはいいものだ。

鳥や虫の気配を間近に感じ、気持ちも安らぐ。

だいぶ慣れたと思っていても、学校にいる間は気持ちが張っていたのだとわかる。

（もういっそ、毎日歩いて帰っちゃおうかな）

そんな気にもなる。

傾斜を下ったところで向きを変え、山沿いを進む。

前方には白睡山が佇む。

あの山のふもとで、三日は育った。

世間では禁山と恐れられる地も、三日にとってはなじみの場所だ。会ったことのない祖母が眠る山でもある。

山の威容を目にしてくつろいだ三日は、鼻歌まじりに駆けていった。

うつすらと心地よい汗をかき、帰宅した三日は、玄関先で皐月とはちあわせをした。

「おかえり。はいね」

声をかける三日に、会うなり皐月は盛大に顔をしかめる。

「なにその顔。どうかしたの」

「おまえこそ、なんだその匂い。ものすっげえ臭い」

「くさい？」

「すっごく。すっごく。うわ」

鼻をつまんで皐月が後ずさる。

「え、そんなに？」

思わず腕の匂いをかぐ三日に、皐月が呆れた目を向ける。

「よく平気だな。尋常じゃないぞ、それ。はやく風呂に入れ。制服も洗え」

「う、うん」

「オレ、今日はそっち行かないから。その変な匂いが抜けるまで、近寄るなよ！」

「……そこまでひどいかなあ」

「ああひどい。大惨事だとも」

皐月は三日の家の鍵を取り出して玄関を開けると、強引に室内に押し込めた。

「普通にわいた匂いじゃないだろそれ。洗ったあとで話は聞いてやるからさ、隅々まできれいに完璧に洗えよ」

「うん」

「あとで電話な」

うう、と、皐月がうめく。

「気持ち悪くなってきた。じゃあな。オレもシャワー浴びるわ」

よろめきながらドアを閉め、玄関の向こうで皐月が自宅に戻る音がした。

「くさい、かなあ」

いくぶん傷つき、バスルームに向かう。

効果は人によると涼一が言っていたけれど、それでいくと、嗅覚の優れた皐月には刺激が強かったのだろう。

（換気もしておこう）

はたして苦情は、奏とさやかのどちらに告げるべきなのかと考えながら、身を清めた。

夢の中で、奏は荒く息をついていた。

とある女の夢。いつもの夢だ。

公園の物陰で、学校の屋上で、あるいは自分の部屋のベッドの上で、――彼はひとりの女を殺す。

この日は柾木の道場の更衣室だった。

畳の上で女を組み敷き、脈打つのどに食らいつく。

犬歯はするどい牙となり、のどにあふれる液体が胸の奥を熱くさせる。

白かった女の肌も、ブラウスも、赤くて甘美な血潮に染まる。畳にはそぐわないブロンドの髪も、赤には映える。

「茜」

女の名を呼ぶ。

焦点の合わない緑の瞳がかすかに揺らぐ。

茜というのは仮の名だ。

夕焼け空の、濃い茜色が美しかったから、茜。

日本に來た折には名乗るのだと言っていた。

本名も、年齢も、国籍すらもはつきりしないこの女は、なにかもが曖昧だ。

「苦しいか」

狂気の宿る目で、女の腕に爪をたてる。

「楽にしてやろうか」

くつくつとのどをふるわせて笑う。

耳に、肩に、指先に、歯をたてては血をすすする。

奏を忌々しい眷属に引きずり込もうとしたのは、この女だ。

「あんたの血はうまいよ」

くり返し、夢の中で、願うのはいつも同じだ。

「オレの手で、呪われた血を根こそぎぶちまけて、——苦しみぬいて死ねよ」

尖った歯が肌をやぶる。

香り高い体液がのどに流れ込んだ。

思うがままにのどをうるおし、肉体をさいなんだ果てに、意識は朦朧として、――いつしか血肉をむさぼられているのは、奏の方だった。

気がついたときには、手足が幾分か縮み、身体の厚みも薄くなっていた。

この女と初めて会って、見初められたときと同じ、中学時代の肉体に逆行している。

先ほどまで人形のようなだった緑の瞳には意地の悪そうな意識が宿り、茜の指が奏の衣服をはいでいく。

女にしては低めの笑い混じりの声が、耳をうつ。

「少年、あたしの血はおいしかった？ 次はあたしの番よね。たくさん食べてあげる」

血の気がひいていたはずの彼女の顔はつやつやと輝き、声は生氣に溢れてはずんでいる。

散々奏に引き裂かれたはずの肉体には損傷のあともなく、ただブラウスだけが褪色した血の痕をとどめている。

いつの間に血を失ったのだろう。

全身は重く脱力し、危機感に煽られた皮膚がびりびりと悲鳴をあげていた。

さらされた胸元に刻まれた十字のアザを、彼女の爪先がえぐる。

おおきく吸い込んだ空気が、のどを焼く。

「痛い？ 少年。血が出てるわ」

とろりと流れ出た血液を、彼女の舌がすくう。

見せつけるように舐めとられた彼女の口から、鋭く尖った牙がのぞいた。

（ああ。――またか）

飽くほどにくり返し見た光景だ。

あの牙が皮膚を裂き、肉をえぐる感触を、奏はよく知っていた。血を吸われるのではなく、燃えるほどに熱い何かを注ぎ込まれるのだ。

茜は笑う。

楽しそうに、嬉しそうに、奏にくちづける。

逃げもせず、叫びもせず、彼は運命を受け入れた――。

おおきくあえいで、目が覚めた。
全身が凍え、震えている。

四肢が冷え切っているのに、身体の内側だけがどうしようもなく熱いのは、夢の残滓だ。

何度も息を浅くつき、呼吸を整える。

「……う」

漏れた声にくやしさがにじむ。

身の内に巣くう呪いが、悪夢を見せる。

「そんな、度々出てこなくなたって、忘れやしないよ」

歯をむいて口元をゆがめ、上体を起こす。

脅迫めいた情欲が身体を巡る。

日中に訪れた化学室で、教師の金森が、これは鎖なのだってい

た。

獲物の首輪につながれた、肉体を縛る鎖。

まったく、姑息で、低俗で、あの女にはお似合いの手法だ。

荒れる感情の波も、下腹を圧迫する衝動も、馴染みのものだ。

ふらりと立ち上がって、部屋にそなえつけてある冷蔵庫から水を出して飲み、携帯電話を手にとった。

時計を見ると、深夜の二時だ。

舌打ちがもれる。

（さつき寝てから、一時間もたっていないんじゃないか）

寝不足は確定だ。

携帯の履歴から、一件選んで電話をかける。

三度目のコールで相手は出た。

電話ごしに、ひとつだけ年下の少女の明るい声が、眠気のかけらも感じさせない元気さで、挨拶をよこす。

「巴、ごめん、オレ。今いいかな」

承諾の声はいつだって頼もしい。

「ああ。助かるよ。今から行く」

手短に通話を終えた奏は、巴から譲り受けている錠剤をひとつ飲む。

秋の妹の、巴は淫魔だ。

吸血鬼のエサとして目をつけられた奏は、この二年間、巴のエサでもあった。

口にした錠剤はさっと溶け、――視界は白いもやに覆われた。

錠剤は通行手形だ。

夢と現実の狭間にある巴の住居に、奏は足を踏み入れた。

第五話

「よう。お嬢ちゃん」

朝、校門をくぐったところで声をかけられ、ふり向いた。

「京堂さん。おはようございます」

「だいぶ暑くなってきたな」

梅雨があけて以降、日を追うごとに日差しが強くなっている。
いい天気だが、暑い。

「そうですね」とうなずくと、京堂が感心したように三日を眺めまわした。

「おや、お嬢ちゃんでも暑いって感じるのかい。なんかひとりで涼しげなんだよなあ」

「そりゃあ夏が来るんだもの、暑いですよ。」

京堂の指が伸び、頬をつつく。

「そうは言っても、汗ひとつかいてないじゃないか。お、けっこう柔らかいね、いいねえ」

「ちよっと、遠慮なしにつつきまわさないでくださいよ。痛いですよ」

ぐいぐい押してくる指を、身をよじって避ける。

「暑いのはべつに嫌いじゃないです。どっちかっていうと、寒い方が苦手かも」

「へえ。意外だな。なまっちょろい体してるのに」

「そんなに弱々しくくないですよ。風邪だってひかないのに」

「日にあたってるのか心配になるくらい白いけどなあ」

まじまじと顔を見下ろされ、表情をゆるめる。

「日焼け、しづらい体質なんですよ」

「ああ、すぐ赤くなっちゃうとかいう？」

「いえ、赤くもなりませんけど。」

「ふうん？」

そういう京堂も、とりたてて日に焼けているわけでもない。

「運動部の人って日焼けしてるイメージだったんですけど、そうでもないですね」

「ずっと屋外で練習してるところに比べたら、そりゃあなあ。とはいえ、お嬢ちゃんと比べると程度が違うよ」

京堂に腕をとられて比較をされる。

「白いな」

どこの深窓のお嬢様だよ、と言って笑う。

「そういえば」

「はい」

「今日は匂わないんだ？」

ぐっと三日は言葉につまる。

「……くさいって幼なじみにも言われました」

「いやあ？ いい匂いだったけどねえ」

頭頂部に顔を寄せ、くんくんと嗅がれる。

「やめてくださいよ」

「どうして。オレけっこう好きだったけどね、昨日のも」

（ああ。なんかこの感じ）

自分より大きいものに鼻をこすりつけられる感覚が、大型犬を彷彿

とさせる。

「京堂さん、動物っぽいところありますね」

「そっかあ？」

「舐めるし、嗅ぐし」

にんまりと京堂の口元が弧を描く。

「ん、ん。愛情表現でしょ。オレって素直だから」

「そうですか」

「うわ、適当な返事だなあ。まあいいけど。そうだな、舐めるといえば」

京堂が声をひそめた。

「さつき風邪ひかないって言ったの、体液の解毒作用と関係あるの？」

「……そう、ですね」

「そう考えると便利だね」

耳元でひそやかな微笑がはぜる。

「あのさ、今度もし具合、悪くなったらさ。いっぱい舐めていい？」
硬い親指がくちびるをなでていった。

「お嬢ちゃんのキス、下手な神頼みより御利益がありそうだ」

ぞわっと背中が総毛立った。

「ふ……」

「ふ？」

的確な言葉を探しあぐねて、三日は叫んだ。

「不埒者！」

きつとああいうのをセクハラというのだろうと気がついて、教室に入った三日を待っていたのは、新たなセクハラだった。

「望月さん、おはよう！」

「八又さん。どうしてここにいるの」

クラスが異なるはずの少女は、尾を振らんばかりに喜び勇んで、登校した三日に飛びついた。

「もちろん朝一番に望月さんに会いたかったからだよう」

ぎゅうぎゅうと抱きしめてくる少女を両手で引きはがして、自分の席につく。

さやかは空席だった隣の椅子に腰掛けて、三日にべったりとしなだれかかった。

「おはようおはよう。今日はいいい天気だね。もうちょっと暑くなったら、一緒にプールに行かない？」

「行かない」

「水泳の授業って合同かなあ。望月さん、手足長いから水着似合いそうだよな。きつと軽やかに泳ぐんだろうな、素敵だなあ」

「私、泳げないから」

「え、そうなの？ うわあ、泳げなくて恥ずかしがってる望月さんだなんて、ちよっととっても、ときめいてしまうじゃないの！」

「……冗談でしょう」

「冗談なんかじゃないわよ。ああん、でも、そこらの雑多な男子に、望月さんの玉のような肌を見られるなんて我慢ならないわ」

「八又さん」

うなだれて、三日は言った。

「私、いたたまれないのだけれど」

「どうして？ あ、そうそう。昨日の無礼で下劣な上級生、何の用だったの？ もう、馴れ馴れしくつきまとして、許せないんだから」

「——つきまとしてるのはお前だろう」

まくしたてるさやかの前に鞆が置かれ、座席の主である三鷹 奏が冷え冷えとした声でそう告げた。

「オレの席だ。どいてくれないか」

「出たわね。むつつり横恋慕男」

ギロリと音をたてそうな眼力で、さやかを睨む。

「邪魔」

くやしそうに歯がみするさやかを追い立てて、席につく。

「もうすぐ始業時間だ。自分の教室に帰ったらどうだ」

「なっによ、偉そうに！」

「騒々しいよりマシだろ」

さやかが頬を紅潮させる。

「望月さん見た？ この無愛想男の勝ち誇った態度！」

「ええっと、あまり教室で騒ぐのはどうかと思うのだけど」

「だってえ」

さやかがくちびるを尖らせる。

「同じクラスで隣の席だからって、優位に立ってるみたいな態度、むかつくんだもの」

「あまりうるさいと嫌われるぞ」

淡々とした口調で述べる奏に、さやかは気色ばんだ。

「なによそれ、頭にきちゃう。望月さんだって、あんたみたいなや

つには目もくれないんですからね、だ！」

「あの、八又さん、もうちょっと声を抑えて……」

とりなそうとする三日をよそに、さやかは固く決意を表明した。

「決めたわ。害虫駆除よ」

そう言って、奏を指さし、出て行った。

「首を洗って待ってなさい。目にもの見せてやるんだから」
さやかが荒く教室のドアを閉めると同時に、予鈴が鳴った。

「あの、三鷹くん。ごめんなさい」

見るからに機嫌の悪そうな奏に、頭をさげる。

ゆるくかぶりを振って、彼は口を開いた。

「いや。しかし、教室まで押しかけるとは、頭が痛いね。エスカレーターしてきてるんじゃない？ 望月さんも大変だね」

「ええ。遠慮してほしいって、もっと強く言ってみる」

「すっかりのぼせあがってるみたいだから、早く目が覚めるといいね」

「目が覚める、か。そうれもそうね」

目をぱちくりとさせて、奏を見た。

（そっか。そうよね。目覚めさせればいいんだ）

昨日の京堂のように、さやかの変調も原因がはっきりしている。

（あとで会ったときにでも、それこそキスのひとつで解決するんじゃないかしら）

それくらいならお安いご用だ。

目途がついたことで、幾分気が楽になる。

「ありがとう。やってみる」

「ん？」

「自分を取り戻してほしいって、かけあってみるね」
「ああ」

（あと、そうだった）

昨日の香水の件を問い詰めようとした三日は、奏を見つめて、目をみはった。

「三鷹くん」

「ん」

常になく、その返答にも力がない。

「すごく顔色が悪いよ。具合悪い？」

「あ、いや」

「保健室に行く？」

まばたきをくり返して、奏は息をついた。

「いや、悪い。平気。少し疲れてるだけだから」

（少して雰囲気じゃないけど）

じつとうかがう三日に、奏はごまかすような微笑を向けた。

「寝不足で朝食も抜いたのがまずかったかな。授業中、居眠りしそう」

「……そう」

穏やかな笑顔の向こうに、はっきりとした拒絶を感じて、口をつぐんだ。

昼休みはまるまる睡眠にあてて、いつもなら落ち着くはずの体の不調が、いつまでも抜けなかった。

「おかしいな」

息苦しくて、目がかすむ。

胸に刻まれた十字架が、熱をもってうずく。

単なる疲労ではなさそうだと、放課後、相談に訪れた生徒会室で、奏は意識を失った。

第六話

目の前で膝の折れた奏を、支えたのは十夜だった。

「奏」

白い顔をしてやってきた後輩に、氣を揉んだ矢先のことである。

「精氣をこっそり奪われてる」

腕の中でくずおれた少年をのぞきこんで、秋が眉をひそめた。

「巴、あいつ、……おかしいな」

難しい顔をする秋に、十夜もうなずく。

自身の知るかぎり、巴は食欲のままに食い尽くすような娘ではない。何かがバランスを崩しているのだとすれば、それは奏の方だというのがあり得る話だ。

「ひとまずこれは保健室だな」

氣がついたら話を聞くことにして、十夜は奏を持ち上げる。

「おおっと？」

すかさず秋がちゃちゃをいれる。

「写真撮ったところ」

携帯で楽しげにシャッターをきって、くすくすと笑う。

「お姫様抱っこだって。奏、見せたら卒倒するよ」

「む……」

余計なことの好きな男だ。

「いいからとっととドアを開けろ」

奏の荷物は秋に持たせて、先導させる。

保健室にいたのは、保険医の六崎^{むつぎ} 麦と、二年の仁木^{にき} 灯^{あかり}。
秋の押さえる扉をくぐると、灯と話していた六崎が、こちらに注意を向けた。

「あら、橘くん。どうしたの、その子」

十夜はかるく会釈を返す。

「調子が悪いようで、気を失ってしまつて」

「こっちに寝かせて」

六崎がシーツをはいだ簡易ベッドに、横たえて靴を脱がす。

「ずいぶん顔が白いわね」

六崎は、ショートカットが軽やかな養護教諭だ。

倒れた奏の脈拍や血圧をてきぱきと計っていく動作は、迷いがなくて頼もしい。

そんな六崎の背中に、灯が声をかける。

「先生。私、おいとましますね」

「ええ、気をつけて。またいらっしゃい」

また来るように声をかけるというのも、あまりないことかもしれないが、灯が病弱だというのは十夜も耳にするところだ。

双子の兄の風太はサッカー部に所属していて、活発なスポーツ少年として名をはせているというのに、かたや灯は万年保健室通い。

男女の別はおいておいて、なかなかに対照的な兄妹である。

灯は首のラインで切りそろえられた黒髪を揺らし、頭を下げると、保健室を出ていった。

表情にとぼしく、影の薄い少女だった。

立ち去る少女を、秋が目で追う。

思うところがあるらしく、物言いたげな顔をしている。

しかし彼とて、奏の容態の方により興味があるのだろう。
すぐにベッドに歩み寄った。

「あら、これ」

体温計を手には、奏のワイシャツをくつろげていた六崎の手が止まる。
奏の胸に刻まれた、十字の痕跡。

普段は赤黒く痕を残すだけのそこから、今は血がにじんでいた。

六崎が小指で血をすくいとり、口にくわえる。

ぎよっとする十夜の前で、彼女は難しい顔をした。

「かわいそうに。なるほど、久々でびっくりしちゃったのね」

わけがわからず問い返すと、落ち着きのある声で知らされる。

「茜が近くにいるんだわ」

「茜？ 誰です」

「この子に牙をたてた吸血鬼よ」

十夜と秋は、そろってまなざしを強くした。

「だから奏は調子を崩したと？」

「その影響は強かったのでしょうね。察するに、最初に傷を受けて
からもう何年も接触がなかったんじゃないかしら」

「そのようですね。しかし先生、なぜそうとわかるのですか」

六崎は眉を下げると、さらりと述べた。

「だって、わたしも吸血鬼なんだから」

意外な告白に息をのむ。

「茜のことも知っているわ。昔なじみなの。まさかこの学校に、彼
女の獲物が入学しているとは思わなかったけれど」

六崎は、奏の胸にガーゼを当て、シャツのボタンを元通りにはめて

いった。

「彼女、いたずら好きで困っちゃうのよね。ちょっと興味をひく子がいると、誰彼かまわず牙をむくんだから」

それは被害にあった側としては、たまったものではないだろう。眉間にぐつと力がこもる。

「元凶がこの街にいるのか」

秋もつぶやく。

「だったら、その茜って吸血鬼に掛けあえば、奏は解放してもらえるのかな」

十夜と同じく、秋にとっても奏は弟分だ。

くだんの吸血鬼が近くにひそんでいるとなれば、見過ごせるものではない。

「ねえ先生。吸血鬼って、どうやって退治するんです？」
秋がたずねる。

「あらやだ。私にそれをきくの？」

「いいでしょ。教えてくださいよ」

「そうねえ」

サバサバとした口調で、六崎は言った。

「一番確実なのは、首と胴体を切り離すことね」

「先生、昔なじみだって言いましたよね。その吸血鬼、素直に僕たちのお願いをきいてくれそうなタイプですか？」

「難しいでしょうね。彼女、子どもっぽいところがあるから」
(とうぶん奏からは目が離せそうにないな)

十夜は言った。

「対策を講じる必要があるな。先生、協力していただけますか」

「ええ。私、今は教員だもの。生徒の健康面に口をはさむのが仕事

よ」

「助かります」

「そうねえ。茜の関心をそらすのは難しいにしても、私にできるところがひとつあるわね」

視線で問いかけると、六崎はこううけおった。

「毒素でこの子は苦しんでいるんだもの。中和してあげればいいのよ」

「どうするんです」

「さっき味見したところ、どうやってか、成分がかなり薄れているわね。それでも、体内に残った分が、時折過剰に反応する。――のよね?」

「ええ。そうなんだと思います」

「茜の痕跡を消すことは彼女にしかできないけれど、副作用の動悸や発情だったら、打ち消すのは、同じ吸血鬼であれば簡単なことよ。もう一度牙をたてて、なだめてあげるの」

（もう一度、か）

はたして六崎は信用に値するだろうか。

厳しい面持ちの十夜に、六崎は言葉をつらねた。

「この子が目覚めてから決めればいいのよ。今、気を失っているのだって、久しぶりに親玉の気配を感じて、血が過剰に反応しちゃっただけだし。このままでいいっていうなら、様子をみてもいいんじゃない」

その言葉をうけて、秋が奏の頬に張り手をみまった。

パン、と、乾いた音がする。

「奏、起きな」

十夜が頭をかかえる。

「殴ることないだろう」

「手っ取り早いでしょう。僕、待つのが嫌いだしね」
乱暴だが、効果はあった。

うめき声がして、奏がうつすらと目を開ける。

「……起きたか」

「おはよ、奏。悪い知らせがあるよ、気をしっかりね」

――そうして奏は微塵も迷うそぶりをみせず、決断をくだした。

「血の高ぶりを沈めるだけで、あなたが呪いを受けたことが反故になるわけでもなければ、真人間に戻るわけでもないのよ」

六崎は念を押したが、奏は静かにうなずいた。

「かまいません。お願いします」

そのころ、わずかに離れた住宅街の一角で、茜の再来を知るもう一人の人物がいた。

柎木 朔は、学校帰りに自宅の道場の前で足をとめた。

（やけにコウモリが活発だな）

街中に、そうそう現れる生物ではない。

嫌な予感に、顔がこわばる。

二年前にも、こんなことがあった。

やけにコウモリが目につく日、柎木は不審に思って、コウモリに探りをいれたのだ。

それが、吸血鬼の注意を引くことになり、友人が呪われるきっかけ

にもなったのだが、今日もあの日と似た空気が流れている。

（――もしかして）

意を決して、声をかける。

「きみたち、きみたちは誰の使い魔なのかな」

『コガネのキミ』

と、返ってきた答えはあの日と同じで――。

柁木は、茜の帰還を察するのだった。

第七話

柁木にさんざん心配をされ、その日、奏は十夜の自宅に泊めさせてもらった。

純和風のお屋敷だ。

どっしりと構えた太い梁や柱も、畳の香る広間も、目につく調度品まで、この屋敷の経てきた年月と重みを感じる。

敷地が広いぶん、この家は人口密度が少ない。

磨き立てられた廊下を渡って十夜の部屋にこもってしまうと、人の気配は閉ざされてしまう。

開け放たれた障子の向こうから、風のそよぐ音と虫の音が聞こえるばかりだ。

部屋には、二組の布団が敷かれていた。

（修学旅行みたいだな）

部屋着も浴衣を借りている。

窓際の、籐を編んだ椅子に並んで腰かけ、冷たいそば茶をゆったりと飲む。

カラカラと、氷の当たる涼しげな音が、十夜のグラスから聞こえた。

「体調に変化はないか？」

気遣わしげなまなざしを向けられる。

「ええ。落ち着いています」

鎖骨の上には、新しくできた傷跡が残っている。

効果のほどははっきりとはしないが、昨夜のように身を焼くほどのたかぶりが訪れる気配はない。

これが小康状態ではなく、永続的なものであるよう、祈るばかりだ。

それよりも、茜の動向が気にかかる。

「奏の都合が許すかぎり、いつまでもいるといい」
ぽんと頭をなでられた。

「ありがとうございます」

「週末には、一緒にライアスの散歩に行くか」

ライアスは、十夜が飼っている大型犬だ。

ふわふわの白い毛並みと、くりくりの優しい目をした、実に気性の
穏やかな賢いやツ。

「いいですね」

茜の来訪を知り、奏の身に気を配ってくれているのだろう。
できるかぎり、一人になるなと言われている。

（迷惑かけちゃったけど、来てよかった）

話しかけてくれる人がいるだけで、気が紛れる。

「十夜さんといると、安心するな」

この家は、時間がゆったりと流れている。

空気までもが、心なしか清浄だ。

「そうか。……俺は、奏といるとハラハラさせられてばかりだよ」
情けなく、顔がゆがんだ。

「未熟ですみません」

本当はわかっている。

吸血鬼だとか、血の呪いだとか、問題の根本はそこじゃない。

（本当、ガキだよなあ）

揺らぐ精神が軟弱なのだ。

（いつか……）

なるべく早くに。

どんな横檜もやり過ごせるような、どっしりと地に足を据えた人物になりたいなど、――奏は思った。

夢かと思った。

けれどすぐに、なんらかの手妻なのだと思い直した。

八又 さやか。親しみのわからない少女がひとり、したり顔で立っている。

奏はかすむ頭を振り払い、あたりにさっと目を配った。

曇りガラスのような質感の、四角い部屋にとらわれている。

広さはざっと、学校の教室一個分くらい。

床も壁も天井も、四方が同じ素材で囲まれたフラットな部屋は、照明もないのに、普通に明るい。

出入り口の見当たらない真四角に区切られた空間に、どうやって呼ばれたのか記憶がなかった。

「びっくりした？」

最前まで、十夜と共に、そろそろ寝ようかと話をしていた。

「あんたの仕業か」

「ええ。ええ、そうよ。あたしが呼んだの」

質のよくない機嫌の良さで、さやかが言う。

「あなたと話をつけたくて」

コン、と、床を蹴ってみる。

ひんやりとしたなめらかな床は硬くて、自分が裸足のままなのに気

づく。

ふいをついて呼ばれたらしい。

だらしなく着崩した浴衣のままだ。

（入浴中……とかだったら悲惨だよなあ）

対峙するさやかは、いまだ制服のままだ。

「で、話ってなに。なるべく手短にすませてほしいんだけど」
さやかは切り出した。

「望月さんのこと。あたし、あの人が好きなの」

「ああ、そうなんだろうな」

「望月さんに近づく男は、許せないのよ」

「……それで？」

ため息をついて、目一杯罵倒してやりたいのを、ぐっところえた。
濡れ衣だ。お門違いだ。そんな不平が渦を巻く。

「あなたが望月さんに不埒な目を向けているのはわかっているのよ。
あたしをライバル視しているものね」

しかし目線を変えてみれば、これは誤解を解くいいチャンスかもしれないなかった。

さやかが目に余るのは本当だが、自分は敵対する意思はないのだと
伝えたほうがいいだろう。

「それは思い違いだよ。オレは彼女には、クラスメイトだっていう
以上の感情は抱いてない」

「白々しいわ」

「嘘じゃない。あんたが望月さんに言い寄るのを止めるつもりはな
いよ」

さやかの眉間にシワが寄った。

「あたしを懐柔して、ここから出ようっていうつもり？ 現実世界では、自分が優位に立っていると思っっているのね」

「いやだから、争うつもりはないんだって」

「嘘つき。そうやって、自分の気持ちをごまかす卑怯な人、望月さんにふさわしくないんだから！」

そう、さやかが大声をあげたときだった。

ふっと空間がゆがんだように見えて、二人きりだった四角い部屋に、新たに二人の人物が姿を現した。

「は、……えええ？」

片方が、すつとんきょうな声をあげた。

「ちよ、三日、三日、起きろって」

（あれって、そうだ。朔のこの）

見覚えのある二人だった。

床にうつぶせになって倒れているのが、クラスメイトの三日。

もう一人、三日にまたがって背中を揺すっているのが、朔のクラスメイトだという皐月だ。

奏は頭をかかえなくなった。

（なんだって人をわざわざ増やすんだよ）

三日に関して、カタをつけたかったんじゃないのか。

どうして当人を呼ぶ必要があったんだと、うんざりする。

が、さやかも不本意そうな顔をしているのに気づく。

「えっ、どうしよう」

そんなことを口走ったりもしている。

「……わざとじゃないのか。どうやったんだ」

声をかけると、幾分取り乱した様子でこたえた。

「これ、ええっと、あたし、強く思い描いた人を招き寄せるっていう水晶をもらったの」

「で？」

「望月さん、思い描いちゃった……」

（アホだな、こいつ）

「そうやってオレのことも呼んだのか」
「さやかがうなずく。」

「言うこときかなかったら、このまま閉じ込めちゃおうと思って」
「思っなよ。物騒なヤツだな」

三日が、ううん、とうめいて目を開けた。

「……どこここ」

起き上がろうとした上半身を、皐月が支える。

「おはよう、望月さん。うーんとね、ここは水晶の中よ」

「水晶？」

「そうそう。ごめんね、うっかり間違えちゃった」

寝ぼけ面の三日に、さやかは謝り、くちびるをかんだ。

「でもね、でもどうして。あたし、望月さんのことしか呼んでないはずなのに。——どうして、二階堂くんまで一緒なのよ!」

「え、皐月？」

自分を支える少年を見て、目をぱちくりとさせる。

「あれ、皐月、おかえり。来てたの？」

皐月は手にしていたタオルを三日の首にかけて、苦笑いをうかべる。
「ただいま」

「ん、なに、このタオル」

「おまえさ、髪の毛濡れたままソファで熟睡してたから、拭いてやってた」

「えっ、私、寝てた？」

あたりをきよろきよろと見回す三日は、バスローブの代わりらしい、タオル地のすんとしたワンピース一枚だ。

色は薄紫でよく似合っていたが、下着に準ずるような代物で、目のやり場に困る。

「でもここ、うちじゃない」

寝ぼけているのだろうか。いまいち現状が把握できていない様子だ。

「望月さん。それと、二階堂くん」

声をふるわせて、さやかが二人に割って入った。

「八又さん？」

「お風呂あがりの望月さんと、どうして二階堂くんが一緒にいるのかしら」

皐月が肩をすくめる。

「なんとなく今日は三日の家の気分だったから」

「……どういう意味よそれ」

「んー、準自宅、みたいなさ。どうしてってきかれても、べつに意味はないよ」

シヨックに青ざめるさやかに、皐月は冷ややかな目を向ける。

「そんなことより、オレたちがわけのわからない状況に追い込まれていることのほうが問題だと思うけど？」

「不潔」

「うん？」

「不潔よ！ あたし、二階堂くんがそんなにだらしない人だとは

思わなかった」

「いやいや、どちらかというところ、だらしなのは三日のほうだと思うけど」

「えっ」

心外だといわんばかりに、三日がおもてを上げる。

「そうよ。そういうええ前からそうだったわ。あたしの前で、いかにも親密そうなムードを作らないでよ」

（あーあ）

既に自分がこの場にいる意味はあるのかと首をかしげながら、奏は少しだけさやかが気の毒にも思えてくる。

（恋の実る気がしないんだよなあ）

しかし、三日と皐月が同棲しているとは意外だった。

「望月さん、その人ときあつてるの？」

そうだとしたら、そもそもが事実無根だった自分は、お役ご免ではないかと期待して訊ねる。

「いや、違う。それはない」

そう答えたのは皐月で、三日はといえば、

「あれ、三鷹くんもいたの。こんばんは」

と、のんきにぺこりと頭を下げた。

「……こんばんは」

（なんだかなあ）

ぐだぐだだった。

「今日はお開きにしたらどうだろう」

気を取り直して提案してみる。

「嫌よ！」

「いやでも、そもそもあんたが突っ走ってるだけだし、時間の無駄だと思うんだ」

いやいやと、さやかがかぶりを振る。

「これ、あたし以外の人は、水晶を割らないと出られないの。一回しか使えないの」

「え、これ、割れるのか？」

拳で床をガンガン殴る。

「ハンマーで叩けば割れるって」

「あんたな……」

自力では出られないほど、物騒な代物だったわけだ。

「さっきの条件はのむ。それでもういいだろ」

「信用できないもん」

舌打ちがもれた。

「どうしろっての」

「あたしにだって、わかんないよ！」

唐突に、さやかは暴れ出した。

「もうっ、どうしてあたしを見てくれないの！」

虚空に、次々と雑多なガラクタが現れる。

辞書、トースター、椅子、インスタントラーメン、マグカップ、ノートパソコン、バレーボール、写真立て、鞆、アイロン台、スピーカー、コート、ブラシ、毛布、靴、フラスコ、せんべい、クツション、シャワーヘッド、ぬいぐるみ、スコップ、扇風機、電気スタンド、クッキーの缶、等身大フィギュア、液晶テレビ、ギター、炊飯器、絨毯、ノコギリ、タイヤ、三輪車、白衣、トイレットペーパー、ハンガー、草履、色鉛筆、カメラ、ラジコン、ボディーソープ、じ

ようろ、泡立て器、体重計、そろばん、それから、それから……。

床に転がる雑貨を次々と、さやかは放り投げる。

涙まじりに、彼女は叫んだ。

「なによこれ。意味わかんない！」

第八話

「あぶないから、さがって」

がらくたの出現は止まらない。

取り乱したさやかが引き起こしているのだとしたら、荷物が部屋いっばいにあふれたら、人は潰れてしまうのだろうか。

部屋の中央にうずたかく積み上げられる荷物をよけて、皐月が三日をかばって後退した。

奏も反対方向にじりじりと下がって、考えを整理する。

（といっても、オレじゃ彼女を落ち着かせられそうにないし）

「気絶させたら止まるかな」

いざとなったら、それもひとつだ。

中央に、ゴミ捨て場のように、山が築き上げられていく。

それに伴い、退避した三日と皐月の姿が、次第に見えなくなっていた。

小山を前にして座り込むさやかの背中から、先ほどのような覇気は消え失せているが、物は増加の一途をたどる。

「さて」

なんて声をかけるべきか、思案する。

（いっそ、十夜さんに来てもらって、カタをつけてもらうかな）

強く念じれば、引っ張り込めると言っていた。

奏にも通じる条件なのかは不明だが、彼が来て左手をふるってくれたなら、場の収集はあつという間にすむだろう。

ともあれ、まずはさやかにおのれを取り戻してもらおう努力をしよう
と、その肩に手を伸ばしたときのことだった。

「あらやだ。なあに、ここ」
ぞっと、全身の肌があわだった。

突然、無人のはずの背後から声がして、――それが一体何を指すのか、とっさには理解ができない。
けれど、鈍い頭とはうらはらに、体は本能に正直だった。

じわじわと認識がしみこんでくる。

血は凍り、同時に沸いてもいるようだった。

頭がしめつけられるようで、息も苦しい。

声は真後ろで響く。

「せっかくだからと思って顔を見に来たのに、ずいぶん変わったところにいるのね」
しっとりとした、女の声だ。

全身が小刻みに震える。

（――ああ）

奏はおのれをさいなむ圧迫感に名前をつけた。

（これは恐怖だ）

顔から表情が抜け落ちた。

緩慢な動作で振り返る。

見知った顔が、そこにはあった。

「あ……」

口を開こうとするが、言葉にならない。

波打つ金の髪をもつ、艶やかな女だ。

けして清らかではない、熟れた桃の実を思わせる女。

因縁深い、吸血鬼がいる。

「なぜ」

ようやくの思いで、それだけを問う。

底知れない緑の瞳が、物色するように奏の全身をたどる。

きゅっと、そのまなじりがつり上がった。

「大きくなったわね、少年。それに、悪い遊びも覚えたみたい」

茜の白い手がのびた。

遅まきながら気がつく。彼女は全裸だ。

なめらかな白い腕の先には、真珠のような光沢を放つ、短くそろえられた爪がならぶ。

彼女の両手が、奏の浴衣の襟をひらき、肩から胸に巻かれた包帯をひきちぎった。

ガーゼがはがれ、胸の十字と、生々しい噛み痕があらわになる。

「あたしの愛し子に悪さをするのはだあれ？」

指先が、数時間前につけられたばかりの歯形をえぐる。

「ぐ、うっ……」

こみあげる悲鳴を、ギリギリ意地で飲み込んだ。

汗が流れる。

茜は指をぱくりとくわえ、音をたてて血をしゃぶった。

不機嫌そうに歪んでいた顔に、好奇の色が混じる。

「ふうん」

彼女の両手が、奏の肩を押さえ込む。

「喧嘩を売られてるのかと思ったけど、どうやらおせっかいをやかれただけのようね」

全神経が、目の前の女に集中した。

足元に、瓦が一枚落ちてきた。

茜の意識がふっと逸れる。

「さっきから騒々しいわね」

彼女は奏を離して前に出ると、惚けたままのさやかをひややかに見下ろした。

「感動の再会の途中なの。物品整理なら、よそでやってちょうだい」がつん、がつんと、物の落ちる音がする。

茜は足をふりかぶり、さやかの体を蹴り上げた。

「おい……!」

さすがに声をあげる奏の眼前で、さやかはふつとび、天井にぶつかった。

そのまま、天井付近まで積み上げられていたガラクタの山を一部崩し、向こう側へと流れて消える。

「何をするんだ」

力のない声しか出なかった。

(……生きていないかもしれない)

運がよければ助かるだろうか。

ガラクタの壁の向こうから、人の騒ぐ気配がある。
そしてぱたりと、物の流入は途絶えた。

（ちくしょう）

人の命など、塵芥のようにしか捉えてはいないのだろう。

（知っていたはずなのに）

奏はまた、何もできない。

つい、と、彼女が距離をつめた。

真っ白な、裸の胸が押しつけられる。

二年前には見上げていた忌々しいその顔も、今は自分と同じような高さにある。

胸の十字架が血を流した。

逃げ出すことも叫ぶことも、非難することすらできず、奏は目の前の緑の瞳をじっと見つめた。

忘れることなどないと思っていた顔も、月日がたてば、抱く印象は若干異なる。

彼女の瞳が深緑に光ることも、意外と表情豊かなことも、……その肌がしっとりとした温もりを伝えることも、以前は気づくゆとりがなかった。

さやかを蹴り飛ばした足が、しどけなく奏の浴衣のすそを割る。

人があっけなく踏みにじられる光景は、ショックだったが、そのおかげで目も覚めた。

吐息のかかる距離で、吸血鬼が言う。

「少年、本当に大きくなったわ。でも、まだだめね。もう少し成長を待たないと」

「あんたは、……本当に身勝手だ」

白い手が這い、先ほどこぐった傷跡をやんわりとなでる。

「かわいがられているのね。少し妬けちゃう」

割り入れられた膝が、内腿をなぞる。

「ねえ、少年。勝手に傷をつけちゃだめじゃない。あなた、あたし
のものだってわかってる？」

視界を、金の髪が覆った。

熱いしたたりが、首筋を経て、肩へと触れる。

とっさに後へ引こうとする体を、容赦なくはがいじめにされる。

今日、保険医に噛まれたのと寸分違わぬその位置に、茜の牙が、肉
を割ってずぶりと入った。

のどが震え、細くかすれた叫びがもれた。

「う、あ……」

体内を焼く毒が、じわりと巡る。

「もう一度、思い出させてあげるわね」

食い込む牙を剥がし、耳元で茜はささやいた。

「ねえ、少年。あたしのことが好きでしょう」

視界ははじけ、ぐるぐるとめまいがした。

（――熱い）

寄り添う茜にすがりつき、奏はあえいだ。

「くそ。ちくしょう」

くつくつと笑い声がする。

「奏」

名を呼ばれた。

どくん、と心臓が波打った。

「……やめろ」

弱々しく首を振る。

「かわいい奏。あたしが欲しいでしょう」

「嫌だ。違う」

「馬鹿ね。いいのよ」

毒をはらんだ、やさしい悪魔の誘惑だった。

皮を一枚へだてた体の中を、抗いがたい劣情が暴れ回る。

「いい子ね」

「ふざけるな」

頬をかすめる吐息と、肩にはらりと落ちた髪、肌に触れる浴衣の生地までも、全てが奏を苛んだ。

目がかすみ、呼吸が一気に荒くなる。

もがく奏の背を、茜はいたわりに満ちた手つきで撫でさすった。

「……ぐ」

喉が鳴った。

切実に、体の求めるものがあった。

「奏。あたしが楽にしてあげる。つらいよね？」

「いらねえ」

「あたしのものだって認めなさい。いっぱいいっぱい、大切にしてあげる」

「いらねえつつってんだろ」

「ね。あたしにキスして」

「嫌だ」

顎を持ち上げられ、視線を上げると、緑のきれいな目があった。澄んだ光を宿した、見とれるほどにきれいな瞳が。

「服従のキスよ。――さあ」

「いや、……だ」

涙がにじんだ。

屈辱のせい、か、混乱のせい、か、暴発しそうな欲求の満たされないことへの怒り、か。

（だめだ）

なけなしの理性を総動員して、茜の肩をつかみ、体を離す。
なめらかな曲線が視界に入る。

指先に渾身の力を込めた。

（いやだ。だめだ）

「奏」

思考をとろかす彼女の声が、頭の中をかき混ぜる。

「好きよ。奏」

「オレはきらいだ」

「ねえ」

呼吸が苦しい。

「奏。キスして」

——限界だった。

「絶対、絶対許さねえ」

屈するほかにないことなど、本当はとっくにわかっていた。

抗うポーズなど、子どもじみた単なる意地だ。

（忘れるもんか。ああ、なんて——）

「最低だよ。あんたも、オレも」

茜は、ほっと顔をほころばせて、満ち足りたような笑顔をみせた。
そっと奏は額を寄せる。

どちらも未来を受け入れた、その瞬間にそれは起こった。

「三鷹くん！」

耳を打つ騒音とともに、名を呼ばれた。

反射で振り返ると、ガラクタの山を崩しながら、駆け下りてくる少女があった。

黒い髪、薄着の少女だ。

奏は顔をしかめた。

現実感の失せた頭は、はっきりと少女の存在を拒む。

（でも……）

黒髪は嫌いじゃない。

（嫌いなのは、たしか金だ）

波打つ黄金色が、心底嫌いだ。

突っ立ったまま、何が起きているのかもわからず、少女の行動を見守る。

彼女は床に降り立つと、茜の姿を認めて、目を見開いた。

「え。その人……？」

丸い瞳が、奏と茜を見比べる。

駆けつけた少女は、疑問をありありと目に浮かべて、奏を見上げた。

（黒はいいな）

少女の瞳も、黒だった。

——どのみち、奏は敗北を受け入れていた。

ただ、目の前には黒い瞳の少女がいて。最後の意趣返しのつもりだった。

「いい色だな」

ささやいて、奏は三日に、くちづけた。

第九話

虚脱した。

悪い夢から覚めたように、何が真実なのかがわからなかった。

左手を茜の腰にまわしたまま、右手でつかんだ顎の持ち主は、ひとりの少女だ。

二人から手を離し、後ずさる。

「――は」

空虚な笑いが漏れる。

（何だこれは）

自分が何を成したのかが理解できない。
選り取ったものなら覚えてる。

「オレは吸血鬼の犬だ」

（そのはずなのに）

――やけに、すっきりしているのは、なぜなのだろう。
とりまく全てがまやかしに見える。

（オレの気持ちも。……どうなってんだ）

呆然としてかぶりを振る。

「奏……？」

茜が問いかける。

いぶかしげな表情は、彼女にも、奏に何が起こったのか把握できていないことを示している。

（だったら）

奏はもう一人の少女に目を向けた。

「望月さん」

ようやくその名に思い当たる。

「君、なぜ」

血迷って、それはもう、完璧に取り乱して、三日のくちびるを奪った記憶がある。

ぽかんと見上げる少女に、はっとして謝罪する。

「あ、いや、……その、ごめん」

再び、ガラガラと大きな音がして、皐月もこちらへやってきた。

（そういや、よくあの壁を越えられたな）

無造作に積まれただけの足場は、さぞかし不安定だったろう。

「あらん」

皐月に目をとめた茜が、ニタリと笑う。

「上玉ね」

「……だったら、ぜひとも鞍替えしてくれ」

ぽやく奏に、茜がうろんな目を向ける。

「少年。――変ね。あたしとセックスしたくない？」

「ええ？」

三日が裏返った声を出す。

奏は、自身も疑念にとらわれながら、うなずいた。

「今は、全く」

「そう。どうやって逃れたの？」

「さあ。あんたは何もしてないんだろ」

「ええ。そうね。だったら」

茜の視線が三日を示す。

「この娘さんのせいかしら」

「望月さんが？」

そう指摘されてもしかたのないタイミングではあったけれど、心情的には素直にうなずきたくはない。

（まあ、いいさ）

理由なんてどうでもいい。

ふつつつと、喜びがわいてくる。

結果が大事だ。

原因が何であろうと、たとえ一時的なものであったとしても、現在呪縛からは解放されている。

快哉を叫びたい気分で、ぐつと歯をかみしめた。

（ざまあみろ）

尻尾は極力振らないほうがいい。

奏の粘り勝ちだった。

三日は状況にまるでついていけなかった。

突然天井からさやかが降ってきて、――虫の息の彼女に、解毒のキスをほどこした。

さやかは、今も意識を失ったままだ。

けれど、皐月が匂いをかいでも特に心配はしていない様子だったので、助かるのだろうと思う。

壁向こうで何かあったのかと気にしてみれば、耳をすましていた皐月が、

「余計な口ははさまないほうがいいかも？」

と、思わせぶりなことを言った。

「でもまあ、三日があいつを助けたいっていうなら、オレは止めないけど」

そこで山となった品々を踏みつけて来てみれば、見知らぬ美人が奏とからみあっていて、さすがにこれはお邪魔かと思った。

奏の瞳がいつになくぎらぎらしていて、油断をしていたら、噛みつくようなキスをされた。

噛みつくというか、むさぼるというか。

お腹をすかせた獣みたいだ。

わずか二、三分の間に、唾液を二人もの人間に与えてしまった。

（大盤振る舞いだね）

途端に憑きものが落ちた様子の奏をみて、眉をひそめる。

（あれ？）

親密な間柄に見えた、奏とブロンド美人も、一気によそよそしく振る舞い出す。

「もしかして、余計なことだった？」

いや、自分でしたわけではなかったけれど。

知らずに二人の仲を裂くようなまねでもしてしまったのかと、そう口走っていた。

「ふうん、それじゃああなたのしわざなの」
なまめかしい裸体の美女が正面を向く。

「毒は全身を巡っていたはずよ。どうやって鎮めたの」

「毒？」

不穏な単語が出てきたものだ。

「三鷹くん、毒に侵されていたの？」

奏は答えない。

「そうよ。ひどいわ。あと少しでこの子が手に入るところだったのに」

「まあまあ。寒そうな格好のお姉さん、ひとまずこれでもどうぞ」
どこから引っぱり出したのか、コートを手にした皐月がやってきて、美女の肩にかけてやる。

「あら、ありがと」

「拾いものだけどね」

「ところで、あなたは誰？」

「あたしは茜」

「オレは皐月。こいつは三日。部外者だよ」

「そうね。驚いたわ。キスで少年を目覚めさせるなんて、おとぎ話の王子さまみたい」

茜が探るような目で三日を見る。

「ねえ、本当にどうやったの？」

「解毒したんでしょ。三日に浄化できたってことは、軽い毒だった証拠だよ」

「あら、やあね。それって、とても面白い冗談だわ」

茜の瞳がきらりと光った。

「邪魔ね」

茜のシルエットがぶれたと同時に、鋭い蹴りが三日を襲った。
とっさに両手をクロスさせてかばう三日を、皐月が突き飛ばして、身代わりとなる。

ズン、と肉を打つ、鈍い音がひびいた。

「うわあ、いい蹴り」

茜の足を受け止めて、賞賛の声をあげる。

「オレ、サッカー部なんだけど。お姉さんほどいい足してるやつ、めったにいないよ」

「そうなの。うれしいわ」

茜は笑顔で、二度、三度と蹴りをみまった。

「でもオレ、けっこう丈夫なんだよね」

皐月もどこか楽しそうだ。

そのまま、獣がじゃれ合うようなおもむきの肉弾戦をはじめた二人に見切りをつけ、三日は奏に駆け寄った。

「三鷹くん、ケガしてる」

首から胸にかけて、血の流れた跡がある。

奏は、のろのろとした動作で乱れた浴衣を正した。

「ああ。そんなにひどいケガじゃないから」

じつと三日を見つめる。

「ありがとう。助かった」

「私、何もしてないけど」

「いや、理屈はよくわからないけど、助かったのは事実だから。感謝してる」

こうして向かい合う彼は、いつものクラスメイトと同じに見える。

「……さっきは、飢えた獣の目をしていたものね」

なにげなくつぶやくと、彼は気まずそうに目をそらした。

「ごめん。ええと、……ごめん」

「何が？」

謝罪の意味がわからず、問い返す。

「いやだから、無理にキスして」
(なんだ、そんなこと)

「いいよべつに。おかげでいつもの三鷹くんに戻ったみたいだし」
顔をあわせていても、こちらの彼のほうが断然話しかけやすい。

「よくわからないけど、大変だったね？」
奏は大きくうなずいた。

「危うく道を踏み外すところだった。望月さんのおかげだな」
感謝されるのは面映ゆい。

頬を染める三日に、奏は厳しい目を向ける。
「……あれは吸血鬼だ。気をつけたほうがいい。君もだけど、幼なじみの彼も」

真剣なその声にかぶせるように、上機嫌な女の声がひびいた。

「大丈夫よ、少年。あたし、人間しか食べないの」
奏の体がこわばるのを感じ、ふり向いた。

いつのまにか争うのをやめた二人が、汗をぬぐいながら戻ってくる。

「もし周囲を巻き添えにしちゃったらどうしよう、……なんて、気に病んでいるのかしら？　かわいいわねえ、本当に。あたし、少年のそういうところ好きよ」

背後の奏から、ギリ、と歯のきしむ音がする。

「その反抗的な目、いいわね。そうよね、まだ成長を見守るつもりでいたんだわ」

つい歯形を見て興奮しちゃったけど、ともらし、茜は肩をすくめる。

「面白いお友達がたくさんいるようね」

「やかましい」

「おかげであたしも、あかく姿が長く楽しめそう。悪くないわ」

「失せろ」

「つれないのね」

茜はくるりと体を反転して、皐月に言った。

「久々に運動できて、たのしかったわ。また相手してくれる？」

「ん、いたずらが過ぎなければ。特に、三日にはだめだよ、ちょっと出しちゃ」

「あら。愛されてるのね」

ちらりとこちらに目を向ける。

「女の子は食べないから大丈夫よ。でも、どうかしら。俄然興味をもっちゃったのよね」

茜は、はおっていたコートを脱ぎ捨てた。

なめらかな裸体があらわになる。

きらめく笑顔で、それぞれと目をあわせ、彼女は告げた。

「ちょっとは遊べたし、今日はこれで退散するわ」

金の髪が、きれいだった。

「また会いましょう」

そう言い残し、ふっと彼女は姿を消した。

残された三人が、そろって安堵の息を吐く。

特に奏は、床にへたりこんで肩をおとした。

「……しんどい」

どうもずいぶんお疲れの様子だ。

「オレたちも帰って寝ようよ」

皐月が言う。

「どうやって出ようか」

「水晶の中に閉じ込められてるって話だったよな」

皐月が床をガツンと蹴ってみる。

「ちょっと待ってな」

軽い足どりで、ガラクタの山に向かう。
ガラガラと物品を漁る音がした。

三日はうなだれる奏に声をかけた。

「傷の手当て、してから寝たほうがいいよ」
かすかに口元がゆるむのが見えた。

「そうする。――まきこんでごめんな」

「何もしてないし、何もされてないから」

それよりひとつ、嬉しいことがあった。

「誰かの役に立てるなんて経験、めったにないから。うれしかったな」

子どもの頃は、周囲に迷惑ばかりかけていた。

クラスの子には、暴れてケガをさせることもあって、――皐月以外の誰かに、ありがとうなんて言われたのは、いつぶりだろう。

「あたしの体も捨てたもんじゃないね」

おとなしく、目立たずに、人にまぎれていられるようにと、この学校に入った。

けど、思ったのだ。

「否定しなくても、いいのかもね」

小さく口からこぼれた言葉を、奏が聞きつけたかどうかはわからないけれど。

彼は、かすかに顔をほころばせた。

「似たようなこと、前に言われたことがあるな」

「うん？」

「十夜さんにさ、最初に会ったとき。オレ、周りに助けってもらって

ばかりだから」

肩を押さえて、立ち上がる。

「望月さんにも、世話になったね」

そこでふいにはっとして、奏はあたりを見回した。

「……そういや、八又さんは」

「ああ」

ひどいケガをして昏倒していると教えてやった。

奏の表情が暗くなる。

「まともにくらってたからな」

そこに工具を抱えた皐月がもどってきた。

「八又さんだったら、今も心音がしっかりしてるから平気じゃない？」

「心音？」

奏が首をかしげる。

「皐月は、耳がいいから」

「そうか」

簡潔な説明で、納得ができたのだろうか。奏はそれ以上はきかなかった。

「さて」

皐月が工具箱からトンカチを出した。

「三日、ちょっと叩いてみな」

「うん」

「どうするんだ、それ」

「砕いたら出られるんだろ。やってみる。ああ、三日、床より壁のほうが入るだろ」

「う、そうかも」

受け取ったトンカチを持って、壁に向かう。

「失敗したら、きつとすげえ腕が痺れるぞ。一回でいけよ」
「わかった」

せーの、と声をあげて、三日は力一杯振りかぶった。
ガン、とトンカチが壁にめり込む。

放射状にヒビがはいった。

「よし」

皐月の満足げな声がする。

細かな氷のような光が舞い、――水晶は碎けて消えた。
閉ざされた空間の崩壊とともに、人は元いた場所へと排出された。

週明けの学校に、それはやってきた。
当たり障りのないクラス委員長の顔に戻った奏の、顔色がだいぶ良くなったと思った、そんな朝のホームルームでのことだ。

この日、教室内はざわめいていた。
転校生ならぬ、留学生が来るというのだ。
そうして、担任の教師とともに入ってきたのは、金の髪もまぶしい、あでやかなあの吸血鬼だった。

机の跳ねる音をたて、奏が立ち上がった。

「――留学生、だど？」

せっかく戻った顔色が、見る間に白くなっていく。

ぐつとくちびるをかみしめて、奏は教室を飛び出した。

「あ、おい！」

教師の斉藤が声をあげる。

「委員長どうしたのかな」

「具合悪そうだったよね？」

「はー、びびった」

ざわざわと声が飛び交う。

斉藤は、保健委員にあとを追うよう指示を出した。

「保健室まで連れてってやれよ」

そう言って、教室を静めると、教壇に立つ留学生の紹介にうつる。

高校生というには大人びた、きらびやかな女が口を開く。

「交換留学生の千葉 茜です。期間限定ではありますが、よろしくおねがいしますね」

ぺこりと頭をさげる彼女に、歓声があがる。

「日本語、すごい上手ね」

感嘆の声に、茜は微笑んだ。

「親戚がこっちにいて、日本の文化には馴染みがあるの。でも、もっと知りたくて今回この学校に来ることになりました。仲良くしてください」

わっと拍手があがる。

あっけにとられて見つめているのは、三日だけだ。

「あ、だけど、言っておくことがあるわ」

クラスメイトの心をあっという間にとらえた美女は、三日に目をとめ、ニタリと笑った。

「今教室を出て行った少年は、あたしのものよ。将来を言い交わした仲なの」

しん、とクラスが静まりかえる。

「だからね――」

静けさが、痛かった。

「望月 三日ちゃん。あなたにあの子は渡さないわ」

ぽかんと大きく口があく。

茜を恐れる奏の気持ち、少しだけわかった気がした。

彼女は、トラブルメーカーだ。

第一話

いつものように、三日よりもおよそ十五分遅れて、三鷹 奏が登校してきた。

万理万里に通う生徒の大半は、駅から学校までピストン輸送しているバスを利用しているはずなので、彼はひとつかふたつ後の便に乗っているのだろう。

先々週までの人当たりの良さはなりをひそめ、露骨な仏頂面での登校だ。

「おはよう三鷹」

「おはよう委員長」

「おはよう」

挨拶を交わしながら席に向かう彼に、不機嫌の元凶たる吸血鬼が声をかける。

「おはよ、少年」

クラスの皆も、この二人がけして甘い間柄ではないことに気づいている。

奏は茜の存在を完璧に無視して、鞆を机に放り投げ、教室を出て行った。

（……なんだかなあ）

廊下の向こうに消える背中を見送って、ぼんやりと考える。

奏は教室にいる時間が極端に短くなった。

初日に覚悟したよりも、茜も彼に過剰なちょっかいをかけることはない様子だったが、そもそも奏のほうでそのような隙はみせることがない。

授業こそ真面目に受けてはいるものの、いつもしかめっ面をしてい

るし、雑談もしない。

おかげで三日も、朝の挨拶すらままならないことがしばしばある。こんなふうに教室を出た奏が何をしているのかといえば、廊下や中庭でぼうつとしている姿を何度も見かけたものだから、おそらく茜が視界にはいない場所ならどこだろうと構わないのだろう。

しかし当の茜は、奏の対応も不在もまったく気にとめない様子で、クラスメイトとはしゃいでいるのだ。

「昨日のシフォンケーキおいしかったわ」

「あ、トラストでしょ、いいなー」

見事にクラスに馴染んだ彼女は、毎日とても楽しそうなのだった。

「次は駅前のここ行ってみようよ。隣のクラスのコが、内装すごくかわいかったって」

「やだ、店員さんのエプロン変な色。見てこれ」

女子の輪にすんなりとはいっていきける愛想の良さが、地味にうらやましかったりもする。

（吸血鬼って初めて見たけど、イメージしてたのと違うなあ）

少なくとも、朝っぱらから陽の当たる教室で、雑誌片手にきゅあきゅあ騒いでないなさそうだ。

明るくて美人の、日本語が上手い留学生。

意外にも彼女は、女子からの人気が高いのだった。

昼休み、十夜は生徒会室で資料をまとめていた。

普段、昼休みまでここに詰めることはないのだが、今週は学外で、他校の生徒との交流行事がある。

実行委員は連日せわしなく動いていて、生徒会も傍観してはいられない。

秋と九条は不在だったが、代わりに、余計な生徒が混じり込んでいる。

「茜ちゃん、からまっちゃった」

「んー、ここね。結ぶときの持ち手が逆なのよ」

「こう？」

「ん、んー、待って。こう、かしら」

「こう」

「そうそう」

人数分の机と資料棚しかない手狭な部屋に、会計の百々と、なぜかにわかに友人となった茜が細い赤縄を手に格闘している。

「あん、難しいわ」

「大丈夫、くり返し練習すれば誰だってできるわよ」

学年は異なるのにどこで出会ったというのか。すっかり意気投合したらしい二人は、ことあるごとに生徒会室でよからぬ遊びを繰り広げる。

もう一度言おう。よからぬ遊びだ。

十夜はこめかみをもみほぐした。

「……よそでやってくれないか」

苦々しい声が出る。

二人はきょとんとこちらを見て、次いでにたりと笑みをこぼした。

「橘さん、あたし、手伝ってほしいな」

「そうよね。練習台は必要よ。生徒会長さん、今お暇？」

「暇なはずがないだろう！」

怒鳴りつけると、ころころと笑う。

「やだ、橘さん、こわーい」

「真面目なのね。そういうとこ、ちょっとだけ少年に似てるわ。やだ、かわいいって思っちゃったじゃないの」

「やだあ」

（うるさい）

元々、茜に対して良い印象など抱くべくもない。
自然と対応は刺々しくなる。

「出て行けとは言わないが、少し静かにしているろ」

「はあい」

百々がぴっと右手をあげる。

「でもねえ」

茜が不満げにくちびるをとがらせた。

「やっぱり生身の男がいないと上達しないわよね」

「うーん、そうかも」

「どこかそのへんから調達してきましようか」

――頭が痛い。

「却下だ」

「いゃん。だって生徒会長さん、協力してくれないし」
「当然だろう」

「百々ちゃんの向上心に貢献してあげたいじゃないの」
「向上心だと？ そんなものはもっと有意義に使ったらどうだ」

茜と十夜が言い争うと、百々も茜に乗っかってくる。

「あら、橘さん。それは違うわ。これってとても有意義だと思うの」
「どこがだ」

「いろいろ使えるわよ。たとえば――」

嬉々として口をひらく百々に、十夜は手のひらを向けて押しとどめた。

「いい。聞きたくない」

「え。ひどい」

「聞きたくない」

どう転んだって下ネタだ。

「あらあん、生徒会長さんったら、意外と純情なのかしら」
じわじわとストレスが蓄積されていくのがわかる。

「いいか。学内で生徒を餌食にするなよ」

「学外だったらいいのかしら」

（知るかそんなの。いや、待て）

「……駄目だ」

「ケチね」

本心をいうならば、茜が手にする縄でしぼりあげて、敷地の外に放り出してしまいたい。

茜と百々がいると、騒々しくて作業もはかどらないのだ。

それでも部外者の彼女がここに来るのを禁止しないのは、単純に目の届くところにとどめておきたいからだ。

ここにいる間は、奏も、その他の生徒も、迷惑をこうむることはない。

（しかし何でこんなに和気藹々としているんだ）
気が合うのだろう。二人は本当に仲がいい。

「まあいいわ。じゃあ百々ちゃん、次は抵抗されたときの対処法よ」
「はい」

クッションに縄をからめて、茜があだこうだとレクチャーしていく。

いかがわしい会話が続く。

無理もない。二人は、縄で人間を縛り上げる練習をしているのだ。

「服を着たままだったら、ロープはこっちにまわして、で、全裸だったらこう」

「こう？」

「そうそう。上手いわ」

（うちのメンバーに余計なことを教え込むな）

「腕はキツめに……、美しく、容赦なく」

「容赦なく、っと」

「ちょっとやってみましようか。百々ちゃん、制服脱いでくれない？」

「うん」

「脱ぐな」

「じゃあ生徒会長さん脱いでよ」

「脱ぐか！」

茜が露骨なためいきをつく。

「んもう、そんなにピリピリしないでよ。性別によって縛り方も違ってくるのよ？」

「それがどうした」

「たとえばね、百々ちゃんみたいな美乳さんだったら、縄は乳房に沿わせて食い込み気味に這わせていくのよ。でも、生徒会長さんみたいなおいしい盛りの男の子だったら、ギチギチに締め上げるのが

いいわよね？」

（誰に同意を求めているんだ）

「体型によらず、男だったらこんなふうに結び目をつくって、乳首を締め上げてね」

「ええ、痛そうじゃなあい？」

「痛いほうがいいでしょ？」

さも当然というような口ぶりで問われて、肩をおとした。

「――俺にきくな」

（そしてやっぱり、どっか行け）

空気を変えてほしくて、誰か来ないかと儚い期待を抱いていると、祈りが通じたのか、扉をノックする音がひびいた。

「どうぞ」

ひとつ咳払いをしてから声をかける。

すると、開いたドアから顔をのぞかせたのは、十夜もよく知る少年だった。

「奏」

間の悪いところに来たものだ。

「十夜さ……ん」

茜の姿をみとめて、はっきりと顔をしかめる。

「やっぱりいいです。失礼しました」

ボタンとドアが閉まる。

十夜は立ち上がった。

「音無、戸締まりをたのむ」

「はい」

百々に声をかけ、資料を机にしまうと、十夜も生徒会室を飛び出した。

「待て、奏。俺をあそこに置いていくな」

奏が足を止めて苦笑をもらす。

「すみません」

「顔色が悪いな。保健室に行くか？」

「いえ、具合は悪くないです。まあ、気分は悪いけど」

「そうか。無理するなよ、何でも言え」

「無理っていうか……、結局オレ、逃げちゃってるんですよ。さつきみたいに」

そう言って、うなだれる。

「あの女、何考えてるんだろう。それだって、避けてちゃわかりっこないんだけど、わかってるんだけど、ダメなんですよ。情けないな」

並んで歩きながら、奏の頭をぼんぼんとなでる。

「転入してきた動機か。確かに不明だな。今のところ、音無とふざけてるばかりで目立った行動は起こしていないようだが」

「百々さんと、仲いいんですか」

「ああ。音無も、普通に接触して探ってくれるならいいんだが、どうもえらく気が合ったみたいでな。二人そろっていると、悪ノリが過ぎて手に負えない」

「へえ。百々さんとはかく、あの女、友達なんて作れるんだ。意外だな」

「そうか？ クラスにも馴染んでるって聞いたぞ」

「オレ、最近教室にいないから」

どうにかしてやりたいのはやまやまだったが、手続きをふんで転入している以上、一方的に追い出すわけにもいかない。

「俺も気にかけるようにしておくから、向こうが何か仕掛けてきたらすぐに言え」

「はい」

「その後調子は？ まだ落ち着いたままか？」

「あー、そっちはまずまず。結局、保険の先生に噛んでもらったのは無駄になっちゃったけど、特に過剰反応するってこともないし。今までと同じくらい」

「そうか」

水晶の一室で茜と再開したときの話は、奏から聞いていた。

負傷を追ったという八又 さやかは、全身打撲でまだ病院だ。

（人間を傷つけることに抵抗はないということだな）

気は抜けない。

（あとは、――奏のクラスのあの娘か）

奏は三日に助けられたと言っていた。

身を守ることに長けた神社の娘でも、吸血鬼の呪いをくちづけのひとつで無効にできるというのは、どうにもおかしい。

（これも保留か）

気にはなるが、そうあっちもこっちも監視はできない。

当面、害のありそうな吸血鬼の対処が優先となる。

「千葉 茜から距離をおくのはいいが、あまり一人にはなるなよ」

「うん。しっかし、いつまで続くんだか。オレも、元を絶たないとどうしようもないってわかってるんだけどね」

「あまり気に病むことはない。もし血を吸われたなら輸血をすればいいし、何か流し込まれたとしても俺が吸引してやる」

「そっか、そうだね。ありがと、十夜さん」

ようやくいくぶん、奏の肩から力が抜けた。
気休めなのは、お互い承知の上だったけれども。

（どのみち、俺にできることなど、そうはないか）

歯がゆくとも、立ち向かうのは当人なのだ。

十夜はただ、逃げ場を用意しておくだけだ。

「昼はもう食べたのか？」

奏が首を振る。

「まだ」

「よし。だったら食堂に行こう。ごちそうしてやる」
背中をたたいて、歩き出した。

第二話

放課後、校舎には管楽器の音色が響き渡っていた。

明後日のイベントに向けて、ブラスバンド部が練習に熱を入れているのだろう。

イベントといっても、川原でのゴミ拾いが主なのだが、八重樫高校との合同作業だと張り切った千佳は、実行委員に名乗りを上げていた。

その千佳に誘われて、補習授業までの合間、三日はともに美術部へ顔を出していた。

この日は珍しく、部室には美術部員が何人もいた。

なんでも、展示会が近いらしい。

実行委員も幾人か、画材を借りて窓際で看板を制作している。

「涼一くんは何を描いているの?」

千佳がいそいそと涼一の元へ向かう。

「人魚をね」

さらにと告げたその言葉に興味をひかれて、三日もキャンバスをのぞきこんだ。

「人魚?」

絵の具の匂いが鼻をつく。

海辺に、人型のシルエットが描かれていた。

「まだ途中なんだ」

描かれた岩の並びに見覚えがある。

「これ、……五宝湾だよね」

「そう。よくわかったね」

「五宝湾には人魚の伝説があるもの。涼一さん、信じているの？」
聞いかけると、穏やかな色の瞳が細められる。

「まさか。あそこで人魚を見たことなどないよ。いないよね、海に人魚なんて」

「そうかしら」

同意はしかねて言葉をにぐすと、彼はきっぱりと首を振った。

「いないよ」

「ん、でも珍しいよね？ 涼一くんが人物を描くなんて」

千佳がたずねる。

「そうかな。海にまつわるものなら、なんでも描くよ」

「そっか。人魚だもんね。それでもやっぱり気になるな。ほら、いつもは波とか魚とかばっかりじゃない。もちろん、それとても好きなんだけど」

「人魚は人間っぽい？」

「うん。だから楽しみだな、涼一くんの人魚。完成したらぜひ見せて」

「もちろん。今週中に仕上げるつもりなんだ」

「珍しいといえば」

千佳は幾分類を赤らめて、キャンバスから涼一へと視線を転じた。

「五宝湾って言ったよね。涼一くん、いつも美術部にいるけど、これを描くときは現地でスケッチとかしたの？ それとも、写真を撮ってきたとか？」

「いや。……五宝湾は、前はよく足を運んだ場所なんだ。だから記憶を辿って描いてる」

「え、すごい。それでも見た人に場所を特定させちゃうんだから、

すごいよね」

「そうかな。岩の並びが特徴的だからね。知ってる人ならわかるんじゃない」

ゴツゴツとした巨石が転がる荒れた岩場に、波が砕けている。

(記憶……?)

三日は眉根を寄せた。

五宝湾は、先祖にゆかりのある土地だから、両親とともに訪れることがある。

キャンバスに描かれた岩には、はっきりと見覚えがあるのだ。

(お母さんがいつも腰かける岩だ)

上が平らになっていて、高さもちょうどいいのだと言って。

「見て描いたんじゃないの？」

気づけばそう口にしていた。

「外で描こうとは思わないんだよね」

荷物持ちたくないでしょ、と涼一が微笑む。

「そうなんだ。ええ、そうね。本当にそっくりだから、驚いちゃった。記憶力がいいのかしら」

「三日さんは、五宝湾によく行くの？」

「ええ。たまに、家族で」

「何もないでしょう」

「そうなんだけど、……母が、行きたがるから」

「へえ」

涼一が目を見張る。

「涼一さんは？ やっぱりよく海を見に行くの？」

「いや、行かないな。海にはめったに行かない」

「え、そうなの？」

千佳が驚きの声をもらす。

「海、好きなんですよ？」

「どうかな。嫌いではないと思うけれど」

それは三日にとっても意外な返答だった。

（海の絵ばかり描いているのに）

「三日さんも、家族で訪れるというのなら、人魚なんていないと知
っているでしょう」

涼一は否定するけれど、人魚自体は確かにいるのだ。

三日は母に何度もくりかえし聞かされていた。

「人魚に会ったことはないわ。でも、いつか会ってみたいとは思っ
てる」

「そう」

「涼一さんは？ 人魚の絵は描いても、存在は信じていないの？」

「信じてないわけじゃないよ。海は広いからね、どこかにはいるん
じゃない」

「会ってみたいとは？」

「人魚に？」

困惑をあらわに、涼一が瞳を揺らす。

「ええ」

「もし人魚に会ったら……」

涼一は苦く歪んだ笑顔をみせた。

「僕は、妬ましくて殺してしまうかもしれないな」

実行委員の看板制作にたずさわるといふ千佳を美術室に残し、放課後の補習授業に参加した。

さやか姿のない教室は、以前の静けさを取り戻しており、特に奏はこの時間えらくのびのびとして見えた。

おそらく、茜を排除できるこの授業が、息抜きとなっているのだろう。

周囲の生徒と談笑する姿など、最近ではここでしか目にしていない。

（よほど嫌っているのね）

嫌いなのではなく、恐れているのかもしれないが。

詳しい事情は知らないが、痛ましくはある。

それはそうと、学期の区切りのこの季節、夏休みもそろそろと意識し始める時期となったが、休みの前にはテストがある。

三日はとにかく、得意科目と不得意科目の差がはげしいので、気を抜いてもいられない。

歴史や物理など、興味を持てない科目を頭につめこむのは苦痛だが、いったん成績などどうでもよいと考えてしまうと、そこでもう全てに対して後ろ向きになってしまいそうで怖い。

（せっかく家を出たんだから、がんばらないと）

三日だって自分なりに、このままではいけないという意識があるのだ。

（立派な人間になろう、とは思わないけど、人間としてもやっていけるようにはなりたいもの）

勉強などとは無縁だった小学生の頃は、人間を毛嫌いして、野山で

かけずり回ってばかりいた。

中学になって、それではいけないと、一転してガチガチの優等生のふりをした。

優等生を目指したわけではなく、人との接し方がわからなかったから、とにかく真面目に登校して机にかじりついていただけなのだけだ。

序盤、テストの点はさんざんだったけど、小学生の時分にくらべて学習内容が論理的で系統立っていたから、要領さえつかめば成績は上がっていった。

そうして高校生となった今は、健全な人間関係を構築できるようにするのが目標なのだ。

（いまのところ、うまくいってるはず）

なにせ、この学校だと、少しくらい常識外れな言動をしても、目をつむっていてもらえる。

（クラスの人とおしゃべりできるようになったし）

見よう見まねで培ってきた対人能力も、板についてきた気がするのだ。

千佳のサポートが大きかったというのもある。

本人は意識していないかもしれないが、ずっと周囲との橋渡しをしてくれた。

（感謝しないとなあ）

初めて親しくなった人間だ。

愛想をつかされないように、大切にしたい。

サッカー部の練習があるという皐月と別れて、柾木はひとり学校を出た。

近頃、教室での話題といったら、夏休みのことばかりだ。

（ああ、あとは学外交流の件もあるか）

今週の金曜、川原で万理万里の生徒とゴミ拾いをしなくちゃならない。

（たしかあれって、三年生は免除なんだよね）

受験をひかえてそれどころではないのだろうが、正直なところ、他校と合同で清掃作業にあたる意味が柾木にはよくわからない。

（ゴミ拾いだけなら、億劫だけど仕方ないって思えるんだけどなあ）

万理万里学園は共学だ。

男子ばかりの八重樫の面々からすると、張り切るやつが出てくるのはわかる。

（そういう面でモチベーションをあげるために仕組んだわけでもないだろうに）

万理万里には、一度行ったことがある。

皐月の交流試合にかこつけて、興味本位で見学に行った。

それはそれは、おかしい学校だった。

（嫌うやつがいるのもわかる）

クラスメイトに、万理万里の生徒なんてろくなもんじゃないと言いつ張るやつがいる。

普段は気さくでふざけてばかりのいいやつなのに、あの学校の話題になると途端に冷めた目をするから、何か不愉快な経験でもしたのだろう。

（高遠くんもそうだけど、二階堂くんも気乗りしない様子だったし）

皐月は柁木と同じように、友人があゝの学校に通っている。けれどそれ以上に、女子に騒がれたくないという意識が強いのだらう。

端で聞いていても、彼がつきあっているという年上の彼女を大切にしているのはわかるから、無理のないことかもしれないが。

（明後日か）

気が重いのは、柁木も同じだ。

万理万里学園には、吸血鬼がいる。

敵意を抱くと同時に、もどかしくも思う。

（……同じ学校に行っておけばよかった）

幼なじみが、よりにもよって同じクラスにいるという。

（奏）

二年ぶりに、とうとう顔を合わせるのだという緊張と、せめて友人とともにいてやりたいという焦燥がせめぎあう。

「――吸血鬼は敵だ」

頭上を、コウモリが飛ぶ。

茜の再来を知って以降、数の増えた不吉なシルエットを見上げる柁木に、背後から声がかかった。

「へえ。それ本当？」

はっとして振り返ると、そこに見知ったクラスメイトの真面目な顔があった。

「高遠」

黒いくせつ毛が特徴的な、気さくな友人。

「吸血鬼なんて、――会ったことあるような口ぶりじゃん」

おぞましいものでも見るように、目をすがめて頭上のコウモリを示

す。

「最近とみに増えたよな。あんなもん、街中にいること自体、おかしいとは思わないか」

「まあ、そうだね。普通、人里では見ないよね」

「お前さ」

足をとめた柂木に身を寄せて、高遠は言った。

「あれが、使い魔だって知ってんの」
言葉につまった。

「知ってるんだな」

「まあ」

初めて見せる硬い表情で、高遠はきいた。

「だったら答えろ。吸血鬼はどこだ」

柂木は思わず、彼の首筋に目をやった。

高遠が鼻にシワを寄せる。

「なんだよ。俺、噛まれてねえぞ」

「あ、そうなんだ。ごめん」

あんまり彼が嫌そうに言うものだから、おかしくなって肩から力が抜けてしまう。

「――誰か噛まれたのか」

「以前にね」

「お前が？」

柂木はくしゃりと顔をゆがめた。

「だったらよかったんだけどね。僕じゃないんだ」

「いいわけないだろ」

「うん、まあ。それで君、吸血鬼を探しているの？」

「ああ。柂木、お前」

「知ってるよ。万理万里学園にいるんだ。ついこの間、転入してきたんだよね」

高遠のまなざしが厳しいものへと転ずる。

「確かか」

「らしいよ。僕もまだ見てはいないんだ。聞いただけ」

「……さっき、吸血鬼は敵だって言ったか」

「言ったね」

「事情を聞いても？」

「うーん、どうだろ。そんなこと聞いてどうするのさ」

まっすぐに向き合って、高遠は神妙な声を出した。

「協力してほしい。吸血鬼がいるなら、捕まえたいんだ」

「なぜ？」

「なぜって、あんなもの、野放しにしておいていい存在じゃないだろう」

（まあ、そうだよな）

きつく拳をにぎる彼に、胸の内で同意する。

「この街にいるなら、排除したい」

「素朴な疑問っていうか、思うんだけど。高遠くんにそれができるの？」

「手順をふめばな」

「手順って？」

「言えない」

「危なくないの？」

きくと、高遠は鼻で笑った。

「化け物と対峙して、危なくないわけがないだろ」

「そっか。おかしいね、噛まれたわけでもないのに、無理して手を出すことないじゃない。わからないな、どうしてわざわざ君がそんなマネをするのさ」

「俺もお前が何に関わっているのか、知りたくてたまらないよ。――話をきく気があるか？」

柾木はうなずいた。

「吸血鬼に関わることなら、何でも知りたい気分だよ」

「じゃあよかった。少し話をしようぜ。時間あるだろう
そうして歩いた先で、高遠は柾木に告げた。

「俺は、ヴァンパイアハンターなんだ。えっとまあ、その、見習い
だけど」

第三話

「天保の改革、享保の改革。……保ってなんだろう」

寛政の改革だけ、保の字がつかない。

「歴史は謎だわ」

教科書をかかえてソファに沈む三日に、キッチンから声がかかる。

「まだやってんの？　だらだら見ても頭に入らないんじゃないのか」

今日の皐月は、デミグラスソース作りに意欲をもやしている。

三日は鼻をくんくんさせた。

「おなかすいた」

「オレも！」

じゅーっとハンバーグの焼ける音が響く。

（ごはんー、ごはんー）

期待に胸を高鳴らせていると、場違いな電子音が耳をついた。

「ええ、今時分に誰だろう」

めったに鳴らないインターフォンに、重い腰をあげる。

「母ちゃんかも？」

皐月がキッチンから首を出して言った。

それはありうる話だった。

ところが見やった先のカメラ映像には、玄関先にたたずむ千佳が映っていたのだ。

「あらら、なんで？」

初の来訪に、三日はとまどう。

「んー、誰？」

「友達」

「へえ、珍しいな」

そう声をかけて、皐月は再びキッチンにこもる。

三日は小走りに玄関に向かい、鍵を開けた。

「はい、おまたせ」

「急にごめんね」

眉根を下げた千佳が現れる。

「うん、驚いた。どうしたの？」

学校の知り合いが家に来るなんて、初めてだ。

「うん、ちょっと、聞いてほしいことがあって。電話でもよかったんだけど、ミカ携帯持ってないし、家の番号は知らないし……」
申し訳なさそうに視線をさまよわせる。

「だから来ちゃった。えっと、時間ある？」

「うん」

とは言ったものの、どうしようかと三日は頭を悩ませた。

（皐月のごはん……）

家にあがってもらったほうがいいのだろうか。

それとも、もうすぐできあがる食事に未練はあるが、千佳をつれてどこかに出たほうがいいのだろうか。

「あー、そうだね、じゃあ」

（どうしよう）

ためらう三日の背中に、声がかかる。

「三日ー？ あがってもらえば？」

びくんと肩がはねた。

「わ」

「え？ あ、きゃあ」

千佳が小さな悲鳴をあげる。

「いらっしゃい。友達なんだよね、どうぞ？」

タオルで手をふきながら、皐月が顔を出していた。

（あー、うん。まあいいか）

腹を決めて、三日もうながす。

「だそうなので、どうぞ、入って」

「急いでもう一人前焼くね。ごはんまだでしょ？」

なぜか皐月は上機嫌だ。

千佳に満面の笑みを向けて、いそいそとキッチンに戻っていった。

うわあ、うわあと、うめいて千佳が真っ赤になる。

「今の……」

「うん」

「八重樫の」

「幼なじみの皐月」

「――恋人？」

「幼なじみだってば。隣に住んでるの」

「隣？」

「そう。ね、千佳、今からごはんなの。一緒に食べるでしょう」

「うう、うん」

「よし、じゃあ行こう。皐月のごはんはおいしいよ」

ぼけっと突っ立つ千佳の背を押し、リビングへ向かう。

「カバン置いて。座って待ってて」

「うん。うん。わかった」

「あ、そうだ」

キッチンから皐月が顔を出すと、千佳の肩がびくっと跳ねた。

「目玉焼き、半熟でいい？」

「はい！」

意気込んで答える千佳に、にんまり笑顔を向けると、皐月は三日を手招きする。

「ほら、お客さんいるんだから手伝って」

「はい」

鼻歌まじりの皐月の背中を追いかける。

「ねえ、なんで急に機嫌がいいの」

「えー、オレ？　だって嬉しいじゃん。三日、友達いたんだな」

「ひとりだけできたって話したよね」

「そうそれ。実在したんだなあ！」

手を打って喜ぶ皐月に、苦笑がもれる。

「そんなに嬉しいの？」

「んー、そうだな。言ってみれば、娘が初めてランドセル背負って登校するのを見送る父親の気分だ」

「ええ、なにそれ」

さすがに面白くなくて、ふてくされる。

「よし。もてなすぞ」

意欲に燃える皐月に、次々と指示を出される。

「レタスちぎって」

「うん」

「チーズ散らして」

「はいはい」

「これ運んで。……って、おい、飲み物出してないだろ」

「はい、いますぐ!」

グラスはこっちだの、普段は使わない箸置きだのと言われるがまま動きながらも、皐月が上機嫌なのは、三日にとっても喜ばしいことだ。

「ああ。こんなことなら、スープも作っておくんだった」

悔やむ皐月の背中を叩き、準備の整った食卓へと千佳を招く。

「おまたせ。ごはんだよ」

「うん。ありがとう」

「どうぞ」

皐月が千佳の椅子をひいてやる。

せっかく通常の顔色に戻っていた千佳が、再びぱっと赤くなる。

「お口に合うかな。今日はロコモコ丼と、アスパラとベーコンのサラダ。たくさん食べて」

「はい。ありがとうございます!」

しゃきんと背筋を伸ばす千佳に、皐月が甘ったるい視線を向ける。

「初めまして。オレ、八重樫高校一年の二階堂 皐月。君は?」

「あ、あたしは、ミカと同じクラスの大瓦 千佳といいます」

「大瓦さん、同じ年でしよう。敬語はいらないよ。よろしくね」

「こちらこそよろしく! ええと、二階堂くん。よろしくね」

「よく来てくれたね。ゆっくりしてって」

「はい。ありがとう。あとその、急に押しかけてごめんなさい」

千佳が二人に頭を下げる。

「いいんだよ。三日の友達が来るなんて初めてで、オレ嬉しいんだ」
「だからって、皐月はちょっとはしゃぎすぎだよ」

このままだと、「ふつつかな娘ですがよろしく願います」とでも、言いそうだ。

「大瓦さん。三日はこのとおり世慣れていなくて、ふつつかな……」

「わあ、ストップ！」

慌てて三日は制止した。

（お父さんすぎるでしょう）

さすがに恥ずかしくなって、うながした。

「挨拶はいいよ。ごはん。ごはん食べよう。今日はね、ソースががんばって作ったんだよ」

「そう、がんばった。オレがな」

「皐月ががんばってた。ね、千佳、食べてみて」

「え、うん。いただきます」

皐月がやけにキラキラしたまなざしを千佳に向けている。

「わ、おいしい」

千佳がつぶやくと、ありありと見てとれた期待が、満足げなものへと変わった。

「よかった。ほら、三日も冷めないうちに食べろよ」

「いただきます」

おおぶりのスプーンを手にとり、ハンバーグとライスを口に運ぶ。

（うん、おいしい）

自分でハンバーグを焼くときは、市販のソースとケチャップを混ぜた簡易的なものをかけることが多いから、手の込んだ味わいが舌に嬉しい。

皐月の料理の腕は、彼の母親仕込みだ。

見よう見まねで一人暮らしを始めた三日とは、基礎が違う。

ツヤのある卵も、宣言通りの半熟具合だ。

「二階堂くん、お料理上手なんだね」

「母ちゃんが作れ作れってうるさいからさ」

「皐月のお母さんも、ごはんおいしいんだよ」

緊張がほぐれてきたのか、千佳の表情にほがらかさが戻る。

「そうなの。でもなかなかここまでできないよ。立派だね」

「大瓦さんも家庭科部なんですよ。オレよくおすそわけもらうんだけど、このあいだのゼリーおいしかったね」

「ああ、あれ！」

互いの部活の話や、近くにセマった交流活動の話に華が咲く。

食事が終わり、さげた食器を食器洗い機にかけてところで、皐月は千佳に声をかけた。

「じゃあオレ、部屋にひっこんでるから。ごゆっくり」

「え？ うん」

軽い足取りでリビングを横切り、自室へこもった皐月を見送った千佳は、顔を覆ってうずくまった。

「はー。びっくりしたあ」

ソファに座ると、非難がましい目をして、三日につめよる。

「住んでるの？ ねえ、一緒に住んでるの？」

あいまいに三日は首をひねる。

「うーん、皐月のおうちは隣だよ」

「じゃああの部屋は？」

「うちに来たときの皐月の部屋」

わっと、千佳が嘆いてみせる。

「さっき、洗面所に歯ブラシが二本あった！」

「うん？」

「でもいい。でもいいの。三日、ありがとう」

「ううん？」

「美人に囲まれて食事をするって夢が叶ったの！」

千佳の感情の浮き沈みに、三日はさっぱりついていけなかった。

「嬉しいの？」

おおきく千佳が首を振る。

「そっか、だったらよかったね」

「二階堂くん、やさしいね」

「うんまあ、過保護だけど」

「おしゃべりできる日があるなんて思わなかったな。三日のおかげね。――ねえ、でも」

ふいに表情を陰らせて、千佳はたずねた。

「あたし、三日は、委員長と付き合うんだと思ってた」

「……委員長って、三鷹くん？」

「うん。ねえ、本当は、どっちが好きなの？」

（うううううん？）

とまどいながらも、話の筋が見えてきた。

皐月との仲を疑われるのは、いつものことだ。

今回は少し趣が異なっているだけで、つまりはそういう話なのだろう。

「待って。なぜ急に三鷹くん？」

「なに言ってるの。お似合いじゃない」

千佳が言う。

（そんなばかな。いやそもそも、彼は売約済みだよね）

エサとしてだけれど。

熱烈に請われているのを知っている。

三日は頭を整理した。

「つまり、千佳は私が、皐月と三鷹くんのどちらを性的な目で見ているのかと聞いているのね」

「え、いや、性的ってどうかな」

「違うの？」

「うん、そうね。そうよ。ああでも、そこはせめて、恋愛感情って言葉を使おうよ」

「そっか。恋愛感情ね。で、それでだよ、それだったらどっちも違うよ」

「うそお」

「嘘なんてつかないよ。どっちとも付き合うつもりはありません」
きっぱりと言い切った。

釈然としない様子で、千佳がきく。

「好きな人、いないの？」

「いないよ。いたことないもの」

「え、やだ。一緒にいて、どきっとしたような覚えはない？」
(どき?)

ふと、先日校舎の踊り場で、京堂に首筋を舐められたときの衝撃が頭をよぎる。

三日はふるふるとかぶりを振った。

(ああ、違った。あれは、どきっとしたんじゃないで、ぞわっとしたんだ)

「うん、ないね」

ぞわっとしたといえ、一番は、入学して間もないころに、秋に見せられた悪夢だろう。

(うう、思い出しただけで寒気がするわ)

あとは、さやかに手のひらを返すように好意を向けられたときにも、どきっとした。

(そう。あれこそどきっとしたよね。ドキドキはしてないけど、ぎよっとした)

二の腕をさすりながら、思考が脱線していく三日に、千佳はぽつんとうろく述べた。

「あたしはね、いるんだ。好きなひと」

「え」

目をまたたいて、顔をあげる。

「本当はね、今日はそれをきいてほしくて、ここに来たの」

(うわあ)

三日はかたまった。

「……恋愛、相談」

千佳がはにかむ。

「うん。そう」

(ど、どうしよう)

日本史どころではない、不得意分野だ。

(そうだ皐月。皐月呼んだほうがいいんじゃない)

内心おたおたする三日に真摯なまなざしを向けて、千佳が言った。

「あのね、——涼一くんが、好きなんだ」
ぽかんと三日の口が開く。

「え。ああ、涼一さん」

「うん。そうなの」

頬を染めて、千佳がうなずく。

（意外）

あまり接点があるようには、見えなかったのだ。

「そうなの、ぜんぜん気がつかなかった」

「ほらあたし、きれいな人とか物とか、好きでしょ」

「うんうん」

「この学校に入って、一番心が動いたのが、初めて涼一くんの絵を見たときだった」

（ああ、あの亀のときの）

学校中にキノコが蔓延した時期のことだ。

「最初は、絵が好きただけかと思ってた。でもね、ずっと考えてるうちに、本当は絵じゃなくて、あの絵を生み出す人のことがもっと知りたいんだなって気がついたの」

（へええ）

そうやって人は他人を好きになるのかと、ひたすらに耳をかたむける。

「彼は、特別美人じゃないけど、雰囲気がい綺麗で」

「あ、それはわかる」

「でしょ？」

嬉しそうに、千佳が微笑む。

「おっとりしてるのに、絵筆を運ぶ右手は力強くて。瞳が澄んでて、他の人とぜんぜん違う」

「そっかあ」

「俗世とかけはなれた部分があるというか。生身の人間とは思えなくて」

（う……）

三日は一気に気詰まりに感じた。

（それは、あるよね）

涼一のまとう清涼な空気といい、彼は人間の気配をまっとてはいない。

「だからあたし、涼一くんが色恋沙汰に興味があるとは思えないの」
「――なるほど」

なんとも口を挟みづらい問題だった。

三日からしても、女子生徒にうつつをぬかす涼一というのは、想像のつかないものだったのだ。

「ねえ、どう思う。好きって言ったら迷惑かな。下世話な女だって嫌われちゃうかな」

三日は、おのれの非力をうらめしく思った。

第四話

「ねえ、あなた。――望月 三日さん」

登校中、廊下で声をかけられた。

誰がいるのかは、とうに知っていた。

なぜなら二人とも、とても目立っていたから。

ふり向くと、色気と覇気を振りまく女生徒が並んでいる。

千葉 茜と、音無 百々だ。

「おはようございます」

返事をするかわりに、挨拶をかえす。

呼び止められるような心当たりはなかった。

茜とは同じクラスだが、彼女はいつも女生徒に囲まれていて、会話を
する機会はなかったし、百々に至っては接触するのもこれが初め
てだ。

（生徒会の、モテモテの人）

そんな印象しかない。

近頃小耳に挟んだところによると、この二人は非常に親密に見える
とかなんとか。

そんな噂話を茜の取り巻きが口にするほど、なるほど、肩を寄せ合
い立っている。

二人とも、ウェーブのかかった髪を、百々はおろして、茜は結わえ
ている。

黒と金の、人形みたいだ。

ただ、夜の闇が似合いそうな茜に対し、百々の瞳には、明るく活発
な生命力が宿っていた。

その百々が言う。

「あら、あなたが『三日ちゃん』？」

「ええ。一年の望月です」

「八百坂神社の三日ちゃんね。皆が話題にしてたことがあるわ。わたし、二年の音無 百々。よろしくね」

「話題、ですか」

あまり良い予感はない。

「生徒会の勧誘、ことわったんでしよう。一之瀬さんが誘うなんて、めったにないのよ。めずらしいから覚えてたの」

「そうなんですか。そういえば、そんなことがあった気がします。冗談だったと思うんだけど……」

百々が人差し指を立てて振る。

「一之瀬さん、たぶん本気よ。気が変わったらいつでもいらっしやいね。女の子は歓迎しちゃうから」

「ありがとうございます」

いささか尻すぼみになりながら、礼を言う。

「ところで」

ここからが本題だとばかりに、茜が割って入った。

「望月さん、奏は元気かしら」

「知りません」

自信を持って即答できた。

「あら、知らないの？」

茜が不思議そうに首をかしげる。

「知りませんよ。まあ、このところ毎日ピリピリしているなとは思ったけど」

(むしろあなたにどうかしてほしいくらいなだけだな)

「仲、いいんじゃないの？」

「わりとよく喋る人ではありません」

「ふうん」

自分からきいたわりに、さして興味もない様子で聞き流す。

「あの子、ちっとも寄ってきてくれないの。最近、ろくに顔も見えないかなあと思って」

(そりゃあ、あからさまに避けられてるものね)

「まあ、離れていても、どこにいるのかとかはだいたいわかるんだけどね」

「……そうですか」

ふふ、と茜は顔をほころばせる。

「血が呼び合うのよ」

頬を染めるさまはまるで恋する乙女のようなだが、眼差しは捕食者のものだ。

目をつけられ、手綱まで握られたクラスメイトを気の毒に思い、幾分気分も重くなった。

そこに百々が困り顔で入ってくる。

「ちょっと、ダメよ。奏くんは大事な生徒会のマスコットなんだから。あんまりいじめないであげてね」

「あたしのなのにい」

茜がくちびるを尖らせる。

「だったらなおさら、きちんと合意をとりつけなくちゃ」

「でも、でもね」

茜がそわそわと体を揺らす。

「あの子、嫌がる顔が最高なんだもの」

ぱん、と百々が手をたたく。

「まあ。わかるわ」

「でしょう」

「同じこと、一之瀬さんも言ってた!」

はじけるように笑う二人を前にして、三日は思った。

(もう、行っていていいかな。私)

そして少しだけ、奏に親切にしてやろうかと思うのだ。

笑いをおさめた茜が言う。

「で、そうそう。それでね、望月さん。あなた家庭科部だってきいたんだけど」

「そうですか」

「あたし、見学にいききたいのよね。今日の放課後いいかしら」

「え?」

「いろいろな部活動を見学してるの。家庭科部も見たいわ」

意外だったが、拒絶はできない。

「そうですね、はい。見学だったらいつでも歓迎するって、部長が以前言っていました」

「そ。嬉しいわ。家庭科室でやっているんでしょう。放課後行くわね」

「わかりました」

(……大丈夫かなあ)

千佳だけでも逃がしたほうがいいのではないかと考えたが、そういえば今日は実行委員の仕事があるから欠席すると話していたの思い出し、ほっと胸をなでおろす。

気詰まりな放課後になりそうだった。

三日と話して、茜は思い立った。

（そういえば、まだ挨拶に行っていなかったわね）

この学園は面白い。

けて短くはない年月を生きてきた茜の、馴染みの顔が何人もいるのだ。

今日は挨拶まわりの日にしようと考え、昼休みに向かったのは、やけに清廉な空気のただよう美術室だった。

「こんにちは」

開きっぱなしのドアをくぐる。

看板やキャンバスの並ぶ室内に、涼一が絵筆を手にして腰かけている。

「茜さんか。久しぶりだね」

さらりとした印象の、色の白い少年だった。

「変わらないのね」

変わりばえないのはお互いさまだ。

だが、めまぐるしく変化するこの世界で、昔の面影を宿す存在と再会するというのは、悪くないものだった。

「元氣そうでなによりだわ」

「あなたも」

とはいえ、彼の洋装を目にするのは初めてだ。

「制服、意外と似合うのね」

「茜さんは、よく高校生に成りすまそうなんて考えたね。仮装のよ
うだ」

「ひどいわ。嫌味？」

「まさか。純然たる感想だよ」

「あたし、けっこう十代で通用するのよ」

「故郷では、でしょう。ここは日本だ。大学ならまだしも、高校だと目立つだろうに」

そうはいうが、彼のように馴染んでいるほうがおかしいのだ。

透明感のある相貌は、冷たさと裏表だ。

「お互い、思いも寄らないところで居合わせるものね」

涼一が人間のふりをして学校に通うなど、当人ですら一顧だにしたことがなかったのではなからうか。

茜は気の向くままに様々な場所に顔を突っ込むが、彼は非常に閉鎖的な性質をしている。

「驚いたのよ。まさかと思った」

しかし、学内を探り、動機にたどり着いたとき、納得もした。

閉鎖的だということは、手の内のものには深い情を抱くということだ。

「――あの子なのね」

涼一の眼差しが厳しさを増す。

「茜さん」

背筋が寒くなる。茜は手を振った。

友好的な間柄ではないが、敵対したくはない相手だ。

「やあね、そんなに警戒しないでよ。彼女に手を出すつもりはないわ」

「茜さんは、なぜここに？」

「楽しそうだったのよ」

いつだって、茜は刺激に飢えている。

「最初は、子飼いの少年の顔を見たらすぐに立ち去るつもりだったの」

（奏はまだ、食べちゃうには早いからね）

「なのに彼ったら、あたしに会っても平気な顔で。素性のはっきりしない少女といえるんだもの。何事かと思うじゃない」

「それが、三日だった？」

涼一は、情を感じさせない射貫くような瞳を向ける。

「ええ。あの少女のせいで彼が人間社会に踏みとどまっていられないのかと思ったのだけど、どうやら違ったみたい。この学校には、お節介焼きがたくさんいるようね」

「前に気の毒な若者がいるという話は耳にしていたんだ。それが茜さんの犬だとは思わなかったけど、――僕としては、とっととそいつを連れて、消えてほしいものだがね」

よほど彼女が大事なのだろう。

「約束するわ。昔のよしみだもの、望月さんに危害は加えない。今日は、それを伝えに来たのよ」

なんでもないことのように、涼一がうなずく。

「当然だ」

筋を通しに来たものの、実際のところ彼女に危害を加えるのは、茜にとって難しい。

（奏を静めるなんて、なんて娘かと思ったけど）

茜の毒が効かない娘に興味を持ち、調べた先には涼一がいた。

「まあ、ああまで不安定な娘なら、あなたくらいの後ろ盾は必要よね」

不安定な存在を見ているのは、大好きだ。

思わず口元をゆるめる茜に、涼一は冷たく言い放つ。

「茜さんの自制心に期待しているよ」

剣呑な声だった。

「過保護ねえ」

大切にしている小鳥を、構い過ぎて殺すタイプだ。

（あらいやだ。望月さんにちょっぴり同情しちゃったじゃないの）

彼女を守る盾は、やがて足枷にもなるだろう。

「ほどほどにしないよ。過干渉は嫌われるんだから」

憎たらしいことに、茜のささやかなアドバイスを、涼一は驚きもあらわに受け止めた。

「茜さんの口からそんな言葉が聞けるとはね。あなたも成長したのだろうか。いや、そっくりそのままお返しするよ」

「かわいくないわ」

「あなたにかわいいと思われたら身の破滅だよ」

「んもう!」

気を取り直そうと、せきばらいをひとつした。

「……ところで、さっきから気になっていたのだけど、あなた絵なんて描くの」

涼一が肩をすくめる。

「趣味でね。僕も他にすることがないんだ」

「見せて」

ひよいと回り込み、キャンバスをのぞきこむ。

（あらん）

「上手いじゃない」

それはもう、意外なほどだ。

「よく言われる」

鼻持ちならない人物だが、嘘はつかない。

海辺に座る人魚の絵。

（歪んでるわ）

茜は描かれた人魚を指さした。

「これ、あの子？」

髪の高い、警戒心の乏しい印象の人魚だった。

「あなたにはそう見えるのかな」

薄ら寒い笑顔で、涼一が否定する。

「そうね、望月さんより大人びてるわ」

「それに、三日より美人でしょう」

（まあ遠慮がないこと）

こちらに背を向けた人魚が、ふり向いた構図だ。

人魚の顔には喜びがあふれ、視線の先に、彼女の名を呼ぶ人物の存在を連想させる。

瑞々しく、幻想的な一枚だった。

「きれいね」

「本人はもっと美人だ」

なぜか得意げに、涼一が目を伏せる。

「大切な人なのね」

きくまでもないことだ。絵を見ればわかる。

（ああ、だけど）

胸の奥が、ひんやりするのだ。

口の中で、つぶやいた。

「美しすぎて、これは儚い夢のよう」

第五話

奏は決めた。

（保健室に行こう）

既に放課後だが、ここ数日悩まされている頭痛がいよいよひどくなってきた。

（薬をもらって、休んでから帰るか）

忌々しい学校とは一刻も早くおさらばしたい気持ちもあるが、現状でバスの振動に耐えるのは難しそうだ。

保健室前にさしかかると、扉が開いた。

肩の上で切りそろえられている黒髪が揺れる。

「あなたも保健室に用？ 今、先生いないよ」
顔色のよくない二年の女子生徒だった。

（見たことあるな）

体が弱いので有名な、仁木 灯だ。

サッカー部のエースの双子の妹。

「そうなんですか。ありがとう。中で少し待ってみます」

互いに会釈をし、通り過ぎる。

（線が細いな）

通り過ぎざま、そう思った。

保健室に入ると、誰もおらず、奏は記帳に記載して勝手にベッドに横たわった。

大きく息をつき、目を閉じる。

（疲れた）

これといって何もしていないのに、精神だけが疲弊していく。

——気づけば、うたた寝をしていたようだ。

ベッドのきしむ感覚に、ぼんやりと目を覚ます。

(夕焼け……?)

視界に映るまばゆい黄金色を、目で追ったのは一瞬だった。

人種の異なる白い肌に、緑の瞳が輝いていた。

奏の意識が激しい警戒とともに明確となり、びくりと体が震え上がった。

「なん……」

白くて硬い保健室のベッドに、いつの間にか茜が乗り上げ、奏をのぞき込んでいた。

「おはよう、少年。お姫様のキスで目が覚めた？」

ぎょっとして口元をごしごしと手でこすると、茜はからかいの声をあげる。

「冗談よ。まだしてないわ。だめじゃない、そんなふうは無防備な寝顔をさらしてちゃ」

「そこ、どけよ」

恐怖にすぐんだせいか、口の中が乾いていた。

「そんなのもちろん、おことわりよ」

茜がころころと笑う。

眉間にくちびるが落ちる。

「そんなに顔をしかめないの。シワになるわよ」

のしかかる体を押し返そうとするが、吸血鬼はびくともしない。鬼と名のつくものは力持ちなのだと、初対面のときに当の茜が言っていた。

「どけって言ってるだろ」

「せっかく会えたのに？」

顔の両側に茜がヒジをついた。

金の髪がふりそそぎ、からめとる視線の強さに息がつまる。

「なぜ、ここに」

「保健の先生に会いに来たのよ。顔なじみだから」

(……くそ)

茜から逃げ回りながらも、別の吸血鬼の根城でうたた寝などした迂闊さに、舌打ちしたい気分になる。

「だったらもう行け。先生、いなかっただろ。日を改めたらいい」

「ええ、そうね。挨拶はまた今度にするわ」

肯定しながら、茜の指は奏の髪をすくってくるくる回した。

「予定が狂っちゃった。少し遊んでちょうだい」

側頭部から首をたどって、指がワイシャツのボタンにかかる。

「触るな」

「いやよ。せっかく二人になれたんですもの」

ひとつふたつと、上から順にはずれていく。

蹴り上げた足で、茜の膝が踏んでとどめる。

「どけって、この馬鹿力！」

シャツをたくしあげられ、ベルトをはずすカチャカチャという音に、背筋に冷たい汗がつたう。

びくともしない両肩を、押しのけようと力をこめる。

なけなしの抵抗など意に介さない様子で、茜は余裕の笑顔をみせると、額からこめかみ、顎に向けてとしつとりとした触感のキスをおとした。

ぎゅっと目をつむって首を振る。

至近距離で茜の喉を鳴らす音がした。

「ここ、まだ痕が残ってるわね」

ひんやりとした指先が鎖骨をたどり、奏は肩をふるわせた。
見なくてもわかる。噛まれた痕だ。

「お前のせいだろ」

「ええ。もちろん、あたしのせいね」

茜の声がはずむ。

上体が覆いかぶさり、傷跡に彼女が顔をよせた。
ひくりと喉がひきつれる。

「……よせ」

恐怖がにじみ、声がかすれた。

熱くぬめる舌が、黒く変色した傷口に触れる。

腕に力がいらなかった。全身に、彼女の体温を感じる。

「いやだ、よせ」

肩口に舌が這う。しめった音が耳を打つ。

唇が肌をはみ、時折当たる硬い歯の感触に、ぎくりと身をこわばらせる。

胸から腹、背中にも、素肌をさする手のひらの感触があった。

重石を乗せられたかのような両足が、痺れて痛みを訴えている。

「――おいしそう」

首に顔をうずめた茜が、低くつぶやいた。

目を見開いて固まる奏の耳に、くぐもった笑い声がひびく。

「おびえないで。大丈夫よ、まだ食べたりしない。あなた、まだ若すぎるもの」

(ふざけるな)

奏は歯がみした。

抵抗するだけの力もなく、おびえるばかりの自分に嫌気がさした。

傷口を舐め回した舌が、首を襲う。

「ぐ……」

にこったうめき声がもれた。

舌を押し込めるように、執拗に喉仏の下を探られる。

茜の腕に爪をたてた。圧迫感に、息ができない。

（ふざけんな、くそ。——苦しい）

もがいて体をそらす奏に、ようやく茜が舌をひっこめる。

奏の肩から力が抜けた。額に汗をかいていた。荒い息が口からもれる。

触れるだけのキスが頬におちる。

「かわいい。ねえ、奏の声が聞きたいわ」

名を呼ばれて、鼓動が跳ねた。

ベッドに体をなげだす奏の頭を、白く優しい手のひらがなでる。

目元にかかる髪をかきあげられて、深い緑の瞳と視線が合う。

「いい子ね、奏。楽しませてちょうだい」

残酷な熱をはらんだ、底冷えのする眼差しだった。

吐息が触れ、耳朶をはまれた。

くちびるの裏の粘膜が、耳の外周を刺激する。

内からこみあげる震えに、きつく下唇を噛んだ。

「だめよ、口開けて」

鼻をつままれて、ゆるんだくちびるの隙間に、指を二本ねじこまれる。

「噛んじゃだめよ、あたしの血を飲んだら、戻れなくなるわ」

「も、やめ……」

押し返そうとあがく舌を、細い指先が挟んでこする。
歯列の裏から、頬の裏、舌の根元を、唾液にまみれた歯の指がやりわりとうごめいた。

「う、あ」

ゆっくりと形状をなぞる舌先が、つぷんと耳に差し込まれた。
熱いぬめりが駆け抜け、水音が鼓膜を打った。

顔をゆがめた奏の口から、くぐもって乱れた声がもれる。
(いやだ。いやだ、離せ)

口内をねぶる側とは逆の手が、裸の脇腹をさする。

「力がはいってる。震えてるわ」

舌を引き抜かれると同時に、ささやかれた。

「うるさい、いい加減にしろ」

開かされたままの口で、形にならない言葉をつむぐ。

舌の裏側を爪で押し上げられ、にじむ快感に喉が鳴る。

音をたてて引き抜かれた指が、下唇をつまんでひっぱった。

「ここ、歯の痕がついてる。もう噛んじゃだめよ」

「黙れ、離せ、触んな」

うるむ視界で懸命に睨みつけた。

腰骨をさする手のひらがあたたかい。

手だけではない。のしかかる体のすべてがぬくもりを発している。

「暑いんだよ。離せもう」

あがる息でそれだけ言っていると、茜は面白そうにくすくすと笑った。

「奏がひとりで熱くなってるんでしょ」

下着のへりに指がかかる。

「邪魔ね。脱がすわ、腰あげて」

「やめろ」

「あら、どうして？」

楽しげに、触れるか触れないかのぎりぎりのところを、指先がたどる。

重たく熱をもった欲望を誇示するように、薄い布地越しに、上下に指が行き来した。

「苦しそう。かわいそうだわ」

「うるさい……っ。もうやめろ、本当に。触んなって言ってるんだろ」
茜がうっとりとした眼差しを向ける。

「涙目になって、かわいいのね。素敵よ」

「いいから、やめ——！」

強く与えられた刺激に、喉がつまった。

立ち上がった先端を、握り込んだ指が押した。

悲鳴にも似た声がもれた。

総毛立つ肌が、期待と恐怖に飲み込まれる。

ふるふると、力なく首を振った。

「たのむから、——いやだ」

みじめったらしく、懇願する声がきこえた。

（ああ、くそ）

撫でさすられて、思考が遠のく。

（オレの声か）

喉を鳴らすだけの、乾いた笑いがもれる。

抱いた殺意は、自分に向けてのものなのか、目の前の吸血鬼に向け

てのものなのか、判別はつかなかった。

「ね。直接触ってほしいよね」

甘くしたたる声がうながす。

「いや、だ」

形ばかりの拒絶を示す。

そんなものになんの効力もないことなど承知していた。

茜の腕が背中に回り、体がわずかに持ち上がった。

奏が諦観に屈しようとしたとき、意識の外側から、突如破裂音がした。

はっとして、おもてを上げる。

パン、というその音は、手を打ち鳴らした音だった。

「あ……」

呆然としてベッドサイドを見上げる。

そこには、いささかあきれた面持ちの、保険医が立っていた。

「ちよっとー。はいはい、そこまででお願いしますよ」

「わ」

あわてて茜を押しつける。

「あーあ」と、残念そうに肩をすくめた彼女は、素直にその身を上からどけた。

「いいところだってわかるでしょう。どうして邪魔するのよ」

「ここは連れ込み宿ではありません」

保険医の六崎が胸を張る。

「まったく。おうちに帰ってからやりなさいよ」

「おうちに帰ってからまでするようなことじゃないわよ。ただの挨

撈でしょ」

「んもう。それをいうなら、ここは学校の保健室です。ベッドの用途は別にあります」

「おかたいわね」

「教師ですから」

軽口を交わす二人を横目に、奏はあたふたと衣服を整えた。

火照る体に、いやな汗をかいている。

（あぶなかった）

半端にあおられた体は熱をもち、精神に負荷をかけるが、あいにくと奏にとってそれは慣れ親しんだ衝動だ。

やり過ぎすのに慣れたとはまではいわないものの、今は頭を冷やしたかった。

（落ち着け）

力の入らない指先を駆使して、ボタンを順にとめていく。

「麦。ひさしぶりね」

フランクに接する茜に対し、六崎はいくぶん硬い表情でこたえる。

「ええ、本当に。あなたらしい無体だけれど、彼はうちの生徒ですからね。会ったら言おうと思ってたんだけど、卒業するまでは手を出しちゃだめよ」

「ええー」

「わかってるでしょう」

髪をかきあげてベッドから足をおろした奏を見やって、茜がふてくされてみせる。

「手なんて出してないわよ。未成年なものね」

「そう。だめよ」

「あらやだ、麦ったら本当に教師みたい」

そうして茜は、思わせぶりの視線を奏にくれた。

「卒業したら、ね。成人を迎えたら、楽しみにしていてね。少年」
口を閉ざす奏に微笑みかけると、茜はさつときびすを返した。

「じゃ、あたしもう行くわ。懐かしい顔にも会えたし、これから部活動の見学にも行かなくちゃならないのよね」

「あら、部活に入るの？」

「入らないわよ。見るだけ。ヒマだから全部見て回ってるの」

「生徒に迷惑かけちゃだめよ」

保健室のドアを開け、振り返らずに茜は軽く手をあげた。

「何もしないわよ。それに今日は家庭科部だもの、怖い保護者がついでるじゃないの」

そう言い残し、部屋を出た茜は後ろ手にドアを閉めた。

彼女の姿が視界から消え、奏はおおきく息をついた。
今更ながら、ひどく緊張していたことに気がついた。

「災難だったわね」

六崎が生暖かい視線を向ける。

奏はうつむき、頭をさげた。

「たすかりました。ありがとうございます」

どんな顔をしているのか、わからない。

ひとりになりたかった。

誰かというのはいたたまれない。ことにそれが、己の痴態を見咎めた相手となれば、なおさらだった。

第五話（後書き）

今作唯一のぬるい濡れ場でした。
この場面のためだけに、R15タグつけたようなもんです。

第六話

「固まっただみたい」

部長の芽衣が冷蔵庫をのぞきこんで言った。

家庭科部の今日の活動内容は、トマトゼリー作りだ。

冷蔵庫から出されたトレーに、赤く涼しげなゼリーが光を反射し、並んでいる。

「かわいいものね」

見学に来ていた茜がつぶやいた。

「さっそく試食会にしましょう」

芽衣の指示で、おのおのお茶の準備を始める。

三日が並べたグラスに、京子が冷やしておいたジャスミンティーをそそいでいった。

芽衣はゼリーとスプーンを人数分ならべ、にこやかに茜に話しかけている。

「さっぱりしていて、食べやすいと思うの。酸味は平気？」

「ええ。酸味や渋みはむしろ好きなの。楽しみだわ」

席についた茜の隣には、久々に顔を出した一年の原田 正樹がはりついている。

美女に弱いと公言する彼は、なんでも、茜の参加をかぎつけたようで、相好を崩し彼女に寄り添う。

逐一茜に話しかけて世話を焼く原田と、警戒心をあらわにして厳しい目を向ける京子がいるおかげで、家庭科室にはいつもと異なる空気が流れていたが、当の茜と部長の芽衣がのほほんとしているため、いたたまれないほどの陰悪さは生じていない。

それでも三日は、茜に対して苦手意識を抱いていたので、無事に部

活が終えられるようにと祈っていたのだ。

全員が席につき、京子をのぞいた全員が、談笑しながらこの日の成果を口に運んだ。

もっとも三日は、相槌を打つくらいしかしてはいないが。

「冷たくておいしい」

ゼリーののどごしはなかなかのものだった。

「望月さん、一緒に帰りましょう」

意外なほどひかえめな態度で部活にのぞんだ茜が、そう声をかけた。

「え、いや、なぜ」

およびごしになる三日に、茜は気安い態度をとる。

「だって同じバスに乗るんでしょう。せっかくだから、おしゃべりしながら帰りましょうよ」

「いいね、ぼくもまぜてよ」

この日上機嫌だった原田が、口をはさむ。

「千葉さんと望月さんとじゃ、両手に花だな」

「決まりね。行きましょう」

左手を茜に引かれて歩き出す。

（わあ、強引）

おしなべてクラスメイトにはよそよそしい態度をとってしまいがちな三日だが、茜に対しては本当にこういう態度で接すればいいのかわかりかねる。

それはおそらく、彼女の意図するところが見えないからだが、あえ

て自分からたずねてみるだけの気概もないのだった。

生徒用玄関から外に出ると、ブラスバンド部の奏でる音色が耳を打った。

草花の手入れをする園芸部の面々も見える。

それでも、運動部のいるグラウンドや体育館となると話は別なのだろうが、部活を終えてからの下校となると、周囲に人気はあまりない。

原田と茜の会話を聞くとともにしに聞きながら、校舎を出てバス停へと向かう。

だが、校門をくぐってまもなく、三日の手を引いたまま、茜がぴたりと足をとめた。

三日も、低くかすかなうなり声を耳にし、あたりを見回す。

学園は山の中腹にあり、視界は悪い。

「ふたりとも、どうかしたの」

原田がいぶかしげな声をあげる。

空気がざわついていた。

低い位置にいくつもの気配がある。

（動物だとは思っただけ、でもどうして）

周囲の茂みをかきわけて、のっそりと現れたのは、野犬の群れだった。

うなり声をあげて警戒している。

「うわっ、え、……犬？」

原田は目を丸くした。

（変ね）

野犬がいるなど聞いたことがない。

隣の禁山ならともかく、ここは人の手が入らない山とは違うのだ。ましてや、三日を前にして牙をむくなど、通常あることとは思えない。

「あらいやだ。物騒ねえ」

茜の声に不快の色がにじむ。

現れた犬には明確な目的があるようだった。

三日たち三人を囲みながらも、その視線は茜ひとりに向けられている。

「ケンカを、売っているのかしら」

いずれも大型の犬だった。五頭いる。

茜は一頭一頭に目をとめて、唇をぺろりと舐めた。

隙間から、存在感を放つ牙がのぞく。

吸血鬼は鬼の眷属だ。野犬のかなう相手ではない。

獣は聡い。通常ならば、あえて向かってくることなどないだろう。

それがひるむ様子もみせないとなれば、可能性としてはよほどの動機が存在するのか、もしくは何者かに使役されているのかもしれないかった。

これが妖怪同士であったり、人間同士であるならば放っておいた。しかし相手は無垢な獣だ。

敵意をつのらせる茜の前に、見捨てるのは気が引けた。

茜の右手が、手首から離れた。

「獣風情が、目障りだわ」

悪意をにじませて、一步を踏み出す背中を見た。

意を決し、とっさに三日は息を吸い込む。

気道を広げ、空を仰ぐ。

夕暮れ時でもまだ明るい、さわやかな空だった。

胸の中で空気を練り、喉を震わせて声を発した。

幼い頃、皐月のマネをしてよく遊んだ。――狼の遠吠えだった。

ウオオオオオオン……と、大気が鳴る。

心地よい痺れが、肌に伝わる。

音が拡散すると、一転してあたりは静まりかえった。

原田は目を丸くしているし、茜は感心した様子でこちらをうかがっている。

三日は親しみを込めて野犬と順に目を合わせ、意思を込めてこう告げた。

「ここはあなたたちの来て良いところじゃないの。散りなさい」

まき散らしていた敵意が霧散し、犬の目には理性が宿った。

ふっと気が逸れたように、野犬は体を反転させ、茂みの向こうへと去っていく。

はーっと息をつき、原田が体の力をぬいた。

「なんだ今の。怖かったなあ」

「余計なことをするものね。でもまあいいわ。余計というなら、最初にちよっかいを出してきた側こそが余計なものですもの」

茜が眉をつり上げ、木陰に目をやる。

下生えが揺れ、制服をまとった男が一人、姿を現す。

八重樫高校の制服だ。

黒くカールした髪が特徴的な短髪の男は、茜に鋭い視線を向けて、口をひらいた。

「見つけたぞ、お前だな」

「あたしが何か？」

「人にたかる寄生虫め」

語気が荒い。

「失礼ね。言いがかりはよしてちょうだい」

男は警戒もあらわに、姿を見せた木陰から一步も動かず、口だけを動かす。

「さっきの犬が教えてくれたんだ。お前が俺の探してる獲物だって」「んー」

興の乗らない様子で、茜が顔をしかめた。

「冴えない口説き文句ね。あなた、あたしの記憶にはないのだけど、どこかで一目惚れでもしちゃった？　こんなところまで追ってきちゃって、ごくろうね」

男は、はっきりとした不快感をおもてに出す。

「この街に住む者として、お前のような存在を見過ごすわけにはいかない」

「呆れた正義感だこと。藪をつついて蛇を出すって、こういうのを言うのかしら」

「藪に潜んだ毒蛇を、放置するよりいいだろう」

すっかり置いてけぼりにされる三日と原田だったが、このとき三日はいささか面白くない気分を味わっていた。

（吸血鬼と蛇と一緒にしないでよ）

三日の育った禁山は、白蛇を山神として奉っている。

白睡山の名の由来がそもそも、神たる白蛇の眠る地であることから来ているのだ。

この街は蛇のお膝元で、三日の感覚からすると、蛇とは母も同然なのである。

「俺たちはお前のような存在を許さない。この街から出て行け」
「まだ何もしてないのに、心外だわ」

「存在が有害なんだよ。それに、何かあってからじゃ手遅れだ」

「だいたい、あなたに何ができるといふのよ。……人間のくせに見下したような物言いに、男は挑発的な視線を返した。」

「何が出来ようが関係ない。俺はお前を追い返すだけだ」

緊張のせいかな、男の顔も手も、やけに白い。

茜の言うように彼が人間なのだとしたら、力ではとうていかなわない相手と相対しているのだ。

可能かどうかは別として、決意を口にするだけでも見上げた根性だとは思う。

（でも私、バスに乗り遅れたくはないんだよね）

視線を戦わせる二人は置いておいて、腕時計に目を向ける。

（ああほら、あまり時間がないじゃない）

八重樫の制服をまとった青年は、おそらく吸血鬼としての茜を敵対視しているのだろう。

だったら、続きは二人でしたほうがいい。

そう考えて、三日は原田の袖を引いた。

「ねえ、どうやら込み入った事情があるようだし、私たち先に帰らない？」

「え、うん？」

「あと五分でバスが来ちゃうの。どうやらお邪魔のようだし、もう行こう」

「でも……」

原田は気遣わしげな視線を茜に向ける。

「私、ひとりでも行くよ」

もとより、一緒に帰る義理などない。

その場を離れようとした三日に、茜がぱっと顔を向けた。

「え、やだ、望月さん帰っちゃうの。あたしも行く」

「いや、どうぞゆっくり話をしていって」

「いいのよ。あたしはべつに用なんてないもの」

「そんな……」

三日がちらりと青年に目を向けると、彼は肩をすくめて冷ややかに告げた。

「構わないよ。元々、今日はターゲットを見極めに来ただけなんだ。これ以上は俺もそいつに用などない」

茜が冷ややかな眼差しを向ける。

「本当に失礼ないいぐさ。礼をわきまえないと、長生きできないわよ」

「不自然に命をながらえる方がよほど病んでる。外道の仕業だ」
つん、と茜はそっぽを向いた。

「もういいわ、行きましょう。気分が悪いったら」

ふたたび茜は三日の手をとる。

「ほら、帰るわよ。吠えるだけの犬は放っておきましょう」

厳しい眼差しを背にうけて、三人はその場をあとにした。

なんとなく、立ち去り際に会釈をすると、男は不味いものでも飲み込んだような顔をした。

幸薄そうな顔だった。

騒動が収まった頃合いをはかって、奏は校門をくぐり、外へ出た。
一度帰宅しようと門を出たのだが、その際、不穏な空気をただよわ

せる茜を発見してしまい、巻き込まれるのも同じバスに乗るのもごめんだと、とって返して時間をつぶしていたのだ。

（さすがにもういないな）

ほっとする奏の元へ、すずめが一羽飛んでくる。

小さく丸められた紙くずが、すずめの口から足元へと落とされた。

（朔？）

幼馴染みが、好んで使う伝達手段だ。

ノートの切れ端らしき紙を、つまみ上げて広げる。

『駅で待ち合わせをしよう』

そうあった。

メールじゃだめなのかといつも思うが、これも野生の生き物と親しむ訓練の一環なのだという。

そうして向かった先で、奏は朔に一人の男を紹介された。

「同じクラスの高槻くん。ヴァンパイアハンターの卵なんだって」
くらりと目の回る思いがした。

「どうも」

互いにぎこちなく、挨拶を交わす。

高槻は、くせの強い黒髪の男だった。

いくつか会話をするうちに、奏が校舎にとって返すことになった先ほどの騒動が彼のせいなのだとわかる。

「なぜ、アレにわざわざ突っかかるようなマネをするんだ」

逃げるならともかく、自分から近づくなどと、気が知れない。
そう言うと、高槻もしぶい顔をする。

「正直なところ、俺もびびった」

聞くところによると、彼はハンターとしては半人前どころか、卵の

殻も割れていないような状態なのだという。

（おいおい、だったらやめておけよ）

無駄に命を散らすことなどないと思うのだが、彼の意志は固いよう
だ。

「だからって、己の未熟を盾にもできないだろ」

「そんなものかね。勇敢なのと無謀なのとは、別だと思うな」

吸血鬼に会うのもこれが初めてだとのことで、恐ろしさが身にしみ
ていないのかもしれない。

高槻に、奏が吸血鬼の被害をこうむっているという話はしていない。
朔が、単に「万理万里に友人がいる」と告げて、引き合わせただけ
のようだ。

「明日の校外学習で、一緒になるだろ」

高槻は言った。

「そこで、仕掛けてみようと思うんだ」

（……死ぬぞ）

苦々しさが口にあふれる。

「手伝えなんて言わないよ。ただ、そちらの生徒にも、事情を把握
しておいてほしいだけだ」

奏はぐりぐりとこめかみをもみほぐした。

「勝算はあるのか」

納得のいく答えが得られないなら、殴ってでも止めるべきかもしれ
なかった。

だが、意に反して高槻は、自信を浮かべて顎をひいた。

「ある。ひとつだけ、捕らえる手段があるんだ」

「それは？」

「危険だから見せられないけど、持ってるんだ。不死ともいわれる

吸血鬼ですら、ひとたまりもないような劇薬を」

「そんなのあるのか」

奏と朔が、身を乗り出す。

「それを使おうと思う。溜血丸。――人魚の血を煮詰めた丸薬さ」

第七話

「臯月」

ゴミ袋とトングを手に持ち、声をかける。

「三日。大瓦さんもおはよう。一緒に拾う？」

おはようと言っても、もう十時だ。

週の最後の金曜日、午前中の二時間をつかって、川原で二高合同でゴミ拾いをおこなっている。

例年開催される行事らしく、両校共に三年生は不参加なのだが、慣れない体操着が半数を占めるというのは、妙に落ち着かないものだ。

臯月に手招きをされて近づくと、同じサッカー部の面々だというのを紹介される。

「うわあ、女の子だ」

「えっと、はい。そうです、こんにちは」

なにやら熱い眼差しに迎えられて、腰がひけてしまう。

「万理万里の女の子！　かわいいね、よろしくね」

「よろしくね」

「よろしくね！」

「よろしくお願いします？」

（何を？）

たたみこまれてあつけにとられる三日の背中を、臯月がたたく。

「気にするな。こいつらちょっと浮かれてるんだ」

「彼氏気取り！」

そのうちの一人が、臯月を指さし非難する。

「ばっか、そんなんじゃないだろ」

（うう、ちょっと怖いかも）

名前と顔が一致しない初対面の生徒に、とまどいを隠せない。
口ごもりがちな三日を補うように、千佳が気安く会話を交わす。

「サッカー部のみなさん、先月うちの学校来てたよね」

「そうそう、雨降られたときなー！」

「あのときも万理万里の女の子いっぱいいたっけ」

「あたしも見に行ったの。中止になっちゃって残念だったね」

「え。嬉しい！　っていつても、おれ補欠だったけど」

「だよなー」

（千佳さすが！）

和気藹々と転がる会話に、尊敬の念がかきたてられる。

「あいつのプレイ見たかったんだけどな」

「ああ、俺も」

口々に示された先に、同じ学校の二年生がいる。

はしっこそうな印象の、短髪の男子生徒だ。

「誰？」

すかさず彼らは教えてくれる。

「サッカー部のエース」

「知らない？　仁木　風太。燃えちゃうほどすごいボールを蹴るんだって」

「いや、さすがにそれは眉唾だろ」

「いくらなんでもなあ。たしかに燃えるって聞くけど、でもなー」
半信半疑といった様子で、さざめきあう。

（ふうん）

いまいち想像がつかないけど、燃えてるボールでサッカーをするのは、少し楽しげだと思う。

（鬼火を蹴って遊ぶ子鬼たちみたい）

夏の夜、白睡山の山中を駆け回って遊ぶ子鬼の無邪気な笑顔を思い出して、ほほえましい気持ちになる。

（冬場に同じことをやると、火事になるからやめなさいって怒られるんだよね）

ボール遊びが楽しいのだというサッカー部員たちに、ほのかな親近感が芽生える。

（皐月の友達だったら、怖くないよね）

積極的に会話に参加はできないまでも、笑顔で相槌を打つくらい、できるようにはなりたいものだ。

「おまえら、ちっとは拾えよー」

通りざま、顔見知りらしい八重樫の生徒が声をかける。

すっかり手が止まっていたことに気づいて、千佳と顔を見合わせる。

「いけない、あたし実行委員だった」

「あっち、拾いに行こうか」

かたまっているのは、効率が悪い。

すると千佳は、何かを探すように視線をさまよわせる。

「どうしたの」

「ん、うん。ちょっと……あの人、いないかなって」

「うん？」

「涼一くん」

（ああ！）

頬を染める千佳につられて、なぜか三日まで赤くなった。

「そうだね、えっと、……あ、いた、あそこ」

川からだいぶ離れた木陰に、やる気のなさそうな姿を発見する。

「どこ？ ああ、あれかあ。すごい、よく見えたね」

眼鏡をかけているから誤解されがちだが、視力はいいほうだ。

「行く？」

「う、うん」

「どこに？」

ひょいと眼前に皐月の顔があらわれる。

「ええとね、前にほら、亀の絵を描いていた人」

「ああ」

すぐに皐月はうなずいた。

「いるのか。どれ？」

「あの木の下」

「細身の？」

「そう」

涼一のたたずむ木陰まで、だいぶ距離はあるものの、皐月は三日より視力がいい。

「へえ。どんなやつ？ 興味あるな。紹介して」

二人の背中を押して、皐月が背後の部活仲間にかける。

「オレたちあっち行くわ。じゃあな」

「はあ？ ちょっとふざけんなよ、抜け駆け！」

「二階堂ずっるい」

「待ってよ、二人とも一緒にいようよー」

「知り合い見つけたんだ。悪いな」

不平の声を軽くあしらひ、挨拶を交わして彼らと別れる。

「で、どんな人？」

「涼一くんはね、あのね……」

途端に瞳をかがやかせて、千佳が熱弁をふるう。

「涼しげで、透明感があって、時折見せる物憂げな瞳がたまらないの」

すっかり様相は恋する乙女だ。

「話し方とかはひかえめなんだけど、なんていうか、まとう空気が凛としてきれいで」

皐月がぱちぱちとまばたきをする。

「そう、なんだ」

「うん。それでね、なんといってもすばらしいのは彼の描く絵で。引き込まれるような絵を描くのよ。青くてきれいな、海の絵を」

そうして木陰であからさまにさぼっている涼一のところへ三人で顔を出すと、涼一は皐月に、「おや」と目をとめた。

「どうも」

声をかけた皐月も、不思議そうに目をすがめる。

見つめ合ってどうしたのかと注視していると、皐月が、「しずくさんと同じ匂いだ」とつぶやく。

「しずくさん？」

ややあって思い当たる。皐月の年上の彼女だ。

涼一の視線が三日に移り、彼の瞳にぬくもりが宿った。

「やあ、三日さん。彼は？」

「幼馴染みの皐月です。涼一さんの絵の話をしたら、会ってみたいって」

「へえ。僕は浦和 涼一。はじめまして」

皐月も名乗り、会釈を返す。

「浦和さんの描く海の絵には、引き込まれそんな魅力があるって、大瓦さんも言っていました」

頬を染める千佳に、涼一が礼を述べる。

三日は皐月の脇腹をつついた。

「なんで敬語？」

「なんとなく」

こっそりとささやきあう。

「涼一さん、今は人魚の絵を描いてるんだよね。完成したら教えてほしいな。楽しみなの」

「それなら昨日遅くに完成したよ」

千佳が目丸くする。

「わあ、本当？」

涼一は穏やかな笑みをうかべて、うなずきかえした。

「夏休みに入るまでは、美術室に置いてあると思う。いつでも見においで」

「人魚……ですか」

物言いたげな目をして、皐月がきいた。

「そう、人魚。空想的だと笑うかい」

「いえ」

ぎこちなく、皐月が首を振る。

「オレも、見せてもらっても？」

「もちろんどうぞ。ああそうだ、三日さん、以前きみに絵を贈ると話していたっけ。終業式の日にも取りにおいで。きみにあげるよ」

「えっ」

三日は目を丸くした。

「約束したから」

遠慮の言葉を口にするより先に、涼一が牽制する。

「ありがとう……」

（人魚の絵を、私に？）

心中は複雑だった。とまどいと、引け目と、疑問と喜びが渦を巻いた。

（涼一さんの描く人魚はどんなだろう）

見てみたいと、強く思う。

見ると皐月も、気むずかしげな顔をしている。

「もらったら、見せて」

「うん」

たまたまなのか、それとも、人魚の絵だからこそ自分に渡そうというのか、問うてみたい衝動がある。

（不思議なひと）

何でも見透かしてしまいそうな、褐色の瞳と目が合った。

「いいなあ！」

ふいに横から叫ばれて、はっとふり向く。

顔を真っ赤にした千佳が、ふるふると拳を握っていた。

「いいな、いいなあ」

「わ、ご、ごめん」

うるんだ眼差しを向けられて、とっさに謝る。

涼一は、ちらとも動じず、千佳に微笑みかけた。

「千佳さんは、人魚の絵よりも、珊瑚や熱帯魚を描いたもののほうが似合いそうだね」

「いる？」と、問いかけられて、大げさなまでに首を振る。

「いいの？ 素敵、ありがとう！」

全身から、喜びがあふれてはじけそうだ。

と、ふいに、皐月が体をすくませ、耳をふさいだ。

「――皐月？」

満月の夜だったなら、全身の毛を逆立てそうな勢いで、目を見開き、固まっている。

額には汗がにじみ、呼吸も浅く速い。

「どうしたの。苦しい？」

そっと頬に触れてみると、しめった肌がひくりと震えた。眉間にぐつとシワが寄る。

「嫌な音がする」

「音？」

あたりを見回し、耳を澄ますが、聞こえない。

千佳と涼一にも視線で問いかけるが、思い当たる音は拾えていないようだ。

（皐月は耳がいいから）

聴かなくていいものまで聞こえてしまったのだろう。

両耳を覆う皐月の手の上から、三日も重ねて手でふさぐ。

（タオルがあればよかったな）

しばらくして、ため息とともに、皐月が全身から力を抜いた。

「おさまった？」

渋面をつくって彼方を睨み、顎をひく。

「ああ。ああ、まったく。制服のときなら耳栓あったんだけどな」
汗で額にはりついた髪をかきあげ、苛立ちもあらわに手櫛で乱す。

「ひどい目にあった」

ぼやく皐月に、千佳がとまどいの目を向ける。

「あの……？」

しかし皐月は音源の方に気がとられているらしく、千佳の疑問に答える様子はない。

「頭が痛かったの？ 大丈夫？」

心配げに見つめる彼女に、代わりに三日が口を開いた。

「皐月、他の人より可聴音域が広いの。たまにキーンって高い音が聞こえちゃうみたい」

「ええ、かわいそう。それで耳栓」

「うん。でも、もう聞こえなくなっただんだよね？」

聞かけると、曖昧にうなずき返す。

「そっか」

「どんな音だったのかな」

涼一が、動じた様子もなく問いかける。

皐月はようやく振り返り、考えながらぽつぽつと答えた。

「ぞっとするような音だったな。ピーっと鋭い、……笛のような？」

「ふうん、楽器の音。仮に違っただとしても、人為的に発した音なのだろうね」

「わざとだろうな。聞いたことのない、不自然な音だった。――迷惑な話」

皐月はそう言うと、持参していたゴミ袋を木の根元に置き、三日を見た。

「オレ、気になるから見てくるわ」

「どこだかわかるの」

「わかる。文句言ってやらないと、オレだけじゃなくて、きっと今のは動物とかも辛い」

「そう」

三日もトングとゴミ袋を重ねて置いた。

「私も行く。また鳴ったら嫌でしょう」

皐月はそれには返事をせず、肩をすくめて歩き出した。

「えっと、ミカ？」

「ごめん、ちょっと何の音だったのか見てくるね。千佳は涼一さんと待ってて」

「え！」

千佳が三日と涼一の顔を交互に見やり、眉根を下げる。

「三日さん、危なかったら戻ってくるんだよ」

千佳に手を振り、涼一に頭を下げて、三日は皐月の背中を追った。

第八話

茜が百々といったって真面目にゴミ拾いをしていると、場違いなコウモリが頭上を旋回し、茂みの向こうへと飛んでいった。誘うような態度に興味をひかれ、茜が百々のそでを引く。

「あたし、ちょっと見てくるわ」

百々も手を休め、茂みの先へと目を向ける。

「一緒に行きましょう」

「あら、なぜ？」

「好奇心って伝染するのよ」

二人分のゴミ袋をまとめて置き、その場を離れる。

「コウモリなんて初めて見たわ」百々が言う。

「ええ、とても不自然だったわね」

茜にとって、コウモリとは使い魔だ。

頭上を無言で通過するなど、通常考えられないことではない。

茂みの先は、小さな空き地になっていた。

木々が重なりあい、川原からの視線は遮られるつくりになっている。

そこに一人の男がいた。

八重樫の体操服をまとった、くせ毛の男だ。

「あらん、あなた昨日の坊やじゃないの」

校門の外で因縁をつけてきた無礼者だ。

（なあんだ）

とたんに関心が薄れ、引き返したい思いにとらわれる。

（彼って、あたしの好みじゃないのよねえ）

緊張のにじむ顔を見れば、彼が自分を待ち伏せしていたのは明らかだ。

感情をおもてに出す率直さは嫌いじゃないが、食指が動くほどかわいげのある面構えというわけではない。

茜の鼻にシワが寄る。

「またあなたなの。悪いけど、あなたとわざわざ遊ぶ気分じゃないのよね」

「遊ぶつもりは俺にもない」

彼は気合い十分といった態度で、茜の言には耳をかさず、手にしたハーモニカを口へと当てた。

ひゅっと空気が流れ込む。

「は——」

全身がビリビリと震えた。一瞬、何が起こったのか把握できなかった。

男の奏でたハーモニカの旋律は、犬笛にも似た暴力的なまでに高音域の波動だ。

体内の全ての血液を泡立てるかのような、おぞましい音が鼓膜といわず肌といわず、四方八方から押し寄せ、茜をさいなんだ。

（気持ち悪い……っ）

たまらず地面に膝をつく。

人間の耳にはとらえられない音なのか、百々にはなんら陰りがないようで、

「え？ やだちょっと、どうしたのよ」

ハーモニカを吹く男の口元と、うずくまる茜を交互に見やって、茜の背に手をかけた。

「ねえ、キミ、何をしたの。やめてよ、つらそうじゃない」

「そうとも」

不審をあらわにする百々の声にかぶって、木陰からもう一人、男に声をかける人物がいた。

「高槻くん、ストップだ。奏まで苦しんでる」

万理万里の体操服姿の少年を抱えて、転げ出てきたのは、かつて奏に目をつけたときに共にいた、友人だという少年の――二年ぶりに目にする少しだけ成長した姿だった。

「なんだと」

高槻と呼ばれた男は、険しい顔をしてハーモニカをおろした。

「そいつにも効いているのか」

「知らない。急に苦しみだしたんだ。高槻くん、きみ何をしたのさ」
柎木の問いに、高槻は眼差しを鋭くする。

「柎木、離れろ。三鷹といったか。おそらくそいつも吸血鬼だ」

「奏はちがう！」

青ざめる奏を支え、柎木はきっぱり否定した。

「奏は――」

「いいや。吸血鬼の持つ血小板にしか作用しない音のはずだ。身動きがとれなくなった時点で、証明されたようなものだ」

（やだもう、全然力がはいらないうじゃないの。やっかいなものを持ち出さないでよ）

音はやんでいくはずなのに、体の内側で虫が這っているかのような不快感がやまない。

「う……」

うめくことも満足にできず、茜は身を震わせていた。

背中をさすっていた百々が、小声でたずねる。

「あいつ、敵なの？ やっつけようか」

体操服の内側から、きらりと光を反射する小刀があらわれ、百々の手に握り込まれる。

「うん？ どうした」

しかし不穏な空気を察知したのか、百々がナイフを放つよりかはやく、高槻は再びハーモニカを構えて吹いた。

身構えた茜の耳に、次はたしかな旋律が響く。

打って変わった低い音階の、ゆったりとしたメロディーだ。角笛の音を思わせる、にごった音が反響をくりかえす。

やがて高槻が吹き終えると、今度は柾木と百々の膝が折れ、二人の体は地面に倒れた。

高槻が、いつのまにやら装着していた耳栓を取り去り、口を開く。

「今のが、人間の動きを封じる音。つらくはないだろう？ 五分もすれば動けるようになるから、おとなしくしてろよ」

柾木の支えをなくした奏が、体をふらつかせる。

それでも立っていられるということは、最初の音波の影響が、茜よりも薄いということなのだろう。

「高槻……」

かすれた声で話しかける気力もあるようだ。

「三鷹くん、まさか君が吸血鬼だなんて。理解者が得られたかと思ったのに、残念だよ」

高槻は奏に歩み寄ると、腕を取り手荒く引いて、地に伏す茜の上に重なるように突きとばした。

ぐう、と痛みをこらえる声もれる。

「くそ」 奏の罵声が耳を打つ。

「吸血鬼に油断は禁物。いつ動けるようになるかわからないからな。

手早くすませちまおう。溜血丸、ひとつしかないんだ。二人まとめて浴びてくれ」

そう告げた男の取り出した丸薬を目にして、茜はくらりとめまいをおこした。

（最悪ね）

紅くつややかな、ビー玉サイズの丸薬だ。

薄く硬い膜の内側に、煮詰めた人魚の血がつまっている。

膜が破れて血を浴びると、――人魚の血は猛毒だ。たいていの者はひとたまりもなく命を落とす。

茜のように純正の吸血鬼ならば深手を負うだけですむだろうが、いまだ人間でしかない奏の助かる見込みはない。

（冗談じゃない。少年はあたしのものよ）

手袋をはめた手で慎重に丸薬を扱う男に殺意を抱く。

早合点をして、自分の所有物に害をなそうなどと、許せる所行ではない。

「ふざけないで」

そう口にしたつもりが、喉に力がいらず、声にならない。

男の手の中の丸薬に、視線が吸い寄せられる。

（なんて忌々しい）

油断していた己に腹が立つ。

どうにか逃れる手段はないかと思考を巡らせる茜の耳に、草をかき分ける音とさわやかな声音がひびいたのは、このときだった。

奏は見た。

新たに姿を現したのは、柎木のクラスメイトだという皐月だ。日本人ばなれした明るい髪が陽にすけて、華やかな立ち姿はいっそ腹立たしいほどだ。

幼馴染みの三日までひっさげ、こちらの苦境とはうらはらに涼しげな登場だった。

（まあいい）

溜血丸とやらの威力のほどは知らないが、自分がピンチに立たされているというのは嫌でもわかる。

下敷きにした茜から、焦燥感が伝わってくるほどなのだ。

場を転じてくれるのならば、何者だろうとかまわなかった。

成り行きを見守る奏の眼前で、皐月がのんきな声を出す。

「こんなところでツノ突き合わせて、穏やかじゃない雰囲気だけど、なにやってんの？」

「二階堂」

高槻のおもてに動揺がはしる。

（知り合いか）

そういえば、どちらも柎木のクラスメイトだという話だ。

クラスメイトといえば、なぜか突然現れた三日も、目を丸くして奏を見ている。

「三鷹くん……」

つぶやく声が耳に届く。

（そういや、望月さんには情けないところばかり見られているな）
歩を進めようとする三日をおしとどめて、皐月が高槻に問いかけた。

「事情は知らないけどさ。見たところバタバタ人が倒れてて、お前
すげえ悪いヤツみたいに見えるんだけど。どうなってんだ」

高槻が眉をひそめる。

「悪い。部外者は下がっててくれないか。後で説明するから、たのむよ」

「って、言われてもな」

「近づくと、危ないんだよ、お前ら」

皐月が首をひねる。

「危ないって、もしかしてそれか？ お前の持ってる丸いの何だ」
口を閉ざす高槻に代わり、奏が口をはさんだ。

「吸血鬼退治のお道具らしいな。溜血丸とかいって、人魚の血を丸めたものだと言明してた。使い方までは知らないが、皆がびくついてるから危険な物なんじゃないか」

「人魚？」

皐月の後ろで、三日がいぶかしげな声をあげる。

「うわあ」と、皐月も目を瞬いた。

「人魚の血って危険物なんだろう。そうとう強い毒性があるって聞いたことあるぜ。やばくねえかそれ」

「だから下がってろって言ってるだろ」

語気荒く高槻が言う。

「時間がないんだ。暴れ出す前に手を打たないと」

茜の体がびくんと跳ねた。

高槻がこちらに向き直り、手をふりかぶる。

溜血丸が、紅い光を照り返す。

（ああ――）

陽に映える朱色が、禍々しい物だと今ならわかる。

高槻の手によって丸薬が投げつけられ、破壊がふりそそぐイメージ

が如実にわくののに、硬直した体はびくとも動かず、ただその瞬間が訪れるのを待つだけだ。

「これで終わりだ」

高槻が告げた。

せめて、玉が飛んでくるのを見届けようと思った。

「だめよ！」

しかしなぜか視界をふさいだのはふりそそぐ金の海で、――地面に頭部を打ち付けた痛みの中で、奏はそれが茜の髪なのだと思い当たった。

立ち位置をひっくり返し、奏の上に茜が覆いかぶさっていた。

「ああもう！ 行け、三日」

叫ぶ皐月の声もした。

金の髪の彼方から、放たれた紅い玉が垣間見えた。――同時に、急接近する黒い人影も。

混乱する意識が状況を把握するより先に、体が潰れるような衝撃と、大きな叫び声が耳をうった。

「二階堂！」

茜の体にうずもれて、激しい痛みにも身をよじった。

「少年、命あつての物種よ」

茜の発言をうけて、ようやくまぶたをこじ開けた奏の視界にはいつてきたのは、真っ赤な血に身を汚した、望月 三日の姿であった。

第九話

高槻という男が丸薬を投げると同時に、皐月に体を投げ飛ばされた。
(いやああああ……!)

皐月はコントロールがいい。投げるのも蹴るのも、それはもう昔からだ。

空を切った三日の体は、奏をかばう茜の背中にヒットした。

ぶつかる直前、飛んできた丸薬をとっさに受け止めた覚えがある。

手のひらで玉が割れ、血がはじけた。

「いったあ」

強く打った背中もさることながら、目に入った血のしぶきがじんじんとしみる。

「皐月、ひどいよ」

目元をこすって体を起こす。

やけにやわらかいと思ったら、奏と茜をクッションにしていたようだ。

助け起こそうとして、両手が赤く染まっていることに気づき、思いとどまる。

(ああ、こういうの見たことがある)

小さな丸薬にどれだけの血液がつまっていたというのか。潔いほど血にまみれた手のひらは、さながら十夜の左手のようだった。

ひとまず体操服のすそで手と顔をぬぐい、立ち上がる。

苦痛に顔をゆがめる奏と目が合った。

「……大丈夫？」

「いや」

力なく奏が首を振る。

「ごめんね」

皐月のせいだと思うのだが、代理でひとまず謝罪をしておく。

奏の上でつぶつぶしていた茜が、首だけひねって苦笑をもらした。

「あきれた力技ね。あやうく少年にケガをさせるところだったじゃないの。――でもまあ、助かったわ。あなた、平気なのね」

そうして、しっしつと、追い払うように手を振った。

「もう少し離れてちょうだい。あたしまだ思うように動けないのよ。あなた血まみれだし、触れてしまったら困るじゃない」

地面に点々と飛沫が飛んでいるものの、どうやら二人に害は及ばなかったらしい。

（そこまで毛嫌いしなくてもいいようなものだけど）

いくら人々が口をそろえて人魚の血は有害だと主張しても、あいにく三日には実感がわかない。

（人魚そのものが嫌われているようで、少し傷つくんだよね）

しかし茜のおもては真剣で、言われるがまま、一步下がった。

「なぜだ。なぜ平気なんだ」

声がしてふり向くと、高槻が白い顔をして三日を凝視していた。

「ありえない。人魚の血を浴びて平然としているなど、ありえないんだ。ましてや、素肌に直接接触して、……どうなってる」

見ると、高槻の膝がガクガクと震えている。

まずは落ち着いてもらおうと向き直った三日に、彼は顔を引きつけて声を上げた。

「寄るな、化け物！」

「おいこら、ふざけんな」

高槻に歩み寄った皐月が、ガツンとゲンコツを振り下ろす。

悶絶する彼を見下ろし、皐月は説教を始めた。

「お前な。ひとの身内つかまえて、化け物呼ばわりとはどういうことだ。物騒な物振り回してるのはお前だろ。何を取り乱してるのかは知らないが、こっちはお前が加害者にならずにすむように体はって止めてやったんだ。オレのあつい友情に感謝こそすれ、罵倒するとはいい度胸じゃないか、なあ」

「痛て、痛ってえ、マジで痛いって！」

「三日に謝れ」

「何で俺が。邪魔したのはそっちだろ」

皐月の眉がはねあがる。

「高槻が暴走するからだろうが」

「どうすんだよ、溜血丸使っちゃまって。吸血鬼を野放しにするわけにはいかないってのに」

「ああ」 皐月の瞳がすっと冷めた。

「高槻お前、そこのお姉さんを捕まえたかったのか」

なるほどな、とつぶやく皐月に、高槻が怯えと焦燥の混じった声で言いつのる。

「そうさ、だが打つ手がなくなった。ヤツは牙をもっているのに、どうしたらいい」

「そうだよなあ。よし、まずは落ち着くか」

ポンと皐月が肩をたたく。

「そんで、ちゃんと三日に謝るんだぞ」

「悠長なこと言うな！」

取り乱す高槻に、ツヤのある女性の声がかけられた。

「自力で落ち着くことができないのなら、無理にでも落ち着けるように周囲が手伝ってあげればいいのよ」

ふらりと立ち上がり、歩いてきたのは、音無 百々だ。

「やっと動けるようになったよ。奏、大丈夫？」

柾木もよろめきながら、奏の元へと駆けつける。

百々は高槻の前に仁王立ちをして、皐月に声をかけた。

「生徒会の一員として、彼に話をききたいの。キミ、彼の両手を少しの間持っていてくれない？」

「はい。こう？」

「ありがと」

皐月が高槻の両手をとると、百々はポケットから赤い細縄を取り出した。

「やっと実践できるわ」

かすかに声がはずんでいる。

「おい、よせ！」

くるくると巻かれる縄を見て、高槻は暴れるが、皐月のつかんだ両手はびくともしない。

手、胴、足と、キュキュツと手際よく巻かれていく様は、まさに職人芸ともいえるもので、三日はひそかに感心した。

「ほうら、きれいに結べたわ」

全体を見直し、満足げに胸をはる。

「橘さんに教えてあげなくちゃ。ちゃんと技術を活かせたのよって。あの人、てんで懐疑的なんだもの」

拘束された身柄を百々に引き渡した皐月が、呆然とつぶやく。

「すごいな。見とれちゃったよ」

「修練のたまものよ」

ほめられ百々はほこらしげだ。

「俺をどうするつもりだ。それ以上にお前ら、その吸血鬼をどうするつもりだ」

体の自由を奪われた高槻がほえる。

「オレも、あまり手荒なことはしないでほしいんだけど。友人としてはさ」

皐月が言うと、百々は周囲を見回し、うけおった。

「いいわ。当事者同士で話し合いの場を設けましょう。大丈夫よ、だって誰も実害をこうむってないもの。ひとまず、そっちの動けない二人もまとめて、身柄は移動させましょうか」

百々が今度は携帯を取り出し、誰かに通話で人手をたのむ。

「九条を読んだわ。すぐ来てくれるって。……ところで」

百々が検分の眼差しを三日に向ける。

「望月さん、ひどい格好ね。あなた体調は平気なの？ やっぱり近づいたら危ないのかしら」

「いえあの、ええと。どうでしょう」

返答に困り、きよどきよどする三日に代わり、茜が口をはさむ。

「空気に触れると毒性はとぶはずよ。たぶんそろそろ、触れても平気な頃合いね」

「へえ、そうなんだ」

つぶやくと、茜がうろんな目を向ける。

「どうしてあなたが知らないのよ」

「そんなこと言われても」

世間一般の常識ではないと思うのだが。

「なんにせよ、血まみれのままってわけにはいかないだろ。三日、オレの着ろよ。手と顔もどこかで洗った方がいいな」

脱いだ服を差し出し、皐月が首をひねる。

「だけどさ、ちよっとドキドキするよな。うっかり川とかで洗った

ら、魚浮かんできそうじゃないか？」

「おどかさないでよ」

人魚の体液は毒にも薬にもなるという。強い毒性を持つ反面、解毒作用も有しているのだ。

もしかしたら、川魚だっていつそう元気になるかもしれない。

そんなことをつらつらと言いつつうちに、生徒会書記の九条が駆けつけ、他二名の男子生徒とともに高槻、茜、奏の三名をかつぎあげた。

人目をさけて駐車場に運ぶというので、奏につきそうという柎木とあいさつを交わし、三日と皐月は別行動をとることにした。

別れ際、百々が高槻に、「三年生がいなくてよかったわね。容赦ないのよ、うちの副会長。命拾いしたねえ」と、こぼしていたのが心に残った。

手と顔をぬぐい、皐月の服を上だけ借りて、千佳と涼一の元へ戻った。

道々気づいたのだが、血痕を残しているよりマシだというものの、他校の体操服を着ているというのは、えらく人目を引くのだった。戻ったところにはゴミ袋はばんばんにふくれていて、千佳が張り切って三日たちのぶんまで働いてくれたというので、お礼を言った。

「危ないことはだめだと言ったのに。困った人だね、三日さんは」
顔を見るなり涼一が眉をしかめる。

「ミカ。服、どうしたの？」

「汚しちゃったから、皐月に借りたの」

「ケガはないかい」

問いかける涼一にうなずき返して、ずっと背筋が寒くなる。いつもと変わらぬおだやかな微笑を浮かべているのに、まとう空気だけがひややかなものに転じたような、そんな気配を感じたのだ。

「涼一さん？」

（怒らせちゃったのかな）

心配する三日の頭を、ひんやりとした空気をまとったまま、涼一はよしよしとなでた。声を潜めて言葉をつぐ。

「ケガがないならいいんだ。けれど、少し目を離したすきに返り血を浴びてくるなど、君はけっこう危なっかしいね」

「えっ。まだ汚れていますか」

「いや。でも血の匂いが残ってる」

思わず肩口をかいでみる。

「元気があるのはいいけれど、ほどほどにね」

ふっと空気が軽くなる。

体を離すと、涼一は自分のゴミ袋を手にして背を向けた。

「じゃあ僕はこれで」

立ち去る背中に、千佳がすがるような目を向ける。

半端にふりあげた腕を、所在なさげに動かして、声をもらした。

「あ……。待って、待って」

「千佳？」

駆けだした千佳に呼び止められて、涼一が足をとめた。

「あの、あたし、涼一くんにききたいことがあったの」

「うん、千佳さん。どうしたの」

「あのね、あたしね」

じわじわと、千佳の頬が赤みを増した。

握った拳に力がこもる。

「今日、一緒に作業ができてうれしかったの」

「そうだね、僕もいろいろな話が聞けて楽しかったよ」

「ううんと、そうじゃなくって、あのあたし」

「うん」

「あたし、涼一くんが好きなんだ。つきあってくれないかな」

（うわあ、千佳。うわああ）

思わず三日も前のめりになり、緊張の汗をながした。

「おー、告白」

皐月がほほえましげに二人を見やる。

「僕？」

涼一が首をかしげると、千佳はぶんぶんとうなずいた。

「そう。そうなの。現時点で意識されてないのはわかってるんだけど、考えてみてほしくて」

「そうか」

まばたきをする涼一に、千佳の喉がごくりと音をたてる。

「こんなにかわいらしい娘さんに好意をよせられるのは久しぶりで嬉しいよ。申し出は受け入れたいところなんだけど、実は僕、結婚してるんだ」

（え？）

涼一は言った。

「妻とはもうずっと会えずにいるんだけれどね。あの人、嫉妬深いから。ごめんね」

「えええええ！」

三人のすっとんきょうな声があたりに響いた。

さらりと澄んだ笑顔を残し、涼一は立ち去った。

振り返ることなく遠ざかる背中、啞然とする三日たちの混乱ぶりなど気にもとめてはいないようで、そのとらえどころのなさ、両手にすくった水のようなと思う。

「結婚」

目を見開いたままの千佳がつぶやく。

「待て、いくつだ。同い年じゃなかったのか」

皐月も釈然としない様子だが、渦巻く疑問に答えられる人物は、この中にはいないのだった。

どっと疲れた気分になり、学校に戻った放課後のことだ。

「よう、お嬢ちゃん。見てたぞ、さっき校歌を歌ってなかっただろ
う」

「京堂さん」

呼び止めたのは、体操部の京堂だ。

「ひとりだけ男物の服を着ていたし、目立ってたからな」

「はあ」

ゴミ拾い終了後、広場に集合した両校の生徒は、ブラスバンド部の演奏を聴いたあと、互いに校歌を歌って解散した。

三日の鞆の中には、血に汚れた自分の体操服の他に、皐月の服も入っている。

「少し、疲れてしまっ」

千佳は実行委員の反省会に参加している。

沈みがちな彼女が心配で、待っていようと思ったのだが、一人で気持ちの整理がしたいから先に帰ってほしいと言われたのだ。

「京堂さん、失恋したことってありますか」

「いいや、ないね。なんだ、好きなやつがいるのか？」

京堂の瞳が楽しげな光を帯びる。

「恋する乙女、いいねえ」

「私じゃありません。友達が」

「なんだ、違うのか」

「どうフォローしていいのかわからなくて」

つまらなさそうに京堂は肩を回した。

「放っておけばいいんじゃないのか」

「そういうものなんでしょうか」

ため息をつく三日の額を、彼は小突く。

「ひとの心配をしてる場合じゃないかもしれないぞ」

「どういう意味です」

からかいまじりの表情をあらため、京堂は顔を寄せた。

「美術部に行ったんだ。知ってるだろう、浦和 涼一」

（涼一さん？）

「このところ奴が描いていた作品が仕上がったというので、見に行っただ。できればを確認してほしいと依頼を受けて」

「そんなことまで引き受けるんですか」

「ああ。それで、見てきたんだよ。人魚の絵を」

はっと息をのむ。

「どうでした」

「似てた」

まっすぐな眼差しが三日をつらぬいた。

「そっくりだった。お嬢ちゃんに。モデルを引き受けたのか？」

「いいえ」

「そうか」

京堂の眉が寄せられる。

「だったら、ささやかなアドバイスだ。当分、身边には気をつけたほうがいいかもな」

「なぜです」

見つめ返す三日に、京堂は告げた。

「似ていたんだ、人魚に。まるで、——本物のようだった」

第九話（後書き）

第四章はこれでおしまいです。
次話から最終章に入ります。

第一話

九十九 一樹は収集家だ。

いつか誰かが使うかもしれないと目にとめたものは、見過ごすことなく手に入れようとする。

飾るためではなく、使うために集めているのだ。

そのため、九十九のもとには頻繁に人が訪れる。

相談には気安くのるし、必要とあれば物品を貸し出すこともある。

そうして物事が回っていくのを見るのが好きだ。

気分は、出し物を眺める観客に似通っていて、そうである以上、演目が風変わりだったり目新しかったりすることを、ことのほか喜ぶ。

この日も馴染みのある学園の生徒が二名、九十九のもとへと足を運んでいた。

まるで印象の違う双子。

仁木 灯と、仁木 風太だ。

血色が悪く線も細い灯に対し、風太ははつらつとして体つきも俊敏そうだ。

季節は夏で、気候の変化の影響を受けやすい灯が、このときを待ちわびていたことを九十九はかねてから知っていた。

双子は火炎の妖精だ。気温が高いと、それだけで生き生きとします。梅雨の湿気を受けて体調を崩していた灯が、身を清めて復活を遂げたいと願うのももつともなことだった。

「いいでしょう。ならばこれを差し上げます」

差し出したのは、水晶の玉だ。

子どもの拳ほどの大きさの、透明な玉の中央に、赤く炎が渦巻いて

いる。

灯の表情がぱつと輝く。

「コレクターさん、ありがとうございます」

「ただしひとつ注文が。召喚は学園内でおこなってください」

「校舎の中でということ？」

「いいえ。建物の中でなどと無理は言いません。敷地の中ならどこでも構いませんよ」

「そうよね、屋外じゃないと。火事になったら困るもの」

「ええ。危なくないところで火にくべてくださいね。さっそく、明日にでも」

「そうするわ。ありがとう」

喜びをあらわにする灯のとなりで、風太もふてくされた表情で頭をさげる。

外見はどうあれ、この二人は、嘘がつけず直情的なところがよく似ていた。

今も風太は、九十九の助力を得ることに対し不満顔で、それでも灯が元氣を取り戻せるとあって安堵もしつつ、——でもやはり自分の力だけで妹を助けてやれないのがくやしいと、顔を見ているだけで感情の推移まで見てとることができる。

「終業式で、元気なあなたに会えるのを楽しみにしていますよ」

「ええ、もちろん」

重ねて礼を述べ、灯と風太が退室する。

入れ替わりに、彼らと同学年の、引き締まった体をもつ長身の若者が入ってきて、口を開く。

「餌付けですか」

「おねだりをきいてあげただけだよ」

いくぶん軽薄そうは雰囲気の彼は、体操部所属の二年生、京堂 友哉だ。

職務に忠実な九十九の子飼いで、小回りのきくとてもよい子だ。

先ほどの二人も、春先に精霊を所望した九十九のところへ連れてきたのは京堂だった。

「さて。万理万里の終業式は明後日だろう。実は着ていくもので悩んでるんだ」

サテンのスリッパドレスのすそを揺らし、九十九は立ち上がった。赤くなめらかな生地は、最近のお気に入りだ。

クローゼットへ向かう後ろに付き従いつつも、露骨に興味のなさそうな声で京堂が言う。

「何を着ていたって同じでしょう」

「そんなことはないよ。若々しい君たちはそうでも、着飾ることを知っているのが大人というものだ」

「ただの着道楽じゃないですか」

ドレスの生地に合わせて選んだ、赤いルージュのひかれたくちびるをつり上げる。

「経験をつませてやろうというのだよ。君も後学のために、女性の装いを見立てることくらいできたほうがいいだろう」

京堂が肩をすくめた。

「だったら、場をわきまえた服装がいいと思いますね。やはりスーツじゃないですか？」

「つまらないか？」

「学校ですよ。終業式の来賓なんて、そんなものでしょう」

「君は意外と頭が硬いね」

ずらりと衣装をならべながら、はっぱをかける。

「ほら、もっと身を入れて選ぶといいよ。なんといっても、人というのは見られて綺麗になるのだから」

「オレがいまさら見るまでもなく、あなたは綺麗でしょうよ。ああ、じゃあこれにしましょう」

そう言って京堂が指さしたのは、フリルのたくさんついたブラウスと、黒のタイトスカートだった。

九十九はぼやいた。

「ほんと君って、無難だよね」

この日、学校はジャングルと化していた。

日よけの帽子をかぶり、首にはタオル、手には軍手をはめて、袋を片手に三日は指定の場所へと足を進める。

終業式を明日にひかえ、一昨日から三日間、学力テストが実施された。

テストがあけて、本来ならば晴れ晴れとした気分で帰宅できそうなものののだが、万理万里学園では、全校生徒一丸となつての草刈りが通例となっているらしい。

クラス担任に言われるがままに軍手や帽子を用意してきたが、人によつては鎌や草刈り器を持ち出している者もいる。

それほど、草が茂って目に余る。

（梅雨の頃を思い出すな）

渡り廊下からあたりを見回し、遠い目をする。

掃除当番の班別に、ブロック分けされた範囲を手当たり次第に抜いていくよう、指示されている。

三日がクラスメイトとともに割り振られたのが、この渡り廊下の近辺なのだが、たったの五名でどうにかなるような草の量ではなかった。

「よし、やるか」

今日の放課後で片がつかなければ、明日の終業式後に持ち越すこととなっている。

それはさすがに気が乗らないのか、どうにか本日中に終わらせたいという皆の意気込みが伝わってくる。

（どうしてこう、増えるとなると見境もなく増殖するんだろう。この学校）

三日前は、ここまで荒れてはいなかった。

雑草が目立つ程度だった景觀が、一日、二日とたつ間に、足の踏み場もないほど草だらけになったのだ。

目につく植生は、近辺の山中にあるものとそう変わらない。

ただ、繁殖力だけが並外れている。

梅雨時期にあったキノコの大量発生を彷彿とさせるが、キノコと違って、好んで刈り取っていく者もない。

（おとぎばなしみたい）

昔話に出てくる豆の木とか、柿の木とか、そういったものを連想させる成長具合だ。

不思議なことに、ほうぼうに点在する園芸部が手にかけている花壇の周辺には草は生えない。

裏を返すと、土が露出している箇所、花壇以外の全ての場所に草

が茂っているということだ。

三日は校舎の壁に沿って、草をちぎってはちぎっては、持参した袋に詰めていく。

およそ十分おきに、抜いた草を回収していく係の者が巡回してくる。今日ばかりは全ての部活動が休止するらしく、集めた草はグラウンドに山積みされるようだ。

（えらい量になりそうだけど、集めてどうするのかしらね）
気にはなるが、目先の仕事を片づけるのが先だ。

「おう、やってるな」

端から皆でもくもくと手を動かしていると、草刈り器をたずさえた担任の斉藤がやってきた。

「先生！」

クラスメイトの間で、歓迎の声があがる。

「よし、お前ら少し下がってろ」

無骨で大柄な男性教諭だ。

常より迫力のある風貌をしているが、これほど頼もしく見えるのは初めてだった。

空気を震わすけたたましい機械音がはぜる。

生徒を渡り廊下に避難させると、斉藤は草刈り器を動かして、大まかに草をなぎ倒していった。

草いきれとともに、大量の土埃が舞う。

（うわあ、すごい）

抜いても抜いても終わりそうにないと思えた背の高い雑草が、手当たり次第に倒れ伏していく。

（機械って、すごいなあ）

音もすごいが、効果もすごい。

「先生、かっこいい」

隣に立つ女生徒が、きらきらした目で斉藤を見つめる。

まったく、三日もそう思う。

生徒の熱い視線に見守られて、あらかた中央部分の草刈りを終えた
斉藤が、機械を止めて戻ってきた。

首からかけたタオルで、汗まみれの禿頭をぐるりとぬぐう。

「壁に当たるから、ふちの方は手作業でやらないとならんぞ」

「はい！」

「じゃあな、がんばれよ」

次の現場へ向かうのだろう。

土で汚れたジャージの裾まで、輝いて見えた。

「ありがとうございます」

声をそろえて、礼を言う。

「よかった、なんとかかなりそうだな」

口々に安堵の言葉がもれる。

「まずは刈った草をどかさないと」

一面、草の絨毯だ。

ちやうど巡回してきた回収係に、運び手を追加してほしいと声をかけ、三日たちは明るくなった表情で、せっせと草をかきだした。

結論からいうと、それでも残った草をむしってきれいにするのは重労働だったのだが、どうにか夕刻には仕事を終えて後片付けにはいることができたのである。

「おつかれさま！」

生徒会から差し入れされたスポーツドリンクを飲み、口々にいたわ

りの声をかける。

体操服は土まみれだ。

日に焼けて、赤らんだ顔をしている者も多い。

まだ作業におわれているグループも多いのだろう。

あちこちで、草刈り器の稼働音が聞こえてくる。

「疲れたー。早く帰りたいね」

「着替える前に、シャワー浴びたいよ」

着替えの制服は、教室の机の上だ。

作業を終えた者から、着替えて自由に帰宅することができる。

同じグループの面々と、手を洗い、教室に戻ろうとする道すがらのことだった。

「見つけた。望月さん、いいかしら」

声をかけてきたのは、テストの前日まで入院していたという八又さやかと、同じ家庭科部の幽霊部員、原田 正樹だ。

（うわあ）

しぶしぶ三日は、足を止めた。

原田はともかく、さやかとは因縁めいた関わりしかない。用件など、とてもまっとうなこととは思えなかった。

第二話

ともに草刈りにあたった生徒に別れをつけ、三日は兩名に導かれ、再び屋外へと足を運んだ。

既に草刈りを終えたとおぼしき、人気のない中庭だ。

「退院出来たんだね」

さやかに会うのは、水晶の一室に閉じ込められた夜以来だ。重傷を負ったように見えたのに、まずまず早い回復だった。

「ええ。まったく、ひどいめにあったわ」

対峙するさやかの瞳からは熱っぽさが抜け落ちている。

いつぞやの惚れ薬の効果は無事に退けられたようだ。

今の彼女からは、露骨な敵意が感じられる。

（そうそう、こういう人だった）

睨まれて、なつかしく思う。

それはそうと、原田がともにいるというのはどういうわけだろう。

「ふたりとも、知り合いだったの？」

「いいや、コレクターさんのところで居合わせたんだ。たまたま互いに用があってね」

「コレクターさん？」

「そう。極上のセレクトショップのような、すばらしいところさ」

原田は上機嫌だ。

「希少な食材をわけてもらってね。八又さんとはそこで知り合ったんだけど、きくと彼女もぼくと同じで望月さんに用があるというから、一緒に来たんだ」

(コレクターって、もしかして)

聞いた名だと思っていたが、ようやくそれが、家庭科部部長の芽衣が狙われたときに、京堂が上役の名としてあげていた人物と同じかもしれないと気づく。

「そうなの。それで、用というのは？」

原田の顔が、ぱっと輝く。

「そうそう、それなのだけど、望月さん。血をわけてほしいんだ」

「……またそんなことを」

「ちよつとでいいんだ。これにちよびつと」

そう言って原田はポケットから試験管を取り出した。

「ね、たのむよ」

「前に、私の血はあげられないって言ったと思うんだけど」

「たしか毒になるんだよね。大丈夫、そのまま飲んだりしないから。コレクターさんがね、きちんと手を加えれば、すばらしい薬にもなるって」

ひたむきな熱意に押されて、半歩下がる。

「そういう問題じゃないんだけど」

「おねがい！ 正直、これってコレクターさんに提示された条件なんだ。望月さんの血と引き替えに、秘蔵の珍味をわけてくれるって！」

「そんな。いやです」

「そこをなんとか。望月さんの血液だったら、きつとどこに出してもはずかしくないよ。だって、そんなに肌がきれいなんだもの」

「肌は関係ないでしょう」

「なに言ってるの、あるに決まってるじゃないか。肌はね、健康のバロメーターでもあるんだよ。血液はね、大事なの。すつごく」

「欲しい」と「だめ」の押し問答になったところで、ずっとさやかが前に出た。

「時間の無駄ね。ちょっとあなた、望月さんを押さえないよ」

「え、ぼく？」

「そう。許可なんてとろうとするから時間がかかるの。必要なら、さっさと取ればいいじゃない」

さやかは苛立ちを隠そうともせず、三日の肩を原田のほうへ押しのけると、小型のツールナイフを取り出し、せまった。

「ほら、瓶を出して。どこを切るの。やっぱり指先？」

「ちよっと、八又さん、待ってよ」

「待ちくたびれたわ。あたしだって話があるのに、全然先に進まないじゃない」

「だからって」

「ほら、とっとと手を出す」

背後から原田が腕を押さえた。

ためらうそぶりもみせずに、さやかがナイフをふるい、三日はあわてて身をよじって逃げ出した。

「いいかげんにして。血をあげるわけにはいかないって言ってるじゃない」

伸びてくる腕を、払って、払って、後ろに下がる。

追い詰められないよう、ひらけた方へ向かって後ずさると、どんと背中になにかが当たった。

どこからふってわいたのか、覚えのある声が耳元ではぜる。

「おっと。これはまた、物騒だね」

よほど気配を消すのが上手いのか、いつも唐突に現れる。

「京堂さん」

背中から腕がまわる。

「またあんたなの」

吐き捨てるようにさやかが言った。

（また？ ……ああ、そうか）

以前にも、教室を出ようとしたところで彼にぶつかったことがあった。

あのときも、さやかは一緒だったのだ。

からかい混じりの笑い声が至近距離であがる。

「上級生として、見過ごせないだろう。校内で刃物を振り回しちゃいけないよ」

「関係ない人は首をつっこまないで」

「それが、関係はあるんだよね。オレも、このお嬢ちゃんに用があるんだ」

おとなしく抱え込まれて、三日は思う。

物怖じせずにこうしてべたべた触ってくる人間は彼くらいのものだ。独特の距離のとりかたにとまどいはするが、基本、他者と触れあうのは嫌いじゃない。

（でもね。夏は暑いわ）

皐月ほどではないにせよ、京堂は体温が高かった。

「あたしが先。じゃまよ、どいて」

「わあ、八又さん！」

さやかがナイフを構え直し、京堂に向けてふりかぶった。

脇で、原田がすっとんきょうな声をあげる。

京堂は無言だった。

三日を離すと、押しのけるように前へ出て、さやかの手首を払いの

ける。

ゴツつとにぶい音がした。

「いっ……！」

うずくまるさやか足元に、ナイフが落ちた。

「うわあ、痛そう。大丈夫？」

原田が青い顔でうかがう。しかし、さやかはそれ以上に血の気の失せた顔をしていた。

ひくひくと喉が鳴っている。

（これは……、痛いわ）

ケガがなおったばかりだというのに、災難だ。

容赦のない手刀にみえた。骨がいつてるかもしれない。

拾ったナイフをたたんでしまった京堂は、「危険物は没収ね」と言
って、ポケットにしまう。

うずくまったさやかからは、返事もない。

「さて。お嬢ちゃん、オレに時間をくれないか」

きびすをかえした京堂は、三日の肩を抱き、歩き出す。

それきりもう、後に残った二人を振り返ることはない。

切り替えのはやい人だ。

「歩きながら話そう」

校舎に沿って歩いていくと、まだ草刈りを終えていない生徒をちら
ほらとみかける。

たいへんだなと思うが、自分もひとを思いやるゆとりなどないよ
うにも思う。

「今日は屋外作業だったから、皆、赤い顔をしてるな」
同じ方向に視線を向けていた京堂が、口をひらく。

「天気がいいから、暑くてたいへんでしょうね」

「ひとごとみたいだな。お嬢ちゃんは暑くなかった？」

「暑いですよ。今もちろん」

「見えないな。さらりと白い顔をしている。日には焼けないほうなのかい」

「ええ、そうですね。あまり」

腕に京堂の指が這う。

上腕で、そでをぺろりとまくられた。

「日焼けのあとが残っていない。本当に焼けないんだな」

「京堂さんは焼けていますね」

それには彼は返事をせず、

「――人魚の絵は見たかい」

本題なのだろうか。さっと話を変えてしまった。

「見ました。明日、取りにいくんです。私にくれるというので」

「へえ、もとかからお嬢ちゃんにあげるつもりで描いたのかな」

「それは違うと思います」

京堂が目線で続きをうながす。

「似ていると京堂さんはいうけど、あれ、モデルは私じゃありません」

「浦和がそう言った？」

「いいえ。でもそれくらいわかります」

涼一に完成したという人魚の絵を見せてもらったとき、驚きに息をのんだ。

きれいな儚い、温かみのあるやさしい絵だった。

きらきらと光る海を背に、ひとりの人魚が髪を揺らしてほほえんでいる。

ずっと伸びた背をもつ、黒髪の人魚。

とてもきれいな面立ちをしていた。

肌は白く、ぬくもりを秘めてやわらかそうだ。

今にも、名を呼ぶ声すら聞こえてきそうな、その人物の印象をまざまざととらえた作品だった。

キャンバスに写し取られた彼女は、よく知る人物だった。

(なぜ)

その疑問は、いまだ解消してはいない。

「あれは、母です」

京堂が不思議そうな顔をする。

おや、と思う。彼のそんな顔は初めてだ。

「母親？」

「納得いきませんか。間違いありません、あれは母です」

「お嬢ちゃんにそっくりなのか」

「どうなのでしょう。自分では、あまり似ているとは思えないんです。母のほうが、優しい顔をしていて、丸みがあって、髪もやわらかいし。……似ていますか」

「あの絵のモデルがそうだというなら、そっくりだろうに。本当に？」

「ええ」

京堂が首をひねる。

「浦和は、なぜその、お嬢ちゃんの母親を描こうとしたんだ」

「そうなんですよね。私も、きいてみたんです。けど、はっきりとは教えてもらえなくて」

「面識があるのか」

「さあ。なければ描けないんじゃないでしょうか」

「あの絵の人魚は若かったよな。お母さん、若いころはあんなふうだったのかい」

「……今もあんなふうですよ。のんびりした人なんです」

「ああ」

腑に落ちた様子で彼はうなずいた。

「お嬢ちゃんものんびりしてるもんなあ」

「どういう意味ですかそれ」

「隙だらけてことさ」

三日は口をとがらせる。

「それは少し、不本意です」

「そうかい。ときに、ひとつききたいんだが」

「はい」

「のんびりやで美人で若作りの、——お母さんは、人魚なのか」
ぴたりと、三日は口をとざした。

「五宝湾に人魚の伝説があるだろう。あんなところに人魚はいないというのが通説だが、それでも人魚を求めてやまない人というのは多いんだ」

淡々と、京堂は言葉をつむぐ。

「体液は毒にも薬にもなり、現に、お嬢ちゃんのクラスにも、人魚の涙を探しているヤツがいるんだってね。さっき、中庭にいたのもそのたぐいだろう。人魚の体液だから、欲しいんだ」

迷いのない京堂の足取りは、どこへ向かっているのだろう。

「人魚姫の話を知っているだろう。あんなふうに、人魚は陸に上がることがある。人魚の見分け方を、お嬢ちゃんは知っている？」

足が止まる。京堂は、三日を抱き上げ、歩きだした。

プールサイドの階段をあがる。

「肌は白く、なめらかでうつくしい。特異な体液を持ち、毒に冒されることなく、長く生きる。そして、――海を捨てた人魚は、二度と泳ぐことができない」

グラウンドのはずれに、屋外プールがあった。

三日には縁のない場所だが、夏場はもちろん、なみなみと水がそそがれている。

階段をあがり、フェンスをくぐると、水面に陽光がキラキラと反射していた。

京堂のシャツをつかむ指に、力がこもる。

「ねえ、度重なる屋外作業でも日に焼けないというのは、いささか不自然ではない？ 猛毒といわれる人魚の血を浴びても平気なのは、人魚だけだろうか、とも思うんだ」

語りかけるその声は、力強い。

「しかし腑に落ちないこともある。人魚はお嬢ちゃんのように怪力だとは伝えられない。お嬢ちゃんは泳げないと聞くけれど、でも実のところ、水より怖いものがあるんじゃない？」

ざわっと肌が総毛立った。

一番嫌いなもの。けして相容れないものが、ひとつだけある。

「ムカデから逃れるために、血の池に飛び込んだというのは本当？」

三日はぱっと耳をふさいだ。

「やめて」

禍々しいその名を耳にするのも厭わしい。

なんて嫌な響きだろう。肌が虫を這い回るような心地さえする。

居すくむ体に、くすくすと笑う振動が伝わる。

「そんなに嫌い？ でもじゃあ、本当なのかな。それでわからなく

なったんだ。泳げないなら、飛び込まないんじゃないかってね。もし、母親が人魚なのだったら、どうだろう。力持ちなのは、父方の遺伝？」

「京堂さん」

「素直にきいたら、教えてくれる？」

「なぜ、そんなことを」

感情の色の見えない眼差しで、彼は言った。

「身边に気をくばるよう、言っただろう。人魚は狙われるんだ。そして、オレが今確認できるのはひとつだけ」

嫌な予感がした。

ここまで連れてこられる前に、逃げ出すべきだったのだ。

（これじゃあ、のんびりしてると言われても当然だわ）

「人魚の娘も、泳げないのかな」

水面に向けて、放り出された。

遠く、誰かの叫ぶ声がした。

ばん、とぶつかった水が痛い。

恐怖に、もがいた。

彼は正しい。

（たすけて）

陸にあがった人魚は泳げない。その血の続くかぎり、もうずっと泳げないのだ。

水は重く、四肢を絡めとる。

——三日は、沈む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9066u/>

転ぶ三日月

2011年12月1日18時50分発行